沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第42集

真　珠　道　跡

－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）－

復元された『眞珠湊碑文』の碑額と碑首（円首）部分の拡大。
文様は碑首が「双鳳雲文」、縁飾に「唐草文」。

2007年（平成19）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

真　珠　道　跡

－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）－

2007年（平成19）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県が昭和63年度に策定した『首里城公園基本設計』に基づく、首里城公園県営区域（約14ha）内の復元整備に伴う遺構確認を目的とした発掘調査で、平成17年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した真珠道地区の発掘調査の成果をまとめたものです。

真珠道地区の発掘調査は、平成15・16年度と継続的に発掘調査を実施し、平成18年度には『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』として刊行いたしました。

真珠道は、1522年（尚真王46年）に守礼門の東南隣接地を起点に、金城坂（首里金城町石畳道）、識名坂、真玉橋、石火矢橋、豊見城城下の東北側を廻って小禄の丘陵中腹を経て那覇港南岸垣花の屋良座森グスクまでの約９kmに至る琉球王国の主要な軍用道路でもありました。

「眞珠湊碑文」は、太平洋戦争末期（1941～45年）におこった沖縄戦で砲弾の直撃を受けて碑文が破壊され、その残片は現在、沖縄県立博物館に保管されています。

本報告書で掲載した真珠道地区は、守礼門の東南側に近接した真珠道の起点近くに所在した1522年建立の「眞珠湊碑文」台座跡の発掘調査により「眞珠湊碑文」台座跡の脇石積み、石敷きなどの遺構が検出されました。

今回の発掘調査の結果、碑文を破壊したとみられる砲弾は信管部分が台座床面の石敷き内から出土しています。この砲弾は北側から飛来し、碑文を破壊しながら台座床面に着弾したとみられ、着弾直後の爆発や爆風により碑文台座の脇石積み、石敷きの破壊及び石積み根石のズレを発生させたことが判明しました。

発掘調査の大きな成果として、「眞珠湊碑文」台座跡が確認されたことです。これにより先述した『首里城公園基本設計』に基づく、「眞珠湊碑文」及び台座の復元整備が可能となったことです。

今回の報告は、台座跡の石敷き検出面までの出土品を主体に報告します。出土品の内容として「眞珠湊碑文」台座跡の発掘調査により台座跡及び周辺に堆積した遺物包含層などからは中国産陶器を主体に沖縄産陶磁器、本土産陶磁器、金属製品などが出土しています。

本報告書が、琉球王国の歴史と文化を理解する資料として広く活用されるとともに、文化財思想への普及などに活用していただければ幸いです。

末尾ながら事業実施にあたり御指導・御協力を賜りました関係各位に深く感謝を申し上げます。

2007年（平成19）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所　長　　田　場　清　志

巻頭図版1　首里城跡（航空写真）

巻頭図版2　1945年4月2日米軍撮影（CV20－103－63）の首里城周辺
（財団法人沖縄県文化振興会　公文書管理部 資料編集室 所蔵）

巻頭図版3　スー11グリットより検出された真珠湊碑文台座跡の状況
（上段：東側より撮影、下段：西側より撮影）

巻頭図版4　スー11グリットより検出された真珠湊碑文台座跡の状況
（上段：西側より撮影、下段：北側の正面より撮影）

例　　言

1　本報告書は、平成17年度に実施した首里城公園内の綾門大道地区に近接する真珠道の整備を記念して、1522年に建立された「真珠湊碑文」及び台座跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2　本事業は県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の教育庁文化課が行い、発掘調査及び事業事務を沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図を使用した。

4　本報告書で使用した航空写真は、国土地理院の93OKINAWA49-12を複写した。

5　出土遺物の同定は、下記の方々に御協力をいただいた。明記して謝意を表します。

金属製品	京都国立博物館工芸室長　久保 智康
本土産陶磁器	佐賀県有田町歴史民俗資料館 学芸員　野上 建紀
更新世動物化石、石器・石質	おきなわ石の会会長　大城 逸朗（理学博士）
中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）	国立歴史民俗博物館 考古研究部 研究連携センター長 小野 正敏
高麗青磁	韓国文化財廳国立海洋遺物展示館 専門委員 韓 盛旭（博士）
瓦	沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 助教授 上原 靜

6　シカ化石（リュウキュウムカシキョン、リュウキュウジカ）の骨格部位の特定については、沖縄県立博物館所蔵のケラマジカ（オス）骨格標本を借用許可申請手続き後に化石資料と原資料とを比較研究を行いながら骨格の部位を特定した。なお、原資料の手続きに際しては、県立博物館学芸課の学芸員 知念幸子（自然史）の手を煩わせた。記して感謝を申し上げます。

7　本報告書は、金城亀信、伊藝由希を中心に、仲宗根三枝子ほかの協力を得て、編集を行った。各節の執筆者は以下に示すとおりである。

金城亀信　第１章～第４章、第５章第１節～第６節・第９節・第13節・第17節～第19節、第６章
知念隆博　附編第１節
伊藝由希　第５章第７節・第11節・第15節・第16節
岸本竹美　第５章第８節・第10節・第12節
長濱健起　第５章第14節
青山奈緒　附編第２節
大城逸郎　附編第３節

8　本報告書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付けは光嶋 香、矢舟章浩がおこなった。

9　発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

報告書抄録

ふりがな	ま　だま　みち　あと
書　　名	真　珠　道　跡
副　書　名	首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）
巻　　次	—
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第42集
編 著 者 名	金城亀信・知念隆博・伊藝由希・岸本竹美・長濱健起・大城逸朗・青山奈緒・仲宗根三枝子
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL　098-835-8751・8752
発行年月日	平成23年3月30日

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所　在　地	コ　ー　ド		北緯	東経	調査期間	発掘面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°　′　″	°　′　″			
まだまみちあと 真 珠 道 跡	おきなわけん　なはし **沖縄県那覇市** しゅりとうのくらちょう　ちょうめ **首里当蔵町3丁目** きんじょうちょう　ちょうめ **金城町1丁目**	那覇市 47201	—	26° 12′	127° 43′	2005.12.1 ～ 2006.1.31	約80	県営 首里城公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
真 珠 道 跡	石碑 台座跡	中世	石碑台座跡（中世）	中国産 　青磁・白磁・染付 褐釉陶器 　中国・タイ産褐釉陶器 本土産陶磁器 沖縄産 　施釉陶器・無釉陶器 　土器 　陶質土器・瓦質土器 　瓦 円盤状製品 金属製品・青銅製品 銭貨 脊椎動物遺存体 貝類遺存体	琉球王国の交易港であった那覇港及び国場川下流域の湧水、豊見城グスクなどを外敵（倭寇）から守るために首里城守礼門東南から那覇港南岸の垣花までの約９km道路整備と真玉橋橋架、島尻を中心にした軍勢の手配等を銘記した「真珠湊碑文（1522年建立）」の台座跡の一部が検出された。
	石積み	中代 近代 現代	石積み （中世～近・現代）		

要　　約

昭和61年に首里城公園計画区域約18haの内、内郭側約4haが国営公園区域とすることが閣議決定され、残り約14haが県営公園区域となり、昭和63年度に策定された『首里城公園基本設計』に基づく復元整備を目的とした遺構確認調査である。

今回、「歴史の道」であった真珠道の整備を記念した「真珠湊碑文」の台座跡と、その位置が確認されたことにより、台座及び碑文の復元整備が可能となった。

目　　次

序
巻首図版
例言
報告書抄録
第 1 章　調査に至る経緯 …… 1
第 1 節　調査に至る経緯 …… 1
第 2 節　調査体制 …… 2
第 2 章　位置と環境 …… 6
第 1 節　地理的環境 …… 6
第 2 節　歴史的環境 …… 6
第 3 章　調査の概要 …… 8
第 1 節　調査経過 …… 8
第 2 節　調査区の設定 …… 8
第 4 章　遺構と層序 …… 10
第 1 節　遺構 …… 10
第 2 節　層序 …… 10
第 5 章　出土遺物 …… 13
第 1 節　中国産青磁 …… 14
第 2 節　中国産白磁・青白磁 …… 20
第 3 節　中国産染付 …… 25
第 4 節　褐釉陶器（中国産・タイ産） …… 32
第 5 節　その他の輸入陶磁器 …… 35
第 6 節　本土産陶磁器 …… 37
第 7 節　沖縄産施釉陶器 …… 39
第 8 節　沖縄産無釉陶器 …… 43
第 9 節　土器・土製羽口 …… 47
第 10 節　陶質土器 …… 49
第 11 節　瓦質土器 …… 51
第 12 節　円盤状製品 …… 53
第 13 節　屋瓦・漆喰・塼・塼瓦 …… 55
第 14 節　銭貨 …… 64
第 15 節　金属製品（鉄製品・青銅製品） …… 66
第 16 節　石製品・石材 …… 69
第 17 節　貝製品 …… 71
第 18 節　脊椎動物遺存体 …… 72
第 19 節　貝類遺存体 …… 73
第 6 章　結語 …… 76
附　編　平成15年度調査の真珠道跡出土の更新世動物化石
第 1 節　調査の経過と出土状況 …… 107
第 2 節　真珠道跡出土化石骨の保存処理 …… 111
第 3 節　真珠道跡出土の動物遺骸 …… 115

図目次

第１図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国 …… 4
第２図　首里城跡及び真珠道の経路と周辺の遺跡 …… 5
第３図　グリット配置図及び発掘調査区域 …… 9
第４図　スー11グリットの遺構（真珠湊碑文台座跡の石敷と石積み）と層序 …… 12
第５図　青磁　1 …… 18
第６図　青磁　2 …… 19
第７図　白磁・青白磁 …… 24
第８図　染付　1 …… 30
第９図　染付　2 …… 31
第10図　褐釉陶器（中国産1～7、タイ産8・9）… 34
第11図　その他の輸入陶磁器（黒釉陶器1・2、瑠璃釉3・4、色絵5～8、高麗青磁9）…… 36
第12図　本土産陶磁器 …… 38
第13図　沖縄産施釉陶器　1 …… 41
第14図　沖縄産施釉陶器　2 …… 42
第15図　沖縄産無釉陶器　1 …… 45
第16図　沖縄産無釉陶器　2　46
第17図　土器（中森式土器1、産地不明土器2、タイ産半練3・4、土製羽口5）…… 48
第18図　陶質土器 …… 50
第19図　瓦質土器 …… 52
第20図　円盤状製品 …… 54
第21図　瓦 1（高麗系瓦1・2、明朝系軒丸瓦3～5、鬼瓦6・8）7は現在の守礼門の明朝系鬼瓦 …… 59
第22図　瓦 2（明朝系軒平瓦9・10、大和瓦11、漆喰12） …… 60
第23図　塼・塼瓦 …… 63
第24図　銭貨 …… 65
第25図　金属製品（鉄製品1～9、青銅製品10～12） …… 68
第26図　石製品・石材 …… 70
第27図　貝製品 …… 71

表目次

第１表　人工遺物出土状況一覧 …… 13
第２表　近・現代遺物出土状況一覧 …… 13
第３表　青磁出土状況一覧 …… 15
第４表　青磁観察一覧 …… 16
第５表　青磁観察一覧 …… 17
第６表　白磁・青白磁出土状況一覧 …… 21
第７表　白磁・青白磁観察一覧 …… 22
第８表　白磁・青白磁観察一覧 …… 23
第９表　中国産染付出土状況一覧 …… 27
第10表　中国産染付観察一覧 …… 28
第11表　中国産染付観察一覧 …… 29
第12表　褐釉陶器（中国産・タイ産）出土状況一覧 …… 32
第13表　褐釉陶器（中国産・タイ産）観察一覧　33
第14表　本土産陶磁器出土状況一覧 …… 37
第15表　沖縄産施釉陶器出土状況一覧 …… 39
第16表　沖縄産施釉陶器観察一覧 …… 40
第17表　沖縄産無釉陶器出土状況一覧 …… 43
第18表　沖縄産無釉陶器観察一覧 …… 44
第19表　陶質土器出土状況一覧 …… 49
第20表　陶質土器観察一覧 …… 49
第21表　瓦質土器出土状況一覧 …… 51
第22表　瓦質土器観察一覧 …… 51
第23表　円盤状製品観察一覧 …… 53
第24表　円盤状製品計測表（実測外） …… 53
第25表　屋瓦・漆喰・塼出土状況一覧 …… 56
第26表　屋瓦・漆喰観察一覧 …… 57
第27表　塼・塼瓦観察一覧 …… 58
第28表　銭貨出土状況一覧 …… 64
第29表　銭貨出土観察一覧 …… 64
第30表　金属製品（鉄製品・青銅製品）出土状況一覧 …… 66
第31表　金属製品（鉄製品・青銅製品）観察表一覧 …… 67
第32表　石製品・石材出土状況一覧 …… 69
第33表　石製品観察一覧 …… 69
第34表　魚類出土状況一覧 …… 72
第35表　ニワトリ出土状況一覧 …… 72
第36表　ブタ出土状況一覧 …… 72
第37表　ウシ出土状況一覧 …… 72
第38表　貝類生息地の分布 …… 73
第39表　貝類出土状況一覧（巻貝） …… 74
第40表　貝類出土状況一覧（二枚貝） …… 74

図版目次

図版１　土器（中森式土器１、産地不明土器２、タイ 産半練３・4、土製羽口５）…… 48
図版２　平成10年度葺替えの守礼門１ …… 61
図版３　平成10年度葺替えの守礼門２ …… 62
図版４　「首里旧城之図」…… 76
図版５　『国王頌徳碑・眞珠湊碑文復元事業報告書』 …… 77
図版６　遺跡の近景及び発掘調査の状況 …… 81
図版７　遺物出土状況 …… 82
図版８　青磁 1 …… 83
図版９　青磁 2 …… 84
図版10　白磁・青白磁 …… 85
図版11　染付 1 …… 86
図版12　染付 2 …… 87
図版13　褐釉陶器（中国産 1～7、タイ産 8・9）‥ 88
図版14　その他の輸入陶磁器（黒釉陶器1・2、瑠璃釉 3・4、色絵5～8、高麗青磁9、ベトナム青花10、本土産陶磁器11～15）…… 89
図版15　沖縄産施釉陶器　1 …… 90
図版16　沖縄産施釉陶器　2 …… 91
図版17　沖縄産無釉陶器　1 …… 92
図版18　沖縄産無釉陶器　2 …… 93
図版19　陶質土器 …… 94

図版20　瓦質土器　…… 95
図版21　円盤状製品　…… 96
図版22　瓦　1（高麗系瓦１・2、明朝系軒丸瓦
　　3～5、鬼瓦６・7）…… 97
図版23　瓦　2（明朝系軒平瓦８・９、大和瓦10、
　　漆喰11）　…… 98
図版24　塼・塼瓦　…… 99
図版25　銭貨　……100
図版26　金属製品（鉄製品・青銅製品）　……101
図版27　上： 石製品･石材１～6､下: 貝製品７・8　…102
図版28　脊椎動物遺存体　……103
図版29　貝類遺存体･上：(巻貝)､下：(二枚貝）…104

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄県の県庁所在地である那覇市の東側丘陵地には、約550年間琉球王国の政治・経済・文化の中枢であった首里城があった。

首里城は歴代の国王によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの粋を集めて築城されたグスクであった。

グスク内には正殿（せいでん）、北殿（ほくでん）、南殿（なんでん）などの多くの建造物が存在し、その幾つかは国宝として1925年に指定されたが、1945年の沖縄戦で、首里城地下に日本軍の沖縄総司令部壕が構築されたことにより米軍の集中砲火を浴びて国宝であった首里城正殿をはじめとする首里城内に入る第二の坊門であった国宝「守礼門」（俗称：上の綾門。1527年～1555年創建）、「真珠湊碑文」（註１）などの多くの貴重な文化財が消失・破壊された。

首里城の第一の坊門であった「中山門」（俗称：下の綾門。1428創建）から「守礼門」までの区間を「綾門大道」と称し、琉球王国第一の道路であった。「綾門大道」の整備時期は不明であるが、『球陽』（註２）では1428年に国門（中山門）を創建したとある。また、平成10～12年度に実施された「綾門大道」跡の発掘調査（註３）から北側の土留め石積みの控え部分から検出されたSA01遺構内から出土した高麗系瓦、大和系瓦、青磁などから15世紀前半頃に「綾門大道」の整備造成が開始されたようである。

今回の発掘調査は、首里城公園（約17.8ha）の内、国営沖縄記念公園首里城地区の約4haを除いた県営首里城公園（約14ha）の整備に伴うものである。

平成15・16年度に実施した真珠道（註４）と重複する県道49号部分の継続調査として発掘調査を予定していたが県道49号の北側未調査部分は、首里城木曳門から首里杜館へ流れる観光客の動線と重複することから、当初、予定の調査地区を県土木建築部都市計画・モノレール課、沖縄県南部土木事務所、県文化課（以下、「四者」と標記。）と現地での調査地区に関する協議・検討を含めた結果、調査地区を「綾門大道」の所在する第二の坊門「守礼門」の南東側に位置する「真珠湊碑文」台座跡及び「守礼門」南側隣接の石墻（「綾門大道」の石墻）などの遺構確認調査として位置付けて調査区として選定した。

なお、四者での調査区の絞り込みには県文化課の担当者が事前に作製した昭和６年頃の「首里城平面図」（掲載内容：守礼門や綾門大道の石墻と真珠湊台座などが実測）と現況地形図との重ね図を使用しながら現地での協議調整を行って調査地区を確定した。

現地での協議調整の際に調査区域内の「真珠湊碑文」台座跡があった位置には、戦後大きく成長したデイゴ(マメ科の落葉高木)をはじめガジュマル、（クワ科の常緑高木）クバ(学名ビロウ。ヤシ科の常緑高木）などが繁茂し、調査の障害となっていた。

これらの樹木の移植や伐採も含めて現地で四者による協議・検討を行った結果、大木となったデイゴやクバなどの移植は困難で、しかもデイゴやクバが「真珠湊碑文」台座跡の直上に位置していることなどから最終的に伐採を立会のもとで実施することで現地での協議・調整を終了した。

以上の調整内容を踏まえて、県土木建築部が文化財保護法第94条第１項に基づく通知を提出し、これを受けて県教育委員会により「発掘調査が必要で在る」旨の回答を行う。

デイゴ、クバ、ガジュマルの伐採は、平成17年11月24日の公園閉園後から25日までの深夜にセンター職員が立ち会いで実施し、遺構損傷の有無確認を行いながら伐採を終了した。

同年12月１日（註５）から発掘調査に着手することとなったが、遺構直上付近で成長したデイゴの切り株の大きさは、南北軸120cm、東西軸170cmを測り、このデイゴの切り株を完全に除去するまでには、発掘調査期間37日間の内、28日間を要した。実に発掘調査期間の3/4日間が切り株の除去作業と発掘調査を交互に平行させての異例ともいえる調査となったが平成18年１月31日に「真珠湊碑文」台座跡を検出して、台座跡下部及び周辺の発掘調査は次回の調査対象範囲として取り扱った。

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書第69集「金石文‐歴史資料調査報告書Ⅴ‐」沖縄県教育委員会 1985年３月。

註２．沖縄文化史料集成５『球陽（讀み下し編）』球陽研究會 角川書店　1974年３月。

『球陽（讀み下し編）』には次のように掲載されている。「尚巴志王７年、国門を創建す。傍ら曰く、中山と（旧記に曰く、中山の二字は内官柴山進めて以て額と為すと。）」

註３．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第13集「綾門大道跡」沖縄県立埋蔵文化財センター2003年３月。
註４．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集「真珠道跡」沖縄県立埋蔵文化財センター2006年３月。
註５．琉球新報「守礼門脇ガジュマル、デイゴ／県の発掘調査で／…」琉球新報社2005（平成17）年12月１日夕刊。

第２節　調査体制

発掘調査は、平成17年度に実施し、資料整理及び報告書作成は平成18年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが以下の体制でおこなった。

平成17年度
事業主体
沖縄県教育委員会
教育長　仲宗根 用英
教育次長　宮城 清志（予算担当）・教育次長　仲村 守和（事業担当）
事業所管課
沖縄県教育庁文化課
課長　千木良 芳範
課長補佐　島袋 洋（事業担当）・課長補佐　崎濱 文秀（事務担当）
記念物係（事業担当）主幹兼係長 盛本 勲・専門員 新垣 力・専門員 知念隆博
文化係（事務担当）主幹兼係長 宮国 栄・主任 神谷リカ
事業総括・事業事務
沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田場 清志
副所長兼庶務課長　赤嶺 政幸
庶務課　主査 山田恵美子
調査課　課長 岸本 義彦
調査課　主任専門員　金城 亀信・専門員 青山 奈緒（臨的任用専門員）
文化財調査嘱託員 比嘉 優子・文化財調査嘱託員 宮城奈緒
文化財調査嘱託員 久貝 弥嗣・文化財調査嘱託員 光嶋 香
文化財調査嘱託員 仲宗根 瑞香
発掘調査作業員　熊田良一・米須武雄・塩川 卓・武島 洋子・渡嘉敷米子・仲宗根 孝・比嘉賀商・比嘉 拓・比嘉哲也・宮平 晃
資料整理作業員　久保田有美・池原直美・玉寄智恵子・瑞慶覧尚美・野村知子・新垣ますみ・與古田 愛小濱かおり・仲宗根めぐみ・中山まり・當間あきの・喜納ひとみ・當山 実仲地和美・高良三千代・石嶺眞由美・玉那覇キミ子・山下美也子・親川守人松門 孝・大嶺愛子・前田和枝・金城敬子・渡嘉敷米子・米須武雄・伊波まさみ城間五百子・真栄城和美・中山由美・仲間留美
調査協力者　文化財調査嘱託員 山田浩久・文化財調査嘱託員 伊波直樹

調査指導・助言等
文化庁記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官 玉田 芳英
鹿児島県立埋蔵文化財センター 調査第一課第一調査係 主任文化財主事 中村 耕治
関西大学文学部 教授 高橋誠一
琉球大学教育学部（社会科教育専修）助教授 西岡 尚也

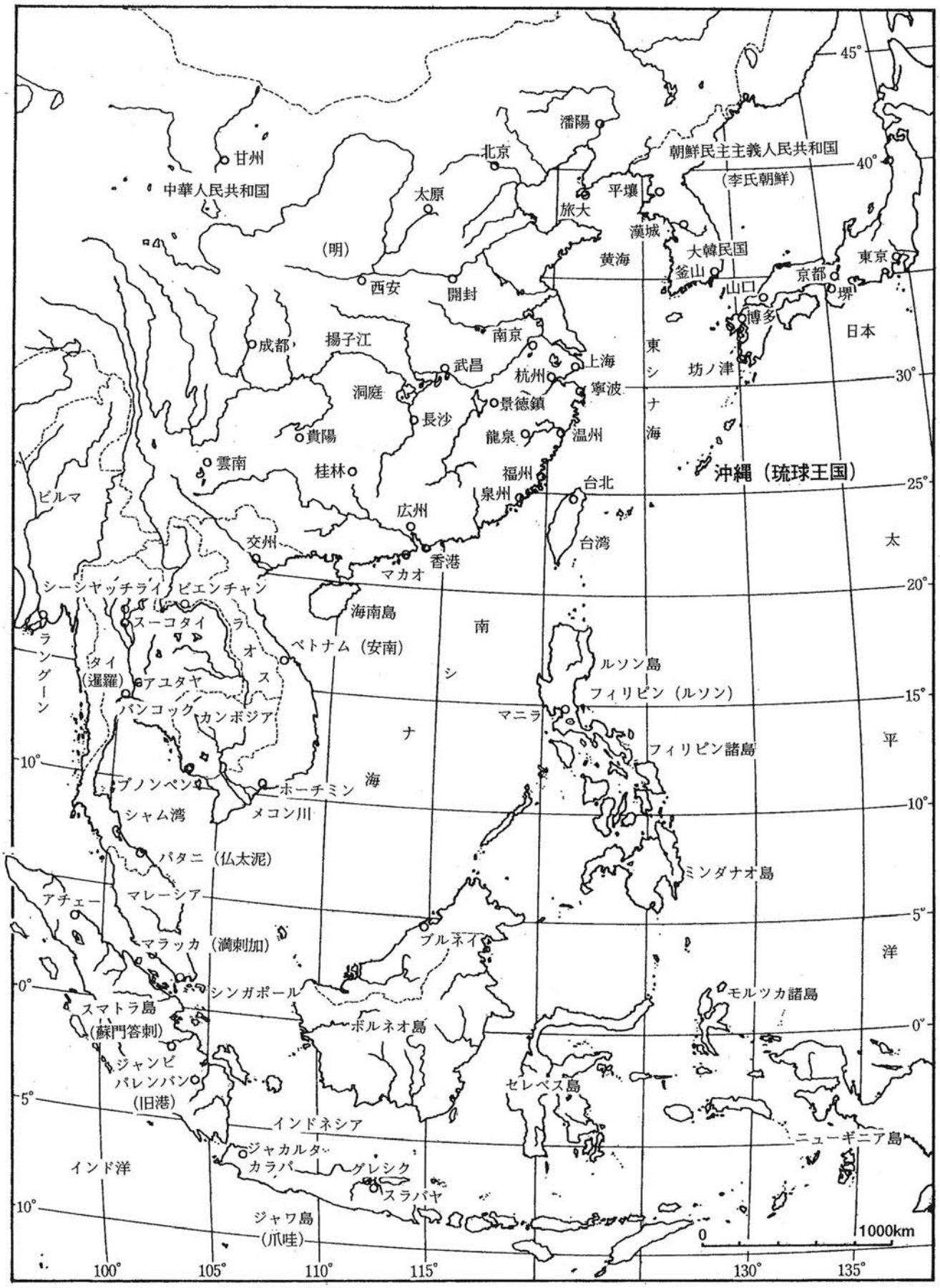
調査協力機関
内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 首里出張所
財団法人海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課
施設係 係長 平良博史、技師 島袋 林博、技師 比嘉 正亮

沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課
公園緑地班 班長 茂上 圭弘、主任 前原 信一
沖縄県土木建築部南部土木事務所土木３課
主幹兼課長 名嘉真 稔、主幹 屋良 一洋、主任技師 上間 秀一

平成18年度
事業主体
沖縄県教育委員会
教育長　仲宗根 用英
教育次長　松田 俊世（予算担当）・教育次長 仲村 守和（事業担当）
事業所管課
沖縄県教育庁文化課
課長　千木良 芳範
課長補佐　島袋 洋（事業担当）・課長補佐　崎濱 文秀（事務担当）
記念物係（事業担当）主幹兼係長 盛本 勲・専門員 新垣 力・専門員 知念隆博
文化係（事務担当）主幹兼係長 城田 久嗣・主任 神谷リカ
事業総括・事業事務
沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田場 清志
副所長兼庶務課長　瑞慶覧 康博
庶務課　主査 玉寄 秀人
調査課　課長 岸本 義彦
調査課　主任専門員　金城 亀信・専門員 伊藝由希（臨的任用専門員）
文化財調査嘱託員 岸本 竹美・文化財調査嘱託員 光嶋 香
文化財調査嘱託員 金城 友香・文化財調査嘱託員 上原留美
埋蔵文化財資料整理嘱託員
石嶺眞由美・上原園子・我那覇悠子・城間千鶴子・仲宗根三枝子・外間 瞳・真栄城和美・
山下美也子・喜屋武朋子・金城敬子・崎原美智子・野村知子・山川由美子・仲地 明
資料整理作業員
本郷 裕太・又吉 扶・村吉 亮・仲宗根めぐみ・喜納ひとみ・志良堂 恵・渡嘉敷敦子・上間 智美
調査協力者　専門員　中山 晋・専門員　仲村 毅（臨的任用専門員）

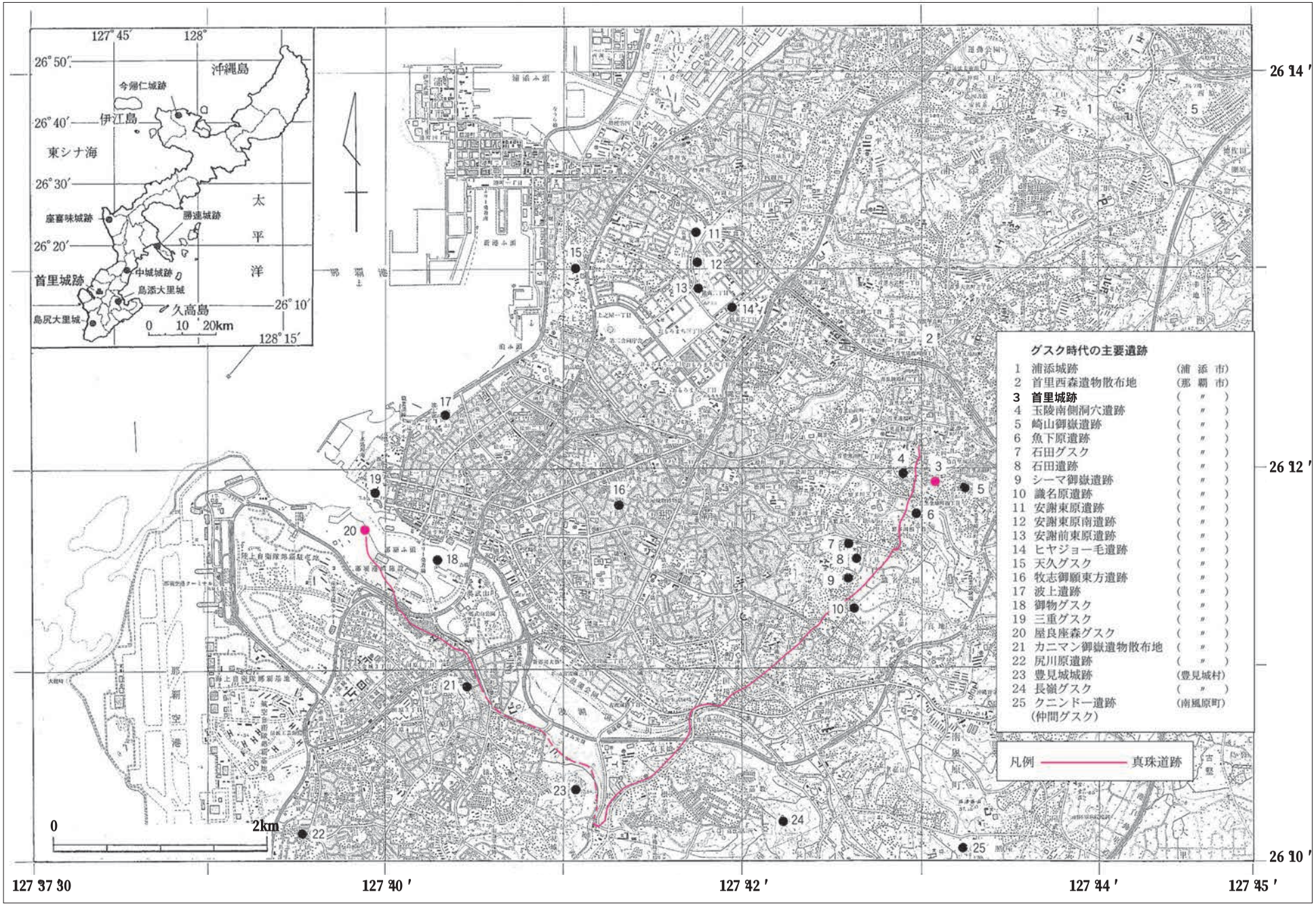
資料整理解釈・助言等
京都国立博物館工芸室　工芸室長 久保 智康
おきなわ石の会会長　大城 逸朗（理学博士）
国立歴史民俗博物館 考古研究部 研究連携センター長 小野正敏
有田町教育委員会 有田町歴史民俗資料館 文化財調査員　野上建紀
沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 助教授 上原 静
有限会社榮用窯 取締役 新垣 栄（壺屋焼荒焼陶工）
壺屋焼やちむん家陶工 新垣 栄一（上焼皿・上焼壺）・ 壺屋焼陶工 新垣 光雄(荒焼)

調査協力機関等
財団法人海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター事業課
沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課
公園緑地班 班長 茂上 圭弘、主任 前原 信一
沖縄県土木建築部南部土木事務所
街路公園班 班長 安里 辰夫、主幹 屋良 一洋、主任技師 上間 秀一
沖縄県教育庁保健体育課 課長補佐 新垣 悦男



14世紀末～16世紀の琉球王国主要対外交易国
日本、李氏朝鮮、明（中国）、呂宋（フィリピン）、安南（ベトナム）、暹羅（タイ）、満剌加（マラッカ）、蘇門答剌（スマトラ）、旧港（パレンバン）、爪哇（ジャワ）

第1図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国



第2図　首里城跡及び真珠道の経路と周辺の遺跡

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡の所在する県都である那覇市の総面積は、平成12年（2000年）時点の境界未定地を含めた総務省推計によると38.98km²を有している。因みに５年前の平成７年（1995）が、総面積が38.74km²であった。平成16年10月１日現在の那覇市の総人口は、310,476人で世帯数121,950世帯（平成８年10月１日現在：300,809人。105,638世帯）である。８年間で人口が9,667人増加し、世帯数も16,312世帯増加していることが窺える。平成16年度の那覇市の平均気温は、23.4℃、最高気温33.9℃、最低気温9.9℃であった。気候は亜熱帯性気候に属している。

国指定史跡首里城跡が所在する那覇市首里当蔵町は、首里台地と称される標高100～135mの第四紀層である琉球石灰岩上に形成された県内最大級のグスクである。

遺跡を囲む環境は、北に西森（標高102m）や虎頭山（標高280m）、北東に弁ヶ嶽（標高165.6m）などの丘陵部、河川では北側に儀保川や真嘉比川が西へ流れている。南側は安里川の浸食により窪地となっているなど自然地形を巧みに利用した位置に占地がなされている。

首里城跡及び周辺の地層は、上層が琉球石灰岩、下層に基盤である第三紀島尻層群（シルト質泥岩）となっている。上層の琉球石灰岩上に降り注いだ雨水は、透水層である琉球石灰岩を時間をかけて透過しながら不透水層である島尻層群（シルト質泥岩及びその風化土）との境から湧き出すような地質的構造となっている。その為、首里城跡を含む首里一帯は豊富な湧泉が多数所在する。

真珠道跡は、首里城の第二坊門であった守礼門南東側を起点とする道路で、北側には園比屋武御嶽石門がある。

真珠道の起点部分の東西両脇には、1522年に建立された「国王頌徳碑」と「真珠湊碑文」があった。起点部分から南へ首里城西のアザナから西に40～50m程度、下った場所を「真珠道」が通り、首里金城町の石畳道、識名坂、真玉湊（国場川の河口、那覇港）までの約４kmの石畳道建設と真玉橋架橋が1522年に整備されたことが「真珠湊碑文」に記されている。

参考文献

・沖縄県統計協会『2006　県民手帳』2006年度版。
・木崎甲四郎編著『琉球弧の地質史』沖縄タイムス社 1985年
・沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年。
・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』
　沖縄県立埋蔵文化財センター　2006年３月。
・沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書－真珠道・末吉宮参拝道－』1984年３月。

第２節　歴史的環境

首里城の築城された年代は不詳であるが、尚巴志王代（1422～1439年）に安国山（ハンタン山。園比屋武御嶽後方の山）の北側に池（「龍潭」）を堀り、安国山に松伯をはじめとする花果、薬木などの樹木を植えて整備をおこなった記念碑で「安国山樹華木之記碑」が1427年に建立されている。この碑文が建立された1429年頃には尚巴志によって首里城の基本的な形が完成したものと考えられている。

その後の城郭拡張などの普請は、第二尚王統の尚真王代（1477～1526年）に首里城の北側外郭と歓会門及び久慶門の整備、そして主要な軍用道路であった「真珠道」が1522年に整備された。尚真王の後を継いだ尚清王代（1527～1555年）には南側外郭及び継世門が整備と共に1553年に那覇港口の重要な防禦拠点であった

「屋良座森グスク」が築城された。

上記のように「真珠道」は、1522年に尚清王によって整備され、石門の真珠道の完成と国王の徳を称えて記念碑文が守礼門東南側を起点とする真珠道の両脇に「国王頌徳碑」（真珠道の東側に位置することから、俗称で「石門之東之碑文」とも称す）と「真珠湊碑文」（真珠道の西側に建立されたため、「石門の西のひもん」とも称す）を建立した。

戦前に採取された「真珠湊碑文」の拓影から、その内容を一部抜粋すると「首里の王おきやかもいかなし天のみ御ミ事にま玉ミなとのミちつくりはしわたし申候時のひのもん　嘉靖元年ミつのへむまのとし四月九日きのとのとりのへに（中略）このはしハくにのあんしけすのため又世の御さうせのためにねたてひかわ又とよミくすく此　くすくとミつのかくこのために一はんのさとぬしへあくかへはへはらしまおそい大さと　ちへねんさしきわま玉はしおわたり下しましりともにかきのはなちにせいそろい（以下省略）」と銘記されている。

碑文内容の主旨からすると、真珠道及び真玉橋架橋は、一般の交通の利便に供するほかに、国土防衛のため王命により建設されたものであり、いったん事が起きた時は、首里の一隊と南風原・島襲大里・知念・佐敷の軍勢と合流し真玉橋を渡り、島尻大里と共に那覇港南岸の垣花の地に勢揃いして外敵の侵入に備えたことが窺える。

この真珠道の終点は、1522年以降から1553年までの間は那覇港南岸の垣花であったが、1553年に「屋良座森グスク」が普請されたことにより、「屋良座森グスク」まで真珠道が延伸された。これにより真珠道の起点と終点の屋良座森グスクまで総延長は、約10Kmの道のりとなった。

具体的な真珠道の道筋は、守礼門東南側の起点から南に向かって首里城西のアザナの近くを通って、金城町の石畳道、識名坂、真玉橋、石火矢橋、豊見城グスクの北東側を廻って、小禄の丘陵中腹を経過して、那覇南岸の垣花、屋良座森グスクまでが、沖縄県教育委員会が実施した「歴史の道」で確認されている（第2図）。

琉球王国の重要な交易の拠点であった那覇港（真珠湊）内には、公庫であった御物グスク〔築城年代不詳。15世紀中頃の琉球国図（『海東諸国記』申叔舟 李氏朝鮮 1471年成立。 刊行16世紀初頭）に〈寶庫〉と記載。〕、そして中国との貢物品の中で重要品目であった硫黄を貯蔵した硫黄グスク（築城年代不詳。屋良座森グスクの後詰として築城）や豊見城グスクなどがあり、倭寇などの外敵から那覇港内への侵攻を阻止する必要があった。真珠道の目的は、那覇港（真珠湊）の守備にあり、倭寇対策の一環で整備された軍用道路として考えられている。

那覇港北岸への道については、1451年に尚金福王によって安里橋（崇元寺橋）から那覇・久茂地普嘉地と若狭町新村渠の接点であったイビガマまでの約１kmの海中に石橋７座と長い堤を築き「浮道（長虹堤）」と呼ばれた海中道路を完成させた。また、那覇港南岸の屋良座森グスク（1553年）築城後に北岸には三重グスクが普請され、両グスク（砲台：石火矢）の完成により那覇港口の防禦がより強固となった。

参考及び引用文献

・沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡‐京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）‐』沖縄県教育委員会　1998年３月。
・沖縄県教育委員会文化財調査報告書第69集「金石文‐歴史資料調査報告書Ⅴ‐」沖縄県教育委員会　1985年３月。
・沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年。
・沖縄県教育委員会『沖縄県歴史の道調査報告書‐真珠道・末吉宮参拝道‐』1984年３月。
・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道跡‐首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2006年３月。
・沖縄県史ビジュアル版12『古琉球①‐古地図にみる琉球‐』沖縄県教育委員会　2002年３月25日。
・那覇市教育委員会『那覇市歴史地図‐文化財悉皆調査報告書‐』1986年３月。

第３章　調査の概要

第１節　調査経過

真珠道跡の発掘調査は、平成15・16年度が首里城西のアザナから西側へ40～50m下った斜面地及び県道49号の歩道と道路部分の調査を実施し完了した。

平成17年度は、道路北側部の横断歩道一帯を調査区域として予定していたが丁度、首里城公園内から首里杜館へと観光客が流れる動線と交差することと県道閉鎖の問題などから県土木建築部都市計画・モノレール課、県南部土木事務所、県文化課の各担当が現地での協議調整を行った。

調整の結果、綾門大道の起点でもあった守礼門の東側から園比屋武御嶽までの未調査地区を複数年度で発掘調査を実施することで調整が着いたものの当該地区の道路部分が国指定史跡首里城跡の指定地内にあることから国（文化庁）への現状変更申請の手続きを必要とした。

現状変更申請の提出の有無については、県文化課との内部調整を行った結果、申請書の提出から許可が下りるまでに数ヶ月を要することから発掘調査の着手時期なども考慮し、手続きを次年度に申請することとなった。

当該年度の発掘調査は、過去に調査を行った綾門大道跡（平成10年～平成12年度に調査）の延伸部分に該当する守礼門南側石墻部分及び真珠道の起点近くに所在した「真珠湊碑文」の台座跡の位置確認を目的とした。

発掘調査は、平成17（2005）年12月１日～平成18年１月31日までの２ヶ月間（実動日数37日間）実施した。

第２節　調査区の設定

調査区は国の史跡指定地域を除外した形で調査区域を設定した。調査区の設定は、平成10（1998）年～平成12（2000）年度の三カ年間に亘って発掘調査を実施した綾門大道跡の残存するグリット鋲（測量鋲）であるス―20・セ―17を確認しながら当時作成したグリット入りの地形を基本にしながら光波測量（トランシット）で守礼門手前のシ―13を復元したが、シ―12のグリットを設定する段階でシ―ライン上に守礼門の北側から二番目の支柱を視準した為、グリットの設定が困難となった。

これにより再度、平成10年度のグリット設定図を基にして遺跡東側の首里城歓会門よりのス―10の復元を行ってから調査区の中心にス―11を新設し、ス―12、セ―11のグリットを設定した。水準高及び座標系は、平成16年度に測量委託を行った成果から調査区に近いシ―10に仮座標（X＝24.174.870、Y＝21.692.200）を、水準点を調査区内のス―11（仮座標X＝24.171.600、Y＝21.677.400。EL＝113.498m）と歩道西側縁石に設置されていた「都市再生街区基本調査 国土交通省」の金属鋲（EL＝113.164m）に設置した。

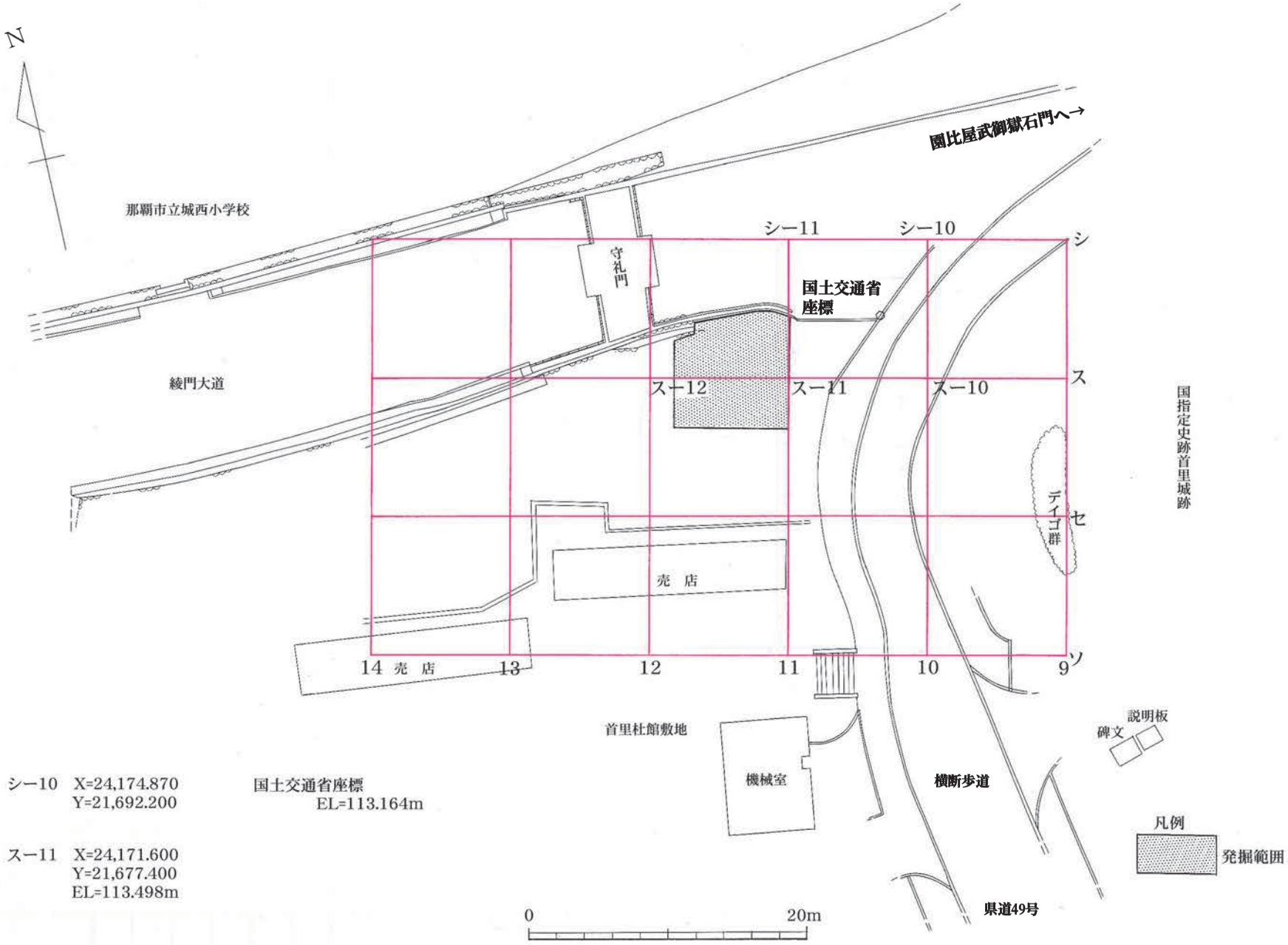
グリット名は、東から西方向に算用数字の９・10・11・・・を、北から南にはカタカナのサ・シ・ス・セ・・を冠した。グリットの標記方法はサ―９、シ―10などとした。なお、グリットの規模は10m×10m四方である。

参考及び引用文献

・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道跡 - 首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）-』
　沖縄県立埋蔵文化財センター　2006年３月。

・沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第13集『綾門大道跡 - 首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書 -』
　沖縄県立埋蔵文化財センター　2003年３月。

・金城亀信「真珠湊碑文跡の発掘調査概要 - 首里城公園発掘調査綾門大道地区 -」『首里城復元期成会会報』第24号
　2006年７月10日。



シー10　X=24,174.870
Y=21,692.200

国土交通省座標
EL=113.164m

スー11　X=24,171.600
Y=21,677.400
EL=113.498m

第３図　グリット配置図及び発掘調査区域

第４章 遺構と層序

第１節 遺 構

明確な遺構として確認されたのは一基のみであり、ス―11から「真珠湊碑文」台座跡の半分弱が検出された。

台座跡の残存状況は、沖縄戦（1945年）で北東方向から飛来した砲弾が中央台座の中央付近に着弾・爆発により碑文や台座を含む遺構が半分以上破壊されたようである。

このことを物語る遺物として、台座に着弾・爆発した砲弾の信管が台座跡の南西隅近くで破壊された敷石の中から出土していた。

検出された台座の脇石積み（南側・西側）は、前述した砲弾の着弾と爆発により石積みが全体的な持ち上がりと落下が一瞬の間に起こった為、根石や石積みにズレと傾斜が発生していた。

その他に「真珠湊碑文」及び台座があった場所には、戦後大きく成長したデイゴやクバ、ガジュマルが自然に繁茂し、台座の石敷きと切石の目地に樹木の根が侵入し、樹木による遺構の持ち上げやズレが遺構の西側部分で確認されていた。

検出された台座跡の規模は、南北約270cm×東西265cmを測る。床面及び切石は、琉球石灰岩を加工したものが使用されている。床面の石敷きは、表面を平坦に粗く加工したものを使用している。切石の加工は丁寧であり、積み方は布積みで施工されている。切石のサイズは、小振りの石で幅24cm、高さ20cm前後、控え長17～20cmを測り、大振りの石が幅70cm、高さ40cm前後、控え長40cmを測った。切石は全体的に控えが短い傾向にある。切石の裏込めには、琉球石灰岩の小振りの剥片や拳大の礫を大量に土砂と共に投入して石積みを安定させている。

台座跡の遺構面を検出した時点で調査を終了し、次年度の調査に向けて遺構検出面やトレンチの下面には、土嚢袋を敷き詰めて土砂を投入して終了した。

参考及び引用文献

・金城亀信「真珠湊碑文跡の発掘調査概要‐首里城公園発掘調査綾門大道地区‐」『首里城復元期成会会報』第24号2006年７月10日。

第２節 層 序

第１節の遺構でも記したように台座跡は半分程度しか残存していなかったが、事前に昭和6（1931）年頃に作製された「首里城平面図」（守礼門や綾門大道の石墻と同石墻に付随する「真珠湊碑文」台座、真珠道及び「国王頌徳碑」などが実測）と現況地形図を重ね図を作製し検討を行ったところ「真珠湊碑文」台座跡の位置を守礼門南東脇の露頭した石灰岩前面部分に埋没しているものと位置特定を行いながら現地での地形等を加味して、ス―11グリット内に遺構が検出されるであろうと推定した箇所に観察用の畦を設定した。

この畦を境に遺構の残存状況が東側では台座の敷石が破壊され、西側では敷石が残っていた。これは台座に着弾・爆発した砲弾の信管が台座跡の南西隅近くの破壊された敷石内部から出土している。その為、砲弾破片はス―11グリット西側トレンチ③を除いた各層から得られている。

１）セ―11

セ―11は、「真珠湊碑文」台座跡の南側に位置し、グリット内の大部分は琉球石灰岩が露頭していた。この露頭した石灰岩の台座跡に近接する箇所に東西約3m、南北150cm規模のトレンチを設定し、表土層を除去し、第2層面を全体的に検出した段階で終了した。

２）ス―11（第4図）

ス―11グリット内には台座跡を検出する目的で、11ラインから西に2mの箇所に幅50cmの観察用の畦を設定し、この畦を中心にして東と西にトレンチ二箇所を入れて発掘調査を進めたが、西側トレンチの台座跡の遺構面

検出と東側トレンチの根石を検出した時点で調査を終了した。その他に守礼門南側石墻の延長部分の把握と同石墻の内部（裏込め）を確認する目的で小規模な試掘坑（西側トレンチ③：南北1m×東西140cm）を設定して発掘調査を実施し、第Ⅲ層（明褐色混礫土層）の途中まで掘り下げた時点で終了した。

以上のように調査の途中で終了したトレンチが多く、ここではス―11の台座跡検出のために設定した畦についての層相を記述するが、この畦を境に遺構の保存状態が分かれている。畦の東側トレンチでは石敷きが破壊され切石と裏込め石のみが確認されていた。畦の西側トレンチからは台座跡の石敷きと切石や裏込め石が検出されている。その為、畦の西壁と東壁では層相が全体的に攪乱を受け、一致しないところが多い。層の堆積状況は、傾向として南側で厚く堆積し、北側で薄くなっている。

以下、便宜的に遺構内東側トレンチと遺構内西側トレンチの二つに区分して記述する。

①ス―11遺構内東側トレンチ（西壁層序）

第Ⅰ層・・・明褐色混土礫層。層厚は10cm前後を有するが、北側で薄く堆積しながら消えていく。攪乱層である。

第Ⅱ層・・・明灰色混礫土層。北側で薄く堆積しながら北端近くで消える。最も厚い堆積箇所は80cmを有する

が攪乱を受けている。

②ス―11遺構内西側トレンチ（東壁層序）

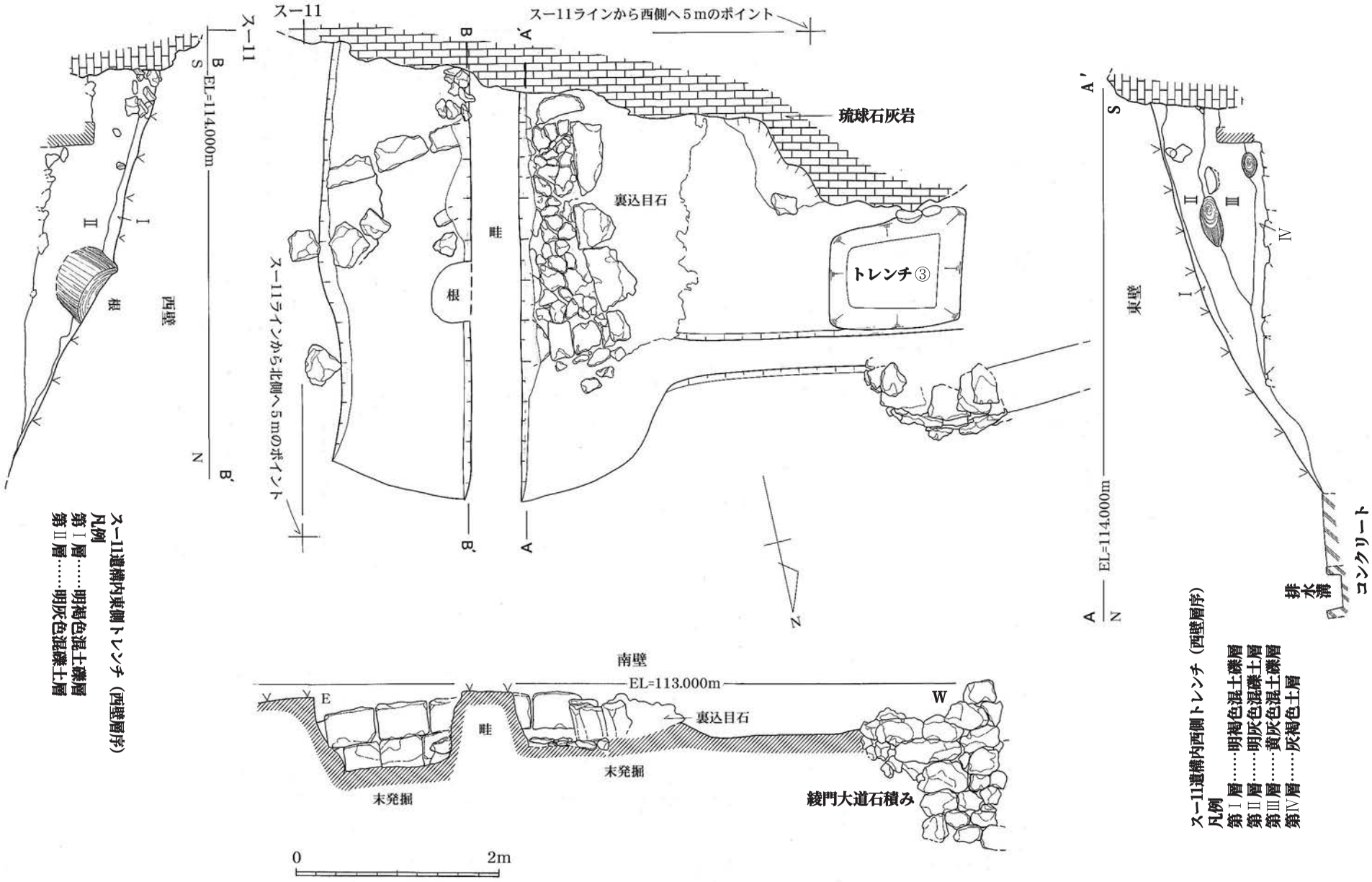
第Ⅰ層・・・明褐色混土礫層。層厚は15cm前後を有し、攪乱を受けている。

第Ⅱ層・・・明灰色混礫土層。攪乱層で、層厚は3～40cmで南側で厚く堆積し、北側で極端に薄くなり北側で消える。

第Ⅲ層・・・黄灰色混土礫層で攪乱層である。層は南側で厚く堆積するが、途中で消滅する。層厚は厚く堆積した所で50cmを有する。

第Ⅳ層・・・灰褐色土層で遺構の石敷き面直上にのみ堆積し、石敷きの北端で消える。層厚は3～10cm と薄く、

攪乱を受けている。



第４図　スー11グリットの遺構（真珠湊碑文台座跡の石敷と石積み）と層序

第５章　出土遺物

平成17（2005）年度の真珠道跡の発掘調査（真珠湊碑文台座跡及び周辺の発掘調査）で出土した遺物は、第1表に示したように中国産陶磁器を主体にタイ産褐釉陶器、半練土器、高麗青磁、ベトナム青花、本土産陶磁器、沖縄産陶器など各地域の多様な陶磁器類が出土している。その他、近・現代の磁器やガラス製品などの遺物も出土していたので、これらについては第2表に呈示した。

本章では、上記の出土遺物を青磁、白磁・青白磁、染付、・・・の順に分類・整理して、各節毎に以下に報告を行った。

第１表　人工遺物出土状況一覧

出土地＼遺物				中国産青磁	白磁・青白磁	中国産染付	褐釉（中国産・タイ産）	その他の輸入陶磁器	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	土器・土製品（羽口）	陶質土器	瓦質土器	円盤状製品	瓦・塼・漆喰	銭貨	金属（鉄製品・青銅製品）	石製品・石材	合計
セー11	表採			25	31	24	35	5	7	11	23	4	1		2	218		4	20	410
	第Ⅰ層(トレ①)			8	10	23	19	4	7	20	74		9	4		248		7	24	457
	第Ⅱ層(トレ①)																			0
スー11	表採			13	16	27	52	2	8	23	96	2	12	2	6	270		10	275	814
	Ⅰ層	東側トレ		1		3	51	1		3	12		1		1	39		3	17	132
		西側トレ			1															1
	Ⅱ層	遺構内	東側トレ	6	3	16	13			6	11	2	7		2	53		8	41	168
			西側トレ	14	2	14	50	4	5	19	86	3	12	2	7	374	2	37	153	784
			トレ③	4			11		1	1	2				1	28		2	7	57
		裏込	南側			4	1			2	6		1	1		28		5	2	50
			西側	1			3			2		2	1	1		2				12
	Ⅲ層	遺構内	西側トレ	1	8	8	39	1	2	20	54	2	14	3	4	149	1	23	46	375
		遺構外		9	2	1	297	1	3	7	20	2	7	2	4	88	8	15	169	635
		トレ③		25	2		9			2		1	1							40
	Ⅳ層	石敷直上		1		1	36		2	1	6		5			5		3		60
不明						2	4			5	7					45			6	69
合計				108	75	123	620	18	35	122	397	18	71	15	27	1547	11	117	760	4064

第２表　近・現代遺物出土状況一覧

器種・部位＼出土地				セー11 表採	セー11 第Ⅰ層（トレ①）	セー11 第Ⅱ層（トレ①）	スー11 表採	スー11 Ⅰ層 東側トレ	スー11 Ⅰ層 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	スー11 Ⅱ層 裏込目 南側	スー11 Ⅱ層 裏込目 西側	スー11 Ⅲ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅲ層 遺構外	スー11 Ⅲ層 トレ③	スー11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
磁器	本土産クロム青磁	小碗	口								1									1
	小碗		完形								4				1					5
			口	1			1									1				3
			口～胴													1				1
			胴				2								1					3
			底										1		1					2
小計				1	0	0	3	0	0	0	5	0	1	0	3	2	0	0	0	15
ガラス	器物片			2			4	2		4	31				19				16	78
	ガラス玉	青										1								1
		緑													1					1
	丸瓶	茶色	完形							2										2
	瓶		胴								1								12	13
			底								2								1	3
		青	胴																9	9
		緑	胴										1		2				15	18
			胴(角瓶)																1	1
			角底																1	1
			丸底																2	2
		透明	完形																1	1
			口縁																1	1
			胴				1			1	1				1				8	12
			底																3	3
	ガラス板																		2	2
小計				2	0	0	5	2	0	7	35	1	1	0	23	0	0	0	72	148
陶器	碑子										1									1
	タイル			3			5								1					9
	タイル（型物）			2			5				1									8
小計				5	0	0	10	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	18
瓶の蓋（現代）				1						1										2
クリーム瓶（現代）				1																1
コイン（現代）											1					1			1	3
アスファルト（現代）				1			6					2								9
プラスチィック											5									5
セメント							1				1					1				3
消しゴム										1					1					2
炭																1				1
小計				3	0	0	7	0	0	2	7	2	0	0	1	3	0	0	1	26
出土層別合計				11	0	0	25	2	0	9	49	3	2	0	28	5	0	0	73	207
				11			27			61			2		33			0	73	207
総合計				11			123												73	207

第１節　中国産青磁

青磁の出土量は第3表に呈示したように108片を数えた。出土品の大半が破片や細片であった。その中で唯一復元可能な資料は皿のみであった。確認された器種は碗、皿、盤、香炉、鉢、水注、瓶、袋物の8種類であった。

これらの資料から特徴的な出土品や図化に耐えられるものを第5・6図に示した。以下、碗・鉢・皿などの順に分類の概念を概略する。なお、個々の特徴などについては第4・5表に示した。

1．碗（第5図１～15）（図版8 - １～15）

確認された碗の種類は、雷文帯碗、ラマ式蓮弁文碗、（仮称）弦文帯類似碗、外反口縁碗、線刻細蓮弁文碗の5 種類であった。今回、弦文帯類似碗は資料としては細片であるが文様構成から便宜的に仮称した。高台資料については、上記5種類の諸特徴などから一致、若しくは該当する時期に含めた。個々の特徴などの記述は観察表に示した。

1）雷文帯碗（第5図1・2）

厚手と薄手の2種類があり、片切彫りで雷文を丁寧に描くもの（同図1）と崩れの著しい雷文を描くもの（同図2）の2種類があった。

2）ラマ式蓮弁文碗（同図3）

外反口縁碗で外面に片切彫りでラマ式蓮弁文を描くものが一点出土していたのでこれを図化した。

3）弦文帯類似碗（同図4）

胴部片一例のみの資料ではあるが文様構成から判断して弦文帯類似碗と便宜的に仮称した。文様は片切彫りで横線を4条施して弦文とし、この弦文を縦位の線で区切っている。弦文帯直下には刻花文を描いている。

4）外反口縁碗（同図6～8）

外反口縁碗の口縁破片が得られたので、これを図化した。諸特徴から大振りの外反口縁碗と判断した。

5）線刻細蓮弁文碗（同図9～14）

口縁に描かれた蓮弁文の種類は、次の三種に整理できる。①箆描きで弁先と弁軸を一致させ丁寧に蓮弁を描くもの（同図9）、②線彫りの弁先と弁軸はズレているもの（同図10・11）、③弁先が省略され、細彫りで弁軸のみを描くもの（同図12～14）、である。

2．鉢（第5図16、第6図17）（図版8 - 16、図版9 - 17）

口径が22.6cmと求められる大振りの鉢が2点出土している。口径のサイズから大鉢とした。

3．皿（第6図18～23）（図版9 - 18～23）

皿の種類として、口折皿（同図18・19）、玉縁口縁皿（同図20・21）、稜花皿（同図22・23）の3種類が確認されている。

4．盤（第6図24）（図版9 - 24）

鍔のない厚手の盤で口縁が直口する。釉薬も1mmと厚く施され、内面に片切彫りで文様を描いているが 構図は判然としない。

5．瓶（第6図25・26）（図版9 - 25・26）

瓶の肩部から胴上部の破片（同図25）と玉壺春瓶の頸部に把手を貼り付けた破片（同図26）を図化した。

6．香炉（第6図27）（図版9 - 27）

千鳥足を貼り付けた筒形香炉の底部破片が1点出土している。

小　結

青磁の中から特徴的なものを抜き出してまとめとする。第5図3はラマ式蓮弁文碗（註1）の類例資料で近年、遺跡からの出土例が増えてきている。例として久米島具志川城跡（註2）、クニンドー遺跡（註3）、島ノ上原遺跡（註4）などで出土している。

第5図16・第6図17の大鉢と近似するものは、南城市斎場御嶽（註5）で出土している。報告書によると16世紀中頃～後半㈱　州窯（福建省）と報告されている。本遺跡の大鉢も当該時期に比定できるようである。

第6図24の盤と類似する資料は、今帰仁城跡分類の鍔縁Ｉｂ（註6）であろう。同図25は優品の花瓶で上質の釉を施し、肩部の推算直径が12.0cmと求められる。肩部の形状から類例を求めると新安海底引き上げ品の青磁魚龍飾花瓶（註7）、国宝青磁魚龍飾花瓶（註8）があり、図録より肩部の直径を求めたところ前者の新安海底出土の花瓶に近いサイズであった。同図25の資料は伝世品とみられるものが破損後に廃棄されたものとみられる。

参考及び引用文献

註1. 金城亀信「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』第20号 日本貿易陶磁研究会　2000年9月。

註2. 亀井明徳ほか『具志川城跡発掘調査報告書Ｉ－史跡具志川城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告－ 久米島町教育委員会　2005年3月。

註3. 上地克哉ほか『クニンドー遺跡－個人住宅建設にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』南風原町教育委員会　2005年3月。

註4. 新垣 力ほか「第５章試掘調査（島ノ上原遺跡）」『与那原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－』与那原町教育委員会 1996年3月。

註5. 大城秀子ほか『国指定史跡斎場御嶽－整備事業報告書（発掘調査・資料編）－』知念村教育委員会　1999年3月。

註6. 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書Ｉ－志慶真門郭の調査－』今帰仁村教育委員会　1983年3月。

註7.『新安海底文物』国立中央博物館　1977年発行。収録図版番号の4. 青磁魚龍飾花瓶（高さ25.7cm）の高さを基準に図版より肩部の直径を求めたところ10.5cmであった。同様に図版番号5. 青磁魚龍飾花瓶（高さ25.0cm）も高さを基準 にして肩部の直径を求めたところ11.3cmであった。図版番号4・5とも南宋～元の時代であり他に2点の合計4点が 掲載。

註 8.『東洋陶磁展目録』東京国立博物館　1970年10月。収録図録番号58青磁鳳凰耳瓶（高さ30.1cm）を高さを基準に図版より肩部の直径を求めたところ13.3cmであった。58の資料は「銘万声 龍泉窯 南宋時代12－13世紀」とある。

第３表　青磁出土状況一覧

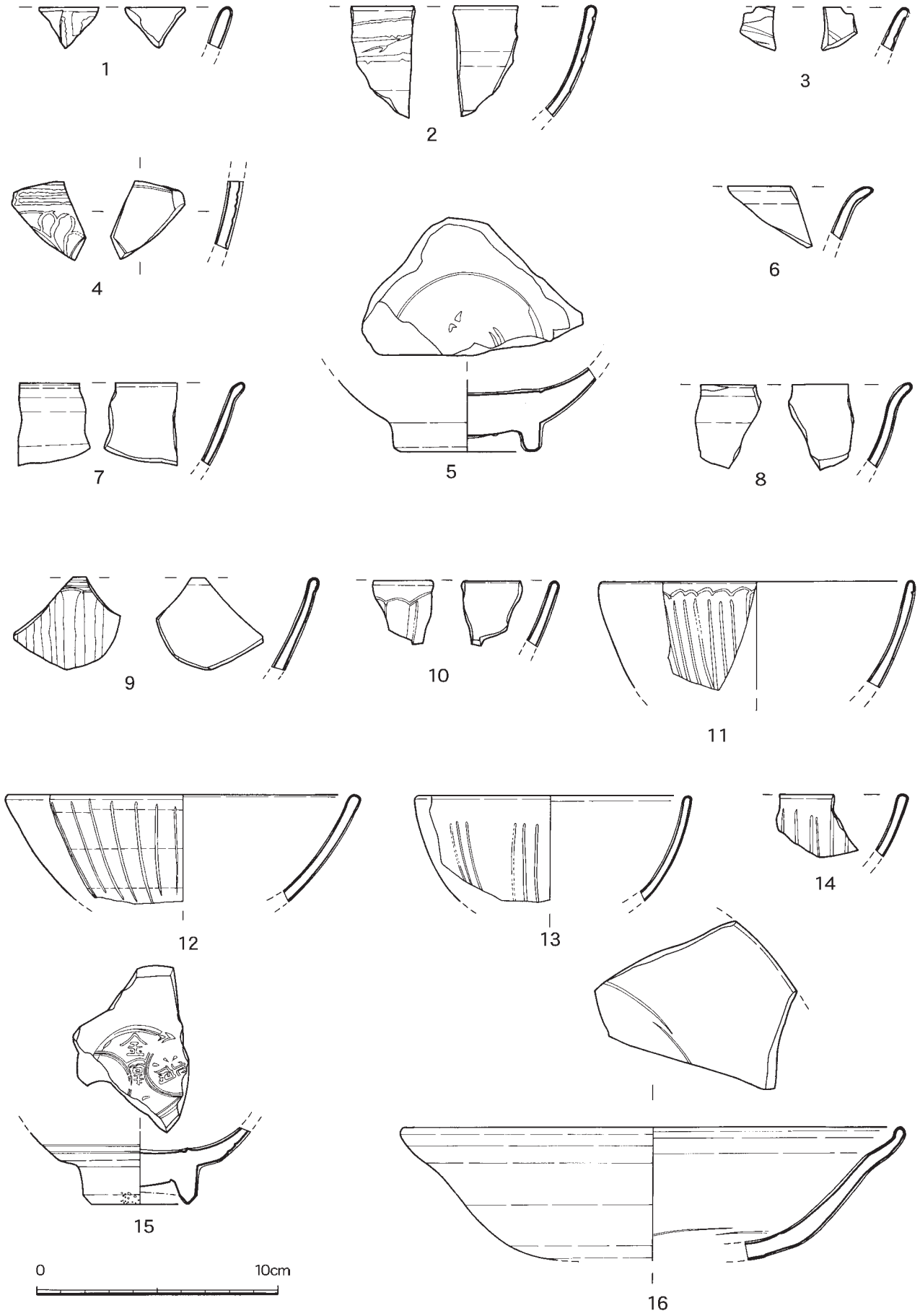
器種・部位 ＼ 出土地			セー11			スー11												不明	合計
							Ｉ層		Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層		
									遺構内			裏込目		遺構内					
			表採	第Ｉ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	東側トレ	西側トレ	トレ③	南側	西側	西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上		
青磁	碗	口	3	3		4				5	3				5	8			31
		胴	9			4			4	5			1	1	2	5			31
		底	2	1		2										5			10
	小計		14	4	0	10	0	0	4	10	3	0	1	1	7	18	0	0	72
	皿	口～底	1	1															2
		口				2									1	1			4
		胴	1						1							2			4
		底					1		1		1				1	1			5
	小計		2	1	0	2	1	0	2	0	1	0	0	0	2	4	0	0	15
	盤	口								1						2	1		4
		胴	1							1									2
		底	1																1
	小計		2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	1	0	7
	香炉	胴	3																3
		底				1													1
	小計		3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	鉢	口	2	1															3
	瓶	胴	1	1						1									3
	水注	胴	1	1															2
	袋物	胴								1						1			2
	小計		4	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	10
出土層別合計			25	8	0	13	1	0	6	14	4	0	1	1	9	25	1	0	108
			33			14			25					35			1	0	108
総合計			33			75												0	108

第４表　青磁観察一覧

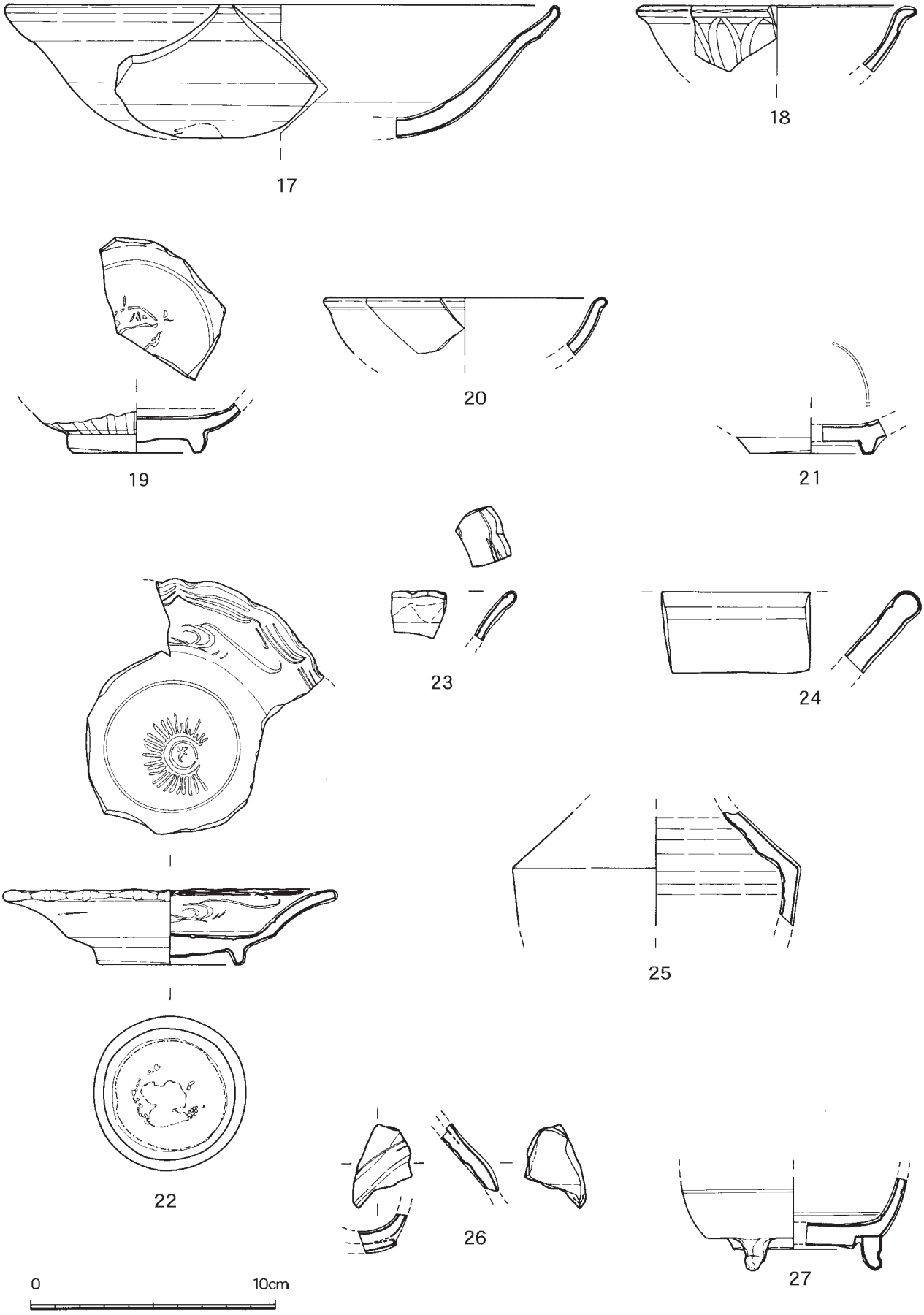
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	素　地	釉色・貫入	施釉・窯・時期	出土地点 出土層
第5図 図版8 1	碗	雷文帯碗	口縁	— — —	直口口縁。外面口縁に片切り彫りで丁寧に「雷文」を描く。	淡灰色の細粒子で劈開面に微細な白色の気泡痕が表面から多く観察できる。また、微細な黒色鉱物が僅かに混入する。	淡緑色。貫入なし。	両面に釉が残存。龍泉窯系？。14C後～15C中。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 2			口縁	— — —	直口口縁。外面口縁の文様は片切り彫りで崩れた「雷文」を描く。釉薬の透明度が高く、釉の上からでも轆轤痕が容易に観察できる。	〃　　。 〃　　。	明灰青色の透明釉。両面に粗い貫入。	両面に釉が残存。福建・広東系。14C終末～15C中。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 3		ラマ蓮弁文式碗	口縁	— — —	口縁部の外端を欠くが、側面観から小さな玉縁を有する口縁であったようである。内外面に片切り彫りで文様を描いている。外面の文様は「ラマ蓮弁文」の弁先の一部とみられる。内面が「刻花文」を描いたようである。	淡灰白色の微粒子。	淡青色。貫入なし。	両面に釉が残存。龍泉窯。14C後～15C中。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 4		弦文帯類似碗	胴部	— — —	外面胴上部に片切り彫りで横位に横線を4本施し、左端を縦位の線で区切っているようである。この文様帯直下に「唐草文」の葉と茎が描かれている。内面には「刻花文」の茎の一部が観察される。	淡灰白色の微粒子。	濃緑色。貫入なし。	両面に釉が残存。龍泉窯。14C後半～15C代か。	スー11 Ⅰ層 西側トレンチ
第5図 図版8 5		無文碗	高台	— — 6.1	高台脇からやや丸味を保持しながら外側に開く無文の碗。見込みに圏線と「草花文」とみられる文様を印刻。	淡灰色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が多く観察できる。また、微細な黒色鉱物が僅かに混入する。	明緑色。両面に細かい貫入。	外底面の釉を蛇の目状に掻き取って露胎。福建・広東系。14C終末～15C。	スー11 表採
第5図 図版8 6		外反口縁碗	口縁	— — —	残存部位から大振りの無文外反口縁の碗が推定される。	淡灰色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が多く観察できる。また、微細な黒色鉱物が多量に混入する。	明灰緑色。貫入なし。	両面に釉が残存。福建・広東系。14C終末～15C前半。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 7			口縁	— — —	〃　　。不鮮明な轆轤成形痕が外面から観察できる。	〃　　。 〃　　。	明灰色。貫入なし。	〃　　。福建・広東系。14C終末～15C前半。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 8			口縁	— — —	〃　　。外面から鮮明な轆轤成形痕が観察できる。	淡灰色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察できる。また、微細な黒色鉱物が多量に混入する。	明灰色の透明。両面に粗い貫入。	〃　　。福建・広東系。14C終末～15C前半。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 9		線刻細蓮弁文碗	口縁	— — —	内彎気味の口縁で外面に篦で蓮弁文を丁寧に描いている。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色。貫入なし。	〃　　。龍泉窯。15C中～16C中。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 10			口縁	— — —	内彎気味の口縁で外面に線彫りの蓮弁を描くが弁先と弁軸の線は一致しない。	淡灰色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が多く観察できる。また、微細な白色や黒色鉱物が多量に混入する。	淡灰緑色。貫入なし。	〃　　。福建・広東系。15C終末～16C中。	スー11 Ⅲ層遺構外
第5図 図版8 11			口縁	13.0 — —	内彎気味の口縁で外面に線彫りの蓮弁を雑に描き弁先と弁軸の線は完全に一致しない。また、弁先も尖り気味に描かれている。	淡灰白色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が多く観察できる。その他に微細な白色や黒色鉱物が少量混入する。	淡緑色。内面にのみ細かい貫入。	〃　　。福建・広東系。15C終末～16C中。	セー11 Ⅰ層
第5図 図版8 12			口縁	14.7 — —	内彎気味の口縁で全体的に外側に大きく開いた碗。文様は外面に線彫りで弁先のない弁軸を等間隔で丁寧に描いている。	淡灰色の粗粒子で劈開面に微細な気泡痕が確認され、微細な黒色・白色鉱物等も多量に混入する。	黄茶色の失透釉。両面に微細な貫入。	〃　　。福建・広東系。15C終末～16C中。	スー11 Ⅰ層西側トレンチ
第5図 図版8 13			口縁	11.4 — —	内彎気味の小振りの碗。外面に幅4mm間隔で三本一組単位の櫛書き様の蓮弁を雑に描いている。なお、蓮弁は弁先が省略されている。	淡黄白色の粗粒子で劈開面に微細な黒色鉱物が少量混入する。	淡灰緑色の失透釉。貫入なし。	〃　　。福建・広東系。15C終末～16C中。	セー11 Ⅰ層
第5図 図版8 14			口縁	— — —	内彎気味の口縁で外面に線彫りの蓮弁を丁寧に描いているが蓮弁には弁先が省略され弁軸のみ表現されている。	淡灰黄色の粗粒子で劈開面に微細な黒色鉱物が少量混入する。	淡灰緑色の透明釉。両面に微細な貫入あり。	〃　　。福建・広東系。15C終末～16C中。	セー11 Ⅰ層

第５表　青磁観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	素　地	釉色・貫入	施釉・窯・時期	出土地点 出土層
第5図 図版8 15	碗	無文碗	高台	— — 4.7	腰下部は丸味を持たせて成形し、高台畳付を尖らせている。高台内刳りは雑である。高台外底面及び畳付外端に部分的な重ね焼きの胎土目が付着している。見込みの印花文は花心に「吉」の一字を中心にし、四方に「金玉満堂」の文字を型で起こしている。	淡灰色の粗粒子で劈開面に粗い筋状の気泡痕が多く観察できる。その他に微細な黒色・白色鉱物等が少量混入。	淡灰緑色の透明釉。両面に細かい貫入あり。	高台内面途中から外底面まで露胎で他は総釉。福建・広東系。15C終末～16C。	セー11 Ⅰ層
第5図 図版8 16	鉢	大鉢	口縁	22.6 — —	全体的に逆「ハ」の状に外側に大きく開き口縁で内彎する鉢。内面上部に蓋受けのタガを成形する。内面腰下部に陽圏線を描くが線はズレている。	淡灰色の細粒子で微細な黒色鉱物が少量混入。	淡青緑色。貫入なし。	外面の釉薬は腰下部まで厚く施すが、高台際まで釉が流れている。漳州窯。16C中～後半。	セー11 Ⅰ層
第6図 図版9 17			口縁	22.6 — —	〃　。　〃　。 口縁端部で若干、厚みがなくなる。	〃　。	〃　。 〃　。	〃　。漳州窯。16C中～後半。	セー11 表採
第6図 図版9 18	皿	口折皿	口縁	11.4 — —	内面口縁の鍔は屈曲に丸味を持って成形。外面の口縁屈曲部下端から弁先の尖った蓮弁文を片切彫りで描いている。	淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕が少量観察される。	淡青緑色。貫入なし。	両面に釉が残存。龍泉窯系。14C後半～15C。	スー11 表採
第6図 図版9 19			高台	— — 5.2	片切彫りの蓮弁文を高台脇まで施す。見込みに陰圏線と双魚文を印刻する。	淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕や黒色鉱物が少量観察できる。	淡灰緑色。貫入なし。	釉は畳付外端まで施釉。福建・広東系。14C終末～15C。	スー11 Ⅲ層遺構外
第6図 図版9 20		玉縁口縁皿	口縁	11.6 — —	無文の玉縁口縁皿で肥厚帯下端を箆で削り出して肥厚を強調する。	灰白色の微粒子。	濃緑色。貫入なし。	両面に釉が残存。龍泉窯系。14C後半～15C。	スー11 表採
第6図 図版9 21		無文皿	高台	— — 5.0	見込みに陽圏線を施す。外底面を平坦に成形する。	淡灰色の細粒子で微細な気泡痕が少量確認される。	淡青緑色。貫入なし。	釉は高台内面途中まで施釉。福建・広東系。14C終末～15C。	スー11 Ⅰ層 東側トレンチ
第6図 図版9 22		稜花皿	口～底	13.7 3.1 6.4	口唇部を稜花状に成形。文様は口唇の稜花に沿うように三本一組の櫛でラマ式蓮弁を描き、その直下に片切彫りで刻花文を描く。見込みに印刻の「菊花文」と圏線を施す。菊花文の花心には判読不能な字款とみられものが施されている。	淡灰色の粗粒子で劈開面に粗い筋状の気泡痕が多く観察できる。その他に微細な黒色・白色鉱物が少量混入。	淡灰緑色。両面に粗い貫入。	外底面の釉を蛇の目状に掻き取って露胎。外底面に重ね焼の胎土目が付着。福建・広東系。15C終末～16C。	セー11 表採
第6図 図版9 23			口縁	— — —	稜花皿の口縁破片で文様は口唇の稜花に沿うように三本一組の櫛でラマ式蓮弁を描き、その直下に片切彫りで刻花文を描く。	淡灰色の細粒子で劈開面に粗い筋状の気泡痕が僅かに観察できる。その他に微細な黒色・白色鉱物が少量混入。	淡灰青色の失透釉。貫入なし。	両面に釉が残存。福建・広東系。15C終末～16C。	スー11 Ⅲ層遺構外
第6図 図版9 24	盤	口縁直口盤	口縁	— — —	厚手の大皿。器壁の厚さが1.1cmを測る。内面に片切彫りの文様を描いているようであるが釉薬も1mmと厚く観察ができない。	淡灰白色の微粒子で劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる。	淡灰青色の失透釉。貫入なし。	〃　。 龍泉窯系。14・15C。	スー11 Ⅳ層 石敷き直上
第6図 図版9 25	瓶	—	肩～胴部	— — —	肩部が「く」の字状に屈曲した花瓶の破片。屈曲部は明瞭な稜線となる。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色。貫入なし。	〃　。 龍泉窯。12～13C。	セー11 Ⅰ層
第6図 図版9 26		—	頸部	— — —	頸部に陶土を紐状に斜位に貼り付けた玉壺春瓶の破片。	淡灰白色の微粒子。	淡青緑色。貫入なし。	〃　。 龍泉窯。14・15C。	セー11 Ⅰ層
第6図 図版9 27	香炉	三足香炉	高台	— — 7.2	胴部に細線（弦文）が一条残存する。三足の千鳥足を持つ筒形香炉。底造りは陶土を削り出して高台を造り、高台外底面を浅く刳り抜いて仕上げている。	淡灰白色の微粒子であるが僅かに微細な黒色鉱物が僅かに混入。	淡灰緑色。貫入なし。	施釉は高台の外底面縁沿いまで垂れている。龍泉窯系。14・15C。	セー11 Ⅰ層



第５図　青磁　１



第６図　青磁　２

第２節　中国産白磁・青白磁

白磁及び青白磁の出土片数は第6表に示すように75点を数え、その内の1点が青白磁であった。唯一、復元可能な資料として白磁の小皿が得られている。確認された白磁の器種は、碗・皿・鉢・小杯の4器種であった。青白磁は小壺や鉢類の蓋とみられるもののみが確認されている。白磁の器種別出土量は、皿を主体に碗・小杯・鉢と順次減少する。これらの資料から特徴的な出土品や図化に耐えられるものを第7図に示した。以下、碗・皿・鉢・小杯・蓋の順に分類の概念を記す。なお、前記した青白磁の釉調は、淡い灰色を帯びたものを施していて、素地も粗製であった。個々の諸特徴については第7・8表に示した。

1. 碗（第7図１～７）（図版10－１～7）

碗は口縁部の特徴から外反口縁碗（同図1）、端反碗（同図2・3）、口禿碗（同図6）の三種類が確認されている。その他に高台破片が3点（同図4～7）得られているが、口縁資料とは時期及び諸特徴（釉薬・素地など）が合致しない。

2. 皿（第7図8～14）（図版10－8～14）

皿の口縁形態で確認されているタイプは外反口縁（同図8～11）のみであった。外反の度合いに若干の強弱がある。口縁資料からは小皿（口径9.4cm）や中皿（口径10.8～12.0cm）の二種類が確認されているが、高台資料（同図12～14）から高台径が9.0cm～10.3cmと中皿の口径と高台資料（同図12～14）を比較した場合、中皿の最大口径12.0cmを1.0とした際に、高台資料の最小高台径9.0cmが0.75となり、比率が口径１：高台径0.75となりバランスがとれていないことから大皿が存在することは確実であるが、今のところ大皿の口縁資料は確認されていない。

3. 鉢（第7図15）（図版10－15）

大振りの鉢の口縁資料が１点得られいる。両面に厚く釉薬（0.7mm）を施す。

4. 小杯（第7図16～18）（図版10－16～18）

小杯の口縁資料は細片したものが３点得られたが、図化を省略した。高台資料は形状の窺える3点を図化（同図16～18）した。

5. 青白磁　蓋（第7図19）（図版10－19）

釉薬がやや灰色味を帯びた青白磁の蓋が1点得られている。素地は軟質で半磁胎である。蓋甲上面には陽刻の圏線や唐草文とみられる文様を印刻する。小壺や鉢類の蓋とみられる。

小　結

白磁の時代幅は14世紀前半～18世紀と幅が広いが、主体となる時期は15世紀後半～16世紀である。出土した白磁の外反口縁碗は、森田 勉編年（註1）の白磁分類碗C群の範疇にあり、14世紀後半から15世紀初頭に今帰仁城跡（註2）で多量に出土していることから、金武正紀は1383～1415年を中心に将来されたと考えている（註3）。

第7図2・3の端反碗は、南風原町クニンドー遺跡（註4）出土の白磁端反碗b・c種と諸特徴が一致し、14世紀前半に比定されている。小杯の第7図16の類例は、首里城跡（註5）で出土していて、16世紀後半～17世紀中頃に比定されているが比較検討の結果、本品が成形などから時期的に若干、先行するようである。

註文献

註 1. 森田 勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』N0.2　日本貿易陶磁研究会　1982年。
註 2. 金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ－志慶真門郭の調査－』今帰仁村教育委員会　1983年３月。
註 3. 金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』N0.8　日本貿易陶磁研究会　1988年。

註 4. 金城亀信・島袋 洋・上地克哉『クニンドー遺跡 - 第１・２・３次範囲確認調査報告書 - 』南風原町教育委員会 1996年３月。

註5. 西銘 章・城間 肇ほか『首里城跡 - 下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・広福門跡・木曳門跡・発掘調査報告書 - 』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年３月。

第６表　白磁・青白磁出土状況一覧

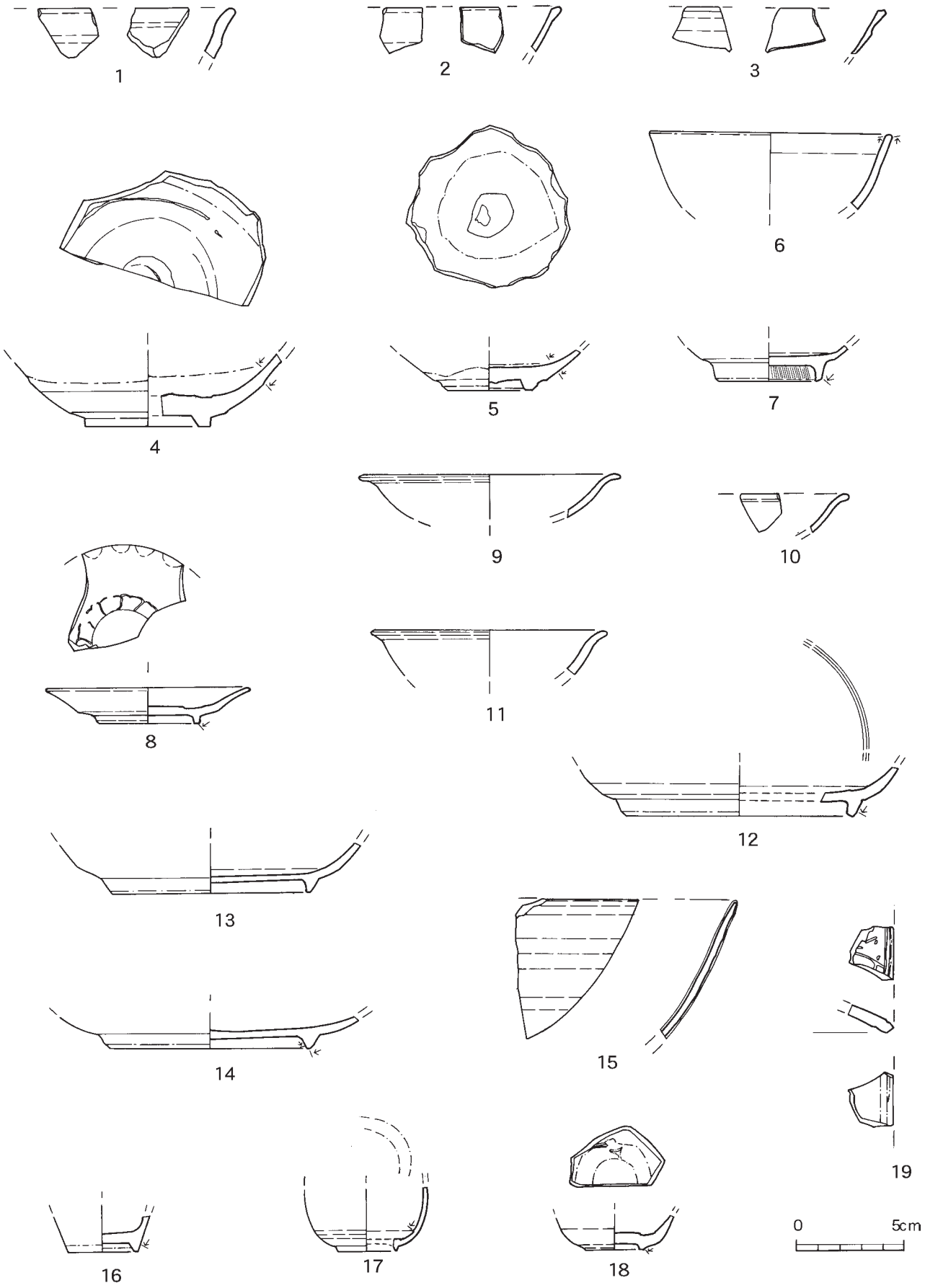
器種・部位 ＼ 出土地			セー11			スー11													不明	合計
							Ⅰ層		Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層			
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	遺構内 東側トレ	遺構内 西側トレ	遺構内 トレ③	裏込目 南側	裏込目 西側	遺構内 西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上		
白磁・青白磁	碗	口	1	2		2									1	1			7
		胴	3			2			1					1		1			8
		底	2	1										1					4
	小計		6	3	0	4	0	0	1	0	0	0	0	2	1	2	0	0	19
	小碗	口～底	3							1									4
		口												1					1
		底						1						2					3
	小計		3	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	8
	皿	口～底							1					1					2
		口	6	3		2								2					13
		底	6	1		6			1	1									15
	小計		12	4	0	8	0	0	2	1	0	0	0	3	0	0	0	0	30
	小杯	口	2			1													3
		胴	4			2													6
		底	1	3															4
	小計		7	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
	鉢	胴	2			1													3
	青白磁	蓋													1				1
	器種不明	胴	1																1
	小計		3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5
出土層別合計			31	10	0	16	0	1	3	2	0	0	0	8	2	2	0	0	75
			41			17			5					12			0	0	75
合計			41			34											0	0	75

第７表　白磁・青白磁観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	素　地	釉色・貫入	施釉・窯・時期	出土地点 出土層
第7図 図版10 1	碗	外反口縁碗	口縁	— — —	厚手の外反口縁の碗で口唇部は丸味を持たせて成形し、口縁部を浅く窪ませて外反させる。腰上部に明瞭な稜線が横走する。内面に丸彫りによる陽沈線が二条施されている。	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色。貫入なし。	両面に釉が残存。福建・広東系。14C後半～15C初頭。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第7図 図版10 2		端反碗	口縁	— — —	口縁が微弱に外反する薄手の碗。口唇外端部は丸味を持たせて成形、口唇内端を篦状工具で斜めに削り出して仕上げる為、内面口縁および口唇内端に明瞭な稜線を横走させて強調。	黄白色の細粒子で劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる。	灰白色。両面に細かい貫入。	両面に釉が残存。福建・広東系。14C中。	セー11 Ⅰ層
第7図 図版10 3			口縁	— — —	口縁が僅かに外反し、器壁が腰上部で1.6mmと薄くなる碗。口唇部の調整は面を取るように口唇の内外面を篦状工具で削りだして成形する。内面口縁及び口唇内端に外面口縁と同様に明瞭な稜線が走る。外面口縁の轆轤引きで浅く窪ませて口縁及び腰上部に不鮮明な稜が観られる。	白色の微粒子。	淡青白色。貫入なし。	両面に釉が残存。景徳鎮窯系。14C前。	セー11 Ⅰ層
第7図 図版10 4			高台	— — 5.7	高台畳付の幅が5.5mmを測るやや幅広の高台で高台脇から削りを加えて成形。高台内刳りは斜位に刳り抜いていて外底面を平坦に仕上げる。	黄白色の粗粒子で劈開面に粗細な気泡痕が多く観られ、稀に2mm程度の茶色の鉱物が混入する。	淡灰色。両面に細かい貫入あり。	内外面とも腰下部まで施釉。福建・広東系。16C～17C。	セー11 表採
第7図 図版10 5			高台	— — 3.9	高台脇に丸彫りで浅く削り出して高台を成形した。碁笥底状の高台。高台内底の内刳りはやや雑で外底中央が浅く盛り上がっている。	白色の細粒子で、劈開面に微細な気泡痕が少量観察できる。	灰白色の失透釉。両面に微細な貫入あり。	外面は高台際まで施釉。内底面のみ露胎。景徳鎮系。16C～17C。	スー11 表採
第7図 図版10 6		口禿碗	口縁	11.1 — —	口禿碗。口縁部は僅かに外反し、口唇部に丸味に持たせて成形。	淡灰白色の細粒子。	白色の釉。貫入なし。	両面に釉が残存。景徳鎮系。16C前半～中頃。	スー11 表採
第7図 図版10 7			高台	— — 4.8	腰下部の器壁が2mm前後と薄手の碗。高台の内刳りは深く飛びカンナ状に削り出しの成形痕が全体的に観察できる。外底面は丁寧に平坦に成形する。	白色の微粒子。	白色の釉。貫入なし。	高台外端から外底面までが露胎。景徳鎮。17C？。	スー11 表採
第7図 図版10 8	皿	外反口縁皿	口縁～高台	9.4 1.7 4.4	薄手の外反口縁皿で腰下部で「く」の字状に屈曲させる。器壁が最も薄いところで1.6mmを測る。見込みに予め花弁を印刻し、その後に釉薬を掛けて釉を蛇の目状に掻き取って花弁が見えるように露胎させている。	淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が僅かに観察できる。	淡灰白色の釉。貫入なし。	見込みと畳付けが露胎。景徳鎮系。15C後半～16C。	スー11 Ⅰ層 西側トレンチ
第7図 図版10 9			口縁	12.0 — —	口縁をきつく折り曲げて鍔縁折れ状に水平に成形する外反皿。	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色の釉。貫入なし。	両面に釉が残存。景徳鎮系。15C後半～16C代。	スー11 表採
第7図 図版10 10			口縁	— — —	口縁の屈曲は緩く外反する皿。	淡灰白色の微粒子。	〃　。 〃　。	〃　。〃　。 15C後半～16C代。	セー11 表採
第7図 図版10 11			口縁	10.8 — —	厚手の外反口縁皿。	淡灰白色の微粒子。	〃　。 〃　。	〃　。〃　。 15C後半～16C代。	セー11 表採
第7図 図版10 12		皿高台	高台	— — 10.3	見込みに陽圏線を施す。	灰白色の細粒子。	淡灰色の釉。 〃　。	畳付及び畳付外端が露胎。景徳鎮系。15C後半～16C。	セー11 表採
第7図 図版10 13			高台	— — 9.0	高台脇から丸味を持たせて立ち上がる腰丸の皿。	淡灰白色の微粒子。	淡灰色の失透明釉。 〃　。	〃　。景徳鎮系。15C後半～16C。	セー11 Ⅰ層
第7図 図版10 14			高台	— — 9.0	見込みに針先状の目痕とみられるが3・4箇所に観られる。	〃　。	淡灰白色の釉。 〃　。	〃　。福建・広東系。15C終末～16C中。	セー11 Ⅰ層

第８表　白磁・青白磁観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	素　地	釉色・貫入	施釉・窯・時期	出土地点 出土層
第7図 図版10 15	鉢	直口口縁鉢	口縁	— — —	大振りの鉢で口唇部を舌状に尖らせて成形する。劈開面の状況から器形に沿って筋状の亀裂が口縁端部から腰下部まで観察されることから型成形とナデ成形の併用が考えられる。	淡灰白色の微粒子。半磁胎。	淡青白色の釉。両面に粗い貫入。	両面に釉が残存。景徳鎮系。16・17C。	セ－11 Ⅰ層
第7図 図版10 16	杯	小杯	高台	— — 3.2	蕎麦猪口形の杯。外底面を丁寧に刳り抜いて成形。	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色の釉。貫入なし。	両面に釉が残存。景徳鎮系。16C前半～中頃。	セ－11 表採
第7図 図版10 17			高台	— — 2.7	高台脇から強く丸味を持たせて腰下部を成形する腰丸の杯。見込みの釉を蛇の目状に掻き取って露胎とする。見込みの重ね焼の際の目痕がある。	〃　。	〃　。 〃　。	見込みの釉剥ぎ部分と畳付及び外端が露胎。景徳鎮系。17C後半～18C。	セ－11 Ⅰ層
第7図 図版10 18			高台	— — 2.6	高台を碁笥底状に成形する。高台の内刳り抜きは浅く、外底面を平坦に仕上げている。見込みの釉を蛇の目状に掻き取っている。	白色の微粒子。	〃　。 〃　。	見込みの釉剥ぎ部分と畳付及び外端が露胎。景徳鎮。17C～18C。	セ－11 Ⅰ層
第7図 図版10 19	蓋	蓋	蓋	— — —	蓋甲上面に陽刻の圏線と唐草文？を施す。蓋縁と縁沿いの釉を面取り成形を兼ねて掻き取っている。釉調や文様などから製作段階から青白磁を意識した製品。	淡黄白色の細粒子で、劈開面から粗い気泡痕が僅かに観察できる。	淡灰青色の釉。両面に細かい貫入。	縁及び縁沿いが露胎。福建・広東系。16C？	ス－11 Ⅲ層 遺構外



第７図　白磁・青白磁

第３節 中国産染付

染付の時代幅は15世紀後半～18世紀代と幅があるが主体となる時期は17・18世紀頃が推定される。出土量は第9表のとおり123片を数えた。確認された器種は、碗、皿（大皿、小皿を含む）、小杯、水注、瓶、小壺の６器種であった。器形の窺える復元可能な資料は２個体のみであり、大半が細片化した破片資料であり、その中から比較的大型の破片や特徴的な資料を抜き出して図化を試みた。なお、個々特徴については第10・11表の観察表に呈示した。

１．碗（第8図１～10）（図版11 - １～10）

碗の口縁形態は大雑把ではあるが、①口縁が緩やかに僅かに外反するタイプ（同図１）、②内彎口縁タイプ（同図２）、③直口口縁タイプ（同図６）、④外反口縁タイプ（同図７・10）と、四つのタイプが把握できる。

碗の外面にみられる文様は、「菊花花文」＋「波濤文」（同図１）、抽象化された「波濤文」（同図２）、「双龍文」（同図３）、「鶴丸文」（同図６）、アラベスク風の「三葉文」（同図７）、「花唐草文」（同図10）がある。見込みの文様は「菊花花文」＋「十字花文」（同図４）、「花卉」（同図５）がみられる。

２．皿（第9図11～19）（図版12 - 11～19）

皿は、口径、器高、高台径などから便宜的に中皿、大皿、小皿の三種類に分類した。

１）中皿（第9図11～14）

中皿は口径が9.5～12.0cm、器高3.0cm、高台径4.0～7.0cmの範囲内にあるものとし、３点が得られている。外面及び見込みの文様は「宝相華唐草文」と「玉取獅子」を組み合わせたものが２点（同図11・12）得られている。口縁内面に「梵字文」を描くものが１点（同図14）得られている。

２）大皿（第9図15～18）

大皿は器高を窺い知ることのできる資料が欠落していたため、サイズの基準が口径と高台に限定された。口径が12.0～24.0cm、高台径7.1～11.5cmの範囲内にあるものとし、その他に類似資料や口縁の形態などから大皿として判断できた５点を図示した。外面に施された文様は構図不詳のものが多く確認された文様は「宝相華牡丹唐草文」（同図15）、「渦巻き文」（同図18）の二例であった。その他に型起こしの「陰刻蓮弁文」（同図18）が存在する。内面の見込みの文様は欠落していて明確な資料はない。内面に施された文様として「蔦唐草文」（同図14）、「麒麟？」若しくは「玉取獅子？」（同図15）、「蕉葉文」＋「虫」（同図16・17）、「渦巻き」＋「波濤文」（同図18）がある。

３）小皿（第9図19）

小皿は全形を窺うことのできる資料が１点のみ得られている。口径9.4cm、器高2.9cm、高台径3.9cmを測った。文様は口縁の内外面に幅広の界線を一条施しているのみで、他の文様は確認されなかった。

３．小杯（第9図20）（図版12 - 20）

口縁部を欠いた小杯が１点出土している。高台径2.8cmを測る資料で、見込みには構図不詳の文様が描かれている。

４．水注（第9図21）（図版12 - 21）

上面観が扁平な水注（扁壷傾向の有る玉壷春瓶型）の胴部片が１点得られている。外面には垂下する五葉文を弁内に描いた「ラマ式蓮弁文」と「窓枠」・「唐草文」が描かれている。

５．瓶（第9図22）（図版12 - 22）

玉壷春瓶の胴部資料が１点得られていたので、これを図示した。窓枠のある胴部で枠内に「青海波文」を描いている。胴下部に胴継ぎがなされている。

６．小壷（第9図23）（図版12 - 23）

頸下部から胴部に「四方襷文」・「龍文」・「雲文」を描いている。

小　結

報告した中国産染付の中で、碗の第8図１が口縁の区画文様帯に「菊花花文」＋「波濤文」を描く例は慶来慶田城遺跡（註１）がある。この碗と類似する区画文様帯に「波濤文」を描くタイプは胴部にアラベスク文を描く例がある。同図２の簡素化された「波濤文」と同図４の見込みに「菊花花文」＋「十字花文」の類例が湧田古窯跡（註２）・慶来慶田城遺跡などで出土している。このタイプには胴部に簡素化された「波濤文」のみを全体に描く例や「蕉葉文」・「アラベスク文」などを描くようである。同図３は今帰仁城跡（註３）で出土している。同図６の「鶴丸文」はクニンドー遺跡（註４）がある。同図10は比較的に県内での類似資料が多く首里城跡東のアザナ地区（註５）・真珠道跡（註６）・湧田古窯跡などで出土している。

次に皿では中皿とした第9図11・12は見込みに「玉取獅子」を描いたもので、湧田古窯跡で10点余が出土している。他に円覚寺跡（註７）、天界寺跡（註８）、首里城跡城の下地区（註９）、首里城跡書院・鎖之間地区（註10）、今帰仁城跡などで出土している。同図13は慶来慶田城遺跡、首里城跡管理用道路地区（註11）、首里城跡継世門周辺地区（註12）などで出土している。

大皿の同図16・17については、野上建紀氏によると1600年にフリッピンのマニラ沖のオランダとの海戦で沈没したスペイン船SAN DIEGO号に積載された資料に類似するとのことであった（註13）。今後、注目される資料とみられる。

小皿の同図19は、内外面に一条の界線を施すものであるが管見の限りにおいて県内遺跡から出土した例がない。

同図20の小杯で見込みに同種の文様を施す例は、ヤッチのガマ・カンジン原古墓群（註14）で出土している。

同図22の窓枠に「青海波文」を施した瓶の例は、天界寺跡にある。また、これと同種の文様を用いたベトナム青花が今帰仁城跡で出土している。

註文献

註１．　沖縄県文化財調査報告書第131集『西表島 慶来慶田城遺跡 重要遺跡確認調査』沖縄県教育委員会　1997年３月。

註２．　沖縄県文化財調査報告書第111集『湧田古窯跡（Ⅰ)』沖縄県教育委員会 1993年３月。

註３．　今帰仁村文化財調査報告書第14集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 1991年３月。

註４．　南風原文化財調査報告書第2集『クニンドー遺跡‐第１・２・３次範囲確認調査報告書‐』南風原町教育委員会　1996年３月。

註５．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第20集『首里城跡‐東のアザナ地区発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2004年３月。

註６．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集『真珠道跡‐首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅰ）‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2006年３月。

註７．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集『円覚寺跡‐遺構確認調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2002年３月。

註８．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第８集『天界寺跡（Ⅱ）‐首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2002年３月。

註９．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第18集『首里城跡‐城の下地区発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2004年３月。

註10．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集『首里城跡‐書院・鎖之間地区発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2005年３月。

註11．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第１集『首里城跡‐管理用道路地区発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年３月。

註12．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第９集『首里城跡‐継世門周辺地区発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2002年３月。

註13．　野上建紀（有田町歴史民俗資料館文化財調査員）に平成18年12月１日に出土品を実見してもらった。記して謝意を表す。

註14．　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群‐県営かんがい排水事業（カン ジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書‐』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年３月。

第９表　中国産染付出土状況一覧

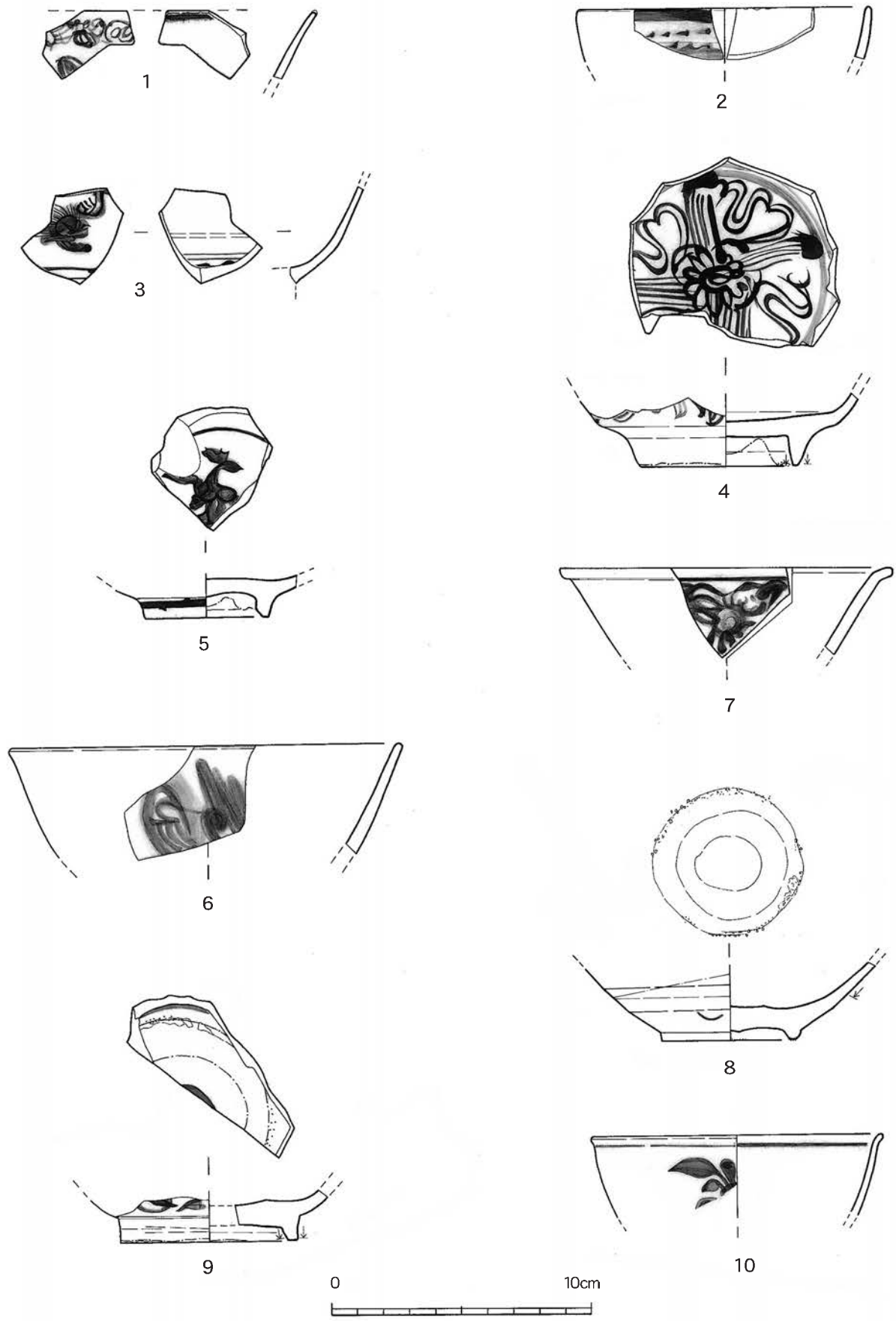
器種・部位 ＼ 出土地			セー11			ス－11													不明	合計
							Ⅰ層		Ⅱ層						Ⅲ層			Ⅳ層		
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	遺構内 東側トレ	遺構内 西側トレ	遺構内 トレ③	裏込目 南側	裏込目 東側	裏込目 西側	遺構内 西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上		
染付	碗	口	2	3		2				2					1			1		11
		胴	4	1		9			8	3					1	1				27
		底	3	1		1			1			1								7
	小碗	底	1			1			1	1					1					5
	小計		10	5	0	13	0	0	10	6	0	1	0	0	3	1	0	1	0	50
	皿	口～底	1	1																2
		口	2	7		1			3	1										14
		胴	1	3		5	3			1		1			1					15
		底	1	2		2				2		1			1					9
	小計		5	13	0	8	3	0	3	4	0	2	0	0	2	0	0	0	0	40
	小杯	口	3	1		1				1					1					7
		底	3			1														4
	小計		6	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	11
	瓶	胴	1	1					1											3
	瓶or袋物	胴	2			3			2	3		1			1				2	14
	器種不明	胴		3		1									1					5
	小計		3	4	0	4	0	0	3	3	0	1	0	0	2	0	0	0	2	22
出土層別合計			24	23	0	27	3	0	16	14	0	4	0	0	8	1	0	1	2	123
			47			30			34						9			1	2	123
総合計																				123

第10表　中国産染付観察一覧

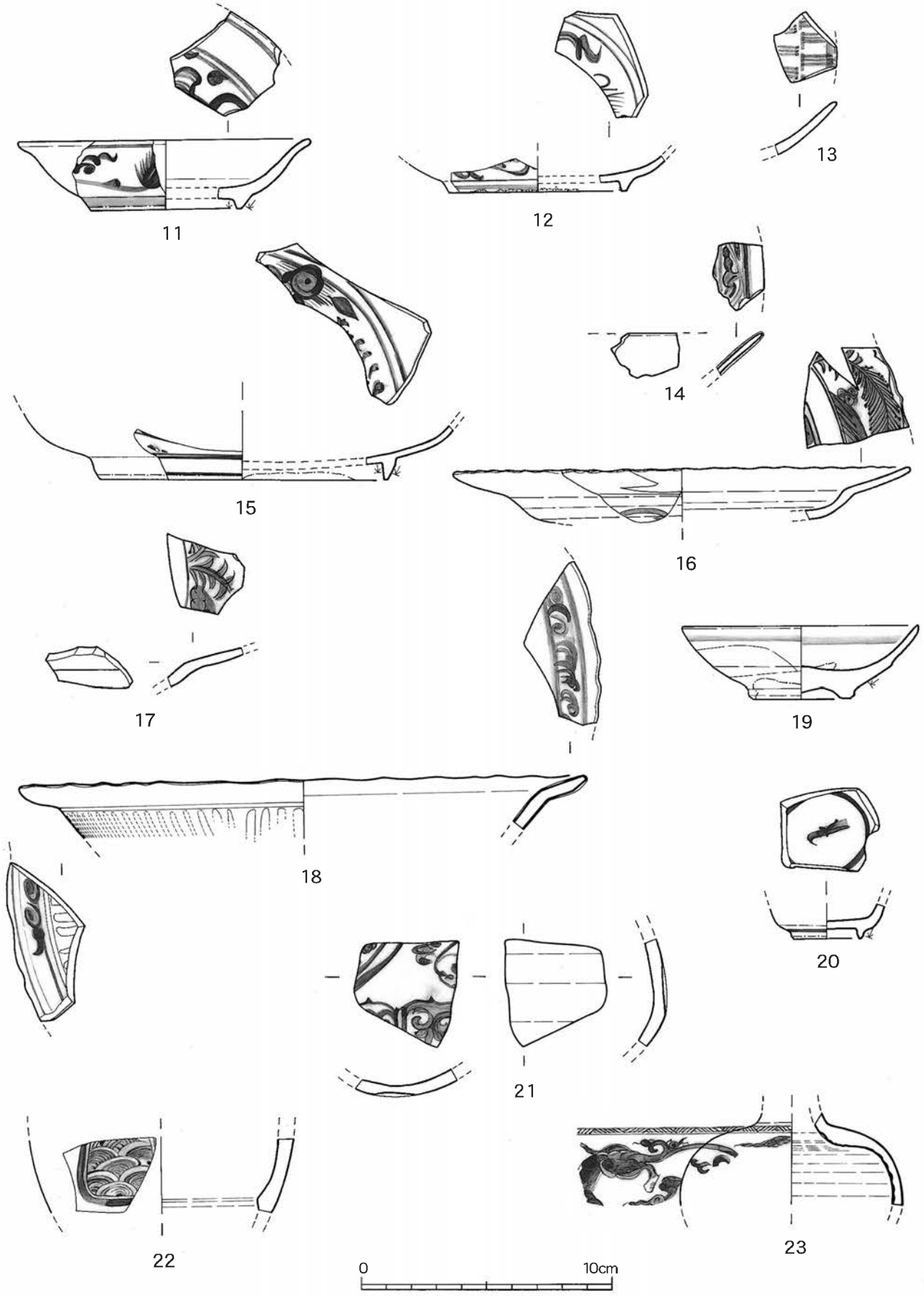
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	呉須の発色と色調	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土地点 出土層
第8図 図版11 1	碗	口縁	— — —	口縁が緩やかに外反する直口気味の碗。劈開面の観察から口唇部は平坦に成形されている。外面の口縁に区画界線を上位に一条、下位に二条を施して、区画内に「菊花花文」と「波濤文」を描いている。この波濤文帯直下に「花文」とみられる文様を描いている。内面は口唇近くに幅広の圏線を描く。	やや不鮮明。淡青色。呉須の一部が釉上まで達する。	淡灰白色	両面施釉。素地は灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮窯。15C後～16C前。	セー11 Ⅰ層
第8図 図版11 2		口縁	11.3 — —	口縁が緩やかに内彎する腰丸碗の口縁破片とみられる。劈開面の観察から口唇部の形状は丸味を帯びた舌状となる。外面の口縁に区画圏線を上位に一条、下位に一条を施して、区画内中央に抽象化された三角形状の「波濤文」と下位の「波濤文」は区画圏線と接するように描いている。内面口縁には不鮮明な圏線が一条描かれている。	やや鮮明。濃青色。	淡灰青色	素地は淡灰白色の細粒子。貫入はない。福建・広東の諸窯。16C初～16C中。	セー11 表採
第8図 図版11 3		胴部	— — —	腰下部から高台脇まで残存する碗。外面の胴部には主文とみられる「双龍文」を描く、高台際と高台脇に各一条の圏線がみられる。内面の腰下部に二条一組の圏線を施し、見込みに構図不詳の文様(双龍文の雲文部分が残存か)を描く。	やや鮮明。濃青色。	淡青白色	素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮窯。15C末～18C前。	ス－11 表採
第8図 図版11 4		高台	— — 6.0	腰折碗の高台破片。外面腰部に「垂下葉文」、高台脇に一条の圏線を施す。内面腰下部に幅広に圏線を二条施し、見込みに主文の「菊花文」を中心に配置した「十字花文」を描く。見込みに砂胎土目痕。高台畳付の一部に砂胎土目の陶土が付着。	鮮明。灰黒色。	淡黄白色	露胎の範囲は高台外面下端～高台内面まで。素地は淡灰白色の粗粒子で黒色の鉱物が僅かに混入。両面に粗い貫入。中国南部の諸窯。15C末～16C中。	セ－11 Ⅰ層
第8図 図版11 5		高台	— — 4.8	内底面が僅かに盛り上がる「饅頭心型」系統の碗。描技法は文様の輪郭内を塗りつぶす「ダミ技法」。外面高台際と脇に圏線を施す。見込みには圏線と主文の「花弁」とみられる文様を描く。畳付に細かいガラス化した植物繊維を剥離剤として使用、植物繊維が釉薬に付着している。	やや鮮明。濃青色。	淡青白色	内外面及び畳付まで総釉。素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。徳化窯系。16C末～17C前。	ス－11 表採
第8図 図版11 6		口縁	15.1 — —	厚手の直口口縁碗。外面に主文の「鶴丸文」を描いている。	不鮮明。淡青色。	淡灰白色	素地は淡灰白色の微粒子。両面に細かい貫入。景徳鎮系の諸窯。17C末～18C前。	ス－11 Ⅰ層 西側トレ
第8図 図版11 7		口縁	12.8 — —	厚手の外反口縁碗。外面は口頸部に幅広の界線を一条施し、その直下に主文となるアラベスク風の「三葉文」を描いている。	やや鮮明。藍色。	淡黄白色	素地は淡黄白色の細粒子。両面に粗い貫入。福建・広東系？。18C前～中頃。	ス－11 表採
第8図 図版11 8		高台	— — 5.1	高台脇から逆「ハ」の字状に開く碗。高台内刳りは浅く雑に仕上げる。外面の腰下部は轆轤痕が顕著。高台際はカンナによる削り出しで成形するが、部分的にカンナが飛んでいる。文様は僅かに腰下部に「蔦文」若しくは「茎文」の一部が描かれている。内底面に重ね焼の胎土目の目痕。	やや鮮明。茶褐色。	淡灰色	外面は腰下部まで施釉で、他は露胎。素地は淡灰色の微粒子、微細な気泡痕が多く観察できる。貫入はない。福建・広東系。16C後～17C。	セ－11 表採
第8図 図版11 9		高台	— — 6.8	高台外面の成形はカンナで雑に削り出して仕上げるが、外底面は平坦で丁寧に仕上げている。外面腰下部の文様は「蔓唐草文」を描いている。見込みの文様は圏線と「丸文？」を描く。見込みの釉薬は蛇の目状に釉を掻き取っている。内底面と畳付に重ね焼の胎土目の目痕。	やや鮮明。青白色。	淡青白色	見込みの一部と畳付を除いて施釉。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が多い。貫入はない。福建・広東系。16C後半～17C。	ス－11 Ⅱ層 裏込め南側
第8図 図版11 10		口縁	11.2 — —	口縁端部が僅かに外反する丸味のある碗。外面の文様は口頸部に界線、主文は簡素化された「花唐草文」を描く。内面口縁端部に幅広の界線を施す。	やや鮮明。藍色。	淡灰白色	畳付けに重ね焼の目痕(胎土目)がみられる。素地は淡灰白色の細粒子、微細な気泡痕が少量観察。貫入はない。福建・広東系。18C。	ス－11 Ⅰ層 遺構内東側
第9図 図版12 11	中皿	口～底	11.6 2.8 6.0	口縁が緩く外反する厚手の玉取獅子文皿。文様は外面に界線を口縁に一条と高台脇から高台外面途中に二条施すが、高台脇と高台途中の界線は呉須が釉上に染み出して界線が不鮮明である。主文は「宝相華唐草文」を描く。内面の文様は幅広の界線を口縁部に施し、腰下部には二条一組の圏線を施す。見込みには「玉取獅子文」を描いている。	やや不鮮明。藍色。	淡灰白色	高台外面途中から高台内面途中までが露胎。畳付は幅が0.9～2.0mmと狭い。素地は淡黄白色の細粒子で、半磁胎。両面に粗い貫入。福建・広東系の地方窯。15C末頃～16C中頃。	セ－11 Ⅰ層
第9図 図版12 12		高台	— — 7.0	薄手の玉取獅子文皿。外面の文様は主文に「宝相華牡丹唐草文」を描き、高台脇と高台外端に界線を二条施す。内面の腰下部に二条一組の圏線を施し、見込みに「玉取獅子文」を描く。	やや鮮明。淡青色。	淡青白色	畳付の露胎。畳付の内外端に胎土目の目痕が全体的に付着。淡灰白色の微粒子。景徳鎮。15C後半～16C中頃。	セ－11 Ⅰ層
第9図 図版12 13		口縁	— — —	内彎の皿。文様は内面の口縁に界線を施し、主文が「梵字文」を施す。	やや鮮明。淡青色。	淡灰白色	素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮窯系。18C後半。	ス－11 Ⅰ層 西側トレ

第11表　中国産染付観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	呉須の発色と色調	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土地点 出土層
第9図 図版12 14	中皿	口縁	— — —	直口口縁の皿で、釉薬が1mm程度と厚く施されている。内面の文様は口縁の上位と下位に二条一組の界線を施す。区画界線の内側には「蔦唐草文」を描いている。	やや鮮明。 藍色。	白色	素地は淡灰色の細粒子。福建省の窯？。15C末～16C前。	スー11 Ⅰ層 遺構内東側
第9図 図版12 15	大皿	高台	— — 11.4	大皿の高台破片。外面の文様は主文が「宝相華牡丹唐草文」、高台際と高台脇に二条一組の界線を施し、高台外面途中に一条の界線を施す。内底面には二条一組の圏線と構図不詳（「麒麟？」・「玉取獅子？」）の文様を描く。	やや鮮明。 淡青白色。	淡青白色	畳付を含む高台外面下端から内面下端までが露胎。素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮。15C末～16C中。	セー11 表採
第9図 図版12 16		口縁	18.2 — —	薄手の稜花皿。口折れで口唇部を稜花状に成形する。外面の文様は口縁端に細線でラマ式蓮弁を描く、口頸部に圏線を描き、胴部の文様は構図不明。内面の口縁端に細線描きの蓮弁と口頸部に二条一組の界線を施している。口縁には「蕉葉文」と「虫」とみられるものを描いている。腰下部に二条一組の圏線を描く、見込みの文様は小破片のため、不明。	やや鮮明。 淡青色。	白色	素地は白色の微粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡が僅かにみられる。徳化窯系。18C第4四半期。	セー11 Ⅰ層
第9図 図版12 17		口頸部	— — —	同図16と同一タイプ皿であるが、口縁部の器壁が3.6mmと若干厚い。外面の口頸部に界線を施すが、二条の界線が重なって一条となる。内面の口縁に「蕉葉文」と「虫」とみられるものを描いている。	やや鮮明。 淡青色。	白色	素地は白色の微粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡が僅かにみられる。徳化窯系。18C第4四半期。	セー11 Ⅰ層
第9図 図版12 18		口縁	23.2 — —	厚手で口折れ気味の稜花皿。口唇部を稜花状に成形する。外面の文様は口縁上位と口頸部に二条一組の界線を施し、区画内に簡素化された「渦巻き文」を描く。胴部には型起こしの「陰刻蓮弁文」を施す。内面口縁の上位と下位に二条一組の界線を施し、区画内に「渦巻き文」と「波濤文」を描く。	やや鮮明。 藍色。	灰黄色	素地は淡灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物が少量混入。貫入はない。窯不明（中国南部）。16C中～後半。	セー11 表採
第9図 図版12 19	小皿	口～底	9.4 2.9 3.9	内彎の小皿。口唇部を舌状に尖らせて仕上げる。腰下部から高台脇までカンナによる削り出しで成形する。高台外面下端にもカンナによる削りだしで斜位に成形する。高台内刳りは雑に成形する為、畳付の幅広が3.6～8mmと一定しない。文様は口縁の内外面に幅4mm前後の界線を施す。	不鮮明。 淡灰青色。	灰白色	外面の腰下部から内面の腰下部までが露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡痕跡がある。福建・広東系。16C後半～17C。	セー11 表採
第9図 図版12 20	小杯	高台	— — 2.8	小杯の高台破片。文様は外面が高台脇に界線、内面は腰下部に圏線を施し、見込みに簡素化された構図不詳の文様「巻物？」を描く。高台脇にカンナの成形痕が釉上から観察できる。	やや鮮明。 藍色。	淡青白色	高台外面下端から外底面まで露胎。素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮系。17C。	セー11 表採
第9図 図版12 21	水注	胴部	— — —	上面観が扁平な水注の胴部とみられる資料で、外面の下部に「ラマ式蓮弁文」を描き、弁内に「垂下の五葉文」を描いている。ラマ蓮弁文の上には「唐草文」と「窓枠」を描き、その内側に主文とみられる構図不詳の文様を描いている。	やや鮮明。 藍色。	淡灰白色	素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。景徳鎮系。15C末～16C前。	スー11 Ⅱ層 東側
第9図 図版12 22	瓶	胴部	— — —	瓶の胴部片。胴部の最大直径は、10.4cm。外面に幅広の線と細線で窓枠を描き、枠内に「青海波文」を描く。内面及び劈開面に胴継ぎがみられる。	やや鮮明。 濃青色。	淡灰白色	素地は淡灰白色の微粒子。景徳鎮系。16C～17C初。	セー11 表採
第9図 図版12 23	壺	胴部	— — —	小型壺の胴部片。胴部の最大直径は、8.8cm。文様は外面の頸下部に一条の界線と二条一組の界線で区画を描き、区画内に「四方欅文」を描く。胴部に主文となる「龍文」を描き、周辺に「雲文」描いている。内面の轆轤痕は明瞭である。	やや鮮明。 淡青色。 細線で輪郭を描き、輪郭内を塗りつぶすダミ技法。	白色	素地は白色の微粒子。徳化窯？。16C後半～17C前。	セー11 表採



第８図　染付　１



第９図　染付　２

第４節 褐釉陶器（中国産・タイ産）

１．中国産褐釉陶器（第10図１～７）（図版13－１～７）

中国産の褐釉陶器の出土総片数は579点が得られている（第12表）。その中から比較的大型の破片を第10図1～7に示した。確認された器種は壺の一種類であった。なお、個々特徴については第13表の観察表に呈示した。

２．タイ産褐釉陶器（第10図８・９）（図版13－８・９）

タイ産褐釉陶器は41点を数えているが、全て破片資料である（第12表）。確認された器種は壺のみであった。なお、個々特徴については第13表の観察表に示した。

小　結

中国産褐釉陶器の壺で第10図２・３は、首里城跡京の内地区（註１）・湧田古窯跡（註２）・久米島ヤッチのガマ・カンジン原古墓群（註３）などの遺跡から出土している。この種の壺は県内遺跡から最も多く出土し、グスク、集落跡、古墓などから得られている。また、時代幅も大きく15世紀中頃～近世まで存続するようである。

その他に第10図１の壺は、粗悪な青磁の素地を使用したものであり、釉薬のみが褐釉を施している。これと同じような素地を使用した壺の胴部片が４点得られている。

次にタイ産褐釉陶器壺は、首里城跡京の内地区・今帰仁城跡（註４）などの遺跡から出土している。1459年の火災で焼失した京の内倉庫跡からタイ産褐釉陶器壺が60個以上出土し、その用途はタイから「香花酒上等」・「香花酒」を入れた酒壺と判断されている（註５）・（註６）。第10図８はタイのシーサッチャナライ窯群（コーノイ窯）が考えられている。

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会　1998年３月。

註２．沖縄県文化財調査報告書第111集『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会　1993年３月。

註３．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第６集『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年３月。

註４．今帰仁村文化財調査報告書第14集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会　1991年３月。

註５．金城亀信〔首里城「京の内」跡の発掘調査概要〕『特別企画展首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年。

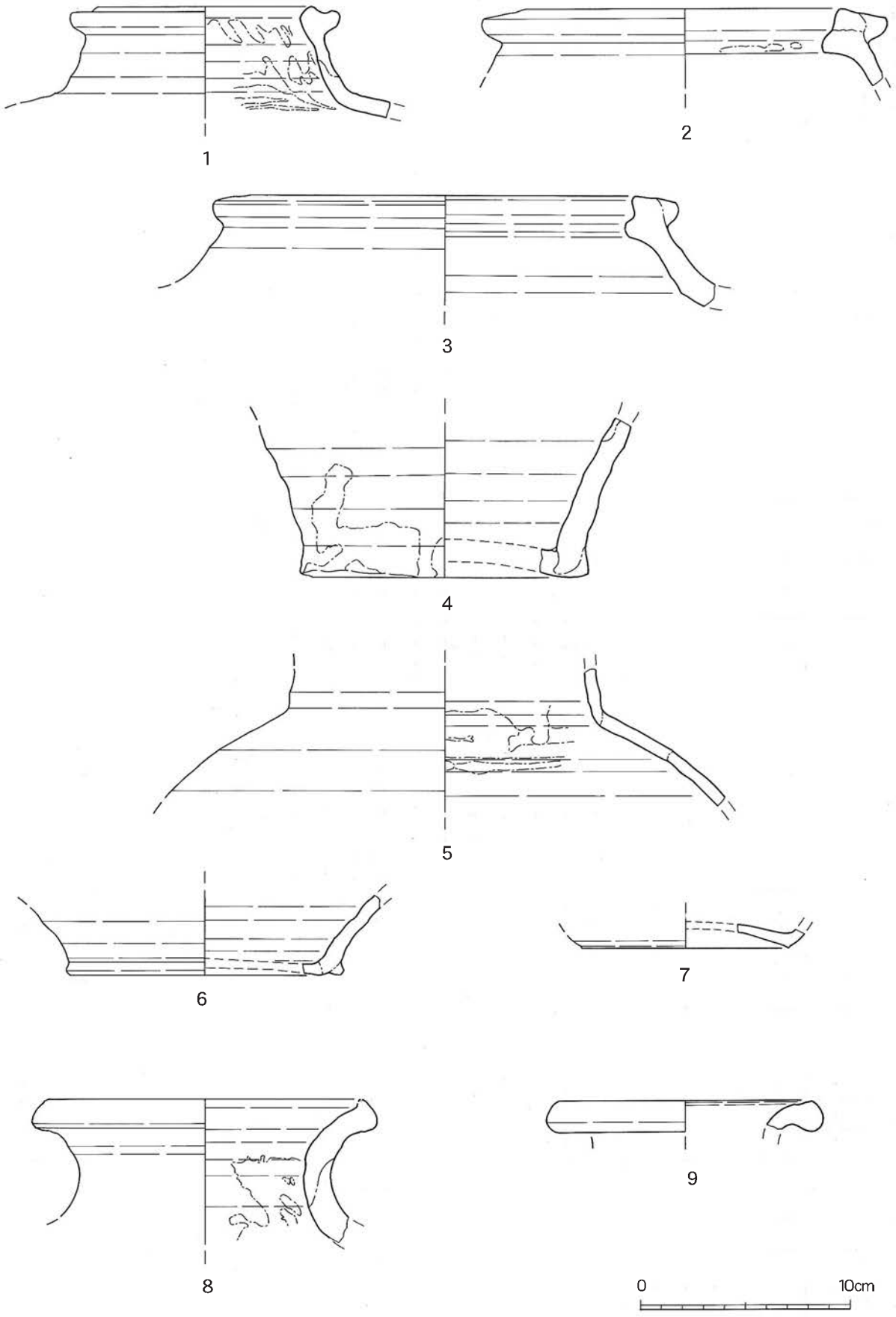
註６．金武正紀「Ⅱ．陶磁器が語る琉球のタイ・ベトナム交流史」『やちむん』第14号 やちむん会　2005年11月。

第12表　褐釉陶器（中国産・タイ産）出土状況一覧

器種・部位 ＼ 出土地				セー11 表採	セー11 第Ⅰ層（トレ①）	セー11 第Ⅱ層（トレ①）	スー11 表採	スー11 Ⅰ層 東側トレ	スー11 Ⅰ層 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	スー11 Ⅱ層 裏込目 南側	スー11 Ⅱ層 裏込目 西側	スー11 Ⅲ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅲ層 遺構外	スー11 Ⅲ層 トレ③	スー11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
褐釉陶器	中国産	壺	口	1	2		2	1			1				3	6	1	1		18
			頸		1						2					1				4
			胴	30	7		44	49		13	44	10	1	1	35	272	8	27	4	545
			底	1	1		2							2	1	5				12
	小　計			32	11	0	48	50	0	13	47	10	1	3	39	284	9	28	4	579
	タイ産	壺	口～底																	0
			口								1					1		1		3
			頸		1															1
			胴	3	7		4	1			2	1				12		7		37
			底																	0
	小　計			3	8	0	4	1	0	0	3	1	0	0	0	13	0	8	0	41
出土層別合計				35	19	0	52	51	0	13	50	11	1	3	39	297	9	36	4	620
				54			103			78					345			36	4	620
総合計				54			562												4	620

第13表　褐釉陶器（中国産・タイ産）観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	部位	口径 器高 高台径 (cm)	観察事項・文様構成	釉色・貫入	素　地	出土地点 出土層
第10図 図版13 1	中国産褐釉陶器壺	口縁	12.8 — —	怒り肩の壺。頸部でやや内側に傾き口縁部が肥厚する。肥厚部の側面観は口縁端部近くに歪な鍔縁状の肥厚を造り、口唇部と一体化させて成形する。口唇部の大半を浅く窪ませて蓋受け状となる。口唇内端は尖らせて成形する為、内面口縁が三角形状の疑似肥厚となる。口頸部に轆轤を深く入れて成形。内面の轆轤痕は丁寧に消されている。	黄茶色。両面に細かい貫入。施釉は総釉後に口唇部の釉を掻き取って露胎とする。	磁器質の陶土。淡灰色の微粒子で微細な黒色鉱物や細かい白色鉱物を少量含んでいる。素地は青磁と同質の陶土を使用。	セ－11 表採
第10図 図版13 2		口縁	19.2 — —	怒り肩の壺。口縁部のみが残存。口縁部の側面観は、歪な隅丸方形状となり内外面の口縁が突出した肥厚で形成し、内面口縁の肥厚部を窪ませて蓋受けとする。外面の頸部に施された轆轤痕が陽圏線状となる。内面は口頸部が内側方向に内彎し、口縁部の肥厚帯下端に明瞭な稜が横走する。	黄茶色。両面に細かい貫入。施釉は両面に残存。	淡灰白色の細粒子で微細な黒色鉱物、粗細な白色鉱物を多量に含んでいる。	スー11 Ⅳ層 石敷直上
第10図 図版13 3		口縁	22.2 — —	怒り肩の壺。口縁部のみが残存。口縁部の側面観は、歪な「ク」の字状となり内外面の口縁が突出した肥厚を形成し、内面口縁の肥厚部を窪ませて蓋受けとする。内外面の轆轤痕は丁寧に消されている。	黄茶色。両面に微細な貫入。施釉は両面に残存。	淡灰白色の細粒子で微細な黒色鉱物、粗い白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。	セ－11 Ⅰ層
第10図 図版13 4		底部	— — 13.8	怒り肩の壺の底部。底部からの立ち上がりでくびれさせて、外側に軽く外傾させそのまま胴下部に移行する。外底面は盛り上がっている。	外面は茶黒色で、内面が黄茶色。両面に微細な貫入。施釉は両面に残存。	淡灰白色の細粒子で微細な黒色・白色鉱物、粗い白色や茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。	スー11 表採
第10図 図版13 5		胴部	— — —	口縁を欠いたナデ肩の壺。器壁は5.5～6.0mmとほぼ均一的で薄手である。外面の頸部は轆轤痕が顕著で、内面はナデ消されている。	釉は火熱を受けて濁った黄白色となり、全体的に微細な気泡痕が観察される。内面の口頸部に茶褐色の化粧土が雑に塗布される。	橙白色の細粒子で細かい白色鉱物を多量に含み稀に粗い白色鉱物が観られる。	セ－11 Ⅰ層
第10図 図版13 6		底部	— — 13.2	底部のくびれ部分は貼り付けて成形する。外底面の縁沿いに陶土を貼り付けた事を示すくびれ部分が凹線状に走る。内外面の轆轤痕は顕著である。	内外面及び外底面に施釉の痕跡が認められない。	茶紫色の細粒子で微細な白色鉱物を主体に稀に微細な茶色の鉱物や粗い白色鉱物を含む。	セ－11 Ⅲ層 遺構内西側
第10図 図版13 7		底部	— — 9.8	外底から丸味を持たせて立ち上がる小壺の底部破片。外底面が上方向に大きく盛り上がっている。外面はカンナで削り出して成形。内面及び内底面は回転擦痕で仕上げる。	〃　。	磁器質の陶土。淡灰色の微粒子で微細な黒色鉱物や細かい白色鉱物を多く含んでいる。素地は青磁と同質の陶土を使用。	セ－11 Ⅰ層
第10図 図版13 8	タイ産褐釉陶器壺	口縁	16.2 — —	口頸部から緩やかに大きく外側に外傾する壺。口縁部が隅丸三角形状に肥厚し、口唇部も小さく尖る。内面の口縁端部を削り取った様に成形する。口唇部から外面の調整は回転擦痕、内面の轆轤痕は頸部中央部分が顕著に残存し、他は轆轤痕をナデ消している。	黄茶色の釉を外面から内面の頸部まで施す。両面に細かい貫入。内面に茶紫色の化粧土が塗布し、部分的に白色を呈する。	茶紫色の細粒子で陶土は精選され、微細な白色鉱物を多量に含み稀に粗い茶褐色や白色の鉱物が観られる。	セ－11 表採
第10図 図版13 9		口縁	13.2 — —	頸部の上方で大きく外側に口縁部が下方に折れる壺で、口縁部がルーズな舌状の肥厚となる。内面口縁端部近くを浅く窪ませている。	両面に黒色の釉を施す。	淡灰色の細粒子で、細かい白色や赤茶色の鉱物を多量に含み稀に粗い茶褐色や白色の鉱物が観られる。	スー11 Ⅳ層 石敷直上



第10図　褐釉陶器（中国産１～７、タイ産８・９）

第５節　その他の輸入陶磁器

その他の輸入陶磁器として取り扱ったのは、黒釉陶器、瑠璃釉、色絵、高麗青磁、ベトナム青花の５種類である。

１．黒釉陶器（第11図１・２）（図版14－１・２）

黒釉陶器として取り扱ったのは、いわゆる黒釉が施釉された天目茶碗である。天目茶碗の胴部破片と高台片が各１点ずつ出土していたので、これを図化した。

第11図１高台脇がやや斜めに削り取られた胴下部の破片で、内外面に黒色の釉の上から茶褐色の釉を二度掛けする。外面の釉は高台際まで施釉され部分的に滴のように厚く釉が溜まっている。この溜まりの先端に粗い砂目が付着する。素地は灰色の粗粒子で、細かい黒色鉱物を主体に白色・茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。福州閩候県鴻尾窯産。ス－11第Ⅱ層遺構内西側出土。

同図２は高台径が5.2cmと求められる。釉は内底面にのみ残存し、下地に黒色の釉を施し、その上から茶褐色の釉を施している。高台脇は、ほぼ水平に削り取って高台を成形する。外底面の内刳りは浅く盛り上がっている。高台の造りは陶土が乾ききっていない段階で成形を行った為、削りによる小さなヒビ割れが多く発生している。素地は淡灰白色の細粒子で微細な黒色や白色の鉱物が多く含まれている。稀に微細な茶褐色の鉱物が混入する。福州寧徳市飛鸞窯産。ス－11第Ⅱ層遺構内西側出土。

２．瑠璃釉（第11 図3・4）（図版14－3・4）

瑠璃釉の器種は、仙盞瓶の水注のみで、胴部破片が２点出土している。

同図3・4は仙盞瓶の胴部片で同図3が瓶の胴上部で同図4が胴部中央付近の破片である。同図4は胴継ぎの部分から破損している。２点とも外面に藍色の釉を施し、内面が青白色の釉を掛けている。素地は2点とも淡灰白色の微粒子で、生産地は景徳鎮窯である。出土地区と出土層位は、同図3がセ－11第Ⅰ層の出土。同図4はセ－11より表採である。

３．色絵（第11図5～8）（図版14－5～8）

色絵の皿と蓋の資料が得られている。色絵の皿が３点出土していて、蓋は１点のみ得られている。

同図5は口縁部が軽く外反する皿。推定復元が可能な資料で、推算口径13.2cm、器高3.5cm、高台径6.5cmと求められた。内外面に施された色絵は禿げ落ちていて僅かに朱色の痕跡が確認される程度である。文様は外面に花文と葉文と観られる文様が描かれている。内面の口縁と腰下部に二条一組の圏線を描き、見込みにも外面と同様の花文と葉文を描いている。釉色は淡灰色を総釉後に高台外面途中から内面途中までの釉を掻き取って露胎とする。素地は淡灰白色の微粒子である。景徳鎮系の窯。時期は15世紀後半～16世紀。ス－11より表採。

同図6は外反する皿の口縁破片で、口径が13.0cmと推算された。外面の文様は花文を描いていて、花弁と花心の一部が残存する。色絵は全て剥落する。釉色は淡灰色で、素地は淡灰白色の微粒子である。景徳鎮系の窯。時期は15世紀後半～16世紀。ス－11第Ⅰ層遺構内東側出土、同図5と同一個体の可能性が高い。

同図7は高台径が8.1cmと推算された皿。見込みに二条一組の圏線と花文及び葉文を描いているが色絵は全て剥落する。釉色は淡灰白色の釉を総釉後に高台外面途中から内面途中までの釉を掻き取って露胎とする。畳付を尖らせて仕上げる。素地は白色の微粒子である。福建・広東系の窯。時期は15世紀終末～16世紀。セ－11より表採。

同図8は急須か茶碗の蓋とみられる資料で撮みが欠落する。蓋の最大直径は5.8cmを測り、蓋下端の身受け部分の復元直径が4.8cmと推算された。蓋甲外周に丸彫りの圏線を廻らし、蓋甲頂部周辺に花弁や草文を描いている。色絵は剥落する。釉色は淡緑白色の透明釉で、蓋甲上面にのみ施釉。粗い貫入が観られる。素地は淡灰白色の微粒子である。景徳鎮系の窯。時期不詳。セ－11第Ⅰ層より出土。

４．高麗青磁（第11図9）（図版14－9）

高麗青磁の碗か皿の腰下部の破片が１点出土している。類似する資料が今帰仁城跡（註１）から出土している。

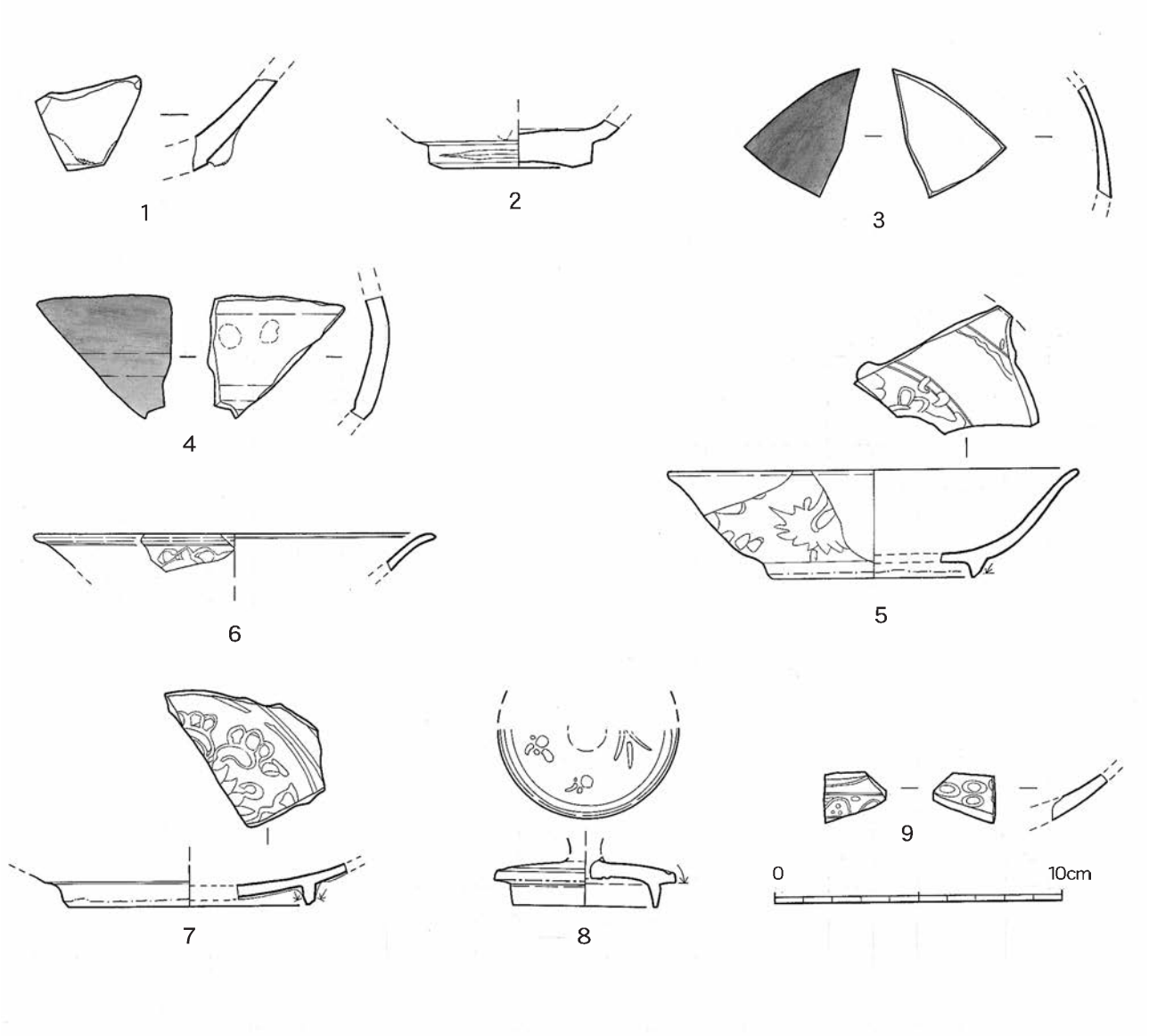
第11図9は素地の上から直接、白土で象眼したものである。14世紀末頃から登場する粉青沙器の手法である素地に白化粧を施していない状況から高麗青磁と判断した。外面の文様は花弁状の曲線を描き、その直下に圏線、丸味のある蓮弁文と弁内に滴を三滴描いている。この蓮弁を下位の圏線で区画して閉じる。内面は竹管文を並列する。素地は灰色の細粒子で微細な気泡痕が僅かに観察できる。所属時期については韓国文化財廳国立海洋遺物展示館専門委員の韓 盛旭博士に直接鑑定を依頼したところ15世紀前半頃（註２）の資料とのことであった。

セ‐11第Ⅰ層より出土。

註文献

註１．今帰仁村文化財調査報告第９集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年３月。
註２－a.　2006年12月25日（月）国立海洋遺物展示館長金聖範と共に県立埋蔵文化財センター所蔵の高麗青磁の調査の
際に御教示を戴いた。首里城跡出土の高麗青磁で最も古いのが城郭南側下地区発掘調査報告書（2004年３月発
行）掲載の第23図16の資料が13世紀代とのことであった。また、東アザナ地区地区発掘調査報告書（2004年３
月）掲載の資料は14C末～15C 初頭とのことであった。その他、15C前半に胎土目から砂目に代わるようである。
註２－b.　韓盛旭「高麗後期青瓷の生産と流通」『貿易陶磁研究』N0.25 日本貿易陶磁研究会　2005年９月。

５．ベトナム青花（図版14‐10）



第11図　その他の輸入陶磁器（黒釉陶器１・２、瑠璃釉３・４、色絵５～８、高麗青磁９）

第６節　本土産陶磁器

本土産磁器と陶器が出土している。磁器は肥前系の碗と蓋、陶器の中には薩摩焼苗代川系の壺とみられるものが出土している。

１．本土産磁器（第12図・１・２）・（図版14－11・12）

第12図１は皿の腰下部の破片とみられるもので、両面にガラス質の青緑釉（銅緑釉）を施す。両面の釉には微細な貫入が観られる。素地は淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕が少量確認できる。17C～18C前半頃の肥前系内野山窯製とみられる。セ－11表採。

同図２は蓋の復元直径が13.6cmを求めた。蓋の資料とみられ内外面の鍔縁下端及び縁部（口唇相当）の釉が掻き取られて露胎する。内外面には淡黄色の釉を施す。釉には微細な貫入が両面にみられる。素地は半磁胎の淡黄白色で微細な茶褐色の鉱物が僅かに観察できる。肥前系の製品とみられる。セ－11第Ⅰ層の出土。

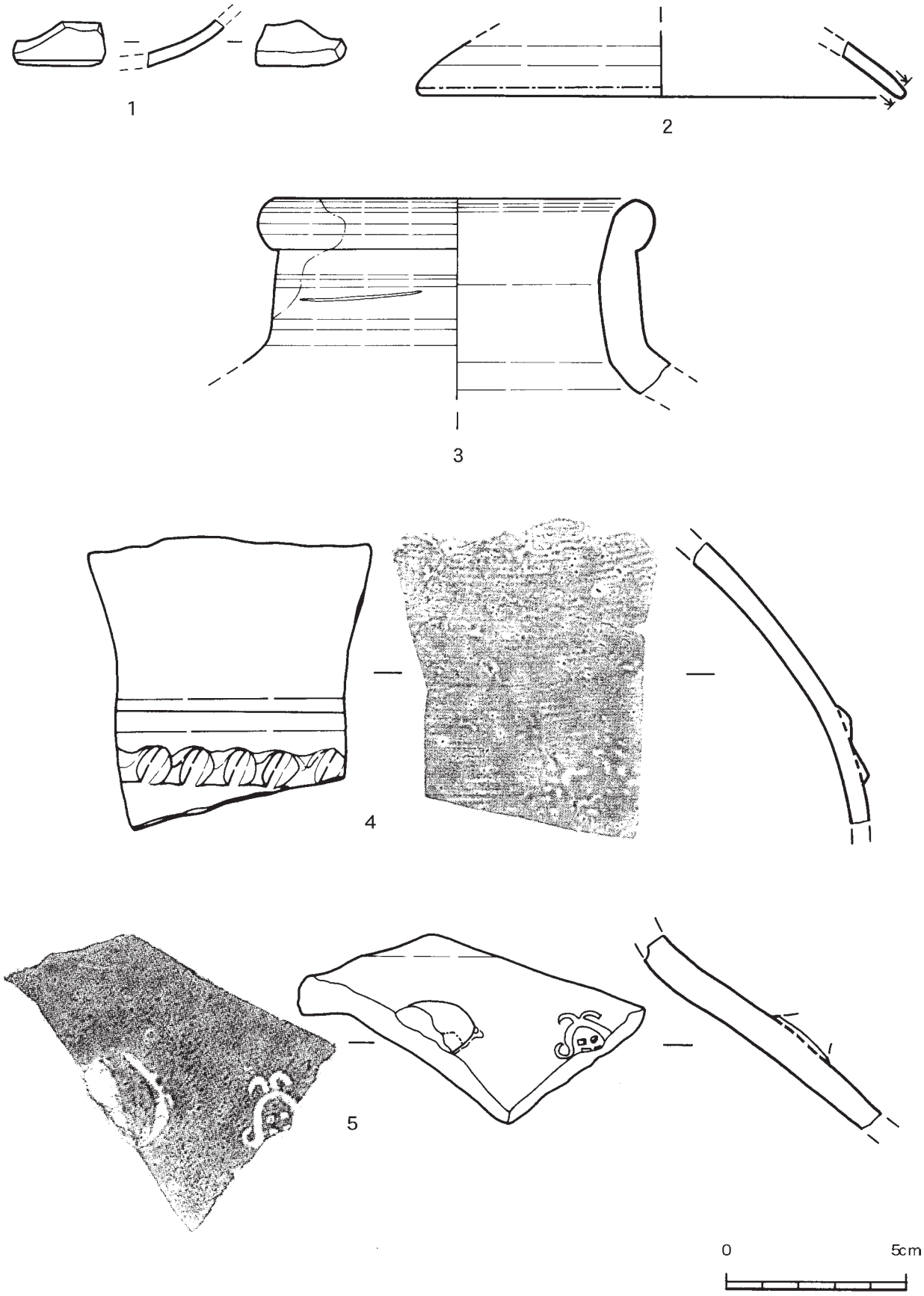
２．本土産陶器（第12図３～５）・（図版14－13～15）

同図３は推算口径が11.0cmと求めることができた壺である。灰緑色の自然釉が口縁部に掛かっている以外は露胎である。色調は外面で薄茶色を帯び内面が淡い黄茶色を呈している。器面調整は内外面とも回転擦痕を主体に丁寧に調整するが、内外面の口縁部分が刷毛目様の調整痕となっている。素地は磁器質の陶土を使用し、光沢のある淡灰色微粒子で素地に微細な黒色の鉱物が多量に含まれ、稀に粗い白色の鉱物が混入する。また、劈開面には成形時に発生した皺状の気泡痕が観察される。産地不明。セ－11第Ⅰ層の出土。

同図４・５は黒薩摩苗代川系の壺の胴部片である。図４は外面に幅7.5mmの三角凸帯で陽界線を廻らし、その直下に縄目状の貼り付けを行っている。内面の調整は釉上からの観察では刷毛目調整である。素地は灰色の粗粒子で細かい白色や茶褐色の鉱物が多く含まれている。セ－11第Ⅰ層出土。図5は胴上部の破片で、横耳を貼り付けた痕跡がある。耳の横に印刻で人物の頭（髪と顔）を型で起こす。内面の調整は釉で厚く施されているが部分的に薄い部分から上記４と同様に刷毛目調整がみられる。素地は灰褐色の細粒子で、細かい白色鉱物を主体に多く含み、稀に粗い白色鉱物が混入する。ス－11第Ⅲ層西側遺構内より出土。

第14表　本土産陶磁器出土状況一覧

器種・部位 ＼ 出土地				セ－11 表採	セ－11 第Ⅰ層（トレ①）	セ－11 第Ⅱ層（トレ①）	ス－11 Ⅰ層 表採	ス－11 Ⅰ層 東側トレ	ス－11 Ⅰ層 西側トレ	ス－11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	ス－11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	ス－11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	ス－11 Ⅱ層 裏込目 南側	ス－11 Ⅱ層 裏込目 西側	ス－11 Ⅲ層 遺構内 西側トレ	ス－11 Ⅲ層 遺構外	ス－11 Ⅲ層 トレ③	ス－11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
本土産陶器	壺		胴	2	4		1											1		8
	壺(産地不明)		胴				1													1
	壺	褐釉 薩摩	胴								1									1
		褐釉 黒薩摩	胴	1	1		3				3	1			1	3		1		14
			底		1															1
	碗		胴	1																1
			底																	0
	皿	緑釉	胴	1																1
	皿		口		1															1
	器種不明	薩摩	胴				2													2
	器種不明		底	1																1
	小計			6	7	0	7	0	0	0	4	1	0	0	1	3	0	2	0	31
本土産磁器	碗		胴				1													1
	小碗		底												1					1
	瓶(伊万里焼)		胴								1									1
	壺(褐釉)		口	1																1
	小計			1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	4
出土層別合計				7	7	0	8	0	0	0	5	1	0	0	2	3	0	2	0	35
				14			8			6					5			2	0	35
総合計				14			21												0	35



第12図　本土産陶磁器

第７節　沖縄産施釉陶器

釉薬をかけた陶器で、「上焼（ジョウヤチ）」と呼称されるものである。今回は122点が出土し、25点を図化した。器種は碗、小碗、皿、急須、鍋、鉢、小杯、瓶、壷、蓋、火取、袋物などがある。個々の遺物については観察表に記載した。

参考文献

1. 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集『真珠道跡（Ⅰ）』　沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年３月。
2. 沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第13集『綾門大道跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター 2003年３月。
3. 沖縄県文化財調査報告書第121集『湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年３月。

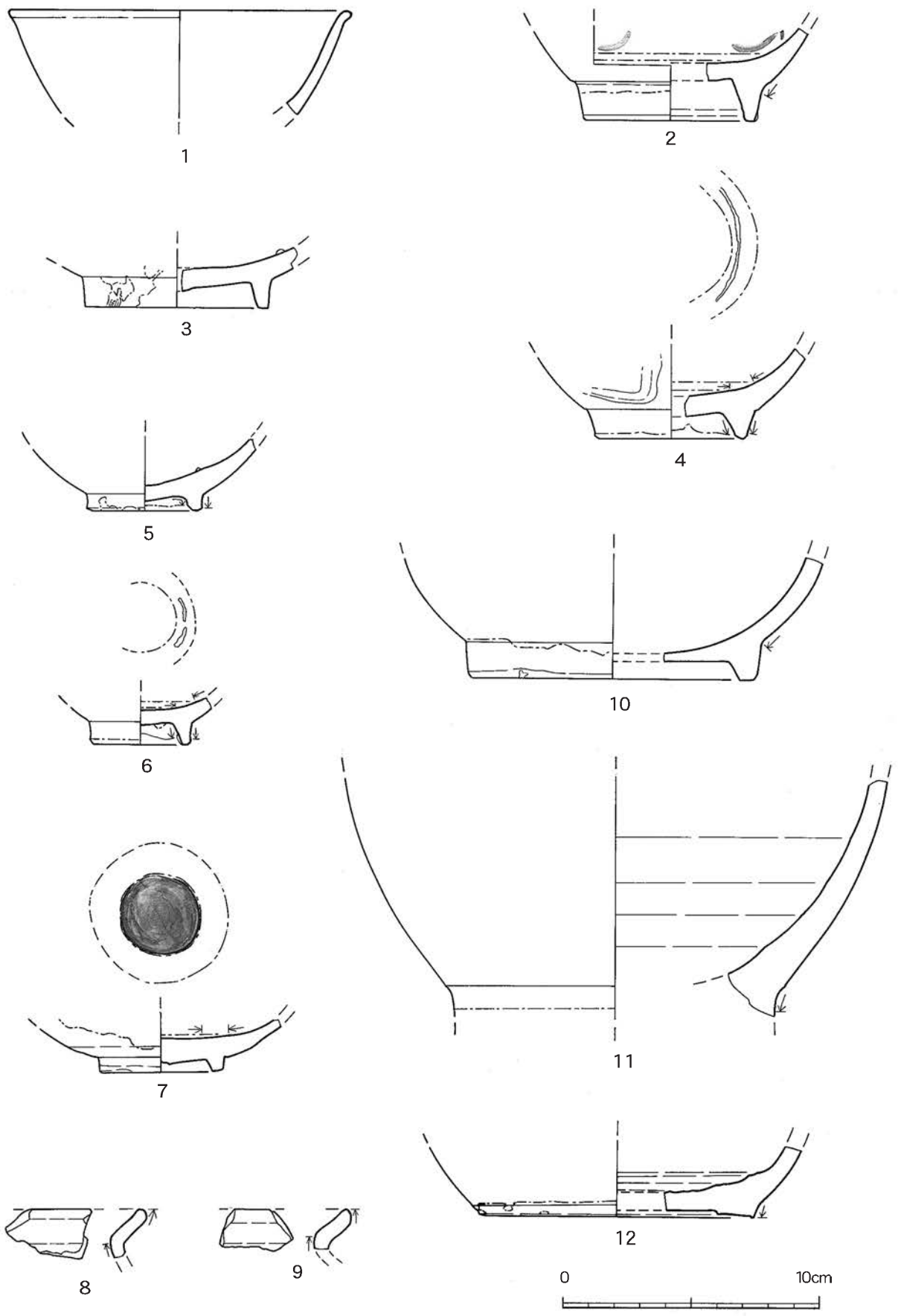
第15表　沖縄産施釉陶器出土状況一覧

器種・部位 ＼ 出土地			セー11			スー11													不明	合計
							Ⅰ層		Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層			
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	遺構内 東側トレ	遺構内 西側トレ	遺構内 トレ③	裏込目 南側	裏込目 西側	遺構内 西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上			
沖縄産施釉陶器	碗	口		1											1					2
		胴	3	1						1						1				6
		底	1	1		4	1			2				1						10
	小計		4	3	0	4	1	0	0	3	0	0	0	1	1	1	0	0		18
	小碗	口		1		1								1						3
		胴		1		1				1				2						5
		底					1		1			1								3
		蓋																		0
	小計		0	2	0	2	1	0	1	1	0	1	0	3	0	0	0	0		11
	皿	口				1														1
		底								2										2
	小計		0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0		3
	急須	口		2										2						4
		取手				1														1
		底	1																	1
	小計		1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0		6
	鍋	口												1					1	2
	蓋	口																	1	1
	蓋（つまみ部分）			1																1
	小計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2		4
	鉢	口							1						1					2
		胴	3	1																4
		底				1				1									1	3
	小計		3	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1		9
	小杯	底											1							1
	瓶	頸												1						1
		胴	1	5		3			2	1	1			4					1	18
	小計		1	5	0	3	0	0	2	1	1	0	1	5	0	0	0	1		20
	壷	胴	1	3		2			1	5			1		2	1	1	1		18
		底				2	1			1					1					5
	小計		1	3	0	4	1	0	1	6	0	0	1	0	3	1	1	1		23
	火取	口								1										1
		口～底	1																	1
		底		1																1
	小計		1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0		3
	袋物	胴								1										1
		底		1						1										2
	小計		0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0		3
	器種不明	胴		1		7			1	2		1		8	2					22
	小計		0	1	0	7	0	0	1	2	0	1	0	8	2	0	0	0		22
出土層別合計			11	20	0	23	3	0	6	19	1	2	2	20	7	2	1	5		122
			31			26			30					29			1	5		122
総合計			31			86												5		122

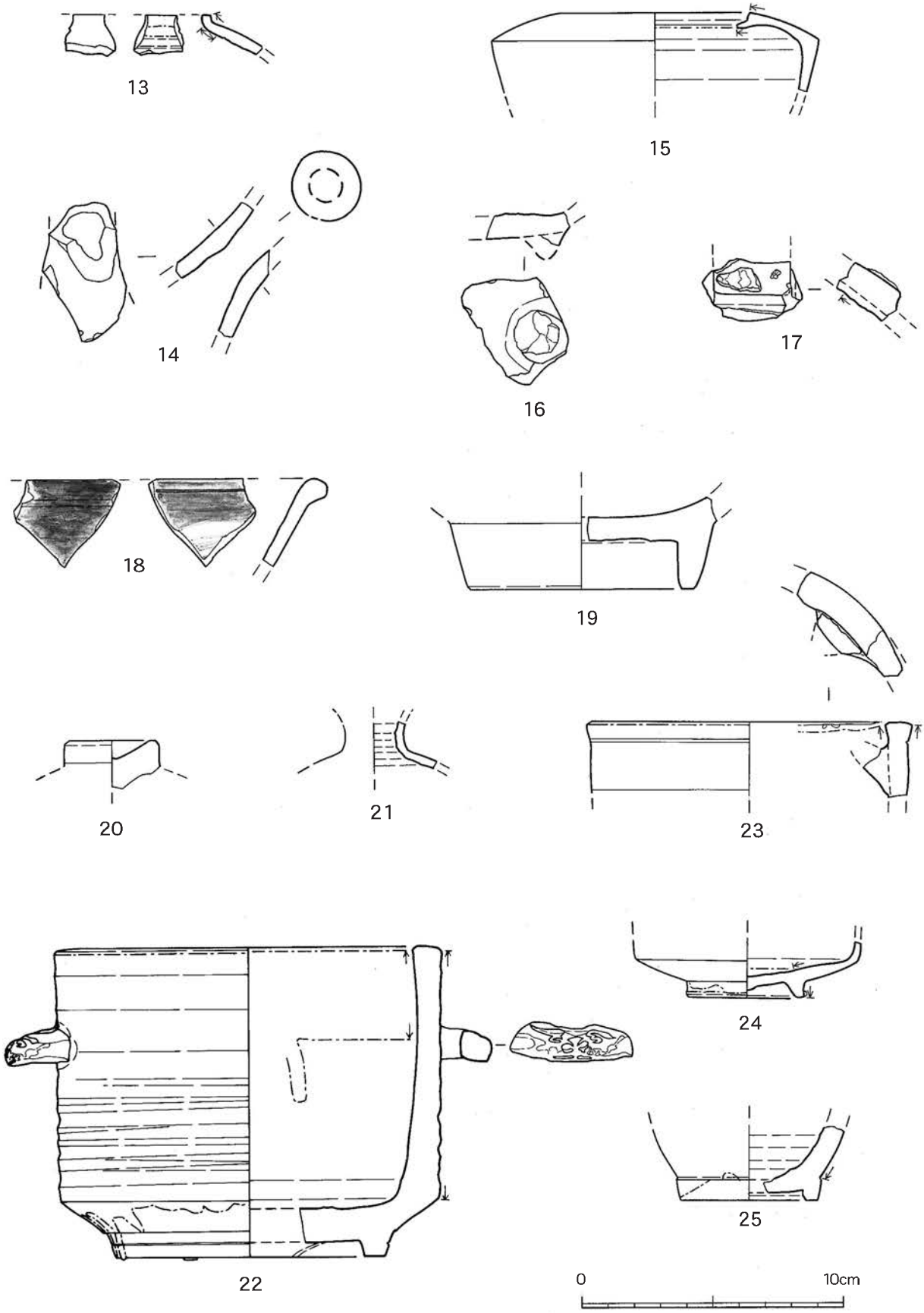
第16表　沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図・図版番号	器種	部位	口径 器高 底径/胴径	観察事項	出土地点 出土層
第13図 図版15 1	碗	口	13.3 － －	素地は灰白色。腰部に丸味をもたせ、外反口縁を呈する。外面に気泡がみられる。灰白色の釉を施す。	セ－11 Ⅰ層
第13図 図版15 2	碗	底	－ － 6.7	素地は黄橙。外面は灰釉、内面は白色の釉の上に灰白色の文様を施す。内底釉を蛇の目状に掻き取り、畳付けには粘土（メーガニク）を塗布。	セ－11 Ⅰ層
第13図 図版15 3	碗	底	－ － 7.1	素地はにぶい橙。外面に灰色の釉を施す。内底に轆轤跡。	ス－11 Ⅱ層遺構内西側
第13図 図版15 4	碗	底	－ － 6	素地は黄橙。内底にアルミナが付着。灰白色釉の上に透明釉を施す。	ス－11 表採
第13図 図版15 5	碗	底	－ － 4.5	素地は灰白色。灰白色の釉を施す。外底に目跡？が溶着。	ス－11 Ⅰ層東側
第13図 図版15 6	小碗	底	－ － 3.9	素地は黄灰色。外面は飴釉、内面は白色の釉を施す。蛇の目釉はぎした内底には目跡が付着。畳付けには粘土（メーガニク）を塗布。	ス－11 Ⅱ層裏込め南側
第13図 図版15 7	皿	底	－ － 4.8	素地は黄橙。飴釉を施し、内面に轆轤痕がみられる。	ス－11 Ⅱ層遺構内西側
第13図 図版15 8	鍋	口	－ － －	素地はにぶい橙。口縁部が外反し、口唇部まで飴釉を施す。内面にも釉薬が残る。	ス－11 Ⅲ層遺構内
第13図 図版15 9	鍋	口	－ － －	素地は黄灰色。口縁部が外反し、口唇部まで灰色の釉を施す。内面にも釉薬が残る。	不明
第13図 図版15 10	壷	胴～底	－ － 11.2	素地はにぶい橙。内面と胴部に灰白色の釉が施されている。底面に轆轤痕。	ス－11 表採
第13図 図版15 11	壷	底	－ － －	素地はにぶい橙。10と比べて立ち上がりが若干ストレートになる。両面に灰色の釉を施す。内面に轆轤跡。	ス－11 表採
第13図 図版15 12	壷	底	－ － 10.7	素地は黄灰色。黒釉を施し、胴下部に丸味を持つ。10、11と比べて高台が低くなる。底面に轆轤痕。	ス－11 Ⅲ層遺構外
第14図 図版16 13	急須	口	－ － －	素地は灰白色。外面と内面上部に灰色の釉を施し、口唇部は釉はぎをする。胴上部は八の字状になり、口縁部は立ち上がる。内面に轆轤跡。	ス－11 Ⅲ層遺構内
第14図 図版16 14	急須	口	－ － －	素地は黄灰色。外面に飴釉を施す。内面にも釉薬が残る。	ス－11 Ⅲ層遺構内
第14図 図版16 15	急須	口～肩	－ － 12.5	素地は灰白色。灰白色の釉を施す。釉は口縁部内部まで及ぶ。	セ－11 Ⅰ層
第14図 図版16 16	急須	底	－ － －	素地はにぶい橙。足の根元は三角形状の突起を貼付している。内底面に褐色の釉を施す。	ス－11 表採
第14図 図版16 17	急須	把手	－ － －	素地は灰白色。把手の根元の部分と思われる。施釉後に本体面に貼付したものとみられ、外面は飴釉、本体面内部には泥釉？が施される。内面に轆轤痕が確認される。	ス－11 表採
第14図 図版16 18	鉢	口	－ － －	素地は黄灰色。口縁は肥大し外反する。内面は灰釉と緑釉？の掛分け。	ス－11 Ⅲ層遺構外
第14図 図版16 19	鉢	底	－ － 8.7	素地はにぶい橙。底面に轆轤痕。	不明
第14図 図版16 20	蓋	摘み	3.5 － －	素地はにぶい橙。外面に白色の釉を施す。鍋の蓋か？	セ－11 Ⅰ層
第14図 図版16 21	瓶	頸	－ － －	素地は灰白色。外面に黒釉を施し、内面に轆轤痕。	ス－11 Ⅲ層遺構内
第14図 図版16 22	火炉	口～底	14.8 11.9 10.2	素地は黄橙。直口の火炉で、胴下部に丸彫りの圏線。内面上部、外面に飴釉を施し、内面に轆轤痕がみられる。口唇部は釉はぎをする。	セ－11 表採
第14図 図版16 23	火取	口	12.4 － －	素地は黄橙。口縁は肥大し外反する。内外面ともに飴釉を施す。	ス－11 Ⅱ層遺構内西側
第14図 図版16 24	火取	底	－ － 4.5	素地は灰白色。内面は透明釉を施し、外面は灰釉と緑釉？の掛分け。	セ－11 Ⅰ層
第14図 図版16 25	袋物	底	－ － 5.2	素地はにぶい橙。外面に黒褐色の釉を施し、胴部にかけて膨らみをもつ。内面に轆轤痕。	セ－11 Ⅰ層



第13図　沖縄産施釉陶器　1



第14図　沖縄産施釉陶器　2

８節　沖縄産無釉陶器

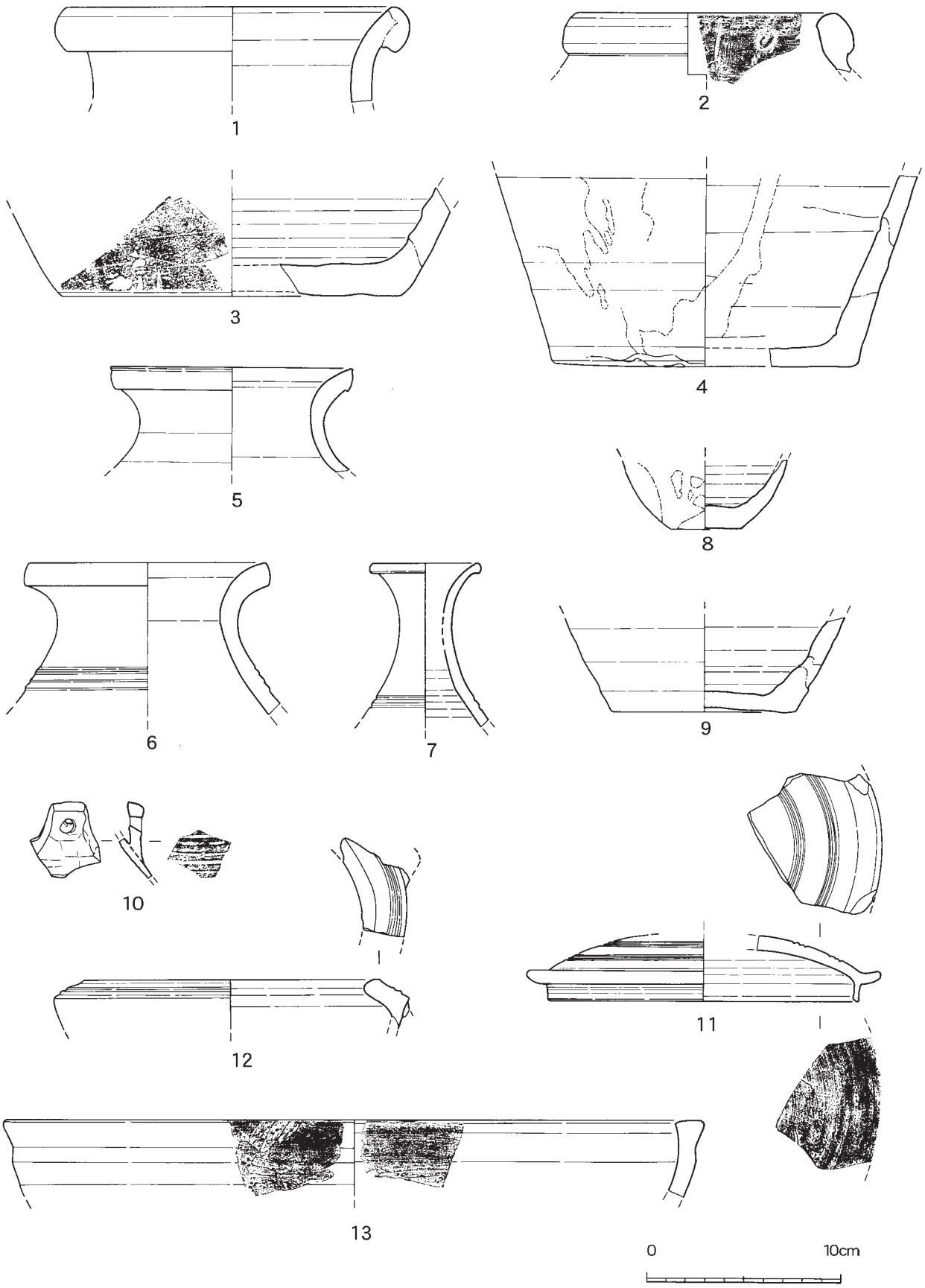
「荒焼（アラヤチ）」と称される高温焼成の焼き締め陶器である。基本的に無釉だが、泥釉やマンガン釉を施す場合もある。本遺跡では総数397点が出土し、うち20点を図化した。器種別にみると、壷・瓶・蓋・火炉・鉢・擂鉢などがある。個々の詳細は以下の観察表に記す。

第17表　沖縄産無釉陶器出土状況一覧

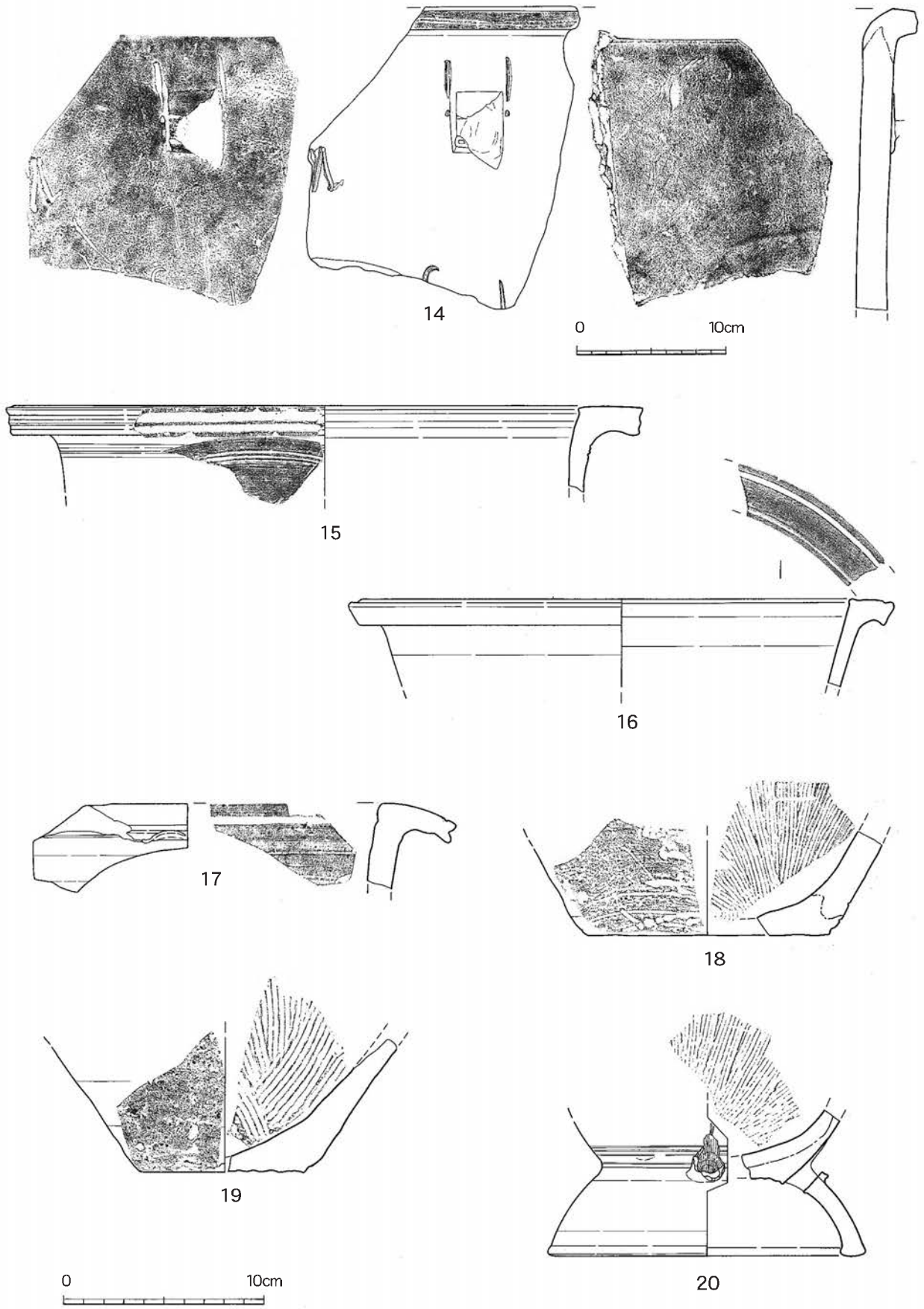
器種・部位 ＼ 出土地			セー１１			スー１１													不明	合計
							Ⅰ層		Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層			
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	遺構東側トレ	遺構西側トレ	内トレ③	裏込目南側	裏込目西側	遺構内西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上			
沖縄産無釉陶器	鉢	口		1		4				6				3	1					15
		胴				1														1
		底		1		1				3							1			6
	小計		0	2	0	6	0	0	0	9	0	0	0	3	1	0	1	0		22
	擂鉢	口～底																		0
		口				1								1			2			4
		胴		2		3			2	1				1						9
		底		1		1				1	1									4
	小計		0	3	0	5	0	0	2	2	1	0	0	2	0	0	2	0		17
	壷	口		1		3								1						5
		胴	16	60		69	11		9	67		6		39	16		2	7		302
		底	1							2				3						6
	小計		17	61	0	72	11	0	9	69	0	6	0	43	16	0	2	7		313
	瓶	口	3	1		1				1	1			1	1					9
		口～頸		1																1
		頸	1	1			1			1					2					6
		胴	1	3		5								5			1			15
		底	1																	1
	小計		6	6	0	6	1	0	0	2	1	0	0	6	3	0	1	0		32
	急須	取手		1																1
	瓶or壷	底		1		6				2										9
	蓋	口				1														1
	火炉	口								2										2
	小計		0	2	0	7	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0		13
出土層別合計			23	74	0	96	12	0	11	86	2	6	0	54	20	0	6	7		397
			97			108			105					74			6	7		397
総合計			97			293												7		397

第18表　沖縄産無釉陶器観察一覧

図・図版番号	器種	部位	法量（cm）			観察所見	出土地点 出土層
			口径	器高	底径		
第15図 図版17 1	壷	口縁部	18.2	—	—	素地・器面ともに暗赤褐色を呈す。口縁部が玉縁状を呈する。	セー11 Ⅰ層
第15図 図版17 2			13.2	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口縁部が玉縁状を呈す。	スー11 表採
第15図 図版17 3		底部	—	—	17.4	素地・器面ともに赤褐色を呈す。内面に轆轤痕が明瞭に残る。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第15図 図版17 4			—	—	15.6	素地・器面ともに暗赤褐色を呈す。内・外面に黒褐色の釉がかかる。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第15図 図版17 5	瓶	口蓋部	12.2	—	—	素地は赤褐色、器面は暗褐色を呈す。口縁の外反が強く、口唇がわずかに肥厚する。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第15図 図版17 6			12.2	—	—	素地は赤褐色、器面は披熱のため黒ずんでいる。口縁部の外反が強く、肩部に３条の圏線をめぐらせる。	スー11 Ⅲ層遺構外
第15図 図版17 7			5.4	—	—	素地は赤褐色、器面は披熱のため黒ずんでいる。外反口縁で口唇が玉縁状に肥厚する。肩部に２条の圏線をめぐらせる。	セー11 Ⅰ層
第15図 図版17 8	瓶 ・ 壷	底部	—	—	3.6	素地は赤褐色、器面は暗赤褐色で、一部に泥釉がかかる。内面に轆轤痕が明瞭に残る。	スー11 表採
第15図 図版17 9			—	—	9.6	素地は暗赤褐色、器面は赤褐色を呈す。内面に轆轤痕が明瞭に残る。	スー11 表採
第15図 図版17 10	急須	把手	—	—	—	素地は赤褐色、器面は暗茶褐色を呈す。耳は方形を呈す。	セー11 Ⅰ層
第15図 図版17 11	蓋	口蓋部	18.1	—	15.9	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口蓋に３条一組の圏線を２条めぐらせる。	スー11 表採
第15図 図版17 12	火炉	口縁部－肩部	15.0	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口縁が「く」の字に屈曲する器形で、肩部に２条圏線をめぐらせる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第15図 図版17 13		口蓋部	36.0	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口唇両端がわずかに張り出す。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第16図 図版18 14		口縁部　－ 肩部	—	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口縁部は逆Ｌ字状を呈する。胴部に『〈〉』と『ハ゛』の印が刻まれている。	スー11 表採
第16図 図版18 15	鉢	口縁部	32.0	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、口唇部に２条の圏線をめぐらせる。	スー11 表採
第16図 図版18 16		口縁部	27.4	—	—	素地・器面ともに赤褐色を呈す。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、口唇上部に圏線を１条めぐらせる。	セー11 Ⅰ層
第16図 図版18 17		口縁部	—	—	—	素地は赤褐色、器面は暗赤褐色を呈す。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、口唇部に圏線を１条めぐらせる。口唇下端が披熱のためか変形している。	スー11 Ⅲ層遺構内
第16図 図版18 18	擂鉢	底部	—	—	12.2	素地・器面ともに赤褐色を呈する。櫛目を全体に密に施す。	セー11 Ⅰ層
第16図 図版18 19			—	—	8.2	素地・器面ともに赤褐色を呈する。櫛目を全体に密に施す。	スー11 Ⅱ層遺構内 トレンチ③
第16図 図版18 20			—	—	15.2	足付きの擂鉢。素地・器面ともに赤褐色を呈する。高台上部に孔が穿たれている。櫛目を全体に密に施す。	スー11 表採



第15図　沖縄産無釉陶器　1



第16図　沖縄産無釉陶器　2

第９節　土器（中森式土器・産地不明土器・タイ産半練）・土製羽口

１．土器（第17図１～４）・（図版1－１～４）

ここで掲載した土器は、八重山諸島の14世紀中頃～17世紀頃まで使用されていた中森式土器（註１）とグスク土器（註２）の範疇から外れる産地不明の土器、タイ産半練（註３）の三種類である。その他に図化を省略したグスク土器の胴部細片とパナリ焼（註４）の胴部細片が各１点ずつ出土してる。

１）中森式土器（同図１）・（図版１－１）

同図１は壺の胴部片で、外面の調整は篦削り後に指ナデでナデ消す。ナデ消し部分的は光沢のある滑面となる。内面は外面より丁寧なナデ仕上げである。外面の器色は灰黒色で内面が黄褐色を帯びている。胎土は泥質粘土で細かいが、微細な石灰質砂粒と粗い貝殻片（2mm前後）を多量に含んでいる。貝殻片の多くは剥落し、アバタ状の器面となる。セ－11表採。

２）産地不明土器（同図2）・（図版1－2）

同図２は厚手（器厚が7～9mm）の鍋、若しくは鉢の胴部破片。外面は篦ナデ調整とみられる。内面が丁寧なナデ仕上げである。器色は外面が淡橙色を帯びている。内面が淡灰色を呈する。胎土は細かい砂質粘土で、角のある細かい石英を主体に白色・茶褐色・黒色の細かな鉱物を多量に含んでいる。 ス－11第Ⅱ層遺構内東側より出土。

当該資料に類似するものが湧田古跡（註５）で出土しているようである。

３）タイ産半練（同図３・４）・（図版１－３・４）

同図３は蓋の撮の破片で、宝珠形の撮である。器面の保持は悪いが残存部分からナデ仕上げが考えられる。器色は橙白色を呈する。胎土は細かく石英を主体に粗い茶褐色の鉱物を多く含んでいる。セ－11第Ⅰ層の出土。

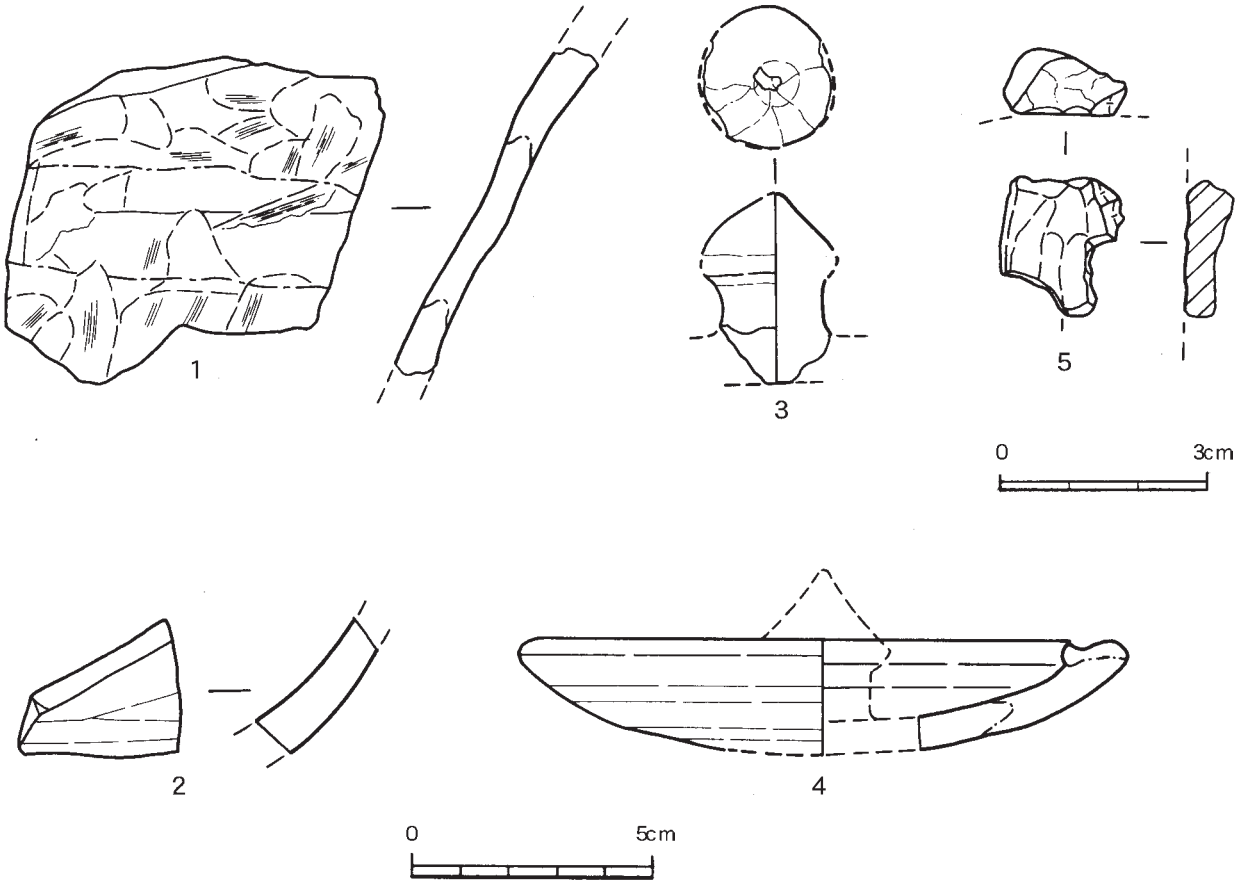
同図４は蓋部の破片で蓋端部の粘土を折り曲げて先端部を丁寧に成形する。折り曲げた端部の断面は三角形状を呈する。三角形状の突起部分は指で摘み上げて丁寧に仕上げる。突起上面は丸篦様の指圧により回転押し引きによって凹みを造る。器色は明橙色を帯びている。胎土は細かい石英を多量に含んでいる。稀に粗い茶褐色の鉱物が混入する。ス－11第Ⅲ層遺構外より出土。

２．土製羽口（第17図５）・（図版１－５）

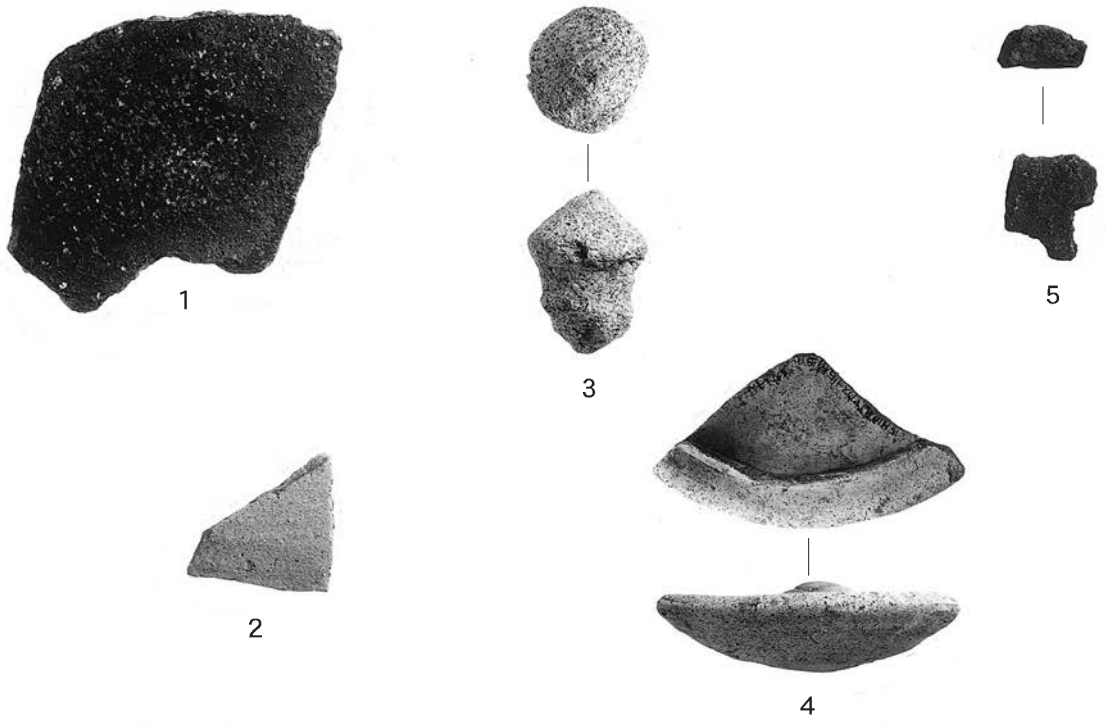
同図５は鍛冶に関連する土製羽口の破片とみられる。鍛冶炉内に接した羽口の内面部分の破片であるが、ガラス質鉄滓の付着はない。羽口の外面は雑な指ナデを深く入れて調整する。内面は割れ面あるが部分的に火熱を受けて茶褐色に変色する。外面の色調は灰褐色で、内面が灰色を主体に部分的に灰褐色を帯びる。胎土は細かく微細な石英を多量に含む。火熱を受けて表裏面の手触りは「ザラザラ」とした砂質傾向の強い胎土に変化している。残存サイズ長軸3.1cm、短軸2.35cm、残存厚1.2cmを測る。残存重量5.5ｇを計った。ス－11第Ⅲ層遺構内西側より出土。

註文献

註１．高宮廣衛「編年試案の一部修正について」『南島考古』第７号　沖縄考古学会　1981年。
註２．金城亀信「グスク土器の出現」『月刊考古学ジャーナル』N0.320（通巻）ニュー・サイエンス社　1990年６月号。
註３．金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号　日本貿易陶磁研究会　1991年。
註４．金武正紀「土器→無土器→土器（八重山考古学編年試案）『南島考古』N0.14 沖縄考古学会　1994年。
註５．沖縄県文化財調査報告書第111集『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会 1993年３月。



第17図　土器（中森式土器　1、産地不明土器　2、タイ産半練　3・4、土製羽口　5）



図版 1　土器（中森式土器　1、産地不明土器　2、タイ産半練　3・4、土製羽口　5）

第10節　陶質土器

壷屋で「アカムヌー」と称される土器群である。本遺跡では総数71点が出土した。器種別にみると擂鉢、鍋、火炉、火取、鉢、瓶、蓋などが出土している。個々の詳細は下記の観察表に記す。

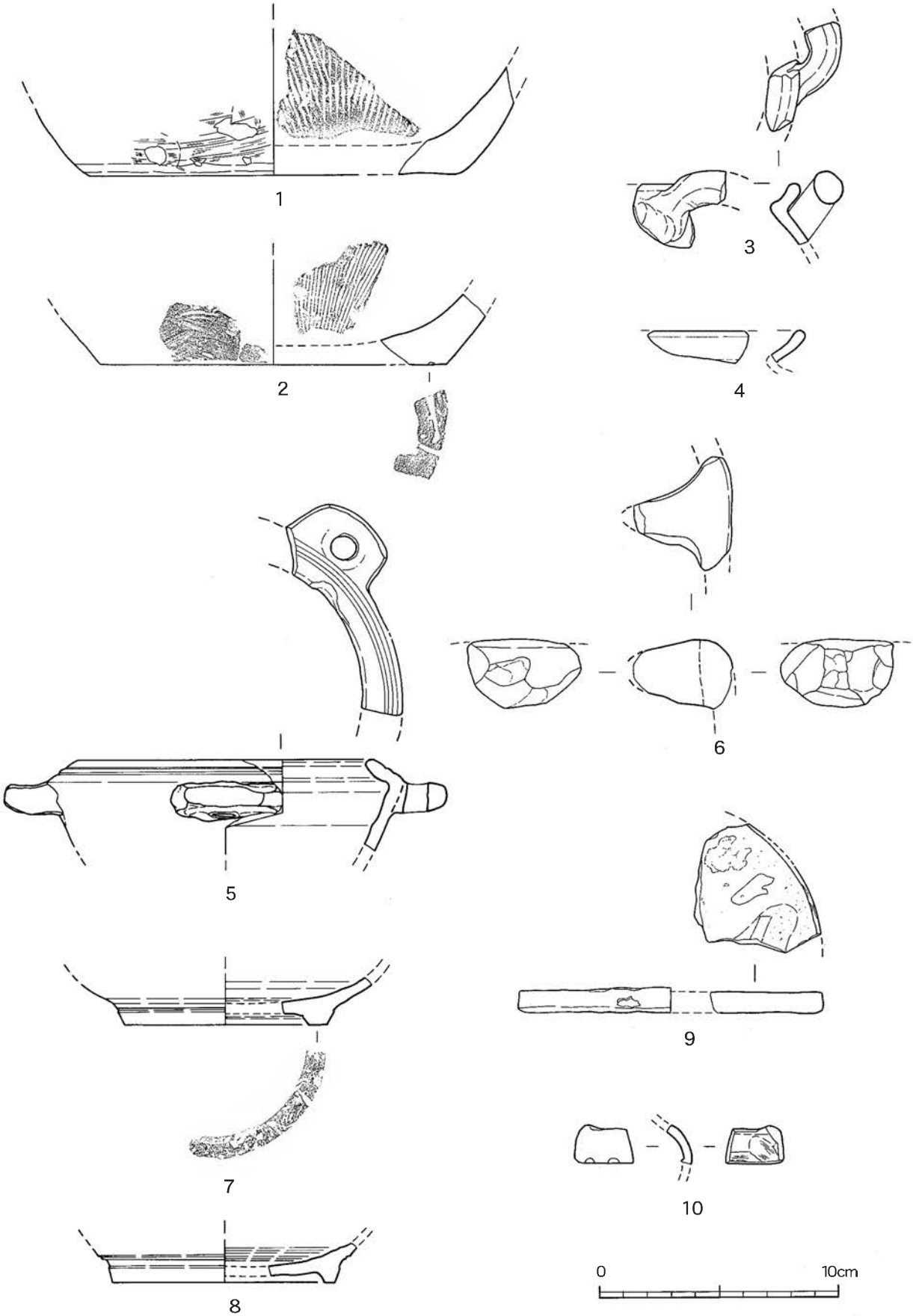
第19表　陶質土器出土状況一覧

器種・部位 ＼ 出土地		セー11 表採	セー11 第Ⅰ層（トレ①）	セー11 第Ⅱ層（トレ①）	スー11 表採	スー11 Ⅰ層 東側トレ	スー11 Ⅰ層 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	スー11 Ⅱ層 裏込目 南側	スー11 Ⅱ層 裏込目 西側	スー11 Ⅲ層 遺構内西側トレ	スー11 Ⅲ層 遺構外	スー11 Ⅲ層 トレ③	スー11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
陶質土器	鍋 口							1	1									2
	鍋 胴		7		5			2					5	1		3		23
	鍋 底																	0
	鍋or急須？ 胴				1							1	4					6
	鍋or蓋？					1												1
	小計	0	7	0	6	1	0	3	1	0	0	1	9	1	0	3	0	32
	擂鉢 底								1					1				2
	小計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
	火取 口				1													1
	火取 胴																	0
	火取 底								1				1					2
	小計	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3
	火炉 口												2					2
	火炉 胴								1				1					2
	火炉 底																	0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	4
	蓋													1				1
	壷？ 底										1							1
	鉢 胴				1													1
	瓶 胴	1			1				1							1		4
	急須 胴							1								1		2
	器種不明		2		3			3	7				1	4	1			21
	小計	1	2	0	5	0	0	4	8	0	1	0	1	5	1	2	0	30
出土層別合計		1	9	0	12	1	0	7	12	0	1	1	14	7	1	5	0	71
		10			13			21					22			5	0	71
総合計		71																71

第20表　陶質土器観察一覧

単位：cm

図・図版番号	器種	部位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	観察所見	出土地点 出土層
第18図 図版19 1	擂鉢	底部	－	－	15.3	器面は橙色。素地は密で胎土に白色粒が混入。外面に轆轤痕が明瞭に残る。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第18図 図版19 2			－	－	14.4	器面は橙色。素地は密で胎土に白色粒、赤色粒が混入。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第18図 図版19 3	鍋	口ー耳	－	－	－	器面は橙色で胎土に白色粒、雲母が混入。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第18図 図版19 4		口縁部	－	－	－	器面は橙色で胎土に白色粒、雲母が混入。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第18図 図版19 5	火炉	口縁部	12.2	－	－	口縁が「　く　」の字状に屈曲する。器面は鈍い橙色で胎土に白色粒、赤色粒、雲母、白色粒が混入。	スー11 表採
第18図 図版19 6			－	－	－	口縁内側の突起部分。器面は橙色で胎土に白色粒、赤色粒、雲母、黒色粒が混入。	スー11 Ⅲ層 遺構内
第18図 図版19 7		底部	－	－	8.4	器面は橙色で胎土に白色粒、雲母が混入。外面に轆轤痕が明瞭に見られる。	スー11 Ⅲ層 遺構内
第18図 図版19 8			－	－	9.2	器面は橙色で胎土に白色粒、雲母が混入。外面に轆轤痕が明瞭に見られる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第18図 図版19 9	蓋	－	－	－	－	器面は淡橙色で胎土に赤色粒、雲母が混入。	スー11 Ⅱ層 遺構外
第18図 図版19 10	器種不明	－	－	－	－	器面は橙色で胎土に赤色粒、雲母が混入。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側



第18図　陶質土器

第11節　瓦質土器

総数15点が出土し、完品の出土はなくすべて破損品であった。器種別には、鉢、水盤がある。

鉢：1～3はいずれも内彎に肥厚する。1は器面を丁寧に研磨し、黒色を呈している。2は口縁部に一条、3は二条の波状凸帯文が貼付されており、口縁部から胴部にかけて膨らみをもつ。4、6はほぼ直線的に胴部から口縁部まで移行するものと思われ、胴部に一条の波状凸帯文が貼付されている。5は胴中央部までは外傾を呈して直線的に移行し、胴上部で僅かに丸味を出して口縁まで移行するものと思われる。また、凸帯文の貼付前に施された刷毛目とみられる痕があり、それ以外の部分に刷毛痕がみられないことから、凸帯文貼付の際に利用される何らかの手法ではないかと考えられる。

水盤：方形の水盤とみられるものである。底面から外傾して直線的に立ち上がり、口唇に僅かに段がつくられている。

器種不明：底部の細片のみで用途が判然とせず、不明なものが1点得られている。

その他詳細は、以下の観察一覧表に記す。

参考文献

・沖縄県文化財調査報告書第121集『湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会　1995年3月。

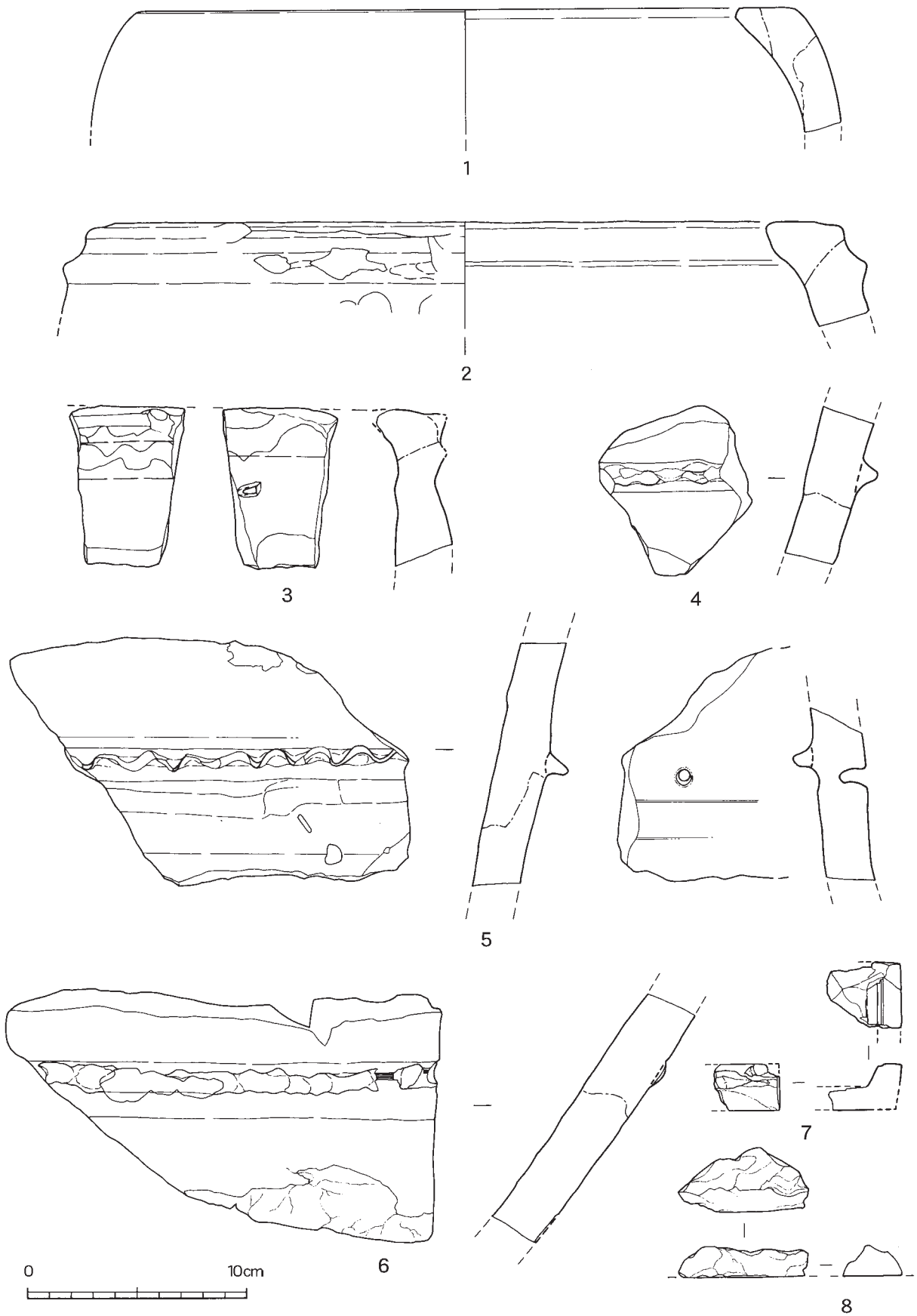
第21表　瓦質土器出土状況一覧

器種・部位 ＼ 出土地			セー11 表採	セー11 第Ⅰ層（トレ①）	セー11 第Ⅱ層（トレ①）	スー11 Ⅰ層 表採	スー11 Ⅰ層 東側	スー11 Ⅰ層 西側	スー11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	スー11 Ⅱ層 裏込目 南側	スー11 Ⅱ層 裏込目 西側	スー11 Ⅲ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅲ層 遺構外	スー11 Ⅲ層 トレ③	スー11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
瓦質土器	鉢	口		1		1				1									3
		胴		2						1									3
		底								1				1					2
	小　計		0	3	0	1	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	8
	水盤	口～底		1															1
	小　計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	器種不明	胴				1				1		1	1		1				5
		底													1				1
	小　計		0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	0	2	0	0	0	6
出土層別合計			0	4	0	2	0	0	0	4	0	1	1	1	2	0	0	0	15
			4			2			6					3			0	0	15
総合計			4			11												0	15

第22表　瓦質土器観察一覧

単位：cm

図・図版番号	器種	部位	口径胴径	混入物	器色	調整	観察事項	出土地
第図19 図版20 1	鉢	口縁	30.1 —	白色細粒・石英	両面：黒色 素地：灰褐色	内外－磨き	内(口唇部のみ)外面ともに丁寧に研磨され、器面は黒色を呈している。焼成は良好。本土産か？	セー11 Ⅰ層
第19図 図版20 2	鉢	口縁	34.8－	茶褐色粒・黒色粒・石英？	両面：にぶい橙色 素地：灰褐色	内－ヨコナデ	口縁部にかけてやや八の字に窄まり、口縁部に波状の凸帯文を一条施す。焼成は良好。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第19図 図版20 3	鉢	口縁	－　－	赤褐色粒・石英？	両面：灰黄色 素地：黒褐色	内外－ヨコナデ	口縁は内部に肥厚する。口唇が彎曲で、口縁部に二条の波状の帯文を施す。内面に煤？が付着。焼成は良好。	スー11 Ⅰ層 表採
第19図 図版20 4	鉢	胴	－　－	茶褐色粒・白色粒・石英？	両面：にぶい黄橙色 素地：にぶい橙色	内－篦ナデ	直線的に外傾し、胴部に波状の帯文を施す。焼成は良好。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第19図 図版20 5	鉢	胴	— 50.6	赤褐色粒・黒色粒・石英？	両面：にぶい橙色 素地：灰褐色	内－指ナデ	凸帯文の欠けている部分から刷毛痕らしきものがみられる。焼成は良好。	セー11 Ⅰ層
第19図 図版20 6	鉢	胴	－　－	赤褐色粒・白色粒	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色 素地：にぶい橙色	内外－篦ナデ・指ナデ	ほぼ直線的に口縁部まで移行するものと思われ、胴部内側に直径約6㎜の孔が認められる。焼成は良好。	セー11 Ⅰ層
第19図 図版20 7	水盤	底	－　－	白色粒	両面：灰褐色 素地：茶褐色	内外－磨き	底面から外傾して直線的に立ち上がり、口唇に僅かに段がつくられている。焼成は非常に良好。	セー11 Ⅰ層
第19図 図版20 8	不明	底	－　－	白色細粒・黒色細粒・石英	外面：黒褐色 素地：灰色	内外－ヨコナデ	細片のため詳細は不明である。焼成は良好。	スー11 Ⅲ層 遺構外



第19図　瓦質土器

第12節　円盤状製品

円盤状製品
総数27点が出土した。素材別にみると、灰瓦、赤瓦、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、染付などがある。個々の詳細は以下の観察表に記す

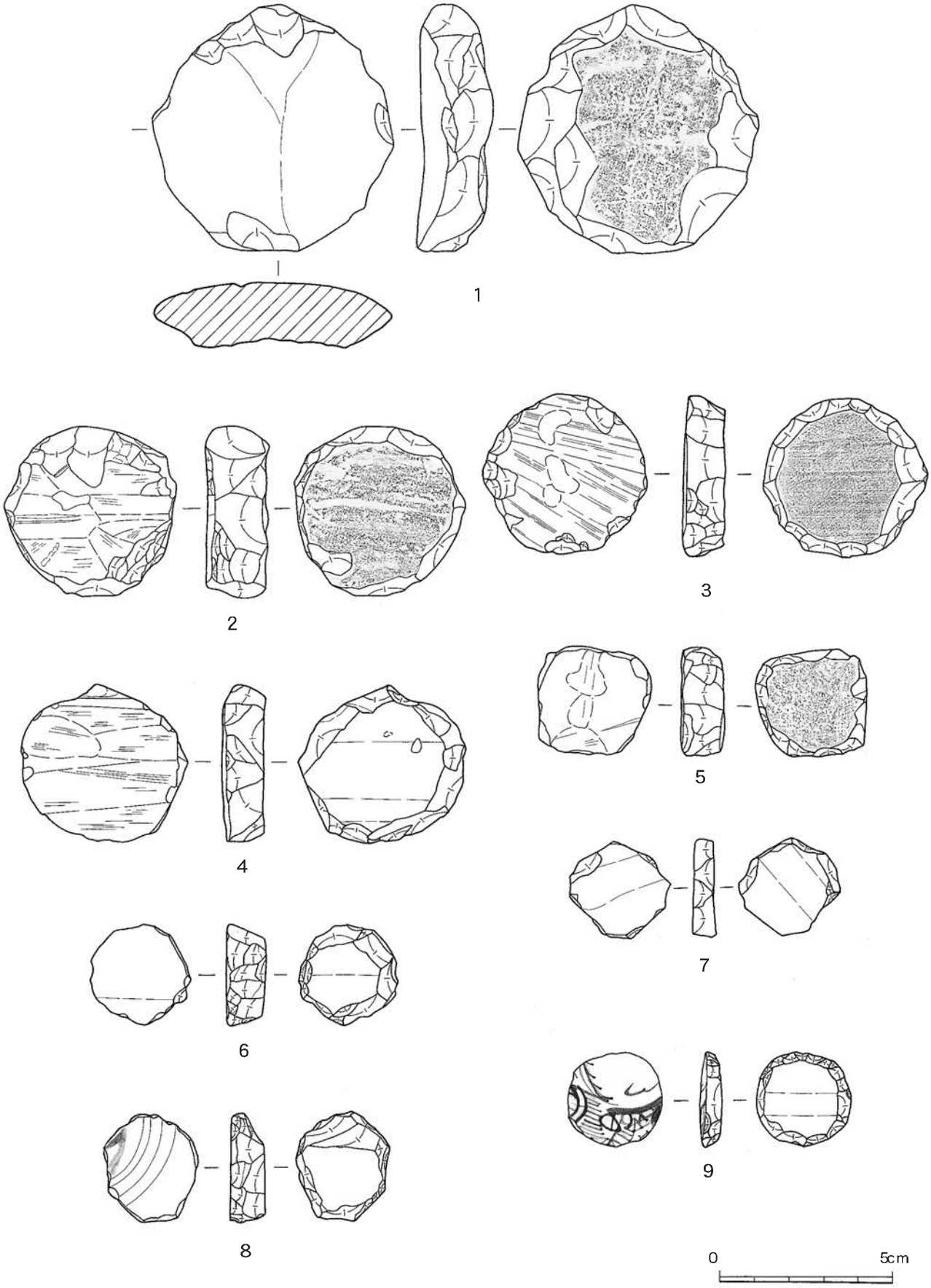
第23表　円盤状製品観察一覧

図・図版番号	素材	法量（cm／g）				観察所見	出土地点出土層
		長径	短径	厚さ	重量		
第20図図版21 1	灰瓦	7.2	6.6	2.1	95.0	丁寧な整形でほぼ円形を呈する。表面に研磨痕が見られる.	スー１１表採
第20図図版21 2		5.0	4.8	1.7	50.0	丁寧な整形でほぼ円形を呈する。表面・裏面に研磨痕が見られる。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第20図図版21 3	沖縄産無釉陶器	4.7	4.5	1.2	3.5	丁寧な整形でほぼ円形を呈する。表面に研磨痕がみられる。	スー11 Ⅰ層東側
第20図図版21 4		4.7	4.3	1.2	35.0	楕円形を呈する。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第20図図版21 5	赤瓦	3.7	3.0	1.3	15.0	ややいびつな方形を呈する。	スー11 Ⅲ層遺構内
第20図図版21 6	沖縄産無釉陶器	2.8	2.7	1.1	10.0	丁寧な整形でほぼ円形を呈する。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第20図図版21 7		2.8	2.5	0.6	0.5	ややいびつな方形を呈する。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第20図図版21 8	沖縄産施釉陶器	3.1	2.6	1.0	10.0	ややいびつな方形を呈する。表面に文様がみられる。	スー11 Ⅰ層表採
第20図図版21 9	染付	2.8	2.6	0.6	0.5	丁寧に整形され、ほぼ円形を呈する。	スー11 Ⅱ層遺構内東側

第24表　円盤状製品計測表（実測外）

単位：cm/g

	素材	長径	短径	厚さ	重量	出土地点・出土層
10	褐釉	3.3	3.2	1.0	10.0	スー11Ⅲ層遺構外
11	沖縄産施釉	2.8	2.6	0.5	0.5	スー11Ⅲ層遺構内西側トレンチ
12	沖縄産無釉	5.6	5.0	2.0	75.0	スー11表　採
13		4.9	4.4	1.0	30.0	スー11表　採
14		3.3	2.9	1.0	15.0	スー11表　採
15		3.9	2.6	0.8	15.0	スー11Ⅱ層遺構内東側
16		4.7	3.4	1.0	25.0	セー11Ⅰ層
17	瓦（赤）	5.9	4.6	1.3	40.0	スー11Ⅱ層遺構内西側トレンチ
18		4.6	3.5	1.2	25.0	スー11表採
19		3.7	2.2	1.3	10.0	スー11Ⅱ層遺構内西側トレンチ
20		6.5	6.0	1.5	60.0	スー11Ⅱ層遺構内西側トレンチ
21		4.3	4.2	1.2	25.0	スー11Ⅲ層遺構内西側トレンチ
22		3.6	3.4	1.0	15.0	セー11Ⅰ層
23	瓦（灰色）	4.8	3.1	1.4	20.0	スー11Ⅱ層遺構内西側トレンチ
24		4.2	3.7	1.1	20.0	スー11Ⅱ層トレンチ③
25		4.4	4.3	1.6	30.0	スー11Ⅲ層遺構内西側トレンチ
26		4.0	3.8	1.2	20.0	スー11Ⅲ層遺構外
27		5.7	5.5	1.3	50.0	スー11Ⅲ層遺構外



第20図　円盤状製品

第13節　屋瓦・漆喰・塼・塼瓦

屋根に葺いた瓦である程度形状が窺える資料と瓦同士を接着する漆喰の大型破片が１点出土している。その他に広場や排水溝に敷かれた塼や屋根に葺いたとみられる塼瓦も出土していたので、これらを図化した。

出土した屋瓦や漆喰は、守礼門の屋根に葺かれた資料（但し、高麗系瓦・大和瓦を除く）として考えられるところである。また、敷瓦の塼も出土している為、在る時期に於いて守礼門の雨落溝（排水溝）の底板などの代用品として塼が使用された可能性も否定できないところである。敷瓦の塼を多用した例は首里城跡歓会門・久慶門内側地区（註１）首里城南殿・北殿跡（註２）、首里城正殿前の御庭跡・奉神門跡（註３）南側石墻附属の排水溝などに塼を使用したようである。屋根に葺いた塼瓦の出土例は湧田古窯跡（註４）、首里城南殿跡や奉神門跡など出土している。

註文献

註１．當眞嗣一・上原 静ほか『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会昭和63（1988）年３月。
註２．上原 静・我那覇 念『首里城跡　南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会　平成７（1995）年３月。
註３．大城 慧・上原 静ほか『首里城跡　御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会　平成10（1988）年
３月。
註４．大城 慧・島袋 洋ほか『湧田古窯跡（Ｉ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1993
年３月。

１）屋瓦・漆喰（第21図1～6・8、第22図9～12）・（図版22－１～7、図版23－8～11）

造瓦技術の違いから高麗系瓦、明朝系瓦、大和系瓦、大和瓦の4種類が確認されている。なお、大和系瓦の破片は細片化したものが９点得られていて、図化を省略した。明朝系瓦の範疇にある鬼瓦（守礼門の鬼瓦）の破片も２点出土している。その他、現在の守礼門の屋根に葺かれた瓦類を出土品と比較検討を行う目的で参考資料として写真（図版2・図版3）を掲載した。また、鬼瓦の部位を特定する目的で守礼門鬼瓦の写真よりトレースを試みた（第21図7）。以下、瓦・漆喰の個々の特徴については第26・27表に呈示した。

参考文献

１．上原 静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号 沖縄考古学会1994　年12月。
２．財団法人 文化財建造物保存技術協会『沖縄県有形文化財 旧首里城守礼門保存修理工事報告書』沖縄県1998年

２）塼・塼瓦（第23図1～5）・（図版24-1～5）

守礼門の雨落溝（排水溝）の底板などの代用品として敷瓦の塼瓦が1枚出土していたので、これを図化した（第23図1・図版24-1）。屋根に葺いたとみられる塼瓦の特徴は下駄に鈎状の返しを貼り付けているところが特徴である。その点で敷瓦の塼と区別ができる。首里城出土の敷瓦分類は首里城跡歓会門・久慶門内側地区（註１）、首里城南殿・北殿跡（註2）、首里城正殿前の御庭跡・奉神門跡（註3）で分類がなされているが、ここでは歓会門・久慶門内側地区の分類（A類～F類までの6類）に準じた。出土した塼は、歓会門・久慶門内側地区の塼分類のD類（平面観は四方形で表面と裏面に互い違いの関係で抉り付けられているもの）の範疇にある1枚が確認されている。以下、個々の特徴は観察表に呈示した。

註文献

註 1．上原 静ほか『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会　昭和63（1988）年3月。
註 2．上原 静ほか『首里城跡　南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会　平成７（1995）年3月。
註 3．上原 静ほか『首里城跡　御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会　平成10（1988）年3月。

第25表　屋瓦・漆喰・塼出土状況一覧

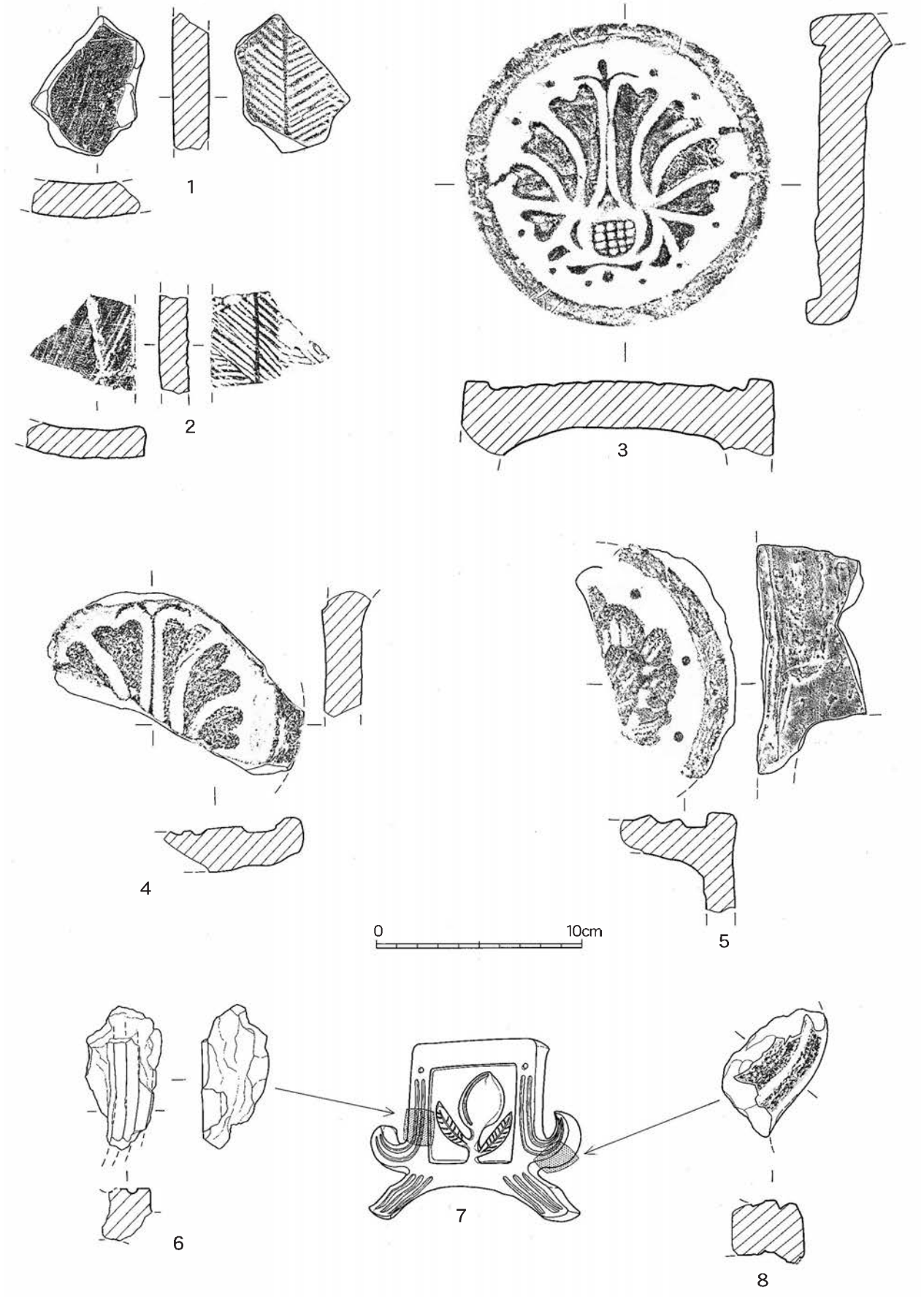
器種・部位 ＼ 出土地			セー11			スー11												不明	合計
						Ⅰ層			Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層		
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	遺構内 東側トレ	遺構内 西側トレ	遺構内 トレ③	裏込目 南側	裏込目 西側	遺構内 西側トレ	遺構外	トレ③	石敷直上		
高麗系	平瓦	赤								1									1
		灰色												1					1
小計			0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
大和系	平瓦	灰色	1			2			1	1				2	2				9
大和	軒平瓦	灰黒色	1																1
	平瓦	灰黒色		1		1	2												4
小計			2	1	0	3	2	0	1	1	0	0	0	2	2	0	0	0	14
明朝系	平瓦	赤	40	80		157	32		40	205	16	11		111	5			22	719
		灰色	151	120		79	5		6	135	9	12	2	16	69		3	19	626
	鬼瓦	赤				1			1										2
	軒丸瓦	赤	2	1						2	1				1				7
		灰色		1		2				2					1				6
	丸瓦	灰色	10	15		11				17		3		5	1		1		63
		赤	2	4		8								1					15
	軒平瓦	赤	4			1			1	3				3	1				13
		灰色	1	1						2									4
小計			210	222	0	259	37	0	48	366	26	26	2	136	78	0	4	41	1455
セメン瓦	丸		2																2
小計			2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
漆喰			1																1
小計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
塼		赤		7					3	3				4	2			1	20
		灰色	2	19		8			1	3	2	2		6	6		1	3	53
小計			2	26	0	8	0	0	4	6	2	2	0	10	8	0	1	4	73
出土層別合計			217	249	0	270	39	0	53	374	28	28	2	149	88	0	5	45	1547
			466			309			485					237			5	45	1547
総合計			466			1036												45	1547

第26表　屋瓦・漆喰観察一覧

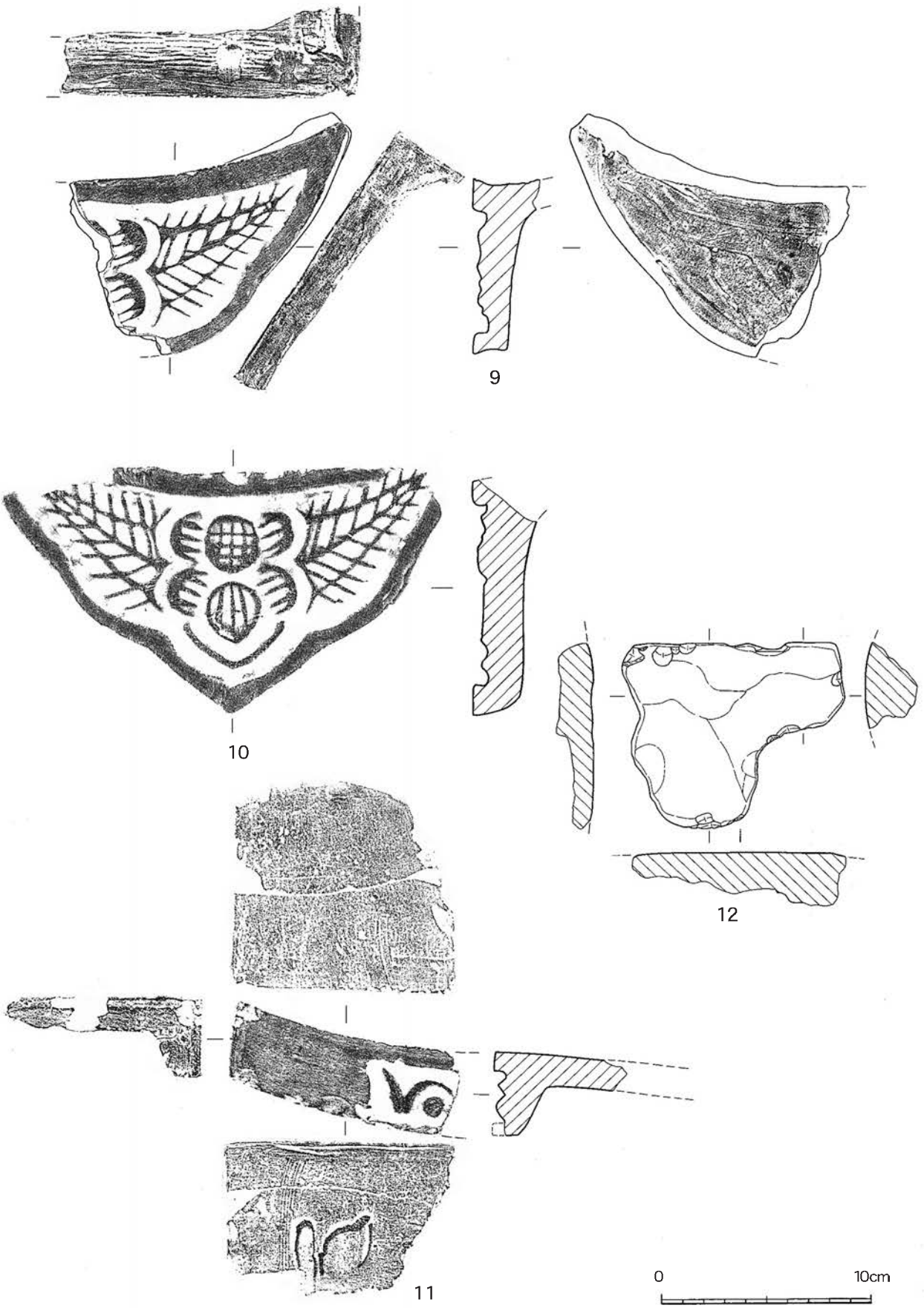
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種・分類	残存部位	縦軸 横軸 厚さ (cm)	観察事項・文様構成・色調	素地	出土地点 出土層
第21図 図版22 1	高麗系瓦	平瓦縁辺欠落	(6.7) (5.6) 1.6	凹面は布目圧痕と糸切りが全体的に観られるが上位の部分のみナデ消されている。凸面の叩きは「有軸羽状」で右側で羽状が交差する。器面の保持が悪く、全体的に摩耗する。手で触れると粉末が付着する。凹面と凸面の色調は淡黄白色を呈する。	素地は軟質の細粒子で微細な石英を主体に粗細な茶褐色の鉱物が少量みられる。稀に細かい雲母片が含まれる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第21図 図版22 2		平瓦側面	(4.9) (5.9) 1.4	凹面は布目圧痕、糸切り痕、紐痕が観られる。凸面の叩き目は有軸で左から右に下がる叩き板で調整。右側面に桶の分割面が観られる。凹面及び凸面の色調は灰褐色を帯びる。	素地は硬質の微粒子で微細な白色鉱物(石英？)を多く含む。	スー11 Ⅲ層 遺構内西側
第21図 図版22 3	明朝系瓦	軒丸瓦	15.0 15.3 1.5～2.1	上原静分類の軒丸瓦Ⅲ期(18世紀)第Ⅲ文様系Ⅲ期08に相当する。瓦当のは花芯から垂直に上に伸びる蕊を中心に左右対称の花弁と簡略化された小葉三枚を展開し、周辺に珠文13個を配置した文様を型で起こす。花弁の弁先は丸味を帯び二股に割れた花弁となっている。外周縁幅は1.1～1.2mmを測る。器面の保持が悪く、全体的に摩耗する。指先に粉末が付着する。瓦周辺に漆喰が付着する。色調は外面が淡褐色で、内面は明褐色を帯びる。	素地は軟質の細粒子で粗細な茶色物質(焼土？)を少量含む。僅かに微細な石英が観られる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第21図 図版22 4		軒丸瓦片	(6.0) (12.8) 1.6～1.8	上原静分類の軒丸瓦Ⅲ期(18世紀)第Ⅲ文様系Ⅲ期09に該当。瓦当の花弁は先端で二股に開いた蕊を中心に左右対称の花弁が展開する文様を型で起こす。花弁の弁先は丸味を帯び二股に割れた花弁となっている。外周縁幅は7～13mmを測る。器面の保持が悪く、全体的に摩耗する。指先に粉末が付着する。色調は内外面ともに淡橙白色を呈する。	素地は軟質の細粒子で細かい茶色物質(焼土？)を多く含み、僅かに微細な石英とサンゴ片が観られる。	スー11 Ⅲ層 トレンチ③
第21図 図版22 5			(11.6) (6.4) 1.6～1.8	上原静分類の軒丸瓦Ⅲ期(18世紀)第Ⅸ文様系の範疇に収まるタイプ。瓦当の花弁は葉脈の花弁を重ねた文様と珠文を型で起こす。花弁の弁先は丸味を帯びた花弁となっている。外周縁幅は10～12mmを測る。器面の保持が悪く、全体的に摩耗する。指先に粉末が付着する。色調は外面が淡橙色、内面が明橙色。	素地はやや軟質の微粒子で微細な白色(石英を含む)鉱物を多く含み。僅かに細かい茶色物質(焼土？)を含む。	セー11 Ⅰ層
第21図 図版22 6		鬼瓦破片	(7.0) (3.6) (2.3～3.2)	守礼門の大棟か降棟の鬼瓦の縁近くの破片。文様の施文具の幅5.5mmで、断面三角形状の工具で瓦の縁に沿った沈線文を深さ2～3mmと深く押し引いている。外面は丁寧なナデ調整で仕上げるが、内面は雑なナデで粗い混入物を引きずっている。内外面とも暗褐色を帯びる。	素地は軟質の粗粒子で粗細な石英を多量に含む。	スー11 表採
第21図 7	参考資料	守礼門鬼瓦	— — —	守礼門の復元は昭和33(1958)年に実施された。その後、平成4度(1992)年の保存修理で瓦に付着した黒カビをコンプレッサーで水洗いで洗浄除去を行う。平成10(1998)年度に老朽化した軒平瓦・軒丸瓦の取り替え及び漆喰の塗り替え補強を行っている。現在の鬼瓦は恐らく、平成10年度に吹き替えられた降棟の鬼瓦とみられるものを南側の鬼瓦を参考資料として写真よりトレースをおこなった。		
第21図 8 図版22 7	明朝系瓦	鬼瓦破片	(6.5) (5.0) 2.4～3.1	守礼門の大棟か降棟の鬼瓦の縁近くの破片。文様は篦状工具により片切彫りで施文する。瓦の縁に沿った沈線文を深さ4mm前後で深く押し引いている。外面は丁寧なナデ調整で仕上げる。左側面は指ナデを主体に部分的に篦ナデや指圧痕が観察できる。内面は雑な篦削りである。色調は外面が明橙色、内面が淡茶色を呈する。	素地は軟質の粗粒子で粗細な石英を多量に含む。僅かに粗い石灰質の細片や微細な雲母片が観られる。	スー11 Ⅱ層 遺構内東側
第22図 9 図版23 8		軒平瓦	(8.3) (13.7) 1.5～1.7	明治期～戦前(1945年以前)に製作された守礼門の軒平瓦か。上原静分類の軒平瓦Ⅳ期(19世紀)第Ⅲ文様系のⅢ02、若しくはⅢ03に該当する資料とみられる。瓦当の文様は中央付近に花芯を上下に配置したタイプで、葉の葉脈が葉の輪郭からトゲ状にはみだす。外周縁幅は上位が10～13mm、下位で7～10mmを測った。谷部面の調整は指ナデを主体に粗く深い刷毛目や布目痕、指圧痕が観察される。外周の側面は指ナデで仕上げる。瓦当内面は雑な指ナデで仕上げている。色調は内外面とも明褐色を帯びる。	素地は硬質の微粒子。素地に僅かに微細な砂粒や雲母片が観られる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第22図 10 図版23 9	明朝系瓦	軒平瓦	11.2 (20.6) 1.5～2.4	〃　。上原静分類の軒平瓦Ⅳ期(19世紀)第Ⅲ文様系のⅢ02に該当する。瓦当の文様は中央付近に花芯を上下に配置し、上位の花心は格子文で、下位が縦位の文様を施す。下位の花心直下に簡素化された小葉と観られる文様がある。葉の葉脈が葉の輪郭からトゲ状にはみだす。外周縁幅は上位が11mm、下位で5～12mmを測る。谷の上面は欠落する。外周側面は丁寧な指ナデで仕上げる。瓦当内面は指圧を施した後に雑な指ナデを加え、外周縁は縁に沿う指ナデで仕上げている。内外面の色調は明褐色を帯びる。	素地は硬質の微粒子。素地に微細な砂粒や雲母片が微量ながら含まれている。僅かに石灰質の細片が混入する。	スー11 Ⅲ層 遺構内西側
第22図 11 図版23 10	大和瓦	軒平瓦	4.0 (10.9) 1.4	明治期以降の近代瓦。瓦当に簡素化された唐草文が施されている。右側面の上位は桶の分割面と観られ斜位の面となる。谷部上面の瓦当部分は縁と平行に走る篦ナデとこれと直交する篦ナデが僅かにみられる程度である。内面は全体的に丁寧なナデ調整で仕上げているが、部分的に刷毛目状の調整痕や雑な指圧痕が観られる。瓦当内面は刷毛目様の調整。瓦当下端面は指ナデで仕上げる。瓦当及び谷部に銀粉が僅かに残存する。色調は凹面及び瓦当が灰褐色、凸面は灰黒色を呈する。	素地はやや軟質で、粗細な黒色や茶褐色・灰色の鉱物を多量に含み稀に微細な雲母片とみられるものを含んでいる。	セー11 Ⅰ層
第22図 12 図版23 11	屋瓦漆喰	漆喰	(10.5) (8.8) 5.6～2.5	屋瓦の漆喰破片。表面は篦様工具(鏝？)でナデている。裏面が瓦接着面で瓦の痕跡が観られる。色調は表裏面とも白濁色を帯びる。	漆喰の混入物として1mm前後の粗い石英を多量に含む。稀にサンゴの細片が含まれている。	セー11 Ⅰ層

第27表　塼・塼瓦観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種 ・ 分類	長軸 短軸 厚さ (cm)	観察事項・特徴	色調	素地	出土地点 出土層
第23図 図版24 1	D類	(14.1) (11.9) 2.0～3.2	長方形の溝の蓋で下位が欠落。表面は縦位の篦削りを横位のナデで消している。右側縁辺に沿う篦削りが集中。左側は斜位に削って面を形成する。裏面の調整は判然としない為、型物成形と観られる。抉りは表面上端と裏面左側にある。表面上端の抉りは大部分が欠落する。	表裏面とも明橙色。	素地は軟質の細粒子で粗細な茶褐色の物質を多量含み、稀に細かい雲母片や石英が含まれる。	セー11 Ⅰ層
第23図 図版24 2	塼瓦	(8.7) (8.9) 3.2	鈎状の返し(タガ)が付いた下駄を貼り付けた方形状の塼瓦で大半が欠落する。表面の抉りは上端表面が型枠の下面で粘土が半乾きの状態で型枠を外した為、器面がアバタ状となる。裏面はナデ仕上げとみられる。下駄は貼り付けで接合部分に篦ナデを集中させている。同様に下駄本体と下駄の返しの部分の接合部にも篦ナデがみられる。下駄の側面を斜位に成形する。下駄の高さは4.5cmを測る。	表面:明灰色。 裏面:灰褐色。	素地は軟質の細粒子で微細な砂粒と石英を主体に粗い淡茶色の物質を含む。	セー11 表採
第23図 図版24 3	塼瓦	(12.2) (7.0) 2.2	〃　。　〃　。裏面はナデを主体に仕上げるが縁辺近くに篦削りがみられる。下駄は貼り付けで接合部分に深目の篦ナデを集中させている。同様に下駄本体と下駄の返しの部分の接合部にも深目篦ナデがみられる。下駄の側面を斜位に成形する。下駄の高さは4.2cmを測る。	表面:灰色。 裏面:灰褐色。	素地は軟質の細粒子で微細な砂粒と石英を多く含む。	セー11 Ⅰ層
第23図 図版24 4	塼瓦 (下駄)	(12.2) (4.0) —	返しの有る下駄の破片。本体との接合部分で破損。下駄外面はナデを主体に篦削りを併用。下駄内面の返しの部分に篦ナデが集中。返し内面を斜位に面取り成形。下駄側面は篦削りによる滑面で面を斜位に成形。	下駄内外面:淡灰色。 下駄底面:灰白色。	素地は軟質の細粒子で微細な砂粒と石英を主体に粗い灰色～褐色の物質を含む。	セー11 Ⅰ層
第23図 図版24 5	塼瓦 (下駄)	(10.5) (4.2) —	〃　。　〃　。下駄外面は全体的に磨耗し、接合面に篦ナデの痕跡が窺える。下駄内面及び底面は磨耗するが部分的に篦削りが観られる。返しの部分に篦ナデが集中。	下駄内外面:淡黄茶色。下駄底面:淡黄茶色。	素地は軟質の細粒子で微細な砂粒と石英を主体に粗い茶色～茶褐色の物質を含む。	セー11 表採



第21図　瓦１（高麗系瓦1・2、明朝系軒丸瓦3～5、鬼瓦6・8）７は現在の守礼門の明朝系鬼瓦



第22図　瓦２（明朝系軒平瓦9・10、大和瓦11、漆喰12）

軒丸瓦（上原　静分類の第Ⅰ文様系ⅠＡ相当：Ⅰ期16世紀後半相当の瓦を基に新たにデザイン化した平成の瓦）

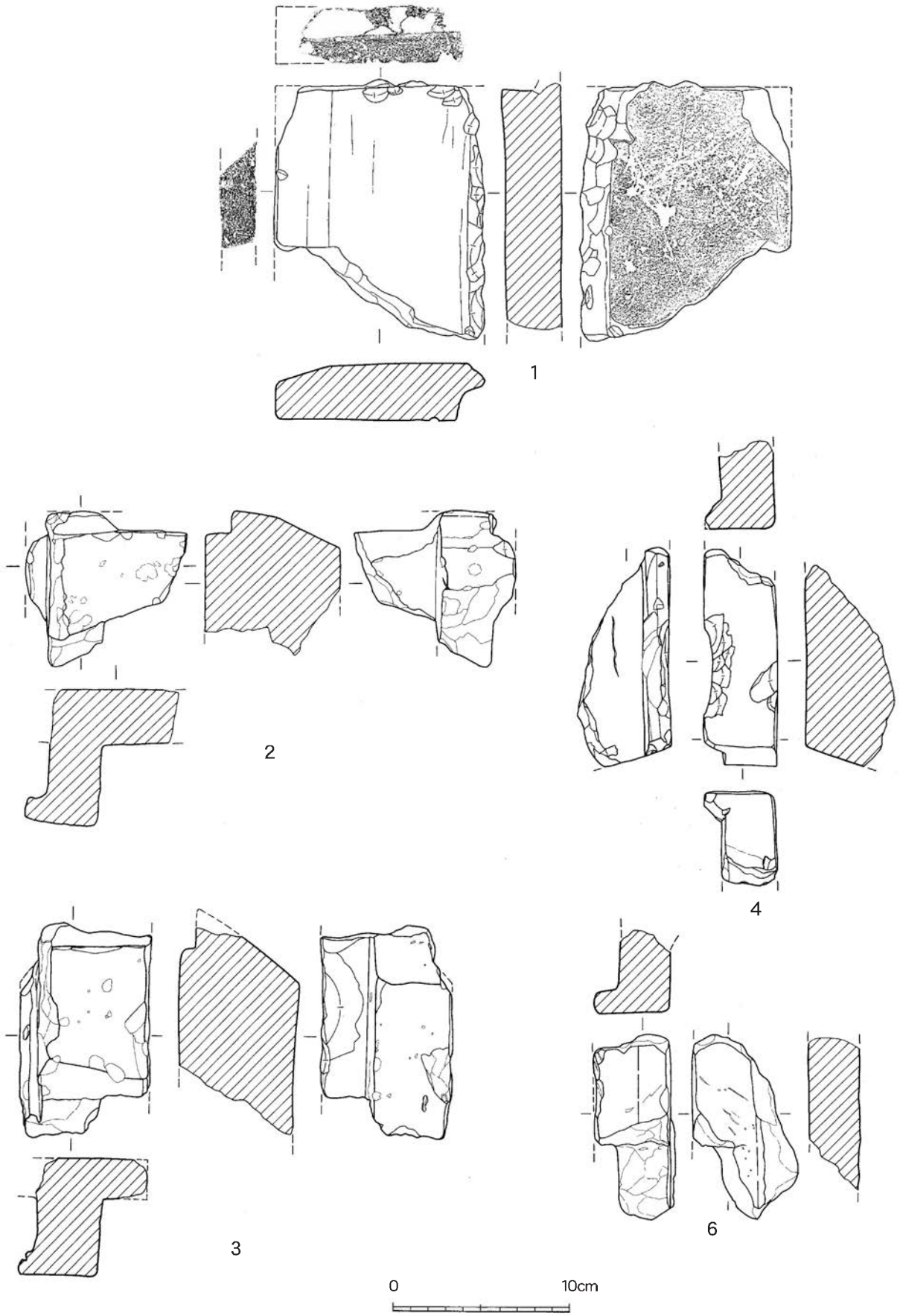
軒丸瓦（上原　静分類の第Ⅲ文様系Ⅲ09：Ⅲ期18世紀）

図版２　平成10年度葺替えの守礼門　１

軒丸瓦（上原 靜分類の第IX文様系ⅢC02：Ⅲ期18世紀）

降棟の鬼瓦と鳥衾瓦当

図版３　平成10年度葺替えの守礼門　２



第23図　塼・塼瓦

第14節　銭貨

今回の調査において得られた出土銭貨は全て有文銭で、総数11点であった。その内訳は、中国銭が８点で日本銭は３点となっており、前者は天聖元寶や永樂通寶といった北宋銭あるいは明朝銭などが確認でき、後者は寛永通寶のみであった。

なお、出土銭貨の多くが欠損しており、６点は銭種同定が困難であった。また、加工銭は認められていない。

第28表　銭貨出土状況一覧

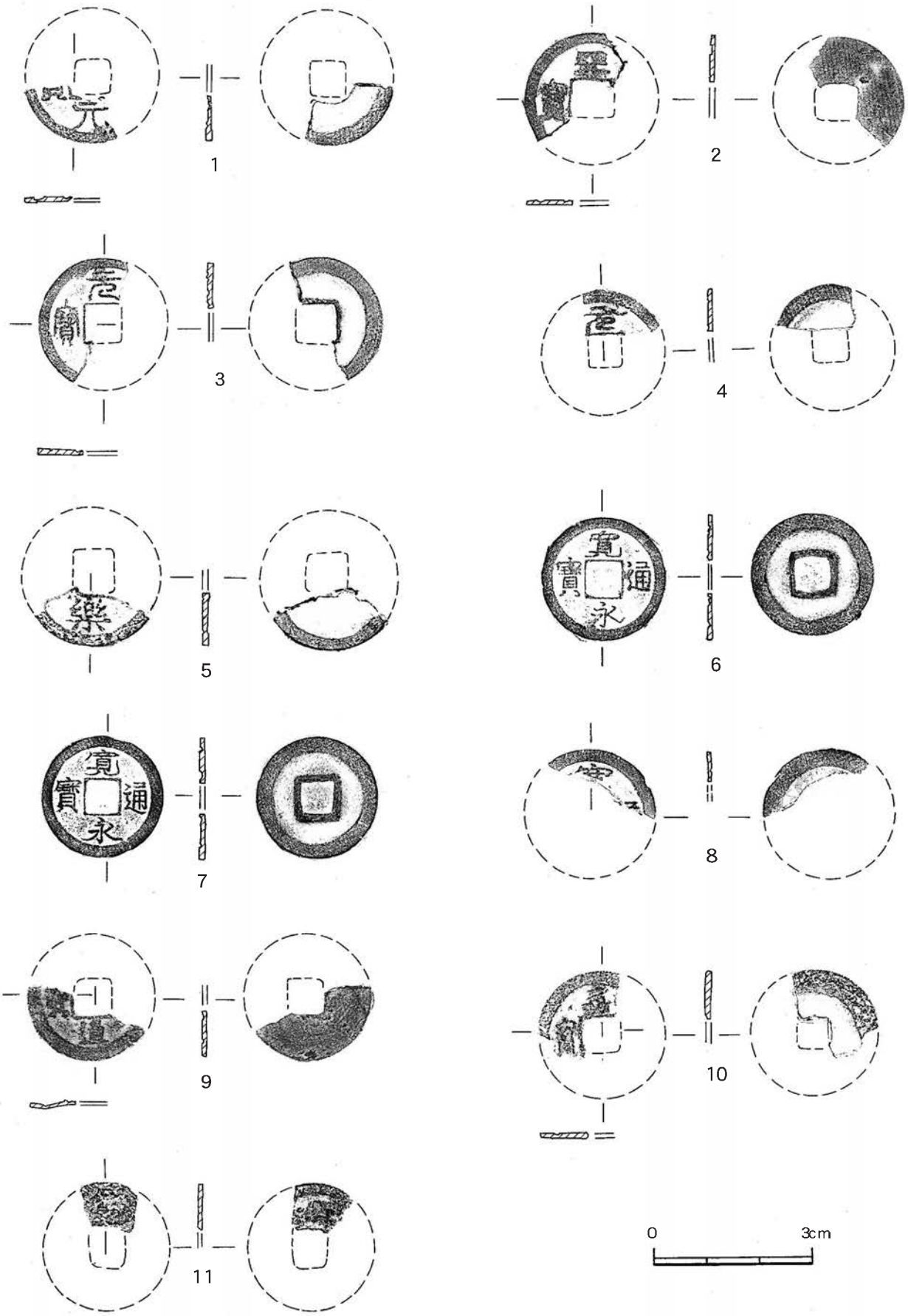
銭種／出土地	天聖元寶	永樂通寶	寛永通寶	○元○寶	元○○寶	元○○○	○○通寶	□○○寶	□○○○	合計
Ⅱ層　遺構内西側			2							2
Ⅲ層　遺構内									1	1
ⅢⅢ　層　遺構外	1	1	1	1	1	1	1	1		8
合　計	1	1	3	1	1	1	1	1	1	11

第29表　銭貨出土観察一覧

単位：mm／g

図・図版番号	銭文	書体	初鋳年	外径	孔幅	最大銭厚	残存重量	備考	出土地
第24図 図版25 1	○元○寶	真書	－	－	－	1.3	0.8	書体の特徴から開元通寶の可能性が高い。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 2	天○○寶	篆書	1023	－	－	1.0	1.2	「天」が篆書体であるから天聖元寶。背の輪や郭が不明瞭で凹凸感がない。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 3	元○○寶	篆書	－	25.0	7.0	1.0	1.9	元豊通寶か元祐通寶か元符通寶。背の輪が明瞭。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 4	元○○○	篆書	－	－	－	1.2	0.7	元豊通寶か元祐通寶か元符通寶。文字の一部が若干歪む。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 5	○樂○○	真書	1408	－	－	1.3	1.4	永樂通寶。肉厚で凹凸感がある。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 6	寛永通寶	真書	1697	24.0	6.5	1.0	2.0	Ⅲ期の寛永通寶。背の郭が正面の郭より幅がある。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第24図 図版25 7	寛永通寶	真書	1697	23.0	6.5	1.0	2.4	Ⅲ期の寛永通寶。本資料も背の郭が正面の郭より幅がある。	スー11 Ⅱ層遺構内西側
第24図 図版25 8	寛○通○	真書	1636	－	－	1.0	1.9	寛永通寶。残存率が低いため、何期の資料か不明。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 9	○○通寶	真書	－	22.5	5.5	0.9	1.2	背の郭が明瞭でなく、凹凸感もない。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 10	□○○寶	真書	－	－	－	1.4	1.1	銭文は磨耗しているが、両面の輪や郭は明瞭。	スー11 Ⅲ層遺構外
第24図 図版25 11	□○○○	？	－	－	－	1.0	0.6	銭文や輪などは摩滅しつつある。	スー11 Ⅲ層遺構内

□：判読不明
○：欠損



第24図　銭貨

第15節　金属製品・青銅製品

鉄製品99点、青銅製品18点の計117点が出土している。器種別には主に、釘、刀子、切羽、小札、飾り金具などがあり、うち12点を図化した。

鉄製品は釘と砲弾片が大半を占め、銃弾、ボルト、ナット等の現代遺物を中心に出土している。図化した釘6点はすべて角釘であり、錆による腐食が進行しているため形状の不明なものが多い。頭部が折れるもの(第25図1)が確認でき、断面は何れも正方形に近い。

青銅製品は18点の出土で、何れも破損品や全形が窺えないものである。第25図10は切羽の破損品で、木曳門地区からも類似の遺物が出土している。また、第25図11は飾り金具と思われる部位で、円環状の鏨を密に打ち並べる魚々子と呼ばれる技法で製作されていることが確認できる。魚々子は県内では例が少ないが、当時の琉球の工房で製作された可能性もあると考えられる。

その他種類や出土状況については観察表に記す。

＜参考文献＞

1．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』　沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年３月。
2．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集『円覚寺跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター　2002年３月。
3．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集『真珠道跡(Ⅰ)』　沖縄県立埋蔵文化財センター　2006年３月。

第30表　金属製品（鉄製品・青銅製品）出土状況一覧

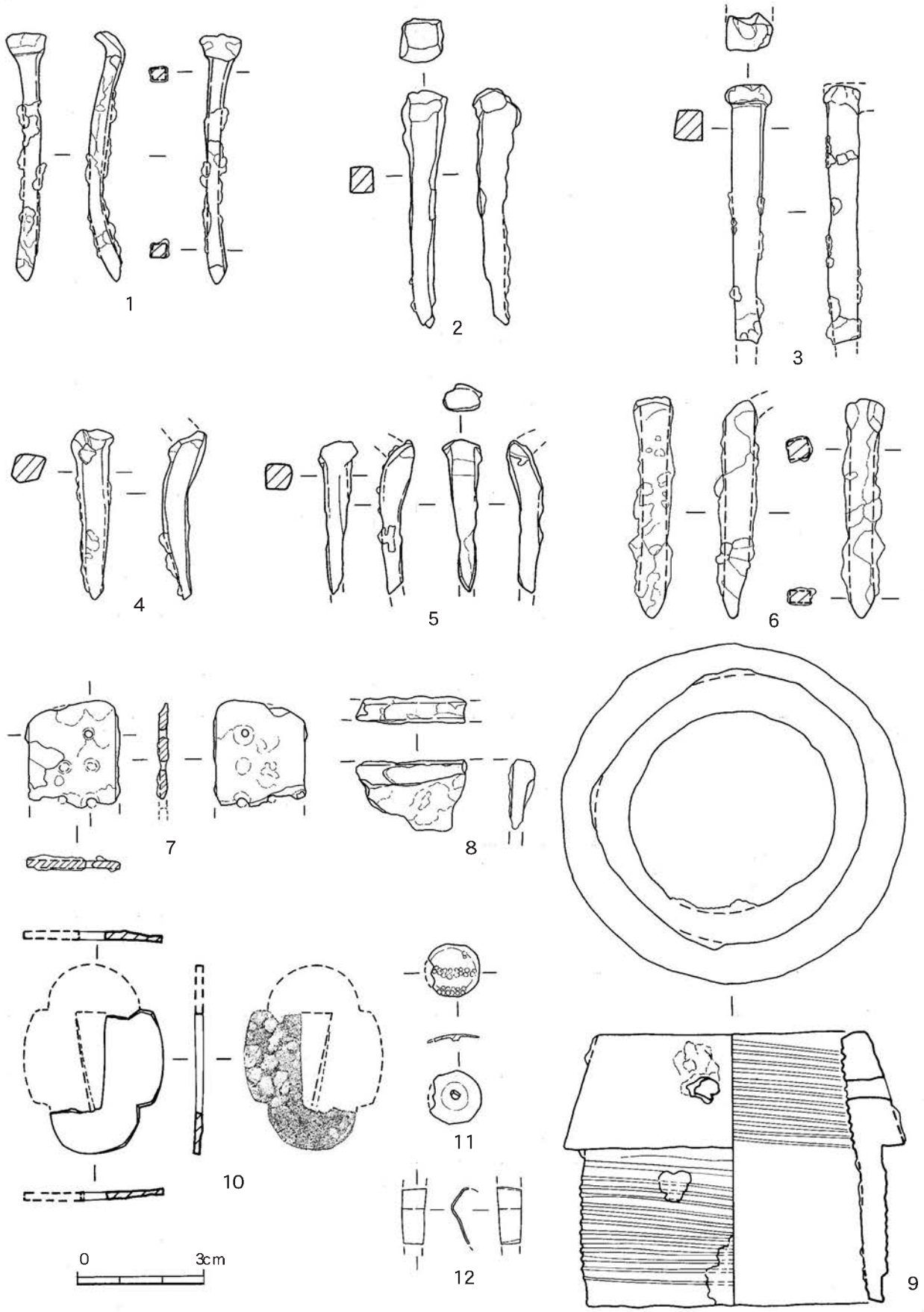
単位：g

出土地 / 器種・部位		重量	セー11			ス－11													不明	合計
							Ⅰ層		Ⅱ層					Ⅲ層			Ⅳ層			
									遺構内			裏込目		遺構内	遺構外					
			表採	第Ⅰ層（トレ①）	第Ⅱ層（トレ①）	表採	東側トレ	西側トレ	東側トレ	西側トレ	トレ③	南側	西側	西側トレ		トレ③	石敷直上			
青銅製品	板状製品	0.30													1					1
		5.78		1																1
	切羽	0.50														1				1
	魚々子鏨	0.40													1					1
	真鍮製砲弾片	600.00		2		1			2	3	1			1	2		1			13
	真鍮製金具鳩目	7.80				1														1
鉄製品	砲弾	630.00								1										1
	砲弾片	7624.55	3	3		8	2		4	31	1	5		21	2		2			82
	刀子	4.40													1					1
	小札（コザネ）	3.50													1					1
	鎧	11.60													1					1
	丸釘	62.25		1										1	5					7
	銃弾片	61.98	1							1										2
	ボルト	166.79					1													1
	ナット	25.50							1	1										2
	鉄製缶詰の縁	13.59							1											1
	合計	9218.94	4	7	0	10	3	0	8	37	2	5	0	23	14	1	3	0		117

第31表　金属製品（鉄製品・青銅製品）観察表一覧

単位：cm/g

図・図版番号	材質	器種部位	残存重量	残存長（縦）	残存幅（横）	残存厚	観察事項	出土地点出土層
第25図図版26 1	鉄製品	釘	3.4	5.9	0.5	0.4	頭部は扁平で長く、胴部より広い。胴部断面は方形で、先端は四角錐形。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 2		釘	8.0	5.6	0.5	0.6	頭部は扁平で幅広い。先端は楔状。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 3		釘	11.4	6.1	0.7	0.7	頭部は肥厚しているが、欠損があるため全形の把握はできない。胴部断面は方形である。	セー11 Ⅰ層
第25図図版26 4		釘	5.7	4.0	0.7	0.6	胴部の断面が若干菱形になるが、これは方形から変形したものと思われる。頭部は欠損している。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 5		釘	2.8	3.6	0.6	0.6	頭部は扁平で幅広く、斜めに面を有する。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 6		釘	9.0	5.2	6.5	0.5	頭頂部が斜めに面を有する。断面は胴部から先端にかけて、方形から薄い長方形に変化する。先端は楔状。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 7		小札	3.5	2.5	2.2	0.2	下部が欠損する。錆により一部孔が正確に確認できない。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 8		刀子	4.4	1.6	2.5	0.3	細片のため全形は不明であるが、刃の背はまっすぐに伸びるようである。腐食し、刃こぼれがみられる。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 9		砲弾	634.0	6.7	8.0	1.1	表面に複数の溝がみられる。	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第25図図版26 10	青銅製品	切羽	6.2	3.4	2.6	0.2	木瓜形の切羽。片面は丁寧に磨かれているが、もう一方は製作過程で残ったと思われる痕も確認できる。破片だが、全形を窺える資料となっている。	スー11 Ⅲ層 トレ③
第25図図版26 11		飾り金具	0.4	1.2	1.2	0.02	直径1㎜ほどの魚々子鏨が2条一組で施されている。飾り金具の一部と思われるが詳細は不明である。	スー11 Ⅲ層 遺構外
第25図図版26 12		板状製品	0.3	1.3	0.56	0.02	非常に薄い板状製品で、くの字状に折れ曲がる。上部・下部共に欠けるが、保存状態は良い。用途不明。	スー11 Ⅲ層 遺構外



第25図　金属製品（鉄製品1～9、青銅製品10～12）

第16節　石製品・石材

石製品は８点、石材は713点、自然礫は39点出土している。石製品はすべて破片で器種または全形を推測できないが、すべてに加工痕が確認でき、且つ出土地区が守礼門や真珠湊碑文に隣接していることから、何らかの石造製品の可能性が高いと思われる。今回は、石製品８点のうち、残存状態の良い６点を図化した。また、表土層より硯の破片が一点検出している。

＜参考文献＞

・『沖縄県有形文化財　旧首里城守礼門保存修理工事報告書』沖縄県　1993年。

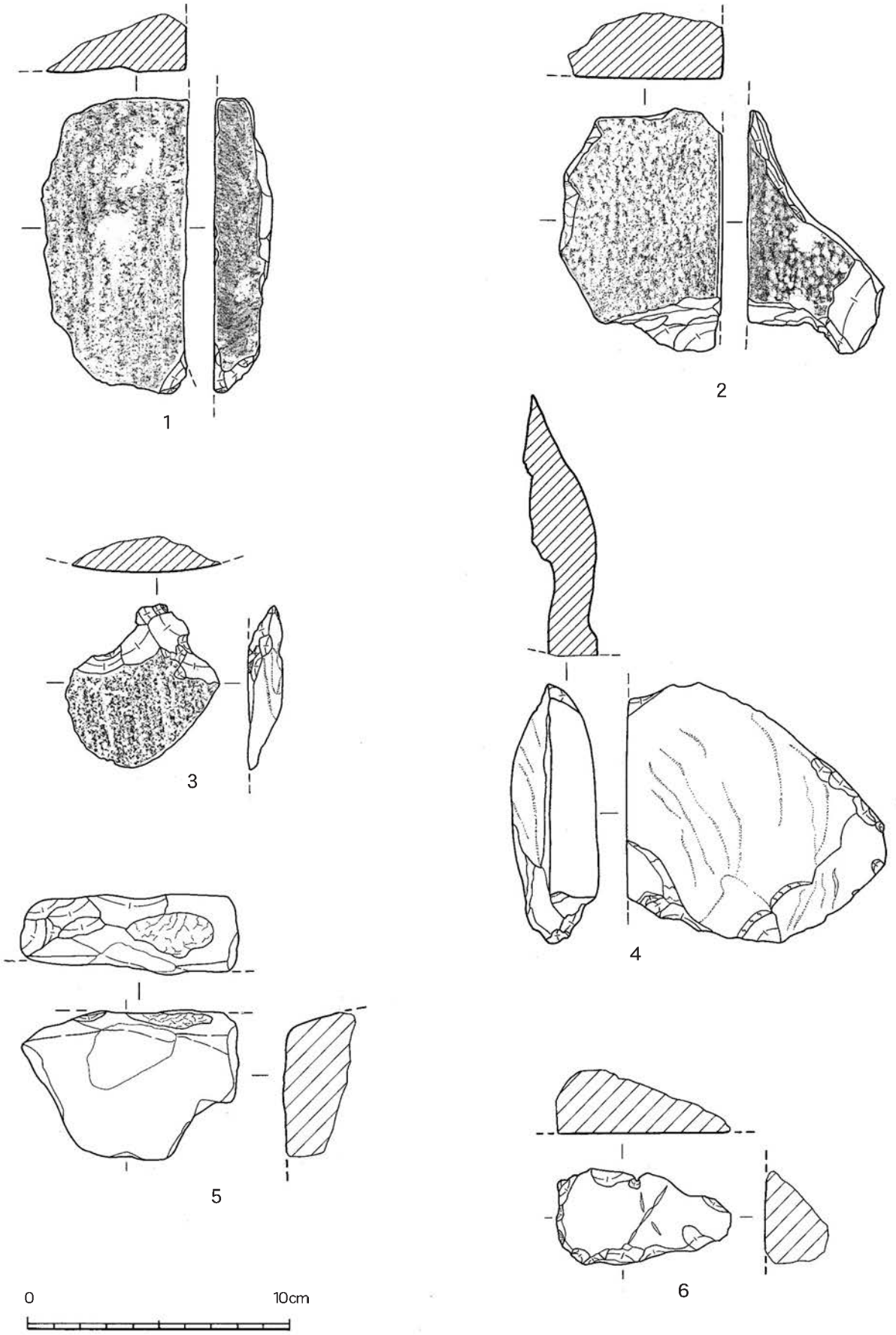
第32表　石製品・石材出土状況一覧

出土地 / 石材			セ−11 表採	セ−11 第Ⅰ層（トレ①）	セ−11 第Ⅱ層（トレ①）	スー11 表採	スー11 Ⅰ層 東側トレ	スー11 Ⅰ層 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅱ層 遺構内 トレ③	スー11 Ⅱ層 裏込目 南側	スー11 Ⅱ層 裏込目 西側	スー11 Ⅲ層 遺構内 西側トレ	スー11 Ⅲ層 遺構外	スー11 Ⅲ層 トレ③	スー11 Ⅳ層 石敷直上	不明	合計
石製品	石碑	砂岩							1										1
石製品	台座	砂岩								1					1				2
石製品	土壁製品					1	1												2
石製品	礎石	青石（輝緑岩）								1									1
石製品	礎石	青石加工								1									1
石製品	ハサミ石	青石（輝緑岩）				1													1
石材	脈石英					1													1
石材	石英					1													1
石材	黒色片岩			1															1
石材	砂岩		8	10		40	1		4	56	6	1		8	25			5	164
石材	細粒砂岩													1					1
石材	砂質片岩								1										1
石材	青石（輝緑岩）		4	5		218	15		34	88		1		35	134				534
石材	千枚岩									1									1
石材	カワラ石					2													2
石材	頁岩（硯の破片）			1															1
石材	本部石灰岩		3	3															6
自然礫	サンゴ								1					1					2
自然礫	石灰岩		4	3		11				4	1			1	7			1	32
自然礫	シルト質泥岩		1	1						1					2				5
合計			20	24	0	275	17	0	41	153	7	2	0	46	169	0	0	6	760

第33表　石製品観察一覧

単位：cm

図・図版番号	器種	材質	器高 胴径	観察事項	出土地点 出土層
第26図 図版27 1	石造製品	砂岩	— —	面取りがされており、守礼門の敷石、若しくは挟石であると思われる。	スー11 表採
第26図 図版27 2	石造製品？	砂岩	— —	ニービ（砂岩）の表面に敲打加工を施しており、2面がほぼ直角を呈している。石碑若しくは造形物の一部と思われる。	スー11 Ⅲ層 遺構内
第26図 図版27 3	石造製品	輝緑岩	6.3 5.9	片面のみ直線的な加工痕がみられ、丸味を帯びている。守礼門の礎石か？	スー11 Ⅱ層 遺構内西側
第26図 図版27 4	石造製品	輝緑岩	— —	3と同様の加工痕が確認でき、その中心部に欠損と思われる窪みがみられる。横面にも同様に斜め方向に比較的細かな加工痕がみられる。守礼門の挟石か？	スー11 Ⅱ層 遺構内東側
第26図 図版27 5	土壁	砂岩	— —	煤が付着しているが、破損品のため、用途不明である。	スー11 表採
第26図 図版27 6	土壁	砂岩	— —	加工面に細かな溝状の傷らしきものが確認できるが、故意に付けられたものなのか不明である。	スー11 Ⅰ層東側



第26図　石製品・石材

第17節　貝製品

ヤコウガイの蓋を利器として使用した製品１個とヤコウガイの殻を主に利用する螺鈿細工や匙状製品などの材料や製品を取り終えた殻が１点得られていたので、これを図化した。第27図１（図版27－7）はヤコウガイの蓋の厚みが希薄な部分を利用する目的で縁辺部を打ち欠いて使用した為、剥離面が集中する。縁辺の剥離面の刃先となる刃縁部分は部分的に潰れている。全体的に風化などによる浸食で器面の保持が悪く、部分的な剥落や亀裂が発生している。サイズは長軸7.8cm、短軸7.1cm、重量145ｇを計った。ス－11第Ｉ層東側より出土。

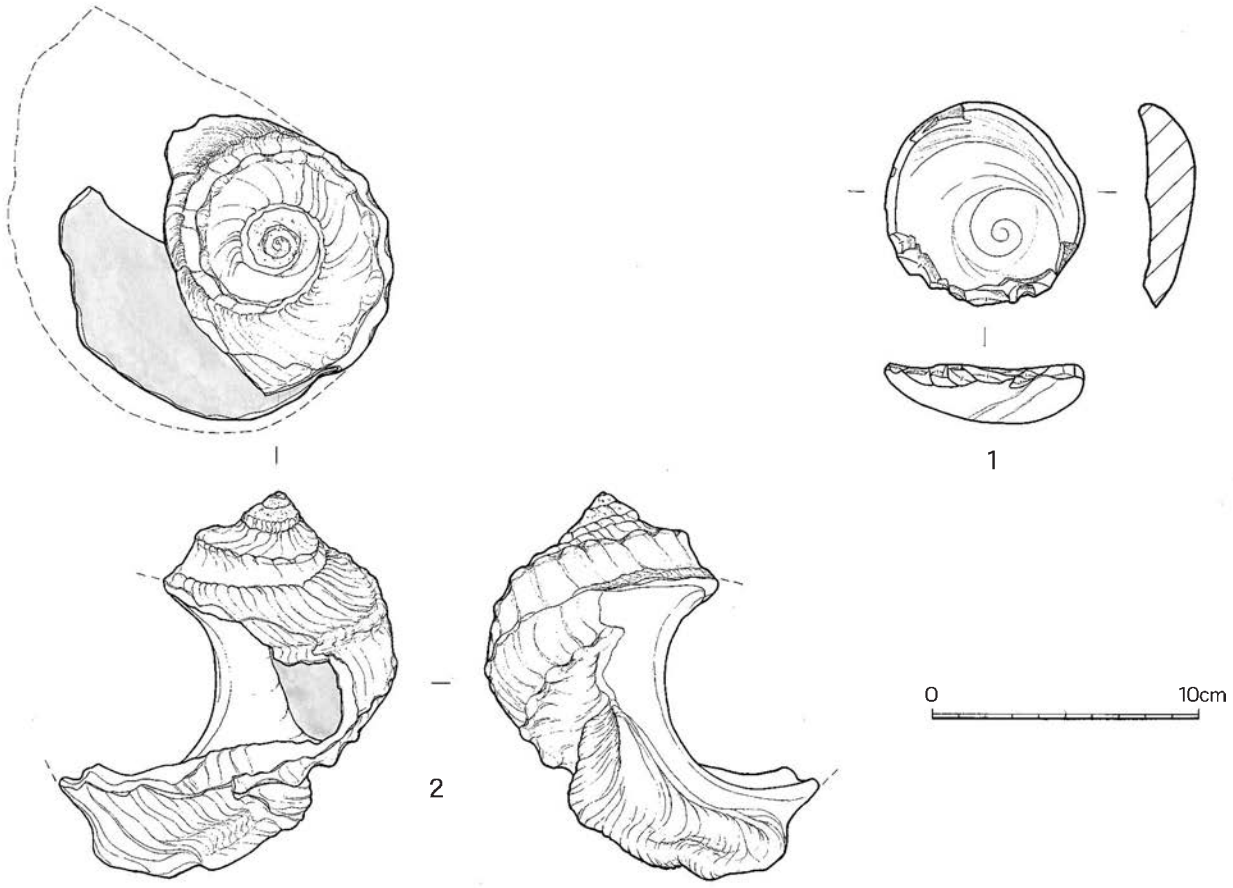
同図２（図版27－8）は小型ヤコウガイの外殻を螺旋に沿ってバチ状に材料を切り取ったものである。切り取られた箇所の縁辺は風化などの作用によって潰れて磨面となる。切痕の形状や殻頂部及び周辺がアバタ状の微細な小穴が無数にみられることから匙状製品ではなく、螺鈿細工の材料として使用されたものと推定される。残存殻長16.0cm、残存殻幅11.2cm、残存重量440ｇを計った。ス－11表採。

本資料と同様に切り取られた製品が首里城跡（註１）・御細工所跡（註２）などで出土している。

註文献

註１．上原静（特集 貝の交流〈シェルロード〉）「首里城跡出土の貝殻」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号 N0.311 ニュー・サイエンス社 1989年。

註２．金武正紀・島袋春美ほか『御細工所跡』那覇市教育委員会 1991年３月。



第27図　貝製品

第18節　脊椎動物遺存体

脊椎動物遺存体の出土状況で主体となる層位は、第Ⅲ層であった。脊椎動物遺存体の出土状況については、第34表～第37表に示したとおりである。脊椎動物遺存体を類別に概観すると魚類がスズキ目のハタ科、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科の４種類であった。獣類では、ニワトリ、ブタ、ウシの３種類であった。

以下、本遺跡から出土した脊椎動物遺存体の種別リストを呈示する。

脊椎動物遺存体種名表

硬骨魚綱　Class Osteichthyes
　スズキ目　Order Perciformes
　　ハタ科　Family Serranidae
　　属・種不明　Gen. et sp. indet.
　　フエフキダイ科　Family Lethrinidae
　　ハマフエフキ　Lethrinus Nebulosus
　　ベラ科　Family Labrdae
　　コブダイ　Semicossyphus reticulatus
　　ブダイ科　Family Scaridae
　　属・種不明　Gen. et sp. indet.

鳥綱　Class Aves
　　キジ目　Order Galliformes
　　キジ科　Family Phasianidae
　　ニワトリ　Gallus gallus var. domesticu

哺乳綱　Ciass Mammalia
　　偶蹄目　Order Artiodactyla
　　イノシシ科　Family Suidae
　　ブタ　Sus scrofa var. domesticus
　　ウシ科　Family Bovidae
　　ウシ　Bos taurus

第34表　魚類出土状況一覧

図版番号	目	科	種　名	部　位	R/L	出　土　地	個数
図版28-1	スズキ目	ハタ科	ハタ科の一種	歯骨	R	ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-2			ハタ類	擬鎖骨	R	ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-3		フエフキダイ科	ハマフエフキ	前上顎骨	R	ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-4		ベラ科	コブダイ	下咽頭骨		ス-11　Ⅰ層	1
図版28-5		ブダイ科	ブダイ科の一種	前上顎骨	R	ス-11　表採	1
					L	ス-11　表採	1
図版28-6				歯骨	L	ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-7	科・種不明			背鰭棘		ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-8				鋤　骨		ス-11　Ⅲ層遺構外	1
図版28-9				脊椎骨		ス-11　Ⅲ層遺構外	3

第35表　ニワトリ出土状況一覧

図版番号	部　位		右/左	出　土　地		個数
	頸骨	骨体～遠位部	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-10		骨体～遠位端	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	1

第36表　ブタ出土状況一覧

図版番号	部　位		右/左	出　土　地		個数
図版28-1	頭　骨	側頭骨	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
	肋　骨	近位～	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
		破　片	不明	ス-11	Ⅲ層遺構外	2
			不明	ス-11	Ⅰ層	1
図版28-2	上腕骨	近位部	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
		骨体	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	幼1
図版28-4		遠位部	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	幼1
図版28-3		遠位端	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-5	橈　骨	完存	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-6	中手骨	Ⅳ	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
	大腿骨	近位部破片	右	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-7		近位部～遠位骨端はずれ	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
		骨体	左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-8	距　骨		左	ス-11	Ⅲ層トレンチ③	1
図版28-9	踵　骨		左	ス-11	Ⅲ層遺構外	1

第37表　ウシ出土状況一覧

図版番号	部　位		右/左	出　土　地		個数
図版28-10	下顎骨	Ｍ２	左	ス-11	Ⅰ層	1
	肋　骨		不明	ス-11	Ⅲ層遺構外	1
図版28-11	基節骨		左	ス-11	Ⅱ層遺構内西側	1

第19節　貝類遺存体

本遺跡の貝類は巻貝11科19種類、二枚貝６科13種の合計17科32種が確認されている。貝類の出土も脊椎動物遺存体と同様に第Ⅲ層に集中する傾向がある。なお、貝類の生息地毎の分類については、第38表に準じて分類をおこなった。

第39表の巻貝出土状況をみると破片総数（204片）の内、特に大型巻貝のリュウテン科ヤコウガイの殻（139片）と蓋（26片）が最も多く出土していて全体の80％を占めている。ヤコウガイの殻を螺鈿細工や匙状製品などの材料や製品を取り終えた殻が廃棄後に細片化したものと推察されるとことである。これとは逆に巻貝の完形品（28点）をみるとソデボラ科マガキガイが８点を占めている。マガキガイの殻が他の巻貝に比べ硬質であることから完全な形として残存する確率が高かったものと思慮されるところである。

次に第40表の二枚貝の出土状況をみると完形品（L：27点＝100％、R：34点＝100％）で出土頻度が最も高かったのはⅢ河口干潟・マングローブ域（１潮間帯中・下部。ｃ岩礁底、砂泥底、砂底）に生息するマルスダレガイ科のアラスジケマン（L：23点＝85.1％、R：28点＝82.5％）であった。

〈引用文献〉

・沖縄県文化財調査報告書第84集『古我知原貝塚』沖縄県教育委員会　1987年３月。

第38表　貝類生息地の分布

外洋～内湾		水　深		底　質	
Ⅰ	外洋・サンゴ礁	0	潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a	岩盤
		1	潮間帯中・下部	b	軽石
Ⅱ	内湾・軽石地域	2	亜潮間帯上部（1ではイノー）	c	岩礁底、砂泥底、砂底
		3	干瀬（1にのみ適用）	d	マングローブ植物上
Ⅲ	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流出する礫底
Ⅳ	淡水域	5	止水		
		6	流水		
Ⅴ	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海兵域		
Ⅵ	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

第39表　貝類出土状況一覧（巻貝）

No.	科名	種名	生息地	セ-11 表採 完形	セ-11 表採 殻頂	セ-11 表採 破片	セ-11 第Ⅰ層 完形	セ-11 第Ⅰ層 殻頂	セ-11 第Ⅰ層 破片	ス-11 表採 完形	ス-11 表採 殻頂	ス-11 表採 破片	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 完形	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 殻頂	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 破片	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 完形	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 殻頂	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 破片
1	ニシキウズ科	ギンタカハマ	Ⅰ-4-a															
2		サラサバテイ	Ⅰ-4-a			4			1			1						1
3	リュウテン科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a			6			10		1	18		1	1			6
4		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a			4	1		3			3						
5		チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a			1												
6		カンギク	Ⅱ-2-b		1													
7	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8				1											
8	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c															
9		ウミニナカニモリ		1														
10		クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a															
11	ウミニナ科	ヘナタリ													1			
12	ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c															
13		マガキガイ	Ⅰ-2-c	1				2										
14	タカラガイ科	ハナマルユキ	Ⅰ-3-a							1								
15		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a															
16	アクキガイ科	ツノレイシ	Ⅰ-3-a															
17	オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ-3-a															
18	イモガイ科	ヤナギシボリイモ	Ⅰ-2-a															
19	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8															
	合計			2	1	15	2	2	14	1	1	22	0	1	2	0	0	7

注：最少個体は完形と殻頂を足した数を個体数とした。破片のみの場合は、個数にかかわらず1個と数えた。

第40表　貝類出土状況一覧（二枚貝）

No.	科名	種名	生息地	セ-11 表採 完形 L	セ-11 表採 完形 R	セ-11 表採 殻頂 L	セ-11 表採 殻頂 R	セ-11 表採 破片	ス-11 第Ⅰ層 完形 L	ス-11 第Ⅰ層 完形 R	ス-11 第Ⅰ層 殻頂 L	ス-11 第Ⅰ層 殻頂 R	ス-11 第Ⅰ層 破片	ス-11 表採 完形 L	ス-11 表採 完形 R	ス-11 表採 殻頂 L	ス-11 表採 殻頂 R	ス-11 表採 破片	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 完形 L	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 完形 R	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 殻頂 L	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 殻頂 R	ス-11 Ⅰ層 東側トレ 破片	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 完形 L	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 完形 R	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 殻頂 L	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 殻頂 R	ス-11 Ⅱ層 遺構内 東側トレ 破片
1	フネガイ科	リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																									
2	ウミギク科	メンガイの一種																		1								
3	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c				1																					
4	シャコガイ科	ヒレジャコ	Ⅰ-2-c					1															2					
5		シラナミ	Ⅰ-2-a																									
6		シャコガイ科の一種																										
7	シオサザナミ科	リュウキュウマスホウ	Ⅱ-1-c																									
8	マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-c																									
9		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	2	1		1	1									2	1							2	1	2	
10		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c																									1
11		ハマグリ	Ⅱ-1-c					1			1				1	1	2											
12		ハマグリの一種									1		2											1				
13		オキシジミ	1-c															1				1						
	合計			3		2			0		2			1		5			1		1			3		3		

注：最少個体数は完形と殻頂のL（左殻）・R（右殻）の合計で多い方を個体数とした。また、破片のみ出土している場合は個数にかかわらず1個として数えた。

ス-11																					合計			最少個体数
Ⅱ層												Ⅲ層												
遺構内						裏込目南側			裏込目西側			遺構内西側トレ			遺構外			トレ③						
西側トレ			トレ③																					
完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
																1					0	1	0	1
		1												3			15			1	0	0	27	1
	1	10					1	1			2			10		1	72			3	0	5	139	5
		2													2		12				3	0	24	3
	1	1											1	1		1	4				0	3	7	3
															3	1					3	2	0	5
															3						4	0	0	4
																1					0	1	0	1
															1						2	0	0	2
															2						2	0	0	2
																					0	0	1	1
			1																		1	0	0	1
1												1			5	1	2				8	3	2	11
																	3				1	0	3	1
															1						1	0	0	1
															1						1	0	0	1
															1						1	0	0	1
															1						1	0	0	1
																	1				0	0	1	1
1	2	14	1	0	0	0	1	1	0	0	2	1	1	14	20	6	109	0	0	4	28	15	204	43

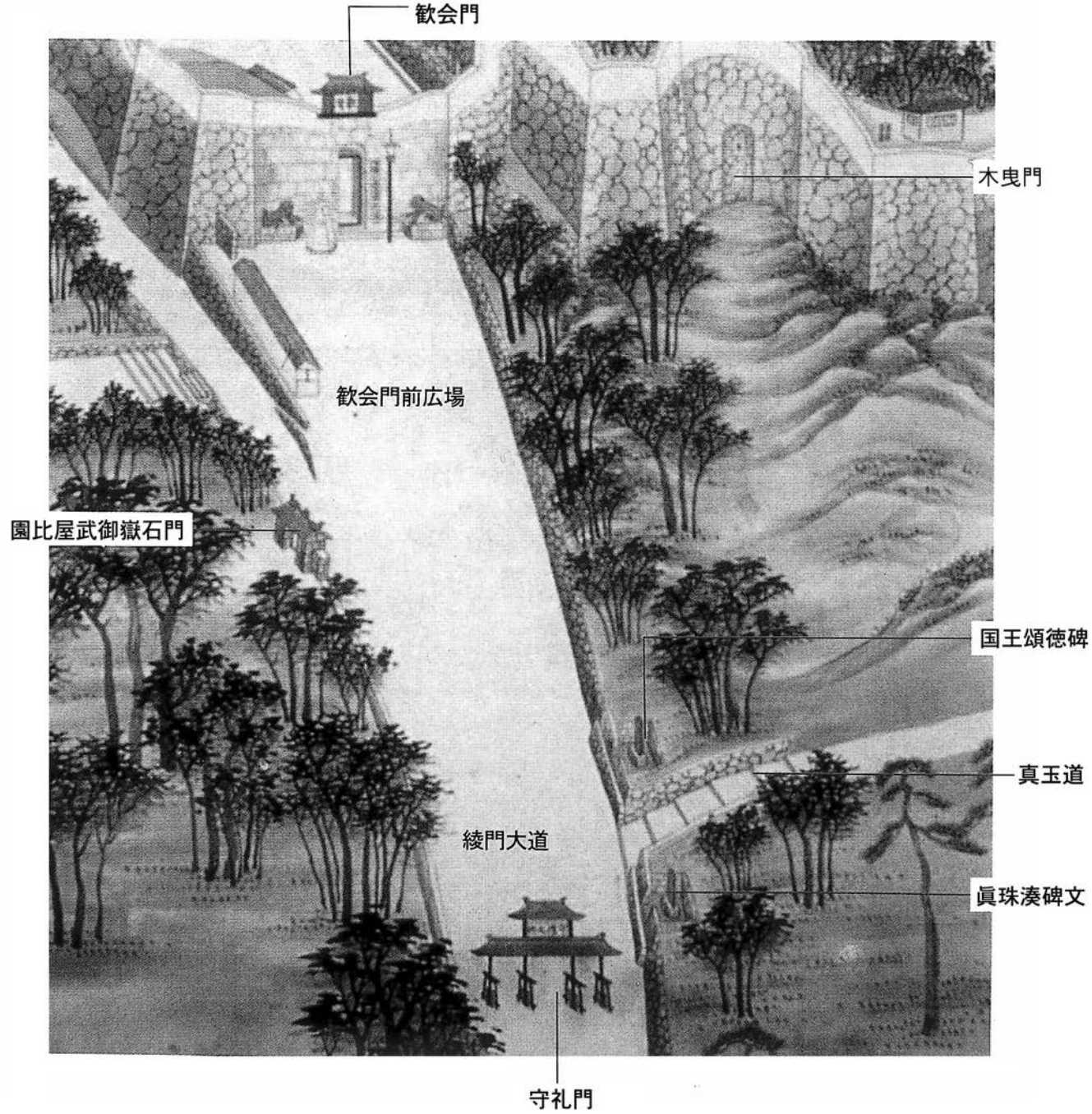
ス-11																																	合計					最少個体数
Ⅱ層																																						
遺構内						裏込目						Ⅲ層																										
西側トレ						西側						遺構内西側トレ					遺構外					トレ③																
完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片								
L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R										
													1												0	0	0	1	0	2							
				1																					0	1	0	0	1	2							
																2									0	2	0	1	0	4							
														1											0	0	0	0	4	1							
																			1						0	0	0	0	1	1							
														1											0	0	0	0	1	1							
														1											0	0	0	0	1	1							
				1																					0	0	0	0	1	1							
			2	1		1	1			1	2			1	19	22	2	5	3	1			1	1	23	28	4	13	8	41							
																	1		2						0	0	1	0	3	2							
								1			1	2			2	1	2	3	2						2	3	6	6	3	10							
														1	1				1						2	0	1	0	4	4							
																									0	0	0	1	1	2							
0		2			1		2			4		3			47		13			1		1			61		34		28	73							

第6章　結　語

各章で記したように平成17年度に実施した首里城公園内の真珠道跡発掘調査の成果を報告した。本章では、これらの成果を整理して結びとした。

今回の調査は、平成15・16年度から継続的に実施されてきた県営首里城公園の真珠道整備に向けての遺構確認を目的とした範囲確認調査（事前調査）である。

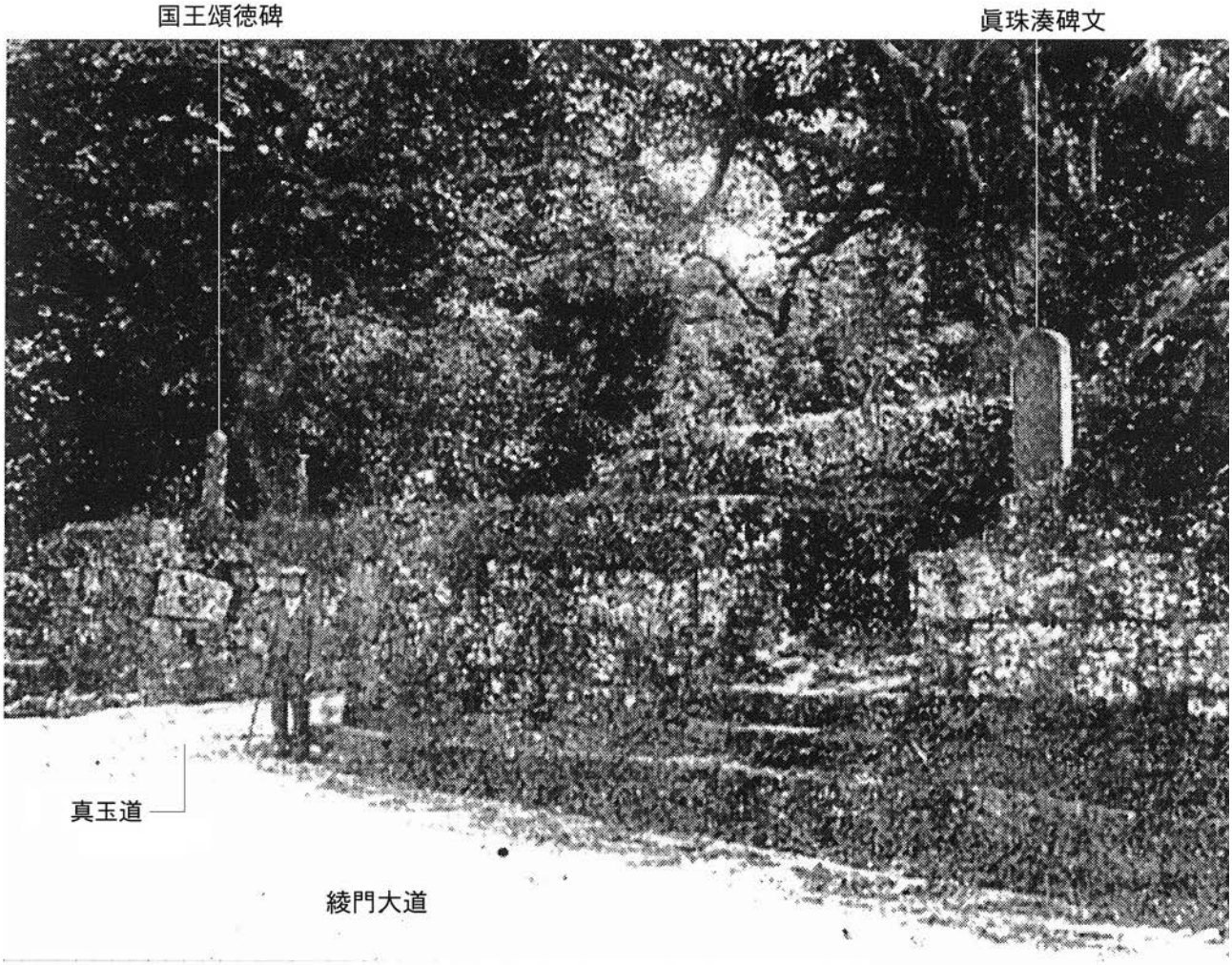
今回の発掘調査で首里城跡守礼門の南東側隣接地域内より1522年に守礼門脇に建立された真珠道の整備を記念した石碑であった「真珠湊碑文」台座跡の一部が検出されたことは大きな成果であった。この碑文と同年代に建立された「国王頌徳碑」との間から真珠道がはじまり（起点）、金城町の石畳道、識名坂、真玉橋、石火矢橋、豊見城グスクの北東側を廻り、小禄の丘陵中腹を経過して終点となった那覇港南岸の垣花までの道筋が真珠道であった。



図版４　「首里旧城之図」査丕烈　筆明治27年頃作製（沖縄県立博物館所蔵）を首里城復元期成会刊行の『国王頌徳碑・眞珠湊碑文復元事業報告書』（2006年）より許可を得て複写掲載。

この真珠道の整備は、第二尚王統（1470～1879年）の尚真王（1477～1526年）が真珠湊、即ち国場川河口および那覇港を外敵であった倭寇から国場川河口に所在する豊見城グスクや那覇港内に所在する御物グスク（王庫）などを防禦する目的で垣花まで整備されたが、最終的には尚真王の後を継いだ尚清王（1527～1555年）により那覇港南岸の港口に「屋良座森グスク」（1553年築城）と、その後に那覇港北岸の港口に「三重グスク」（築城時期不詳。屋良座森グスクの築城後に普請）の完成によって、両グスクの砲台（石火矢）設置により那覇港口の防禦がより強固となった。そのような意味合いからも真珠道の起点に近い「真珠湊碑文」台座跡の発見は重要である。

検出された台座跡の規模は南北約270cm、東西265cmを測った。昭和6（1931）年頃に作成された「首里城平面図」から真珠湊碑文を囲む石積みの規模は、概ね東西350cm≒東西二間（360cm）が図面上から読み取れるところである。この規模からすると「真珠湊碑文」台座跡の残存状況は半分以下であり大部分が沖縄戦（1945年）により台座中央付近に着弾した砲弾で破壊された状態で発見された。この砲弾による破壊と爆風により碑文を取り囲む切石の根石が瞬間的な持ち上がりと原位置への落下によって根石の大半にズレが発生していた。また、戦後大きく成長したデイゴの根が根石への被さりや目地への侵入によるズレや根石の内側への傾斜が大きくなっていた。残存する台座跡の囲い石積みは、内側にのみ面を持ち外面の無い状態で発見されていることから「真珠湊碑文」台座跡は、琉球石灰岩を北側からの掘り込みや掘り下げから土盤の作事と碑文台座の普請と平行して綾門大道の石墻天端部分と台座の囲い石積みの天端がほぼ同じ高さにすり付けて普請を行ったものと古絵図（図版4）・古写真、（図版5）、そして検出された台座跡の状況から推察される。その為、台座跡の囲い石積みの外面は存在しないものと判断される。今回の調査では台座跡の石敷き面及び破壊されたレベルまで掘り下げた時点で終了し台座跡の下部構造を明らかにするまでには至っていない。次回の調査に備えて土嚢袋で検出された遺構面の



図版５　『国王頌徳碑・眞珠湊碑文復元事業報告書』（2006年２月）収録の「昭和７、８年頃の国王頌徳碑・真珠湊碑文」の写真を首里城復元期成会の許可を得て複写掲載。

出土遺物は中国産陶磁器、本土産陶磁器、タイ産褐釉陶器と半練土器、ベトナム産染付、沖縄産陶器などをはじめ様々な種類の遺物が出土している。出土遺物は時代幅はあるが、「真珠湊碑文」創建の1522年以降のものが主体とみられる。これより古い時代の陶磁器類は首里城及びその周辺から持ち込まれた土砂に含まれていたものではないかと推察されるところである。特に注目された資料は12～13世紀頃に製作された龍泉窯の優品とみられる青磁花瓶の破片がある。類例品が韓国新安海底引き上げの青磁魚龍飾花瓶、国宝青磁魚龍飾花瓶に観られ前者の新安海底出土のタイプに近いものとみられる。

参考文献

1．『国王頌徳碑・眞珠湊碑文復元事業報告書』首里城復元期成会　平成18（2006）年２月。
2．金城亀信「眞珠湊碑文跡の発掘調査概要―首里城公園発掘調査綾門大道地区―」『首里城復元期成会会報』第24号（平成18年度）首里城復元期成会　2006年７月10日。
3．『新安海底文物』国立中央博物館　1977年。
4．『東洋陶磁展示目録』東京国立博物館　1970年10月。
5．沖縄タイムス『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社　1983年。

図　　版

1

2

3

4

5

6

7

8

図版 6　遺跡の近景及び発掘調査の状況

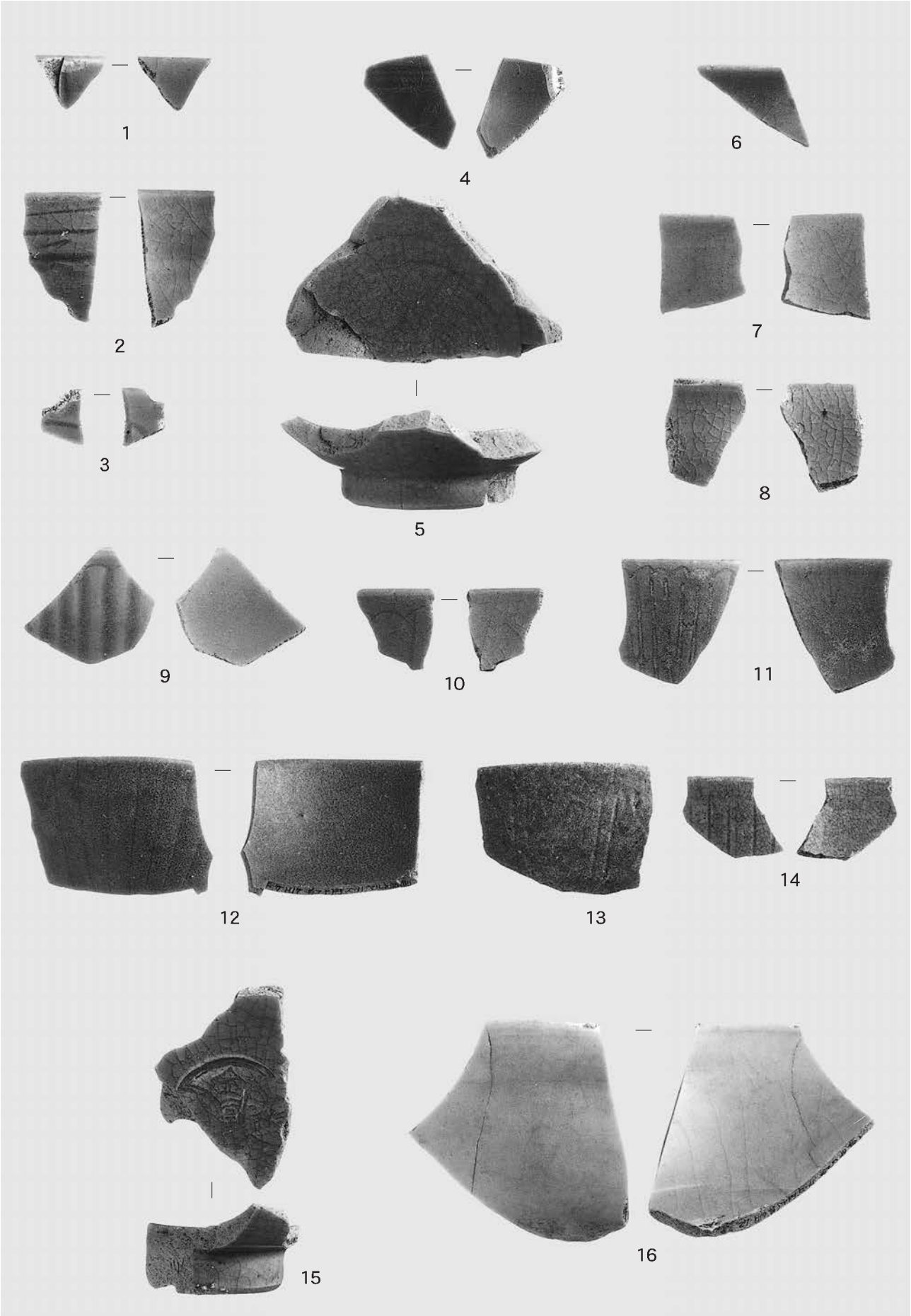
〔1：遺跡の近景（守礼門右側が調査地区）、2～5：発掘調査状況と検出された遺構、6～8：遺構等の埋め戻し状況、8：調査完了後の状況（右側が守礼門）〕

図版7a　セ-11の地表面に露出した陶磁器類

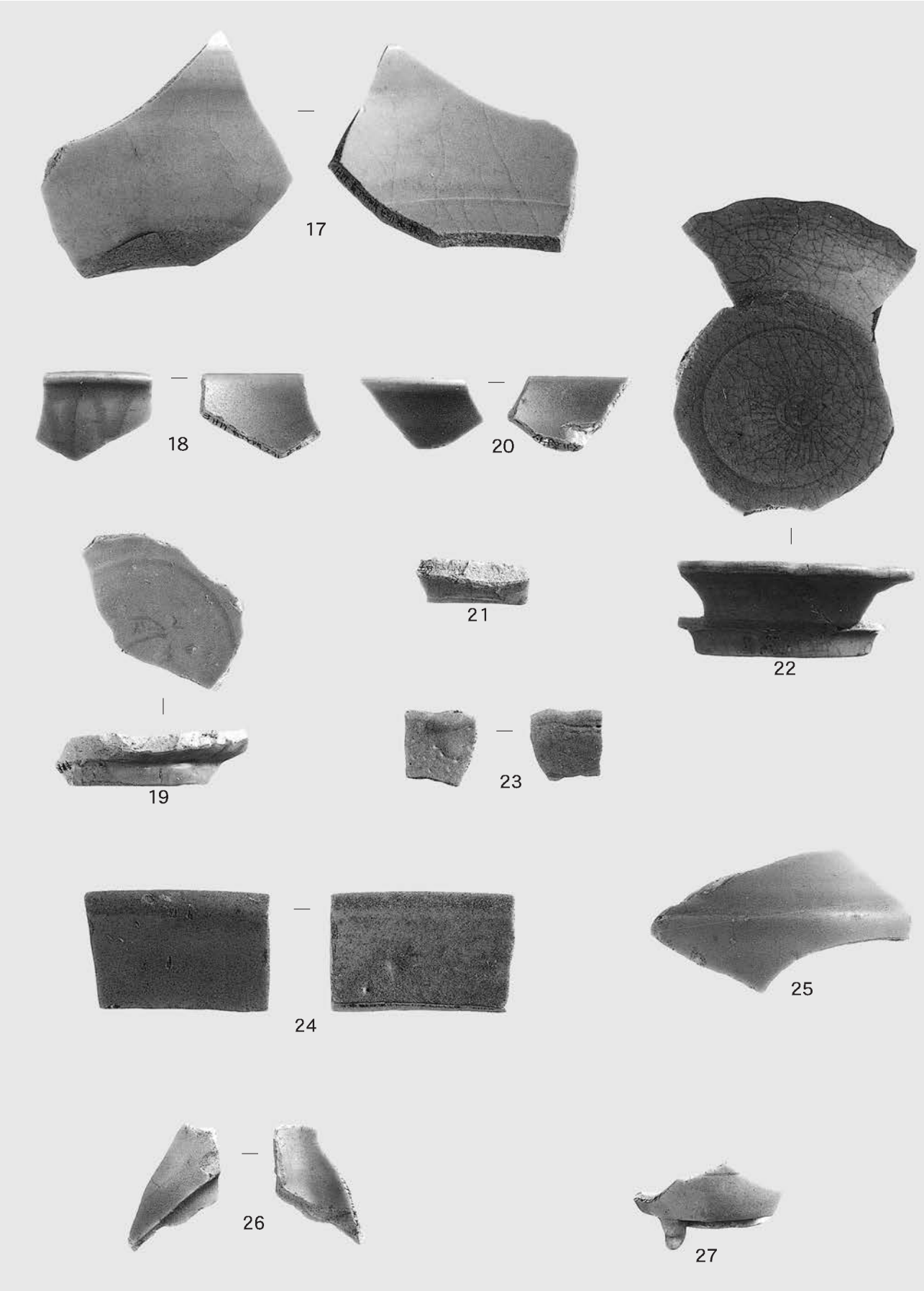
図版7b　ス-11トレンチ③の第Ⅲ層より検出された青銅製の切羽

図版7c　ス-11第Ⅱ層遺構内西側出土の明朝系軒丸瓦

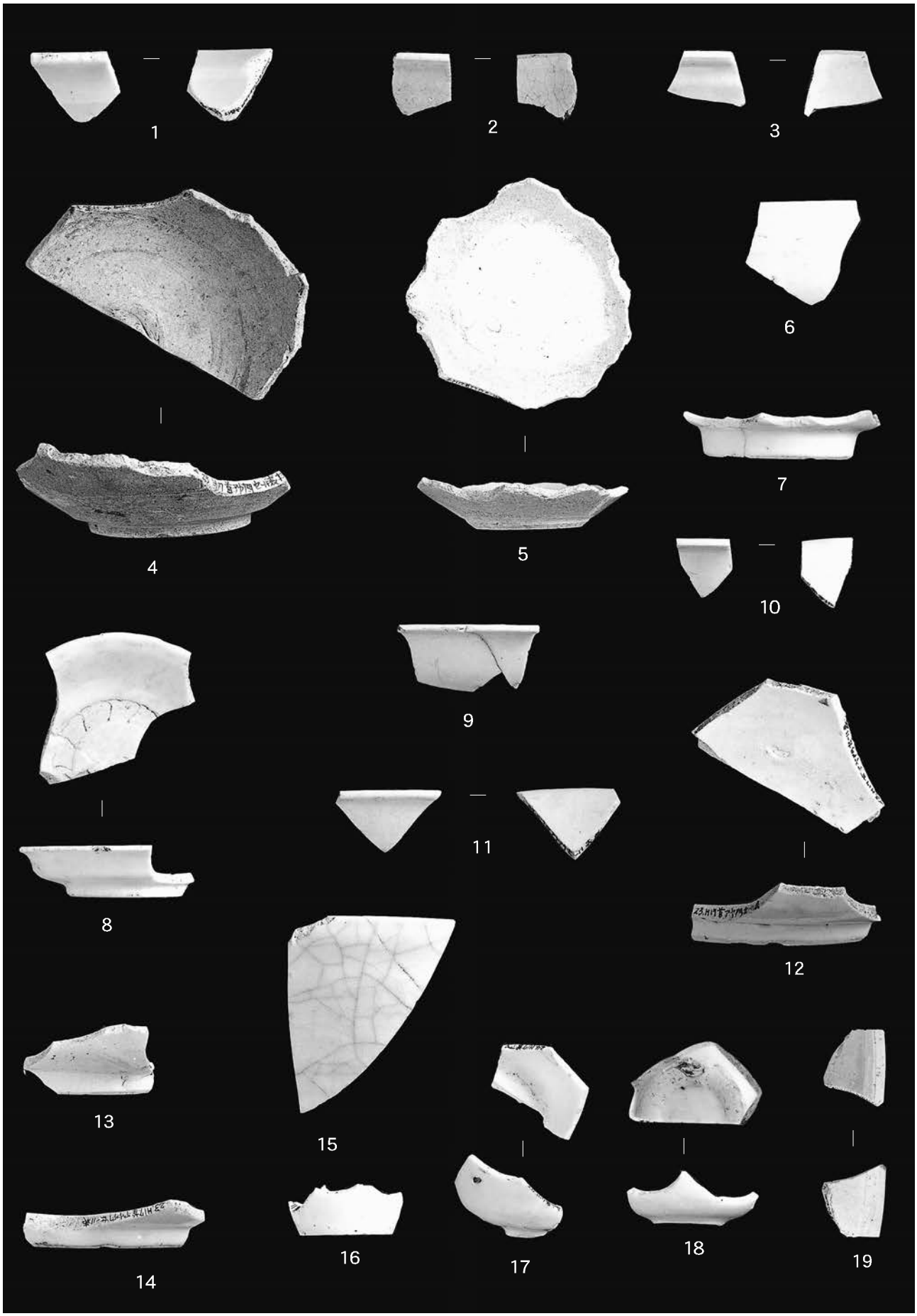
図版７　遺物出土状況



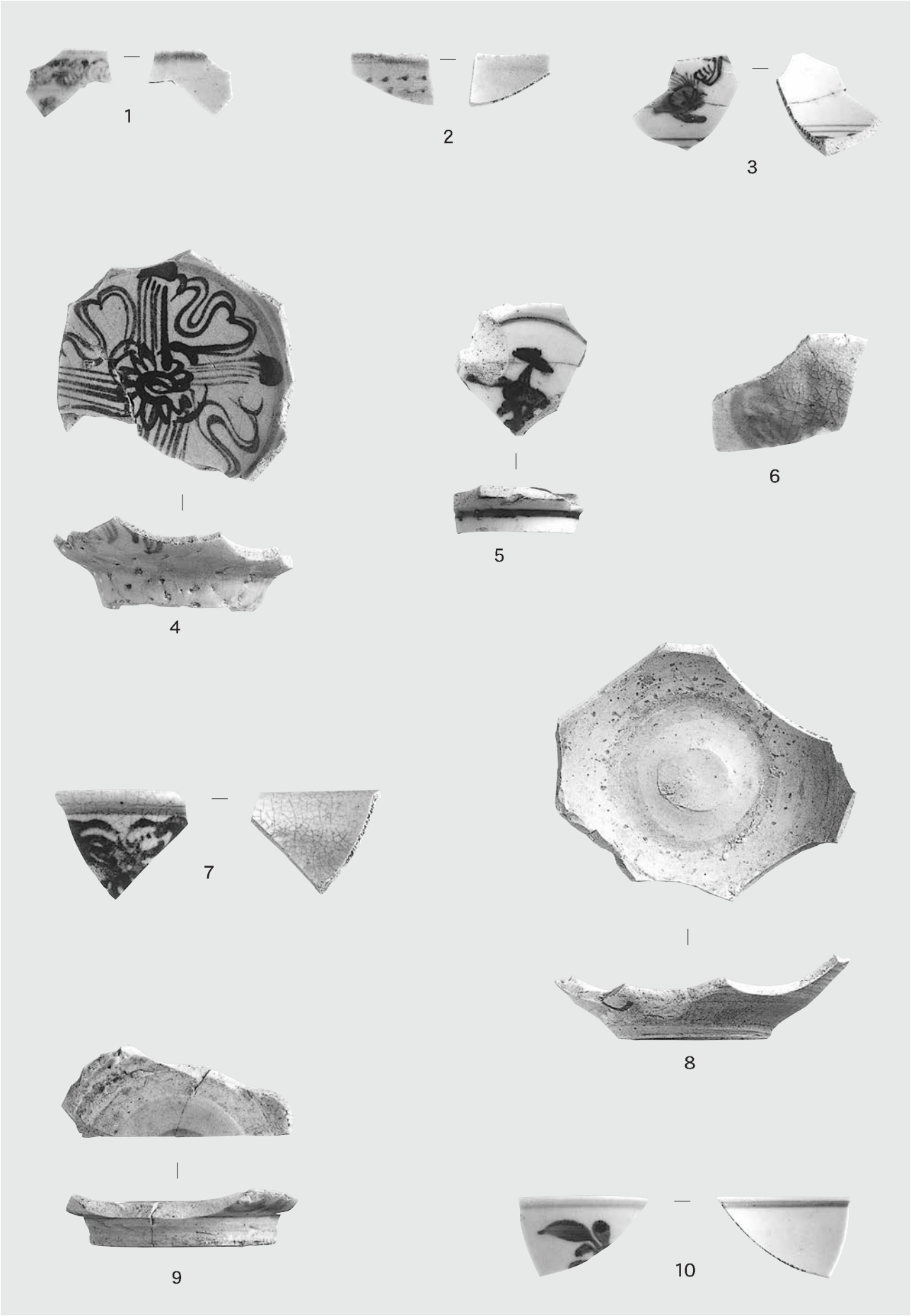
図版8　青磁　1



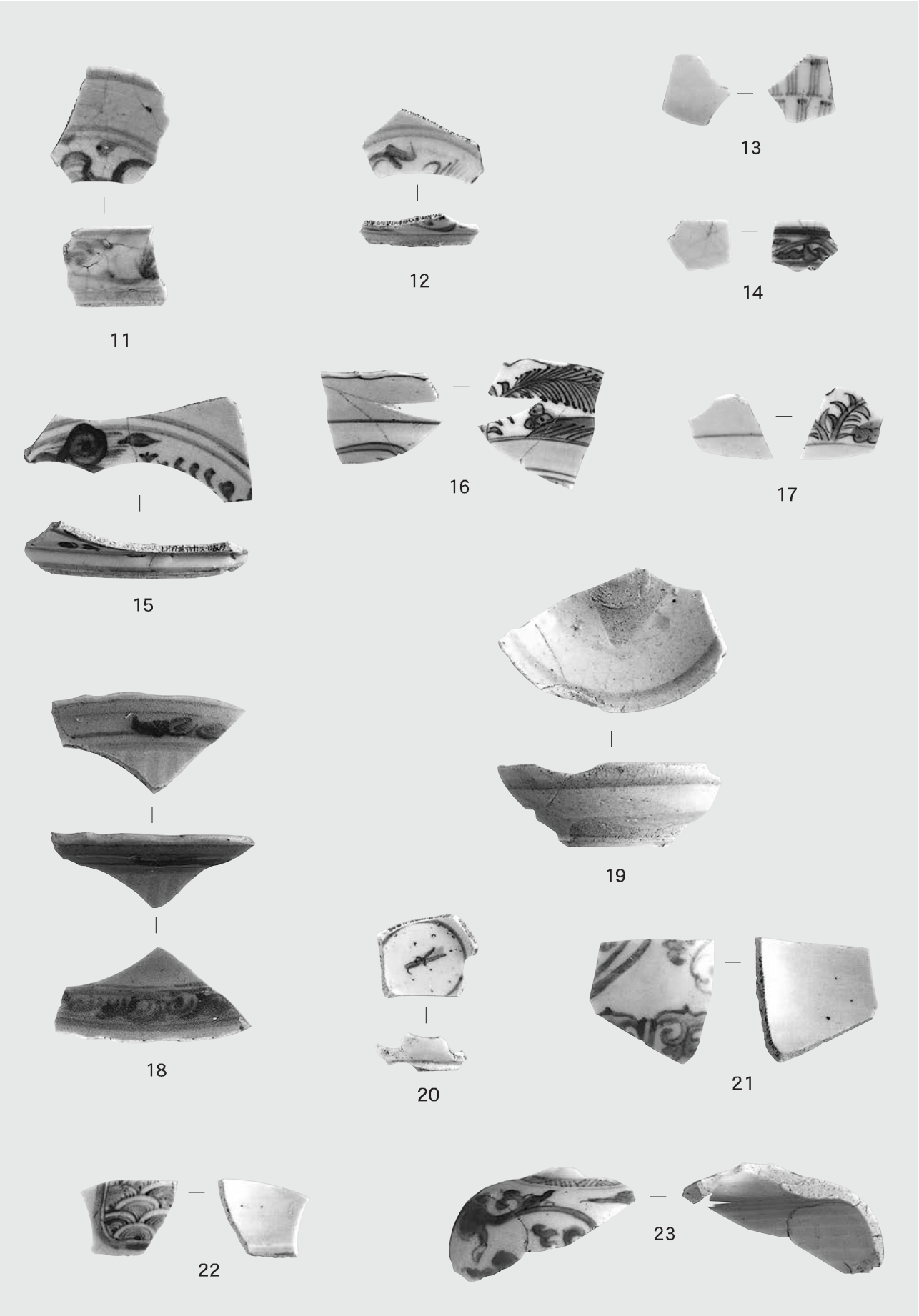
図版9　青磁　2



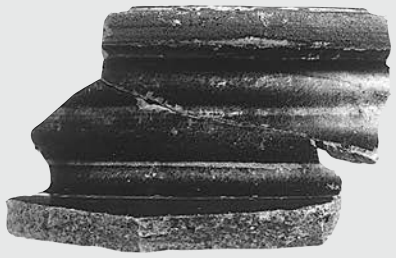
図版10　白磁・青白磁



図版11　染付　1



図版12　染付　2



1

2

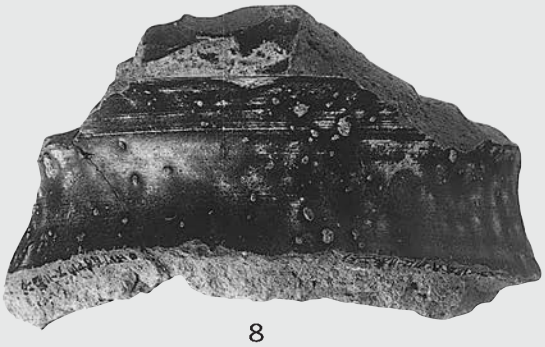
3

4

5

6

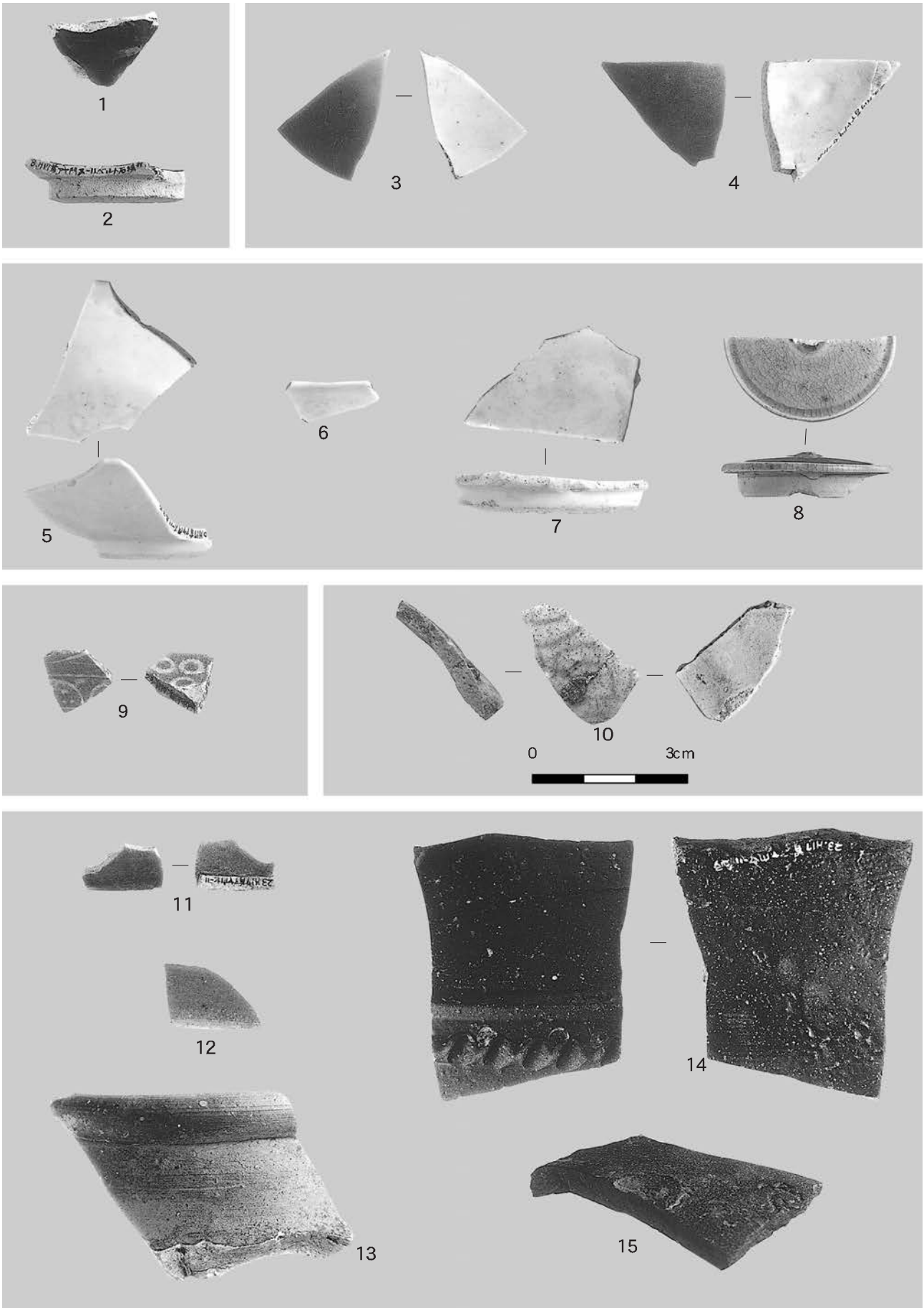
7



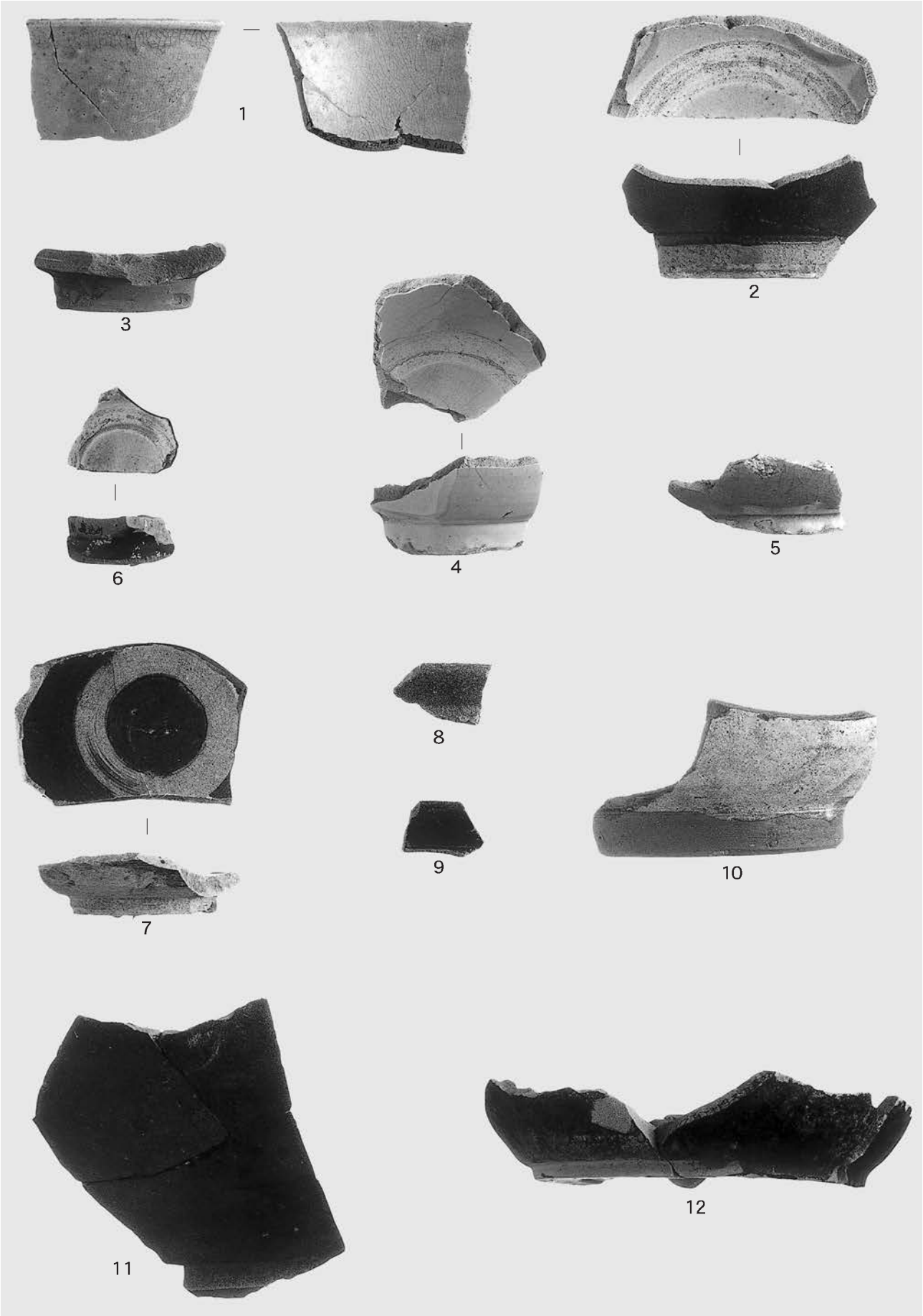
8

9

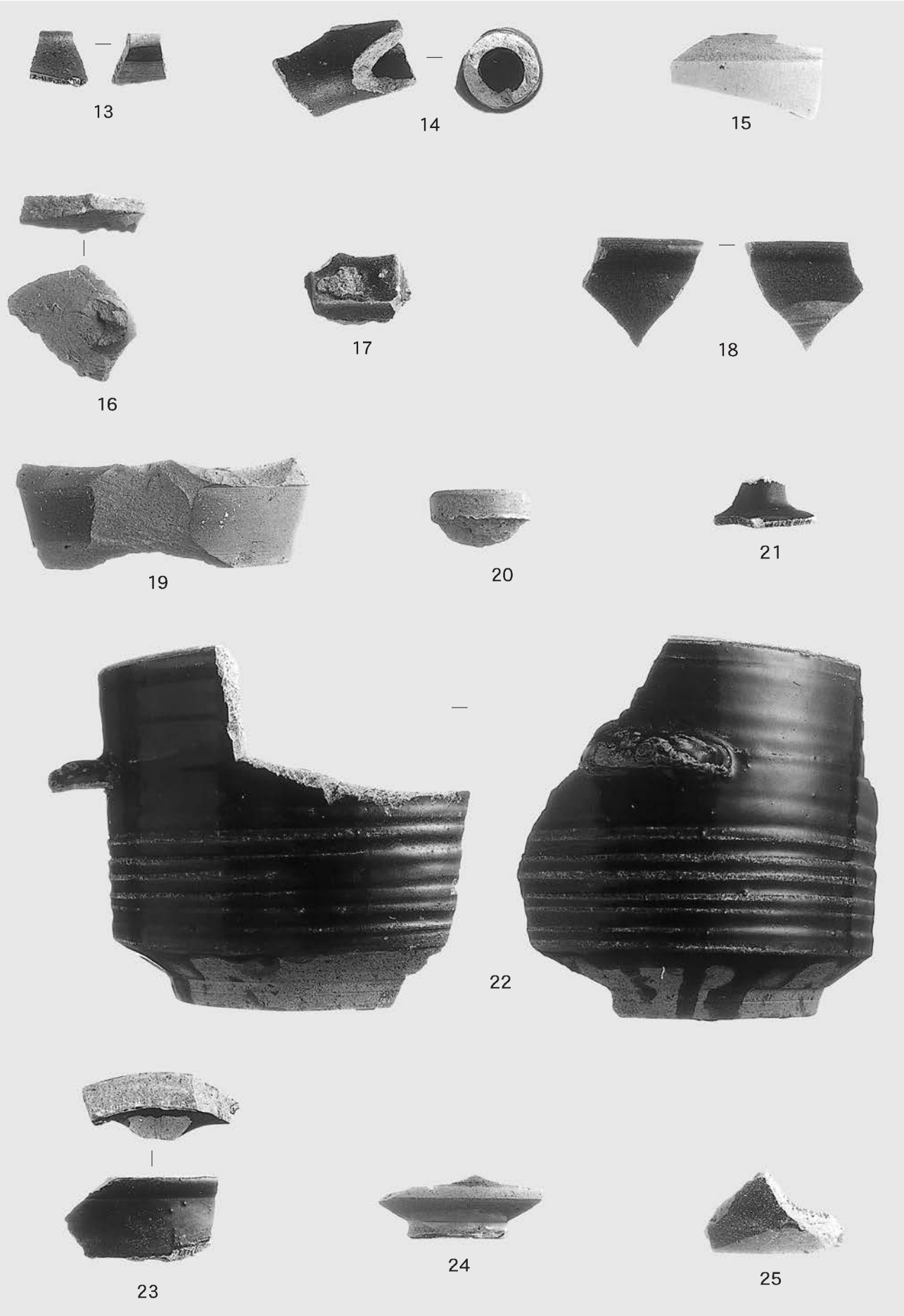
図版13　褐釉陶器（中国産1～7、タイ産8・9）



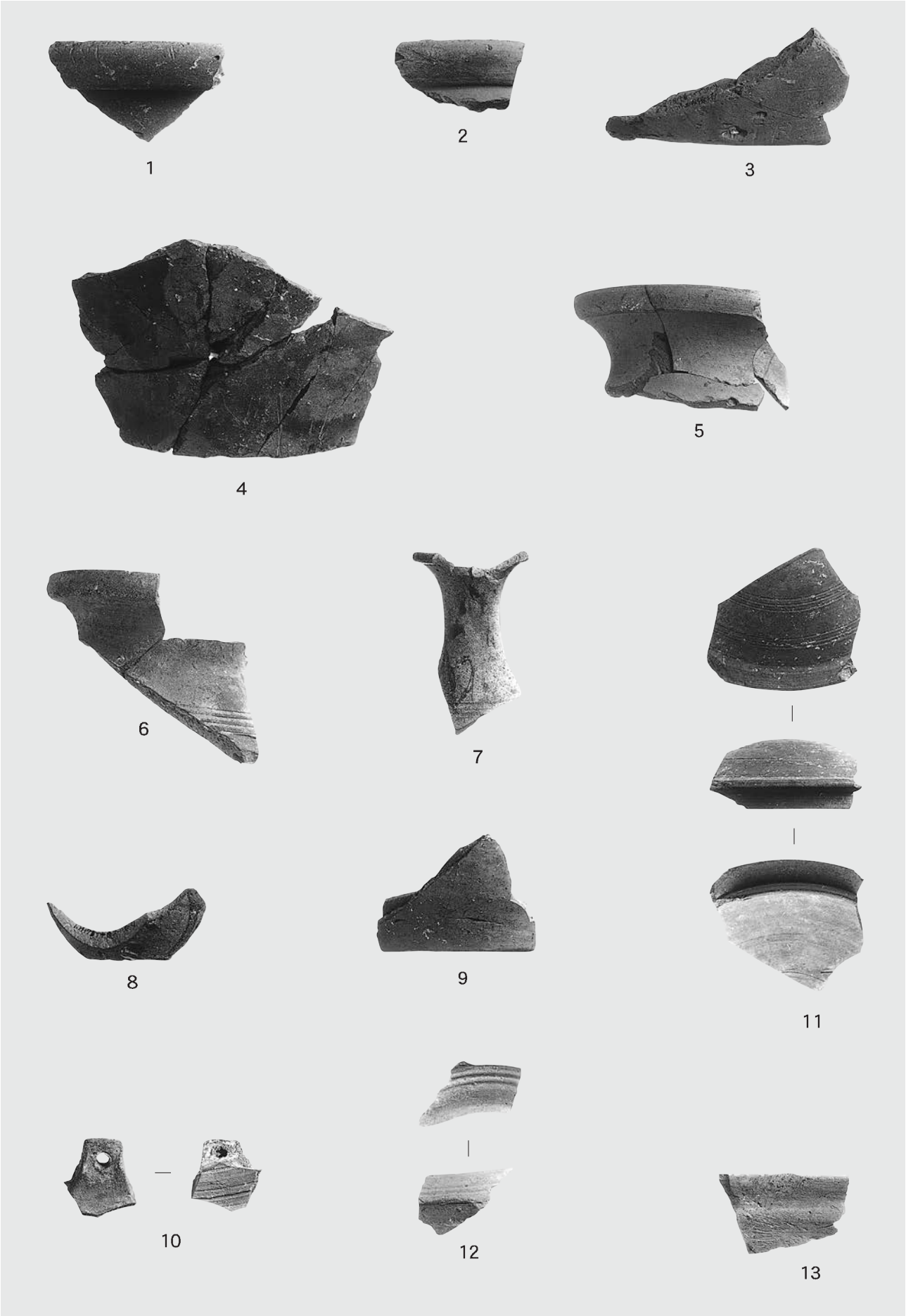
図版14　その他の輸入陶磁器（黒釉陶器1・2、瑠璃釉3・4、色絵5～8、高麗青磁9、ベトナム青花10、本土産陶磁器11～15）



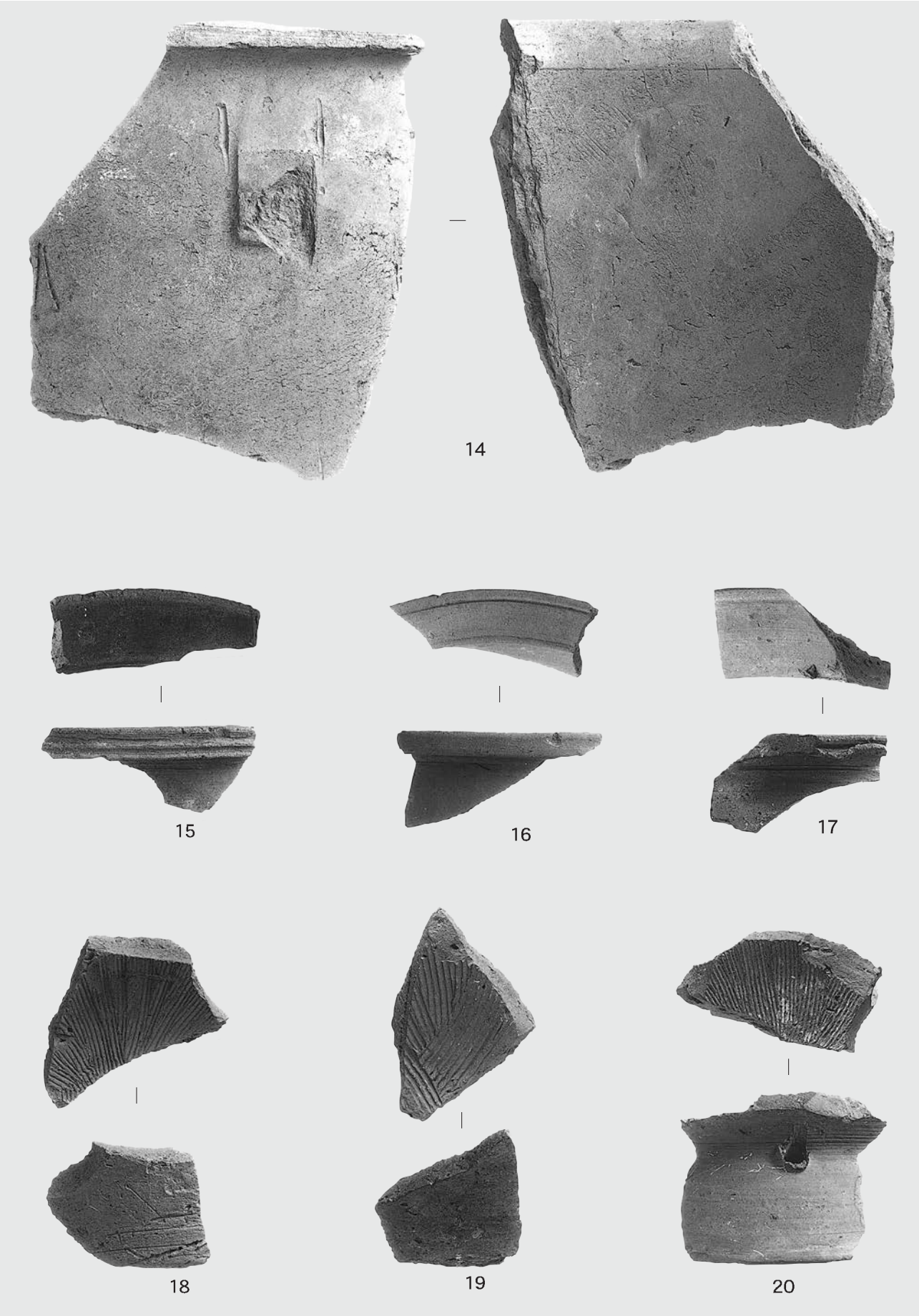
図版15　沖縄産施釉陶器　1



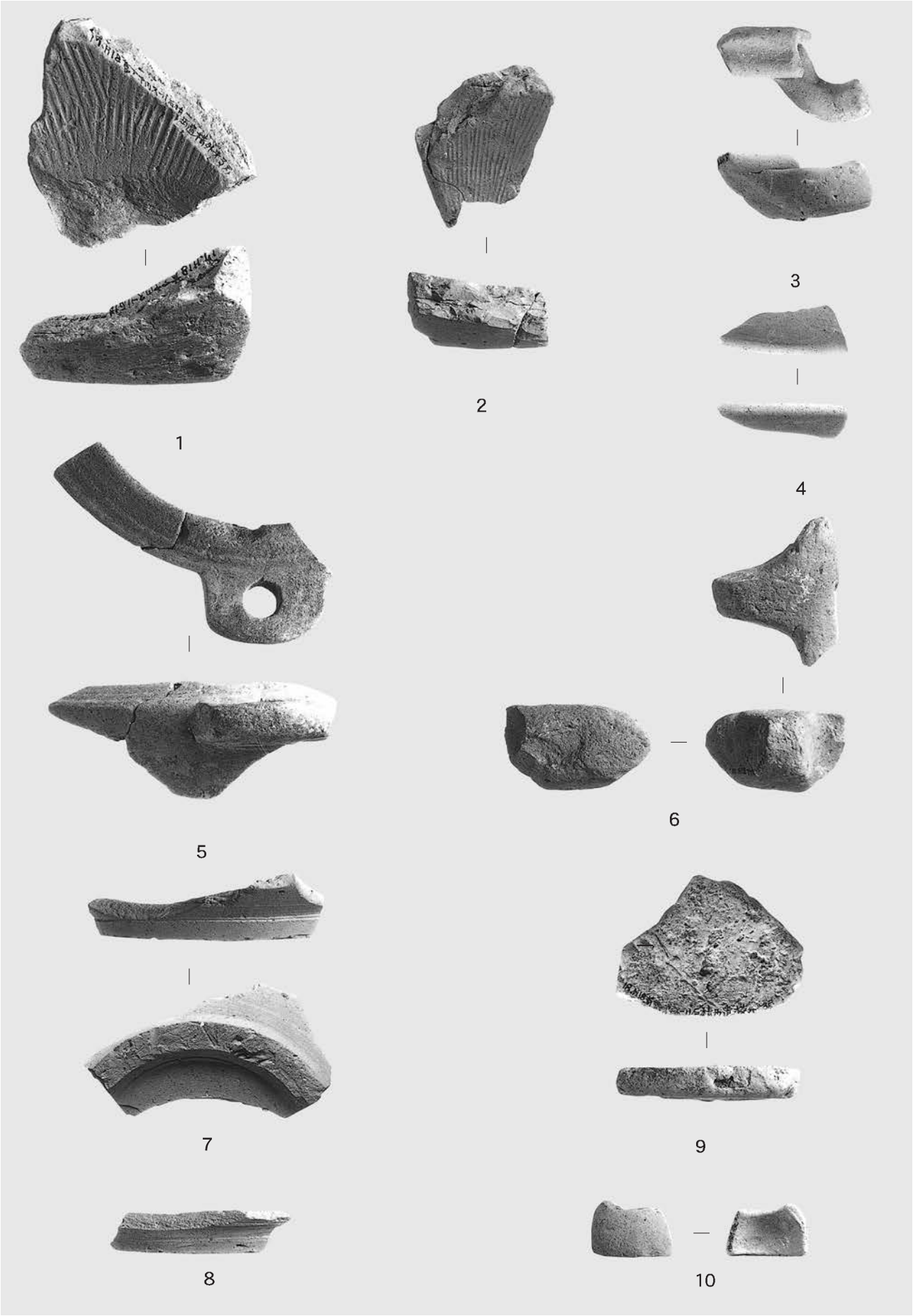
図版16　沖縄産施釉陶器　2



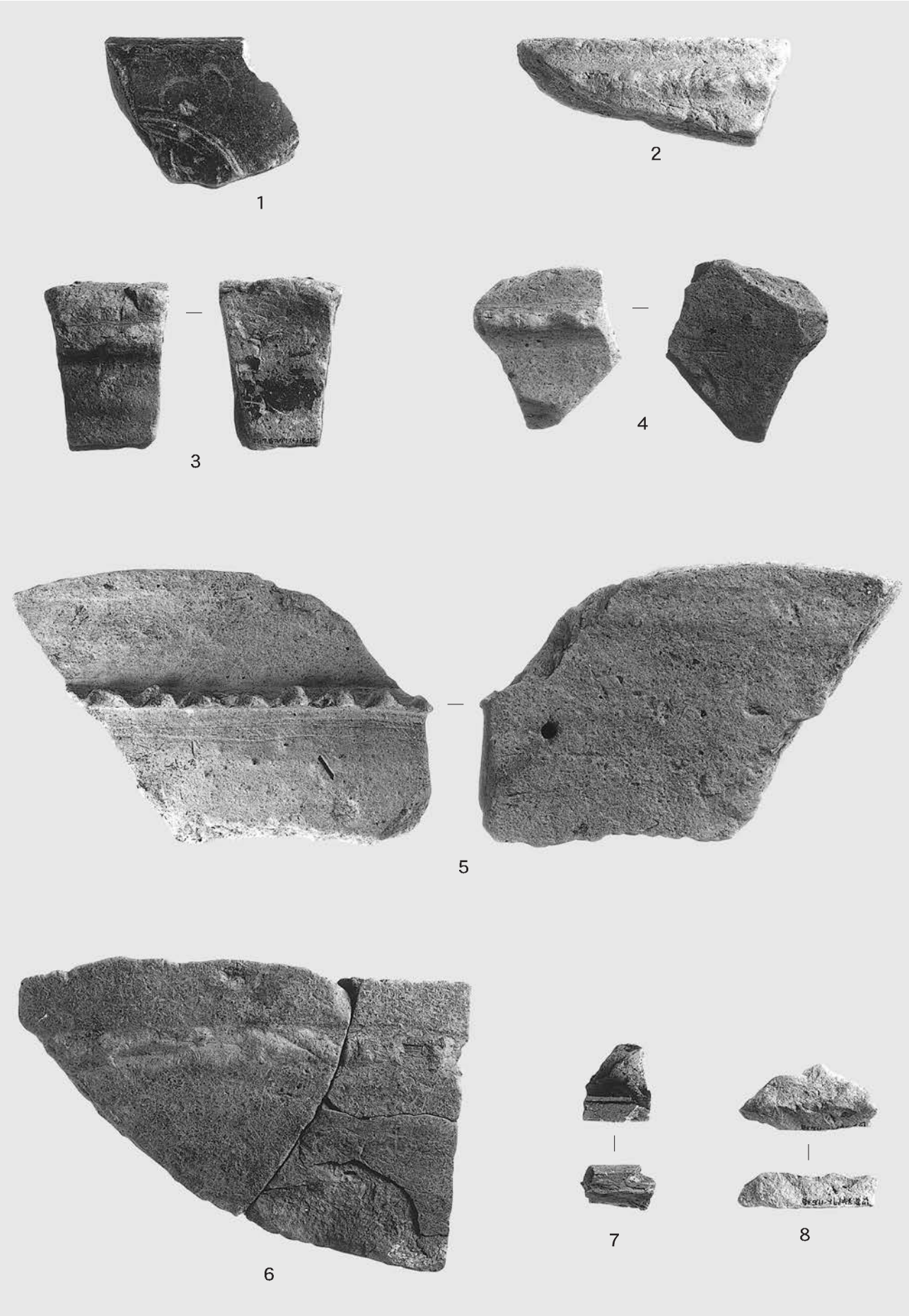
図版17　沖縄産無釉陶器　1



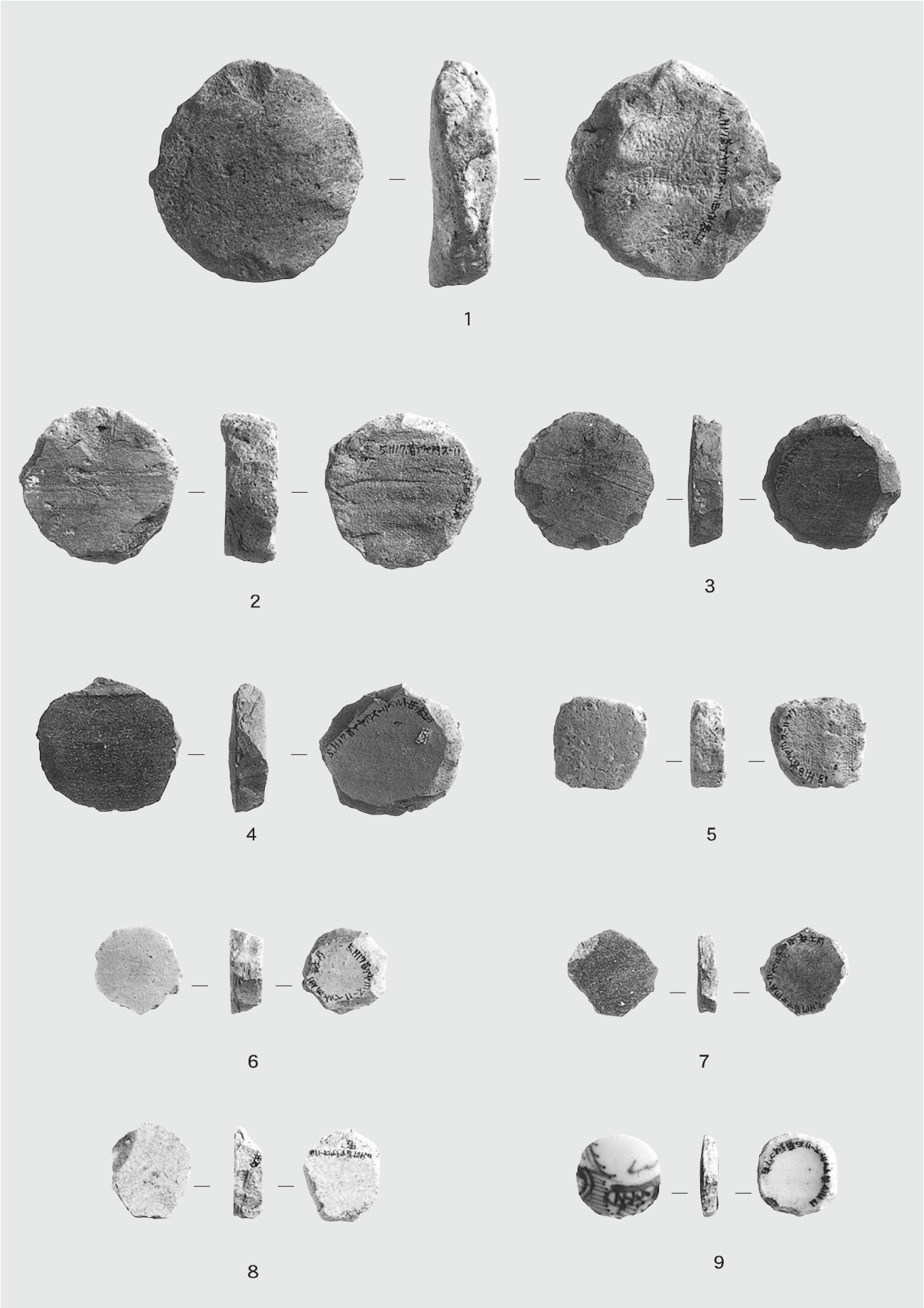
図版18　沖縄産無釉陶器　2



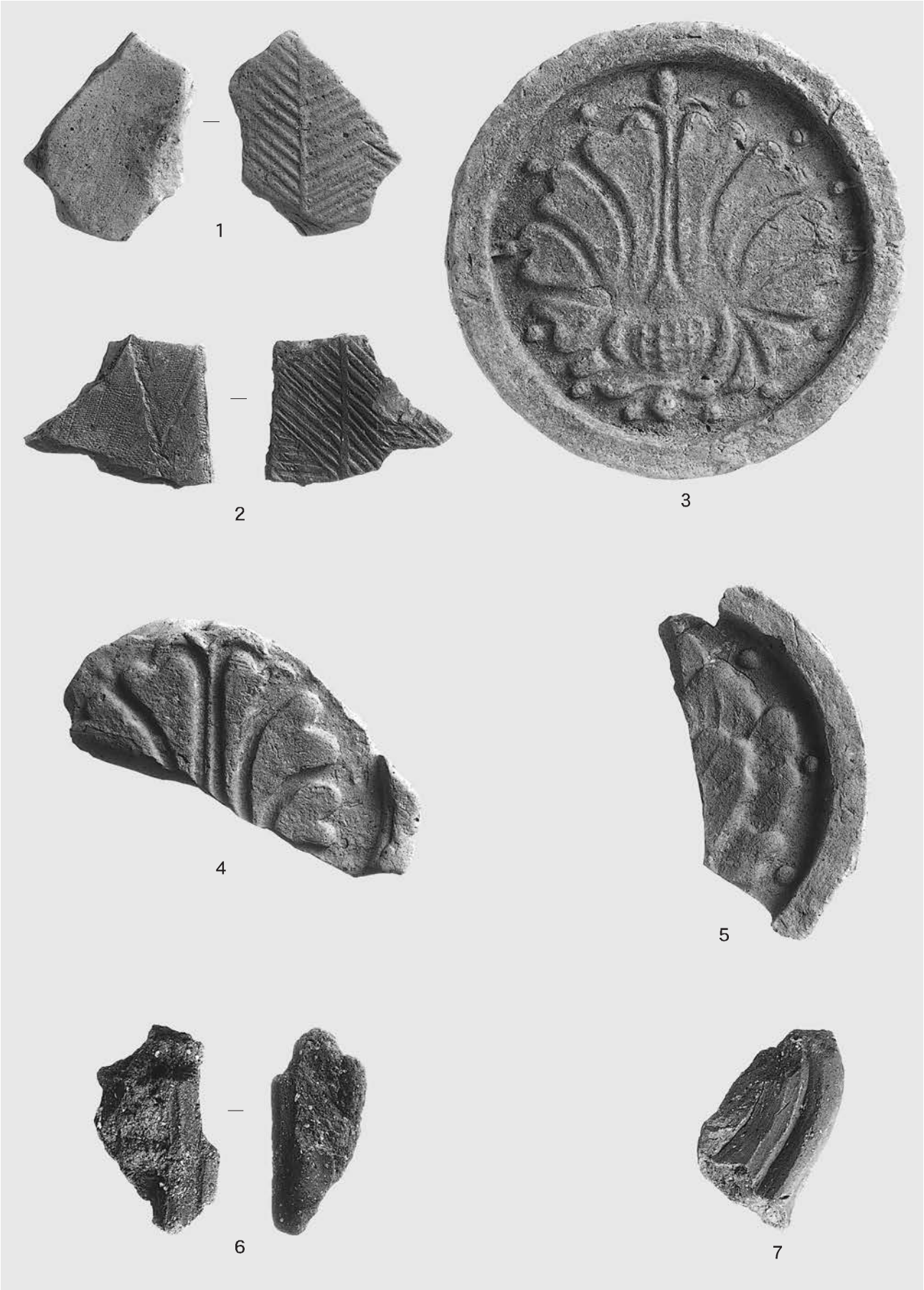
図版19　陶質土器



図版20　瓦質土器



図版21　円盤状製品



図版22　瓦１（高麗系瓦1・2、明朝系軒丸瓦3～5、鬼瓦6・7）

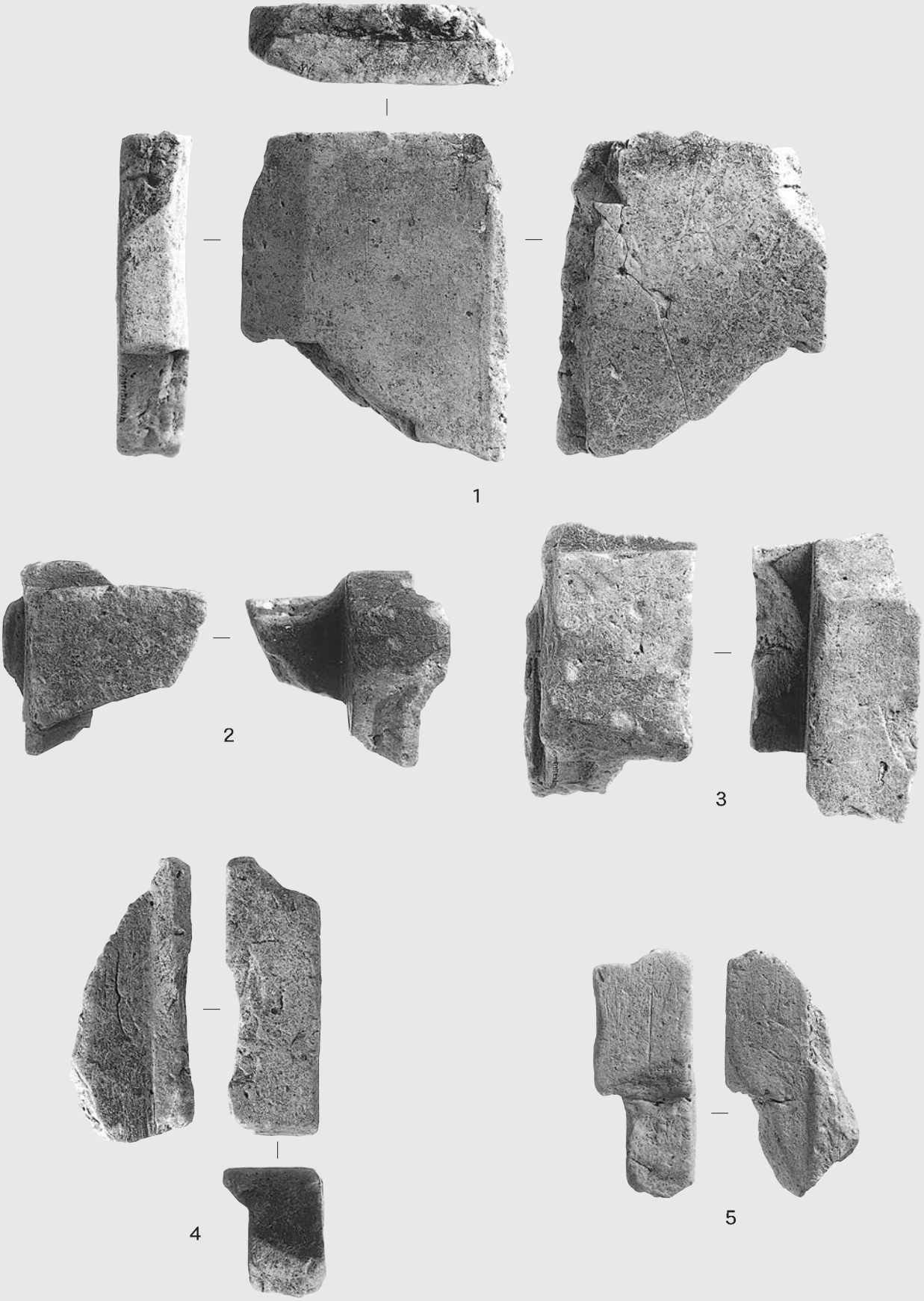
8

9

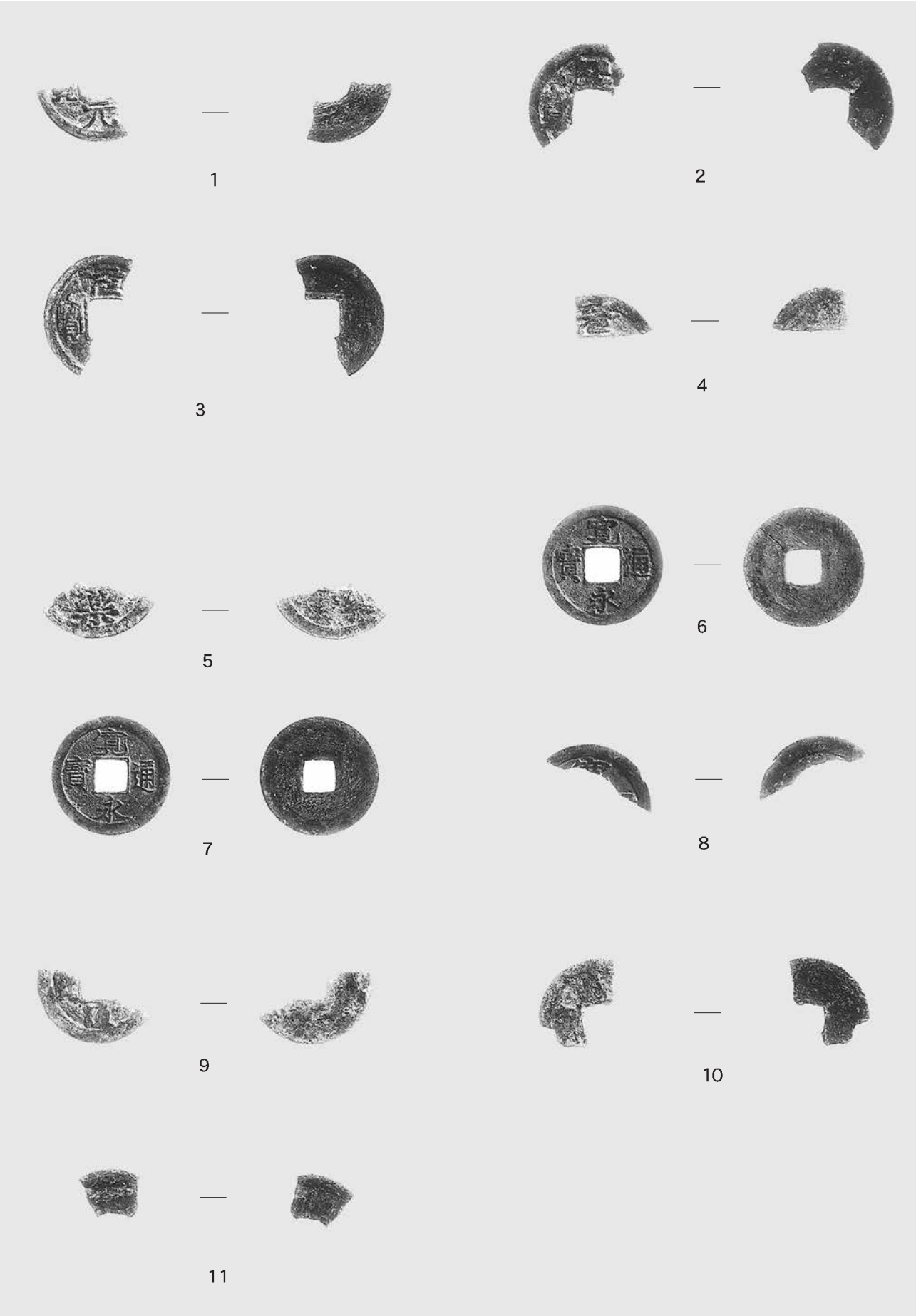
10

11

図版23　瓦２（明朝系軒平瓦8・9、大和瓦10、漆喰11）

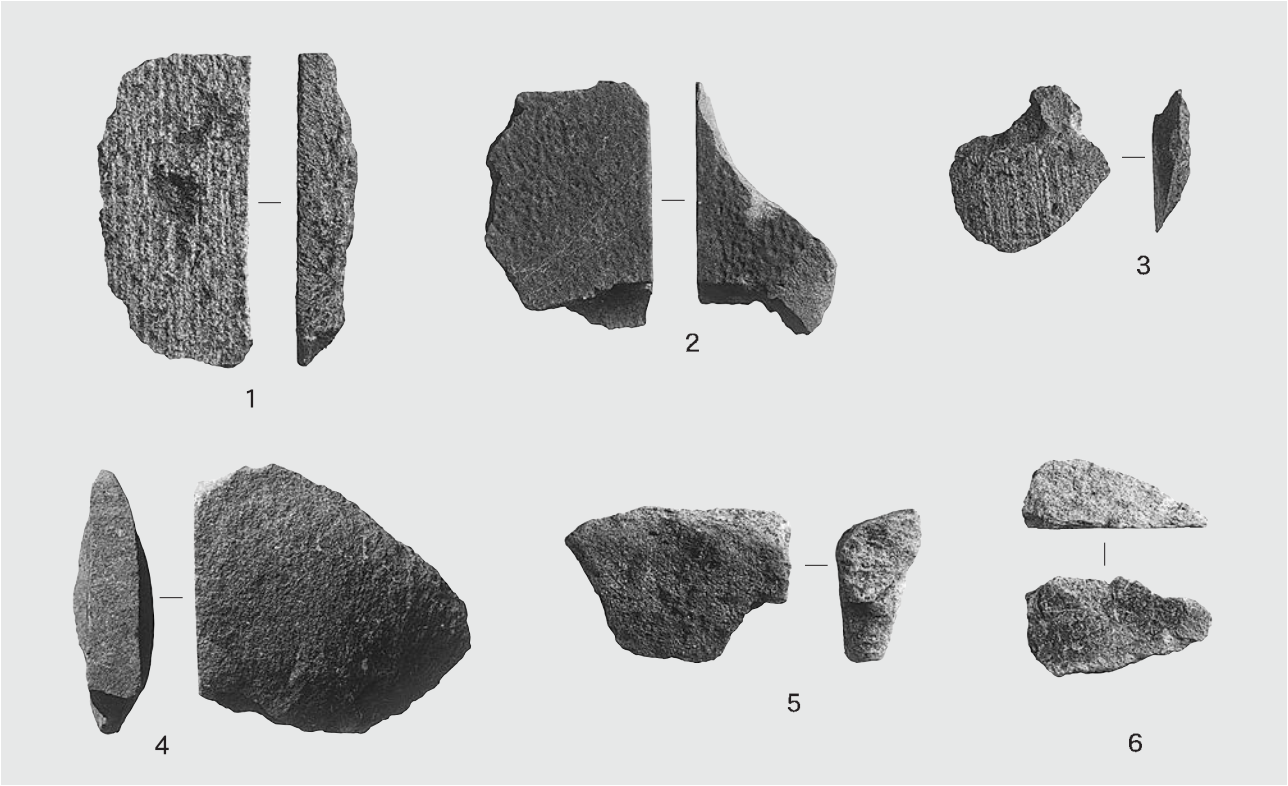


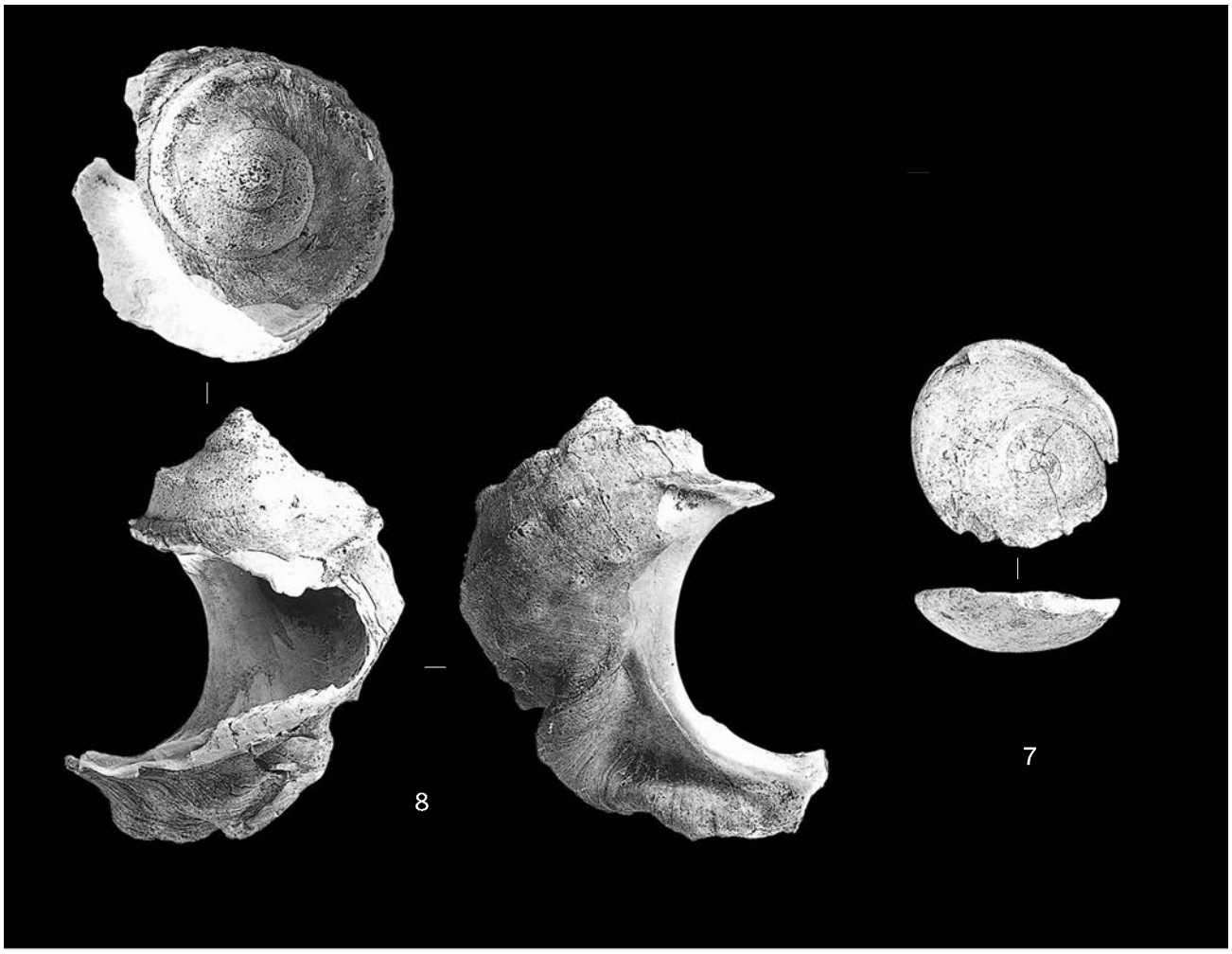
図版24　塼・塼瓦



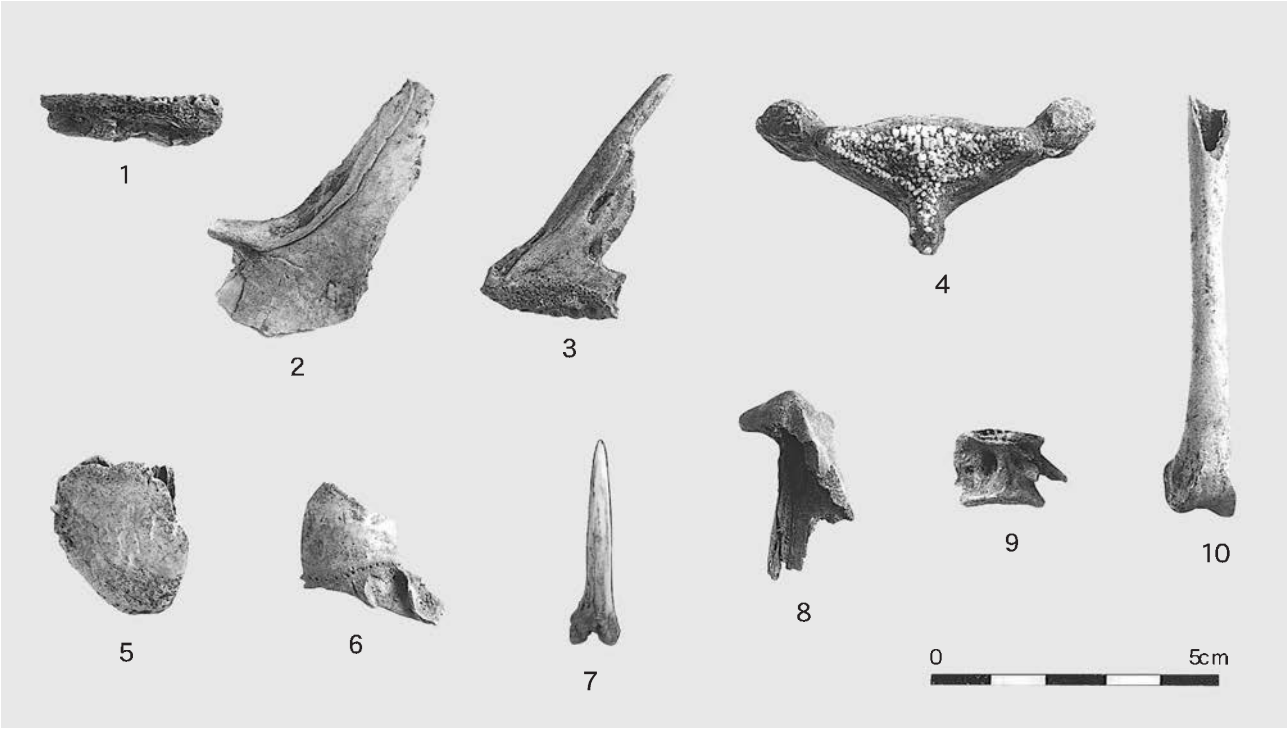
図版25　銭貨

図版26　金属製品（鉄製品・青銅製品）





図版27　上：石製品・石材１～6
　　下：貝製品７・８



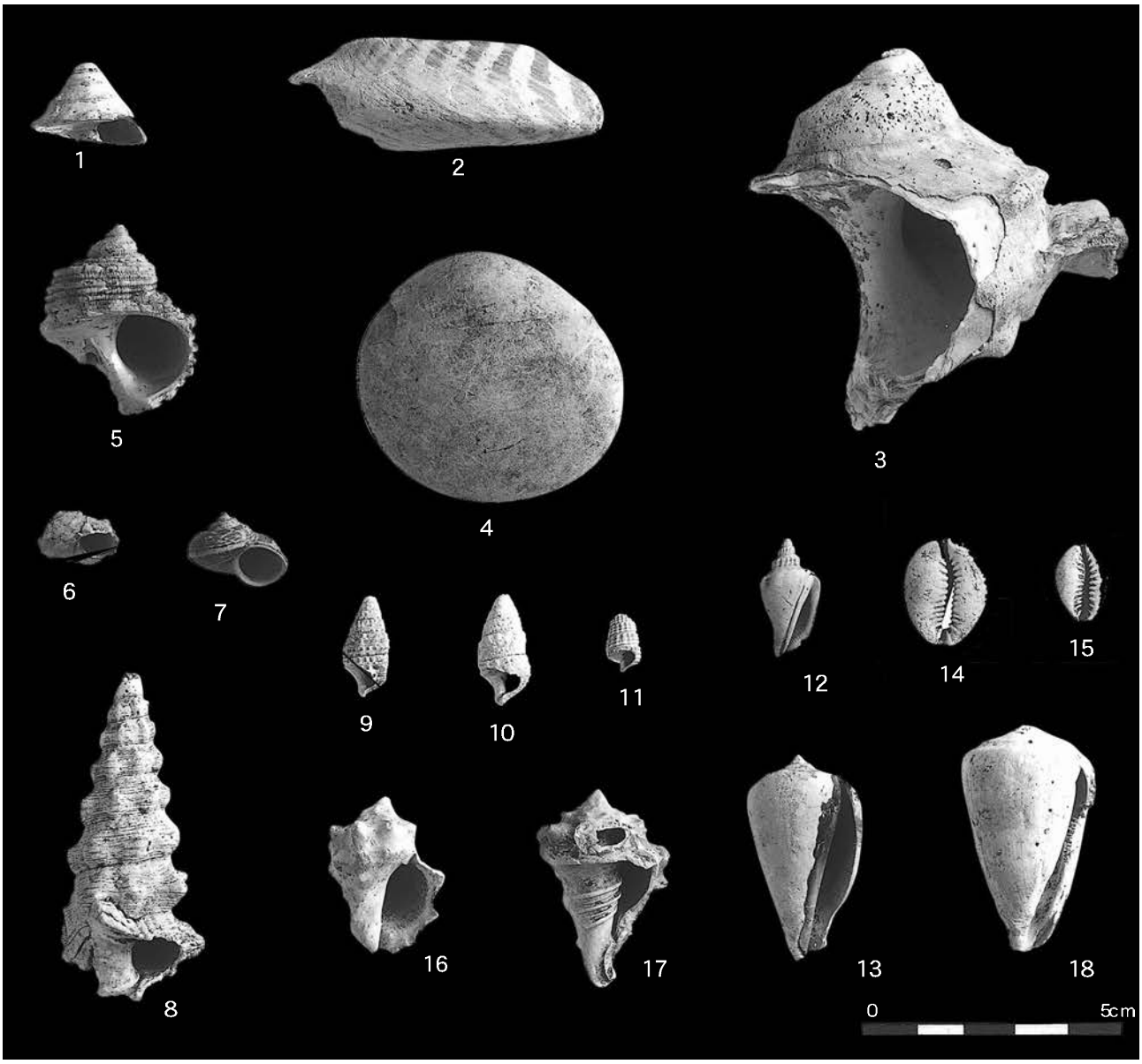
図版28　脊椎動物遺存体

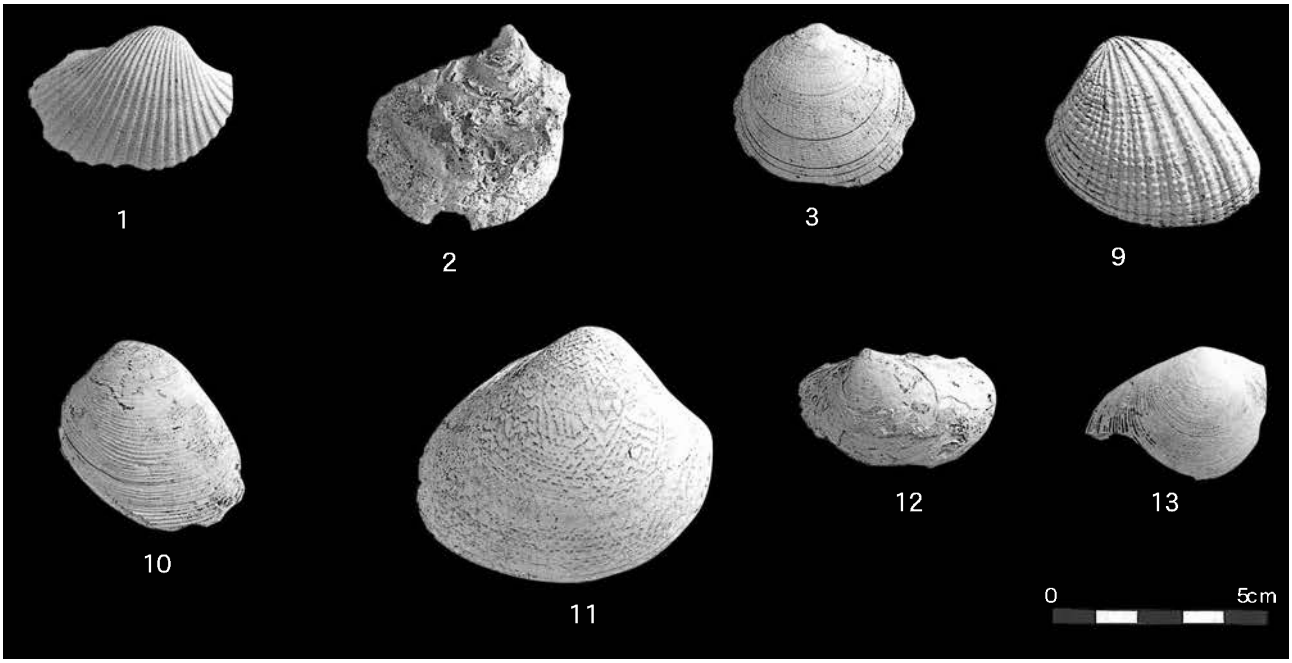
上　サカナ　：1、ハタ科　右　歯骨　2、ハタ科　右　擬鎖骨　3、ハマフエフキ　右　前上顎骨
4、コブダイ　下咽頭骨　5、ブダイ科　右　前上顎骨　6、左　歯骨　種不明　7、背鰭棘
8、鋤骨　9、脊椎骨

ニワトリ：10、右　脛骨

下　ブ　タ　：1、右　側頭骨　2、右　上腕骨　3、左　上腕骨　4、右　上腕骨（幼）
5、左　橈骨　6、左　中手骨、　7、左　大腿骨　8、左　距骨　9、左　踵骨

ウ　シ　：10、左　下顎骨　M_3　11、左　基節骨





図版29　貝類遺存体・上（巻貝）下（二枚貝）番号は表と一致

附　　編

第１節　調査の経過と出土状況

１．はじめに

本報告は、平成15年度の首里城公園整備の事前調査として実施した真珠道跡発掘調査にて検出した更新世動物化石の出土状況等の報告である。発掘調査の目的は1522年に完成した真珠道跡の確認であり、調査区は写真１・２（第1図）に示すように首里城跡の西隣に位置する。

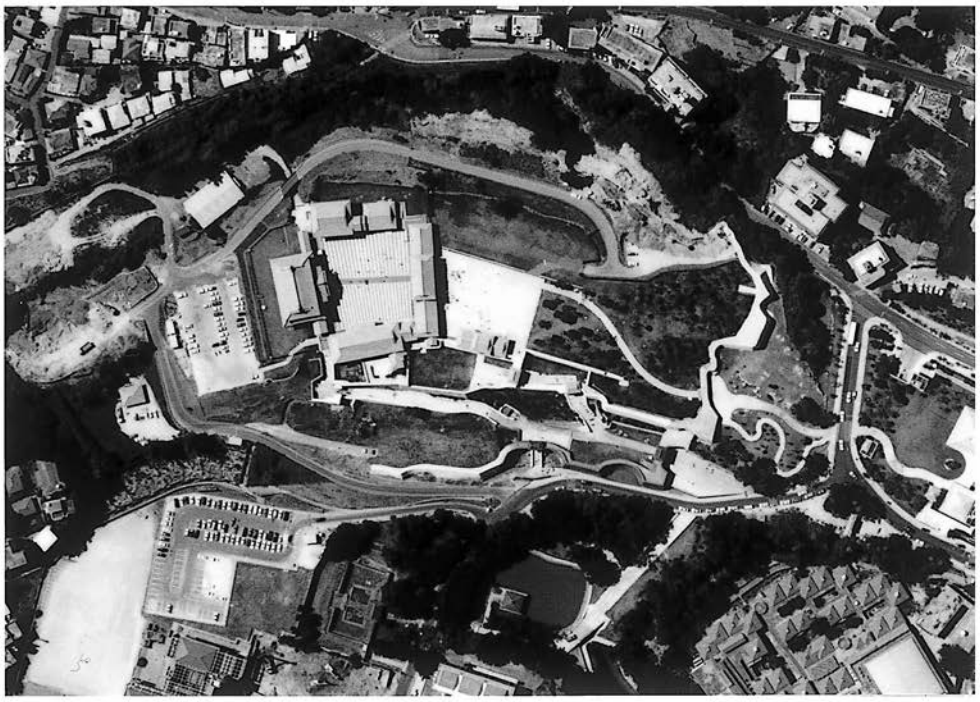
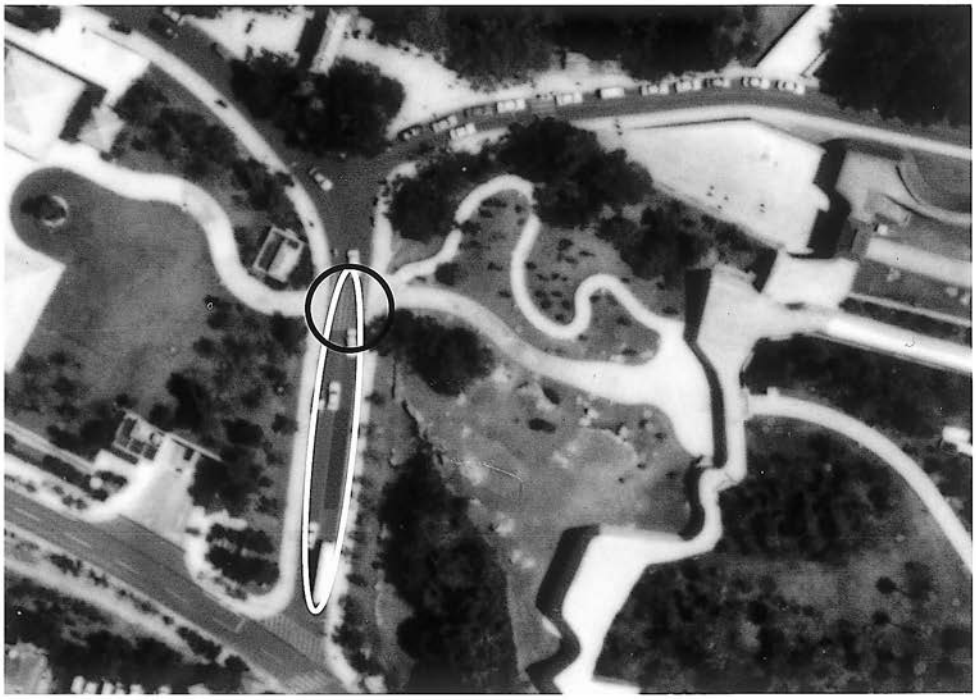


写真１　首里城全体

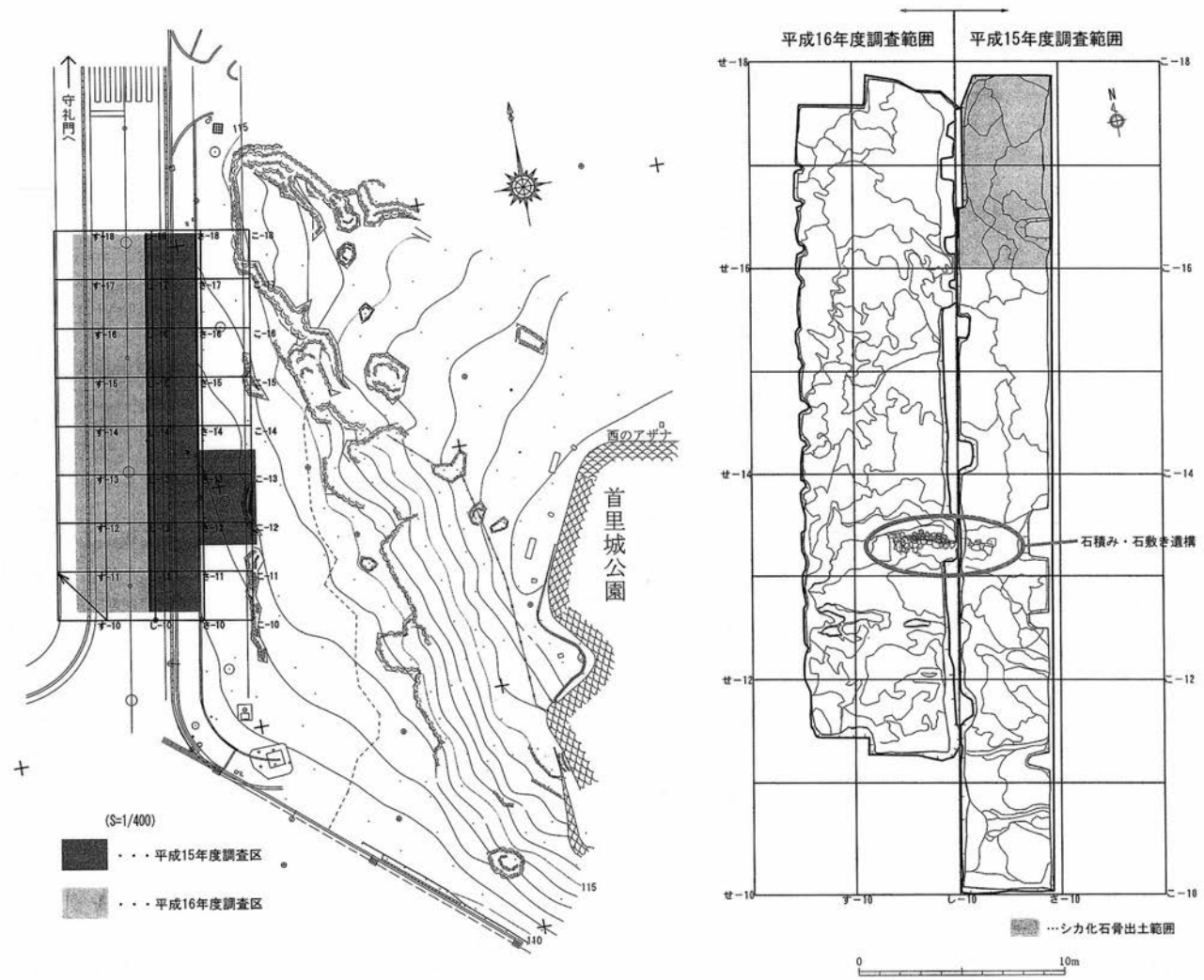


凡例

平成15年度調査範囲

動物化石出土地

写真２　調査区拡大



第１図　グリット配置図及び調査範囲（右図の点描がシカ化石骨出土範囲）
『真珠道跡ー首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（I）ー』2006年３月より転写

2. 調査の経過

平成15年10月17日より調査に着手し、表土剥ぎが終了した段階で、岩盤まで撹乱されている箇所が多いこと及び岩盤が削られている箇所を確認した。そのことから真珠道跡は既に取り除かれていることが想定された。実際に調査を進めていくと真珠道跡は確認できなかった。

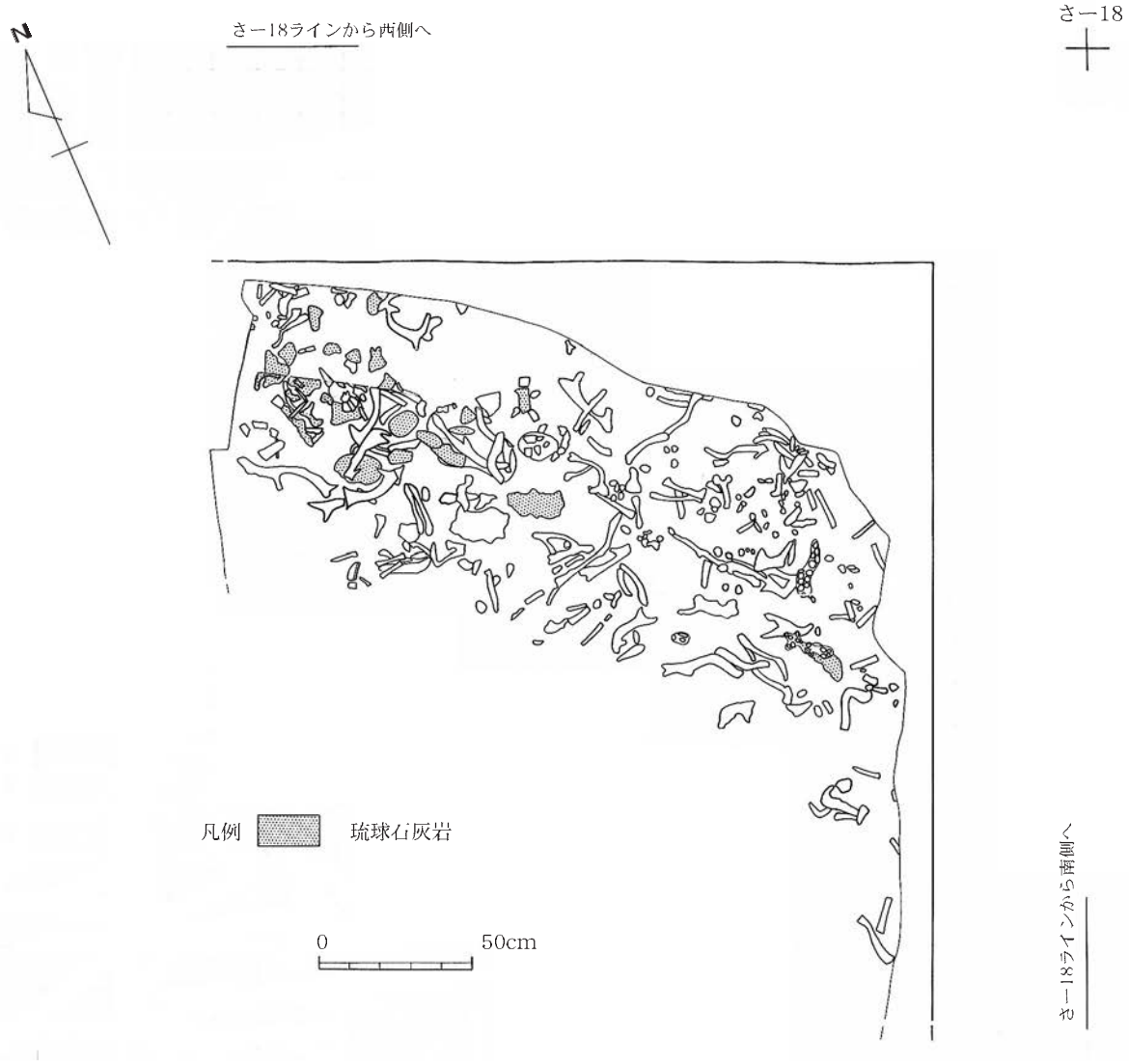
更新世の動物化石は調査区北側の撹乱されていない箇所から検出されており、調査の最後に検出を行い平成16年２月28日に調査を終了した。

3. 出土状況

動物化石を含む箇所の層は、上部に撹乱層、その下にマンガンを含む明褐色土層で構成されている。動物化石はマンガンを含む明褐色土層より確認した。動物化石の部位等の詳細については次節以降に記されるが、調査段階においては、角及び顎の多いことが特徴であった。しかし、各化石は一個体全体として確認できていないことから、土と共に流れ込んできた際に離散したことも考えられる（写真3～6。第2図）。

化石は土に埋まっていたことから非常に脆くなっているものが多く、取り上げる際に離散する可能性があるものは、パラドイドB-72を塗布し強化したものもある。石灰岩の岩盤に接していた化石については、丈夫で、土に埋まっていた化石とは対極な状況であった。

発掘調査を進めていくと、化石が包含されている明褐色土を取り除くと石筍を確認することができた。このことは、当該調査区は、石灰岩の洞窟状になっていたことを示していると考えられる。



第２図　シカ化石出土状況

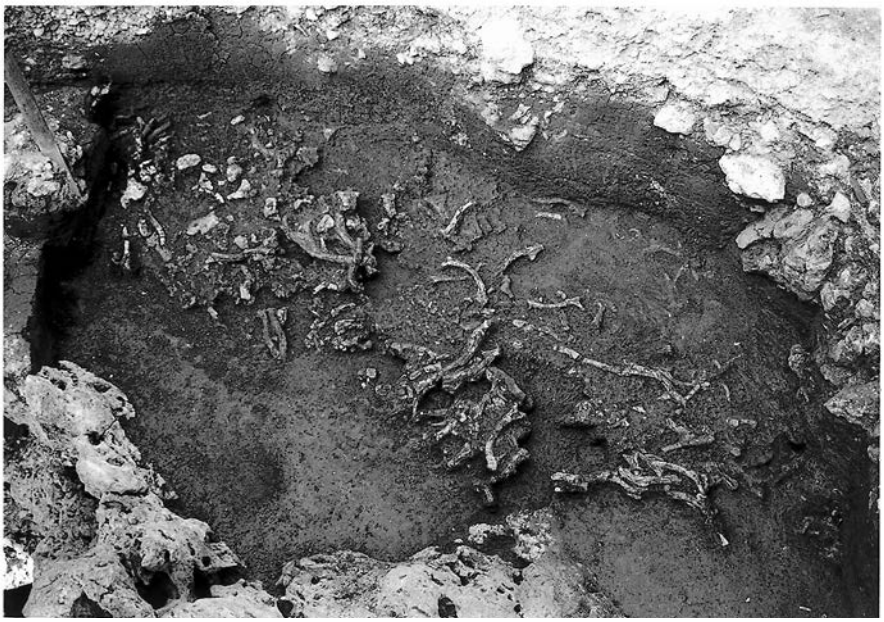


写真３
動物化石検出状況（南より）

写真４
動物化石検出状況（南東より）

写真５
動物化石検出状況（東より）

写真６
動物化石出土地完掘状況（南より）

第２節　真珠道出土化石骨の保存処理

真珠道出土化石骨の保存処理

1.出土状況

平成15年度の調査時に大量のシカ化石骨が発見された。シカ化石骨は、し-16～18グリッドで石灰岩岩盤の空洞部分より、ほぼ一括の資料として出土した。周囲には三角錐状の鍾乳石も見られたため、洞穴であった場所と思われる。化石骨の一部は石灰岩に溶着し、またほとんどが土圧でつぶれており崩壊は免れない状況にあった。しかし、四肢骨の関節がつながった状態で出土したものもあり、ほぼ原位置を保っていることが確認できた。

これらの遺物は資料整理を行う際、崩壊して部位が確認できなくなる恐れがある。種同定や個体数の確認を行うためには強化処理と土砂の除去が必要であると判断し、保存処理を行った。

２.保存処理前状況

保存処理前の状況は以下の通りである。

①土ごとブロックで取り上げている。

いくつもの骨が重なり合い、しかもそれらは破片の集合体となって形状を保っており、不用意に持ち上げるとボロボロに崩れる。その状態の遺物がある程度の範囲にまとまっていたため、周辺の土ごとブロック体として現場から持ち込まれた。コンテナに収納されているが、移動中にもいくつかの破片が落下し、すでに検出時の状態を保っていない。土の厚みも20～30cmはあるため内部が確認できず、遺物量が推定できない。

②現場で樹脂塗布を行っている。

応急処置として現場で遺物表面に樹脂塗布を行い、ある程度遺物を強化してから取り上げを行っている。しかし樹脂塗布した部分は表面が白く変色し、本来の質感が失われているため樹脂を取り除く必要がある。また、樹脂によって周辺の土が付着しているため土を遺物から除去するのが容易ではないと見られる。

③現状で取り上げ、ユニパックに保存している。

比較的丈夫な遺物で、手に持つことができる。しかし遺物の内部に入り込んだ土によって形状を保っており、亀裂も無数に確認できた。そのため崩壊の危険があり、なかには乾燥すると崩れるものもある。

上記のように遺物の状態は一様でないため、１点ずつ状態を確認し、それぞれに適した保存処理方法を検討する必要がある。以下に詳細な工程を記す。

3．保存処理工程

①写真撮影

遺物の保存処理前状況をデジタルカメラで撮影、記録した。ユニパックに入っている遺物のなかには取り出す際に崩壊するものもあったため、ユニパックごと撮影した。土ごとブロックで取り上げている遺物は移動が困難なため、コンテナごと撮影を行った。

②洗浄　(写真2)

土砂の除去、また遺物内部の脱水もかねて100％エタノールで洗浄を行った。比較的丈夫な遺物は竹串や筆などで丁寧に土を落としていったが、ほとんどの遺物は風化によって空洞化し、内部に入った土によって形状を維持しているため、エタノールに浸すとその土が崩れ、遺物もバラバラの状態になる。そのためエタノールを表面のみに塗布し、強化後に土を除去することにした。

③樹脂塗布（2回）（写真3・4）

脆弱化した遺物の強化と、土圧によってひび割れた破片の接合をかねてパラロイドB-72・15%キシレン溶液を塗布した。事前に洗浄が万全に行えなかった遺物は、1度目の樹脂塗布後ある程度の強度が保たれていたため、2度目の塗布前に土の除去を行った。その後1～3日間自然乾燥させ、2度目の樹脂塗布を行った。

今回出土した遺物のなかには資料整理作業に充分耐えうる強度を有する一群もあった。そのような遺物は洗浄作業のみにとどめ、強化処理（樹脂塗布）を行わなかった。

④取り上げ

土ごとブロックで取り上げられた遺物は、樹脂塗布を行って遺物を強化した後、慎重に土から取り出した。土のブロックについては、まだ内部に遺物があると思われたため、水で土を湿らせながら竹串で崩していった。全てのブロックを崩し、遺物を取り上げた後の土は水洗しながら篩いにかけて微細な遺物も検出するように努めた。

⑤接合

保存処理前に撮影した写真を参考にしながらセメダインCで接合を行った。接合面が小さい遺物は、エポキシ系接着剤アラルダイトラピッド（昭和高分子株式会社）にシラスマイクロバルーンを混合し、補填を行い接合に耐えうる強度を保った。強度が不十分で、接合作業中に崩壊する遺物がいくつかあり、再度樹脂塗布を行った。

土圧でつぶれ、小さい破片の集合となりかろうじて原型を維持している遺物については、原型を復元しようと試みると破片をひとつずつ取り外しながら接合しなければならない。膨大な時間を費やすうえに、逆に破片が散逸して原型がわからなくなる恐れがあるため、現段階ではつぶれたままの形状を維持した。

4.まとめ

今回の保存処理工程のなかで得られた情報を概観すると、部位では枝角が総数のなかで大半を占めるようであった。これはそのまま個体数に反映されるわけではなく、生前のシカの落角によるものと見られている（註１）。頭蓋骨は小片が多く、全形が窺える資料は無い。下顎骨のほとんどは、歯骨が良好な状態で残存している。四肢骨についても多くの部位が得られている。

これらのシカ化石骨は真珠道や首里城など、遺跡に直接関連する遺物ではない。しかし大量に良好な化石資料が出土したことは特筆すべきことである。

今回は、遺物を観察や同定が行える状態に持っていくことを目的としたため、強化に主眼を置いた。遺物は手に取ることができる状態にはなっているが、土圧により崩壊したままの形状で強化した遺物に関しては、原型の半分程度の厚さしか保っていないため、取り扱いに注意が必要である。また、現状維持のために土砂の除去は最低限にとどめている。今後、資料の活用方法に応じて対処を講じる必要がある。

註

註１．金子浩昌氏（東京国立博物館研究員）の御教示による。

写真１　保存処理前状況

写真２　洗浄作業（土砂の除去・エタノール塗布）

写真３　樹脂塗布

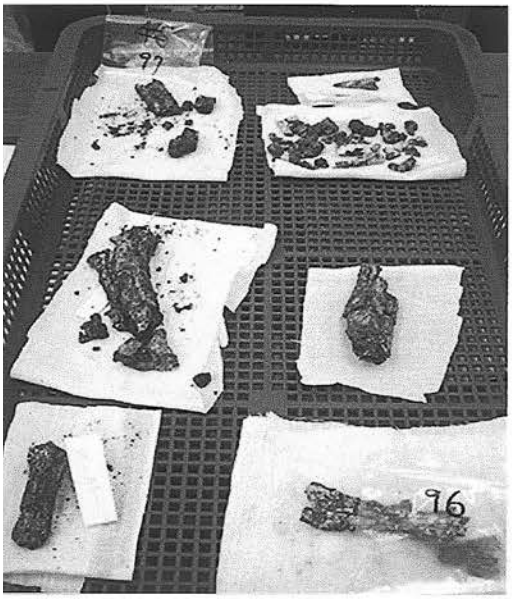


写真４　乾燥

写真５　保存処理後

写真６　作業風景（安全のためマスク・手袋を着用し、精密分析室で作業）

第３節　　真珠道跡出土の動物遺骸

はじめに

大城逸朗
（おきなわ石の会会長、理学博士）

琉球列島の陸生脊椎動物遺骸に関する最初の報告は，Matsumoto(1926）により行われた。本報告では、沖縄本島島尻地域の南海岸から採取されたシカ類の不完全な左下顎骨と角の基部をもとに、前者を*Muntjacus astylodon*、後者を*Cervus*（cfr. *Rucervus*）*riukiuensis* と命名した。その後沖縄島、伊江島、伊計島の隆起珊瑚礁に形成された洞穴や裂かを充填した堆積物からもシカ類遺骸が発見され、琉球列島と台湾の陸地接続問題が提起された(Tokunaga、1936；徳永・高井、1938)。Tokunaga and Takai(1939）は、伊江島から発見された多量のシカ化石を研究し、先に報告された *M. astylodon* と *C. riukiuensis* を同種とみなし、*Metacervulus astylodon* とした．なお長谷川（1980）は、シカ類の *Metacervulus astylodon* について、角や頭骨の形態からシカ亜科 Cervinae に属すべきとして学名を *Cervus astylodon* に改め，和名をリュウキュウジカとし、また角の形状はＶ字状に分岐し、
C. astylodon とは顕著な相違の認められる種類はキョン亜科 Muntiacinaeに属するとして、リュウキュウムカシキョンという和名を与えた。リュウキュウムカシキョンについて、長谷川・大城（1981)は、欧州の中新世から知られる *Dicrocerus elegans* に類似するものと考え *Dicrocerus sp.* とし、琉球列島では中新世の遺存種が更新世まで存続した可能性を指摘した。

沖縄県の陸生脊椎動物遺骸の堆積年代については、那覇市山下町第１洞穴から採取された炭化物により、はじめて同位体年代値（C14 年代；32,100 ±1,000 y. B.P.）が示された(Kobayashi *et al.*,1971）。その後、動物遺骸に伴い採取された木炭や陸産貝を試料として多くの炭素年代値が得られた。例えば、港川フィッシャー遺跡の16,600±650 y.B.P.、18,250±650 y.B.P.（高井・長谷川、1971)、久米島町下地原洞穴の15,200±100 y.B.P.（大城、2001)、本部町備瀬の23,050±70 y.B.P.、南城市クルク原の23,140±100 y.B.P.、25,010±90 y.B.P.（大塚ほか、2004）などである。

長谷川ほか(1978）は、伊江島のゴヘズ洞穴から７千点余の動物遺骸を報告した。“伊江島動物化石群集”は、主にシカやキョン類からなり、埋没頭数は両種で 700頭余であることが明らかになった。また大城(1994)は、宜野湾市の普天満宮洞穴遺跡を発掘し、リュウキュウジカ 67 頭以上、リュウキュウムカシキョン133 頭以上を識別した。なお琉球列島からは 100箇所以上の脊椎動物遺骸産地が知られ（大城・野原,1977;大城ほか,1983)、長谷川ほか(1983)は、採取したシカやキョン類の遺骸をもとに雌雄の骨格を復元した。

今回、真珠道跡から発掘された動物遺骸について、クリーニングと破片を接合するなど補修を行い、部位ごとの分類をした。その結果、動物遺骸は化石化したシカ類（リュウキュウジカとリュウキュウムカシキョン）のみで、他の種類の動物は確認できなかった。

１．発掘地の立地と動物遺骸の産状

真珠道は、首里城の西側に位置し、当時の東城壁に沿い、現在の那覇港まで延びた重要な軍用道路であった。平成15年度、首里城公園の整備事業の一環として、真珠道跡の発掘調査が実施された。発掘に伴い、砂利舗装の道路直下に多量の動物遺骸を含む暗褐色粘土層が発見された。粘土層は、上部は細粒の粘着性の弱いサラサラしたもので、下部の基盤岩に近い部分は赤灰色～灰色の粘着性に富む粘土であった。粘土層の厚さは、20～120cmと基盤岩の凹凸を埋めて堆積しているため変化し、動物遺骸は特に下部の粘土層に集中していた。遺骸を含む粘土層は、つらら石、石筍、フローストーンなど洞穴に特有な二次生成物の存在から洞穴堆積物であることが判断できた。恐らく、当時真珠道の造成中、洞穴の伸長方向（Ｎ―Ｓ）に沿い道を造成したため洞穴の一部を破壊し、洞穴堆積物が現れるようになったのではないかと推測した。（図版１）

洞穴は、首里城の西側で、東城壁に沿ったところに位置している。これまで首里城周辺では幾つかの洞穴が確認されていたが、本洞はこれまで未確認であった。本地点は、海抜113mで、地質は第四紀更新世中期初頭の琉球石灰岩（80万年前）と、これを不整合におおう鮮新世（400～500万年前）の島尻層群（青灰色のシルト質粘土）から構成されている。首里城一帯は、「首里高台」と呼ばれているように、北側のNE―SW方向、南側のE―W方向の断層で境された台地である。現在洞穴は、かつての道路工事、あるいは去った大戦で破壊され全容を把握するのは困難である。しかし、グリッドや僅かにできた岩塊の隙間から観察した限りでは、洞穴は基盤に近い不整合部に形成され、伸長方向はＮ―Ｓで、N55°～80°Ｗ方向の幾つかの亀裂（フィッシャー）が確認できた。

つまり南北方向に伸びた洞穴をほぼ輪切りするように数本の亀裂が発達している。洞内には、洞外から粘土と共に動物遺骸が流れ込み堆積した。しかし遺骸の産状は、グリッドの設定位置にもよるが、ふるい分けられたようにシカ類の角だけが集中して埋積し、今回の発掘では他の長管骨類は極めて少なかった。また堆積層の角の産状は、その長軸方向はN40°～45° Wで、洞穴の亀裂方向とほぼ一致し、幅の狭い割れ目から流れ込み方向性を有するようになったのではないかと推測した。さらに遺骸は、角や長管骨は原形を保ち保存状態が良いように思えた。しかし、それぞれの遺骸は、樹脂で固定しないと崩れて細片化するなど取り出しは困難であった。遺骸は、角は落ち角であるが破損することなく原形を保ち、さらに連結した部分骨もあり近い距離から運ばれ堆積したことは容易に判断できた。しかし原形を保ちながらも遺骸そのものの保存がよくないのは、外圧による破砕の可能性が考えられた。(図版17の22～28)

遺骸は、洞穴に埋積後、洞穴の自然崩壊か、あるいは真珠道の造成中に洞壁が崩壊されて開口し、そこを埋めるため岩塊や土砂を入れて押し固めるなどが原因ではないかと推測した。いずれにしても遺骸は趾骨など小型で頑丈な部分骨を除き大部分圧砕された状態のものであった。遺骸は、既知の化石産地のものと比較しながら部分骨を分類し、その結果シカ類（リュウキュウジカとリュウキュウムカシキョン）のもののみで、他の種類の動物は確認できなかった。なお、シカ類の部位骨の詳細な比較は現生のケラマジカの骨格標本（県立博物館所蔵）も利用した。

なお、採取した遺骸の総点数は700点余で、部位識別の可能なものはすべて図版に示した。発掘したシカ類の埋積頭数は、角や頭骨座骨を含めリュウキュウジカ39頭以上、リュウキュウムカシキョン７頭以上である。しかしこれは角という雄ジカの限られた部位骨での判断であり、実際はそれ以上である。いずれにしても本地点の堆積物は、リュウキュウジカ主体の化石層である。(表4、5)

２．主な部位骨の記載

角　antler

角は形態的に１分岐角と３分岐角に区別できる。県内の他の地域の化石角と比較すると、１分岐角はリュウキュウムカシキョン、３分岐角はリュウキュウジカである。

３分岐角は、完全標本及び３分岐角のものと思われる座骨や角座を含め196個を識別できた。角は、落ち角や頭蓋骨の一部が残ったものもあり、それらを含め右角36個、左角34個、左右不明角23個、あるいは分枝の一部を欠くもの６個である。しかし標本の大部分は不完全である。本地点から出土した化石骨に共通するが、特に角は完全あるいは不完全な標本も細かいひび割れが多く保存状態は悪い。これは標本の化石類が堆積場所へ運搬される途中で壊れたのではなく、堆積後何らかの物理的な力を受けて圧砕された可能性が考えられる。

３分岐角は、成長とともに第１枝から第３枝角となる。第１枝は前方内側、第２枝が後方内側へ張り出す。第３枝は、おそらく前方内側へ張り出し、角幹と共にU字型をつくり、左右ともねじれるように内側に湾曲する。第１枝、第２枝の発達する角座からの位置は、距離にばらつきがあるが、個体差によると思われる。角座は円形で、標本では直径12～17㎜である。角表には、角座直上から角尖近くまで縦状の浅い溝が発達し、溝と溝の畝に相当する部分は、所々とぎれて突起状になっている。(図版2～7、10)（表4）

高い角柄を有し、角座直上で分岐する角はキョンのもので、22個を識別した。そのうち２本は分枝と角幹を残し、不完全ながらキョンの角の形態を有するもので１本は落ち角、他は角柄を残している。その他のキョンの角と識別できるものは、角幹部分、落ち角、あるいは角柄の付随したものである。角の形態は、分枝は角幹より短く、さらに前方に強く張り出しながら先端1/3付近から内側に湾曲する。これに対して、角幹は後方に張り出し、内側に緩やかに曲がりながら中央部付近から外側に湾曲する。その側面観は、全体的にS字状を呈する。角座は大きく、前後径に長い楕円形である。分枝の分岐点付近の断面は、左右径の大きい楕円形で、角尖にかけ次第に丸くなる。角表には、角座から角尖にかけ縦方向の浅い溝が発達するが、シカに比べ溝の間隔は広く直線状である。(図版8～10)

肩甲骨　scapula

肩甲骨は、右５個、左３個の８個である。標本はいずれも関節窩を有する肩甲骨体と肩甲棘の一部を残してはいるが、保存状態は悪い。関節窩は、ほぼ円形の関節面で、大きさは33～38㎜である。(図版11)

上腕骨　humerus

上腕骨は、シカとキョンのものが混合した右部位９個と左部位８個の標本を得た。そのうち上腕骨頭の一部を欠くが右２個と左２個はやや完全骨である。他は、近位端部か遠位端部、あるいは骨幹部のみの不完全骨である。特に、上腕骨体は頑丈なつくりをしているが、埋没後に外側から物理的な力により破砕されたようであった。

大型の完全骨は、上腕骨稜が外側に強く張り出し、そのため近位端近くの上腕骨体の面積が大きい。さらに前面観は遠位端の外側上顆稜は、三角形を描くように強く張り出している。小型の上腕骨の遠位端部のみの標本では、外側上顆稜の発達は弱く、そのため三角形ではなく平面的である。

近位端は、上腕骨頭は半球状で、後方に強く張り出し、上腕骨体と交わる上腕骨頚は緩やかである。また大結節と小結節の間の結節間溝は浅く、前面観はＶ字型である。遠位端では、上腕骨滑車は大きく、そのため内側上顆および外側上顆は強く張り出し、肘頭窩は大きく深い。なお、骨幹部を含む遠位部のみの標本は２個あるが、いずれも完全骨の標本に比較して上腕骨滑車は小さく、肘頭窩も小さく浅い。その結果、完全骨４個と大きな上腕骨頭を有する近位端部の標本はシカのもので、遠位端部のみの２個は、キョンである可能性が強い。（図版11）

橈骨　radius

橈骨の標本は、1個の完全骨を含めて右側10個、左側９個の19個である。標本の大部分は、橈骨体部を欠く近位端、あるいは遠位端部である。橈骨体は、前面に強く張り出しながら湾曲し、前面観における遠位端付近には明瞭な腱溝が発達している。完全骨は、肘頭を欠く尺骨体が融合して残り、橈骨体の最大長は130.2㎜である。また遠位端の腱溝をつくる2本の稜は、１本はほぼ前面観の中央に位置するのに対し、他は外側面方向へ延び次第に消滅する。（図版12）（表1）

尺骨　ulna

標本は、右側５個、左側５個の10個を得た。尺骨は、橈骨と連結し、前腕骨を構成する。標本は、約20㎜の長さの尺骨体と肘頭からなる1個を除き、他は肘頭部のみである。識別できた標本からは、形態的な差異は認め難い。（図版12）（表1）

中手骨　ossa metacarpalia

標本は、右側11個、左側４個の15個である。標本の保存状態は悪く、近位端あるいは遠位端部を欠く不完全骨や部位が識別できる程度の破片である。

中手骨の骨体は、小型で頑丈なつくりをしている。骨幹部の形態は、近位端から中央部にかけて左右幅が広く、掌側面では溝の両側の隆起が大きいものと、左右幅が狭く、かつ隆起の弱い標本に区別できる。また背側面では、近位中手管及び遠位中手管を結ぶ浅い背側縦溝が認められるものと、発達が弱く縦溝が認め難い標本がある。これらの特徴は、標本の形態や大きさ、さらに他の化石標本との比較から後者がシカ、前者がキョンと考えられる。（図版12）（表1）

大腿骨　femur

大腿骨の標本は、完全標本１個を含め、右側５個、左側８個の13個である。完全標本の骨体は、大きく頑丈で大腿骨頭最大長137.7㎜、近位端最大幅29.8㎜、遠位端最大幅27.5＋㎜で、大腿骨骨体中央部の大きさは14.7×14.5㎜で円形である。他に遠位端部のみの標本が２個あり、それぞれの最大幅は24.5＋㎜、24.2＋㎜である。

完全標本の近位端は、大転子から延びる小転子は外側に強く張り出し、前面観では顕著な突起となる。遠位端は、内側顆と外側顆がよく発達し、他の2個の遠位端のみの標本でも同じで、外側顆がやや球形となり大きい。大腿骨滑車は、よく発達し、外側に比べ内側が大きい。滑車は、いずれの標本のものも外側の滑車の稜は鋭く、稜から延びた仲筋窩は深い。（図版13）（表1）

中足骨　ossa metatarsalia

標本は、右側8個、左側14個、左右不明5個の27個である。標本のうち、9個はやや完全骨で、他は骨幹部、近位端あるいは遠位端部からなる破片である。中足骨の形状は棒状で、近位端は平坦で形態的に四角で、それに対して遠位端は滑車である。骨幹部の背側面には、明瞭な背側縦溝が認められる。背側縦溝は、近位端で浅く、遠位中足管側にかけ次第に深くなる。

掌側面には、掌側縦溝が認められる。しかし標本では、掌側縦溝の発達が弱く、近位端から1/3のところで消滅するものと、発達は弱いながらも中央部から遠位中足管近くまで認められるものがある。標本の中で大きく（最大長 94.2～15.5 ㎜）、頑丈なものは後者の特徴をもち、リュウキュウジカの標本に類似する。(図版13)（表1）

脛骨　tibia

標本は、右側13個、左側14個の27個を得た。そのうち完全骨は右側3個と左側3個で、他は脛骨と識別できる程度の特徴がある破片である。完全骨の最大長は、右部位で155.2～161.7㎜、左部位120.5～161.2㎜である。脛骨体の骨幹部の形は、近位端から1/3の長幅指数（骨幹部の幅と長さの比、100が円形）は、右部位64.6～73.3、左部位64.8～68.2で、やや小さく楕円形に近い。骨幹部のみの標本には、1個だけだが長幅指数が78.0で、やや円形に近いものが含まれ、シカかキョンのいずれかの可能性がある。

なお、標本は部位が欠けたり、摩耗したりしているが、近位端最大幅29.9～30.6㎜、遠位端最大幅13.7～14.2㎜である。脛骨は、近位端の内側顆、外側顆、それに脛骨粗面もよく発達し、大きくて広い。遠位端は、内果や外果がよく発達し、そのため脛骨ラセンは広く大きい。(図版14)（表1）

距骨　talus

標本は小型で頑丈であり、また特徴的な形態をしているため識別しやすく、右側10個と左側8個の18個を得た。標本には、骨体の中半分の全長23.2～26.6㎜、横半分の全長26.4～29.0㎜の大型と、それぞれ20.9㎜、と22.4～25.6㎜と比較的小型のものが混在する。(図版15)（表1）

踵骨　calcaneus

標本は小さく頑丈な骨で、右側12個、左側5個の17個を得た。標本は完全骨でも、踵骨隆起部や関節面突起が欠けているものが多い。標本には最大長53.1～63.8㎜、最大幅21.7～24.3㎜のものから、最大長17.8㎜、最大幅16.8㎜と極端に小型のものが含まれる。
(図版15)（表1）

犬歯・小臼歯・大臼歯　canine, premolar, molar

臼歯は、顎体に伴うものを除き、遊離した切歯、犬歯、小臼歯、大臼歯を含めリュウキュウジカの右上顎の歯40個、同左34個の74個、右下顎の歯12個、同左33個の45個、またリュウキュウムカシキョンの右上顎の歯15個、同左14個の29個、右下顎の歯8個、同左11個の19個を得た。（表8、9）

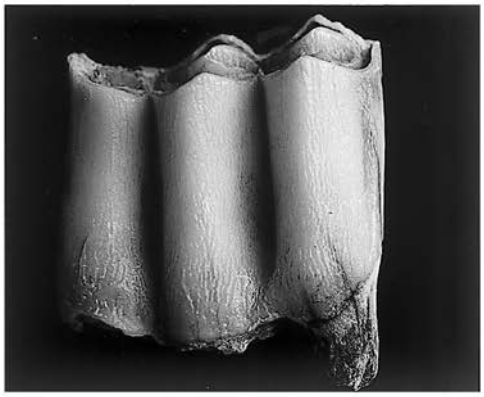
歯は、一般に形態をよく残し、保存もよい。特にリュウキュウムカシキョンは上顎に湾曲しながら鋭く尖った特徴的な犬歯が発達するが、３個の標本を識別した。

小臼歯や大臼歯は、リュウキュウジカは大型で、それぞれの最大長と最大幅は一般に大きく、それに対してリュウキュウムカシキョンは小さい。特に識別できた下顎の第３大臼歯の長幅指数では、２グループに分かれる。(表10)（図1）　また、臼歯の咬合面におけるエナメルヒダのつくる形態はいずれも三角形をしている。しかしリュウキュウジカでは、三角形の形態はやや丸みがあり大きく、それに対してリュウキュウムカシキョンは臼歯の形態そのものも小さく、エナメルヒダのつくる形態も鋭角に鋭く張り出した三角形である。

なお、臼歯については、上顎骨の舌側面側と下顎骨の頬側面側の歯冠のエナメル部にザラザラ模様があるものと、ないものが認められた。模様は、上下に細かく樹枝に伸び、ザラザラ感がある。光を反射させながら観察す

ると、肉眼でも容易に確認でき、摩耗したものでもルーペで見ると、模様をはっきり確認することができる。臼歯のエナメル面に模様があるのはリュウキュウジカ（写真左）で、模様が無く白く光り輝いているのはリュウキュウムカシキョンの臼歯（写真右）である。なお、その知見は小澤智生氏（名古屋大学）から得たが、さらに多くの化石と比較し、食性との関わりなども検討する必要があり今後の課題である。

そのような観点で臼歯を観察すると、模様のあるものは形態的に大きく、咬合面のエナメルヒダが丸みのある三



写真左：リュウキュウジカの下顎右第３大臼歯
臼歯の頬側面にザラザラした模様がある

写真右：リュウキュウムカシキョン下顎第３大臼歯 の頬側面は模様が無く光り輝いている

角形をつくるリュウキュウジカ、模様の無いものは小型のリュウキュウムカシキョンの臼歯と一致する。（図版16）

下顎骨　mandibula

下顎体は、下顎体尖端部と下顎枝を欠く不完全な標本の10個を得た。そのうち右下顎骨はM_1－M_3残ったもの3個、P_1－$_3$とM_1－$_2$が残ったものが1個である。M_1－$_3$の残った下顎の歯列長は49.3～49.6㎜で、M_3の直下の下顎体の幅は23.5～23.9㎜である。またM_3の臼歯の最大長は20.3～22.1㎜、最大幅は6.6～8.3㎜で、いずれの標本も咬合面は摩耗せず鋭い。左下顎は、P_1－M_3まで残ったものが１個、P_3－M_3が2個、M_2－M_3が1個、M_3が1個の5個である。M_1－M_3の歯列長は、44.0～48.6㎜で、M_1直下の下顎体の幅は23.5～25.4㎜である。またM_3の臼歯の長さは19.3～19.9㎜、幅は6.7～8.9㎜で、咬合面は摩耗せず鋭い。

M_3が残存した左下顎体片が1個認められた。この標本のM_3の長さは14.7㎜、幅は7.7㎜で、上述した下顎体のM_3に比較して小型である。さらに形態も頬側面観の臼歯のエナメル質の半月型咬頭が三角形となり強く張り出している。これは他の地域のキョンの臼歯化石によく類似している。なお、半月型咬頭の三角形状の張り出しは、臼歯の幅が広いため弱く、シカとキョンの区別に有効と考えられる。（図版16）（表2）

上顎骨　maxilla

標本は、左上顎1個で、P^1－M^3まで残り、歯列長は71.4㎜である。臼歯の咬合面は、エナメルヒダが鋭くよく残り、それに対してゾウゲ質の部分は溶けて空洞になっている。
（図版16）

軸椎（第二頸椎）axis

軸椎は、７個の標本を得た。骨体は、小型で頑丈であり、歯突起と外側関節面が発達する特徴的な形態をしている。しかし、本標本は外側関節面と歯突起部分、あるいは外側関節面の形状から軸椎と判断できる程度で、不完全である。（表3）

沖縄県の多くの化石産地から多数のシカ類化石が採取されている。そのうち軸椎は、半円形の外側関節面中央部に切痕が発達しているものと、発達してないものが存在し、また外側関節面後方の腹稜を挟む椎体は、幅が狭く、横突起が観察できるものと、幅が広く、しかも横突起が大きく楕円形になるなどの特徴をもつものが認められた。これまでの化石軸椎の観察から前者はシカで、後者はキョンに属するものと判断される。なお、ケラマジ

カの軸椎には、外側関節面の中央に弱いながら切痕が発達し化石ジカに類似する。
本地点の標本には、外側関節面中央部に切痕が発達するものを１個確認したが、他は不完全品で識別は困難である。いずれにしろ両特徴を有するものが混在している。(図版17)

＊遺骸の各部位の名称については、加藤（1974）を参照のこと。

まとめ

真珠道跡を発掘し、そこから得た多量の動物遺骸を整理し、次のことが明らかになった。

１．設定の限られた発掘グリッド内の観察であるが、シカ類の角が集中して産するなど動物遺骸の産状にはふるい分けがある。

２．動物遺骸は、趾骨や小型で頑丈な部分骨を除き、角や長管骨などは骨の原形は留めながらも、何らかの物理的な外圧により圧砕されたように細片化し、保存状態は悪い。

３．動物遺骸は、部位骨700点余を識別した。遺骸はシカ類のもののみで、角の形態や既存の化石標本との比較で、
リュウキュウジカとリュウキュウムカシキョンの２種類であることが明らかになった。

４．埋積したシカ類は、角や頭骨座骨をもとにリュウキュウジカ39頭以上、リュウキュウムカシキョン7頭以上で
あるが、角は雄ジカに特有であり、頭数はそれ以上となる。なお本地点の動物遺骸はリュウキュウジカ優位
の堆積層である。

主な参考文献

長谷川善和（1980）：琉球列島の後期更新世～完新世の脊椎動物、第四紀研究、18(14),263-267
長谷川善和・野原朝秀・野苅家　宏・小野慶一（1978）：ゴヘズ洞の獣類遺骸群集、沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査一第２次概要、伊江村文化財調査報告書（伊江村教育委員会）、５、8-17
長谷川善和・大城逸朗（1981）：宜野湾市マヤーアブ産リュウキュウムカシキョンの角化石、日本地質学会第88年学術大会講演要旨、281
長谷川善和・大城逸朗・野原朝秀（1983）：琉球列島の鹿類とキョン類化石の復元（琉球列島の古脊椎動物相一そのⅧ)、沖縄県博紀要、９、23-30
加藤嘉太郎（1974）：家畜比較解剖図説（上巻)、養賢堂、290p.
Kobayashi,H.,Matsui,Y., and Suzuki,H.(1971)：TK-78、Yamashita-choCave 1、Radiocarbon、13:100.
Matsumoto,H.(1926)：On some new fossil cervicorns from Kazusa and Liukiu. *Sci. Rep.Tohoku Imp. Univ., Ser.*2,
(*Geol.*), 10(2), 17-27.
大城逸朗（2001)：琉球列島産第四紀陸生脊椎動物遺骸の地質学的研究、琉球大学教育学部自然環境教育コース、野原朝秀教授退官記念論文集、37-136
大城逸朗(1994)：沖縄県普天満宮遺跡における陸生脊椎動物遺骸群、地学雑誌、103(1)、49-63
大城逸朗・野原朝秀（1977)：琉球列島における鹿化石産出地について、沖縄県博紀要、３、1-11
大城逸朗・野原朝秀・長谷川善和（1983),：型動物化石分布と動物の渡来、宮城栄昌・高宮廣衛編：沖縄歴史地図（考古編)、柏書房、28-29、79
大塚裕之・中村俊夫・太田友子（2004)：沖縄島における第四紀脊椎動物化石包含層のＣ－14年代、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（XV)、名古屋大学年代測定総合研究センター
高井冬二・長谷川善和(1971)：琉球諸島の脊椎動物化石について、1971年地質学会総会シンポジゥム資料、九州周辺海域の地質学的諸問題、107-109

第 1 表　主な部分骨の出土状況

部位			出土地点 さ-16 3層	さ-17 3層	さ-16.17 3層	合計
肋骨	第1	右		1	1	2
	第1	左			1	1
	第3	左	1			1
	左右不明		16	1	5	22
肩甲骨		右	3	2		5
		左	1	2		3
上腕骨		右	4	4	1	9
		左	3	3	2	8
橈骨		右	2	5	3	10
		左	8	1		9
尺骨		右	3		2	5
		左	4	1		5
手根骨	2+3	右		1		1
		左		1		1
	4	右		1		1
	橈側	右		2	1	3
		左		1	1	2
		左	1			1
	尺側	右	1		1	2
		左	1	1	1	3
中手骨		右	7	3	1	11
		左	1	2	1	4
寛骨		右		1		1
		左	1			1
大腿骨		右		3	2	5
		左	5	2	1	8
膝蓋骨		右	2			2
		左	2			2
脛骨		右	3	7	3	13
		左	7	4	3	14
足根骨	第4中心	右	1	1		2
		左			3	3
中足骨		右	3	5		8
		左	4	7	3	14
		左右不明	3	2		5
距骨		右	5	3	2	10
		左	4	4		8
踵骨		右	6	4	2	12
		左	3	2		5
基節骨		右	7	6		13
		左	9	3	2	14
中節骨		右	8	3	11	22
		左	8	5	3	16
末節骨		右		2		2
		左	1			1
種子骨		左右不明	3	2		5
合計			141	98	56	295

第 2 表　頭骨・下顎骨の出土状況

部位			出土地点 さ-16 3層	さ-17 3層	さ-16.17 3層	合計
頭骨	前頭骨			1		1
	側頭骨	左	1			1
	側頭骨鼓室部	右	4			4
		左		1	2	3
	後頭骨		1			1
	後頭骨底部		1			1
下顎骨	下顎角	右		1		1
	関節突起	左	1			1
	合　計		8	3	2	13

第 3 表　椎骨の出土状況

部位	出土地点 さ-16 3層	さ-17 3層	さ-16.17 3層	合計
環椎	3			3
軸椎	2	4	1	7
頸椎	5	1		6
胸椎	6	2	4	12
胸骨	2			2
腰椎	3	4	1	8
仙椎	4		1	5
尾椎	1		1	2
合計	26	11	8	45

第 4 表　角（リュウキュウジカ）の出土状況

部位	出土地点 さ-16 3層 右	左	不明	さ-17 3層 右	左	不明	さ-16.17 3層 右	左	不明	合計
頭骨角座	2	2		1	1	1		1	1	9
座骨	2	3			4		1			10
角	7	1	1	17	23	10	9	3	2	73
角座			7			2			1	10
角先端部			13			51				64
合計			38			110			18	166

第 5 表　角（リュウキュウムカシキョン）の出土状況

部位	出土地点 さ-16 3層 右	左	不明	さ-17 3層 右	左	不明	さ-16.17 3層 右	左	不明	合計
角			5		2	2	1		1	11
角先端部			6			2			1	9
合計			11			6			3	20

第 7 表　顎骨（リュウキュウジカ）の出土状況

部位		右/左	出土地点	個数
上顎骨	$P^{1.2.3}$ $M^{1.2.3}$	左	さ-17　3層	1
下顎骨	$P_{1.2.3}$ $M_{1.2.3}$	右	さ-17　3層	1
	$P_{2.3}$ $M_{1.2.3}$	右	さ-17　3層	1
	$M_{1.2.3}$	右	さ-16　3層	2
	$M_{1.2.3}$	右	さ-17　3層	3
	$M_{2.3}$	右	さ-16　3層	1
	$P_{1.2.3}$ $M_{1.2.3}$	左	さ-16　3層	1
	P_3 $M_{1.2.3}$	左	さ-16　3層	1
	P_3 $M_{1.2.3}$	左	さ-17　3層	1
	$M_{2.3}$	左	さ-17　3層	1
	M_3	左	さ-16.17　3層	1
	M_3	左	さ-16　3層	1

第 6 表　下顎骨（リュウキュウジカ）の出土状況

部位	右/左	出土地点	個数
下顎骨M_3	左	さ-17　3層	1

第８表　歯（リュウキュウジカ）の出土状況

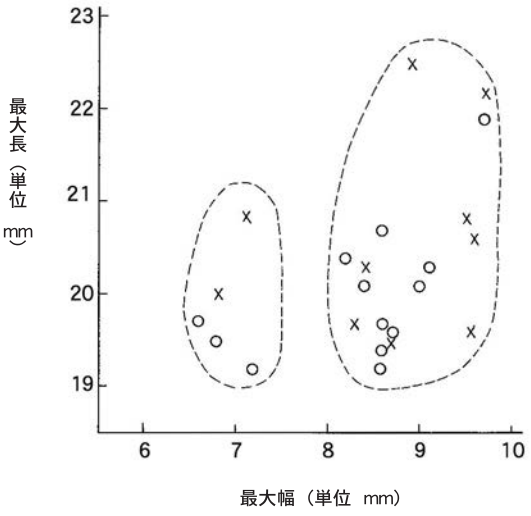
	部位	出土地点						合計
		さ-16		さ-17		さ-16.17		
		3層						
		右	左	右	左	右	左	
上顎骨	C	1				1		2
	P_2	1			1			2
	P_3	5	2	3			2	12
	M_1	10	8	3	5	2	2	30
	M_2	4	4	5	8	2		23
	M_3		2	3				5
	合 計	21	16	14	14	5	4	74
下顎骨	P_2	1			1	1	2	5
	P_3		1	1	5		2	9
	M_1		2	1	5			8
	M_2	4	1	1	3			9
	M_3	1	4	2	6		1	14
	合 計	6	8	5	20	1	5	45

第９表　歯（リュウキュウムカシキョン）の出土状況

	部位	出土地点								合計
		さ-16			さ-17		さ-16.17			
		3層								
		右	左	不明	右	左	右	左	不明	
上顎骨	C	1	2		1	2	2			8
	P_2		1				1	1		3
	P_3				4				2?	6
	M_1				2	2				4
	M_2	1			1	1	2			5
	M_3					4		1		5
	合 計	2	3	0	8	9	5	2	2	31
下顎骨	P_2	1		1?	3	1	1	2		9
	P_3								2?	2
	M_1	1				2		1		4
	M_2	1				1	1	2		5
	M_3		1					1		2
	合 計	3	1	1	3	4	2	6	2	22

第10表　リュウキュウジカ下顎第３大臼歯　法量　単位mm

遺物番号	右／左	最大長	最大幅	出土地点
1	右	19.59	9.55	さ-17 3層
2		22.30	9.73	さ-17 3層
3		19.45	8.65	さ-17 3層
4		20.57	9.59	さ-17 3層
5		20.04	6.80	さ-17 3層
6		19.65	8.32	さ-17 3層
7		22.47	8.89	さ-16 3層
8		20.77	9.49	さ-16 3層
9		20.79	7.06	さ-16 3層
10		20.30	8.41	さ-16 3層
11	左	19.70	6.61	さ-17 3層
12		19.71	8.60	さ-16 3層
13		19.14	8.59	さ-17 3層
14		(16.01)	8.52	さ-16 3層
15		20.37	8.16	さ-17 3層
16		21.94	9.69	さ-17 3層
17		20.25	9.11	さ-16 3層
18		20.68	8.62	さ-17 3層
19		19.16	7.16	さ-17 3層
20		(15.82)	9.25	さ-16 3層
21		19.18	8.85	さ-17 3層
22		19.47	6.79	さ-16.17 3層
23		20.13	9.08	さ-16.17 3層
24		20.06	8.41	さ-16 3層
25		19.55	8.76	さ-16 3層



×：右下顎第3大臼歯
○：左下顎第3大臼歯

図１　下顎大３大臼歯の最大長と最大幅の関係

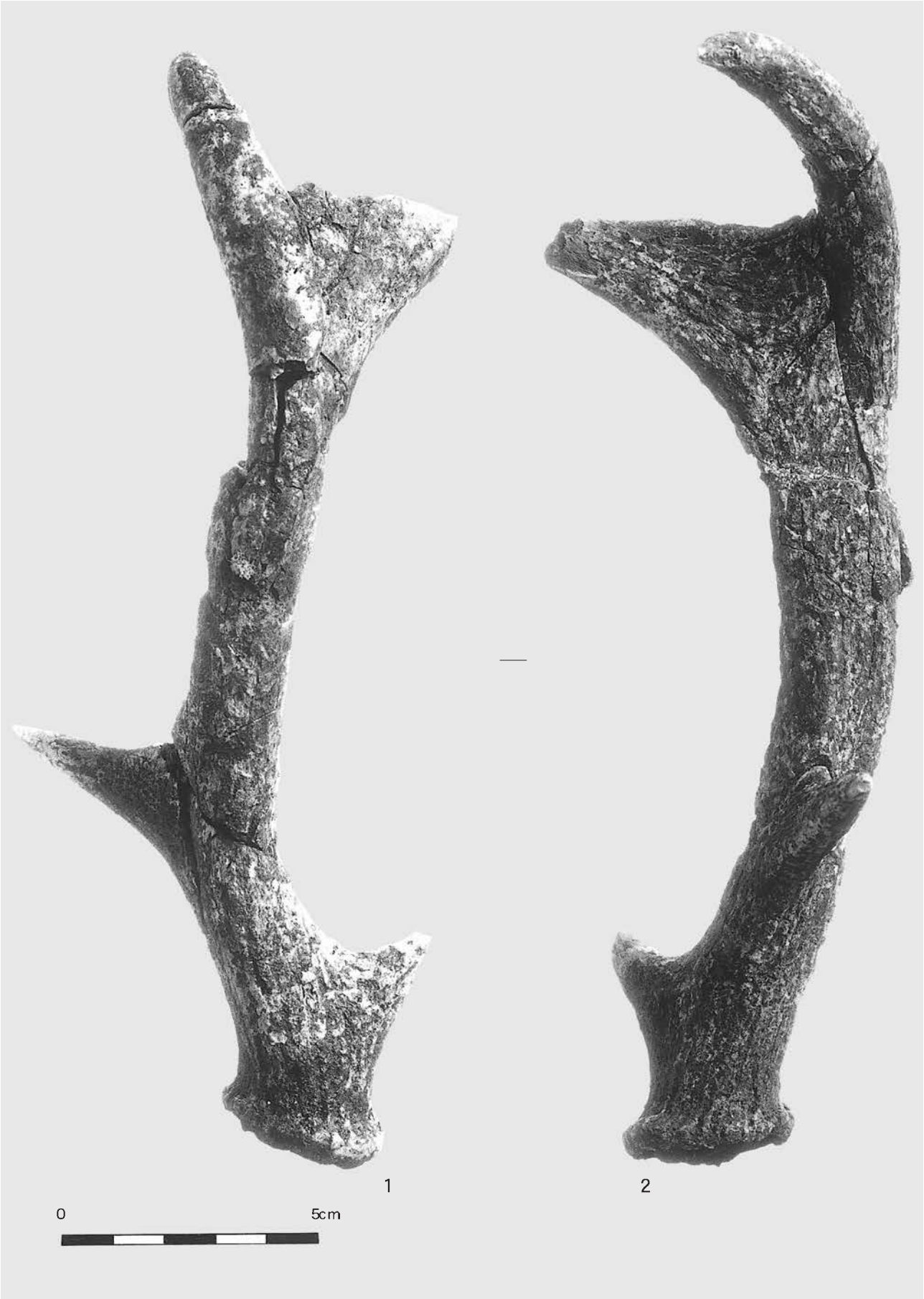
1. 遺跡の発掘断面。上の白い部分は砂利舗装の道で、化石を包含する赤褐色土の下には、かつての洞床を推側させる侵食され磨耗した石灰岩体

2. 洞床から発達した石筍とその周辺に堆積した化石層

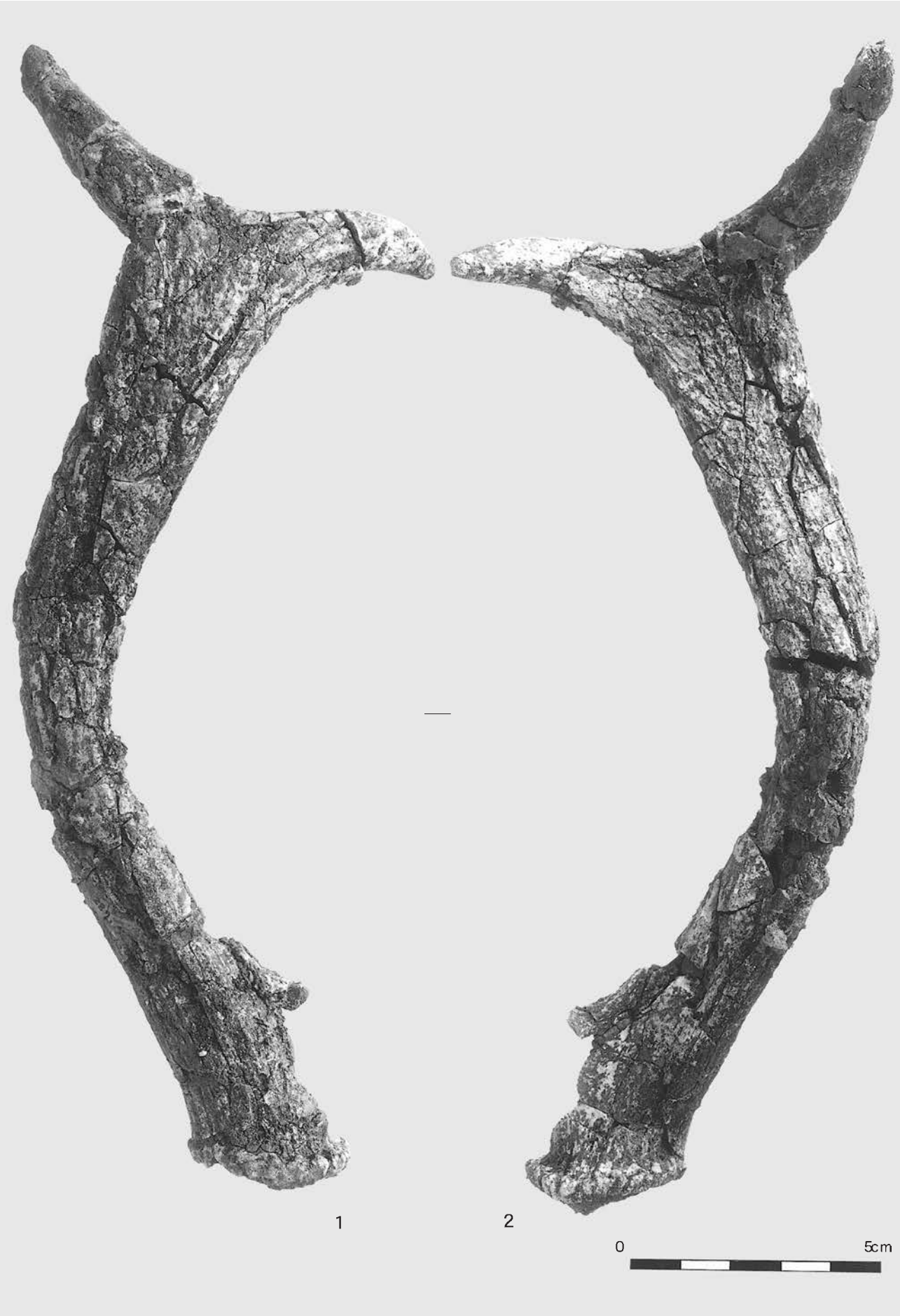
3. グリットを設定した発掘状況。化石骨は篩い分けられたようにシカの角が密集した状態

図版 1　発掘地の動物遺骸の産状

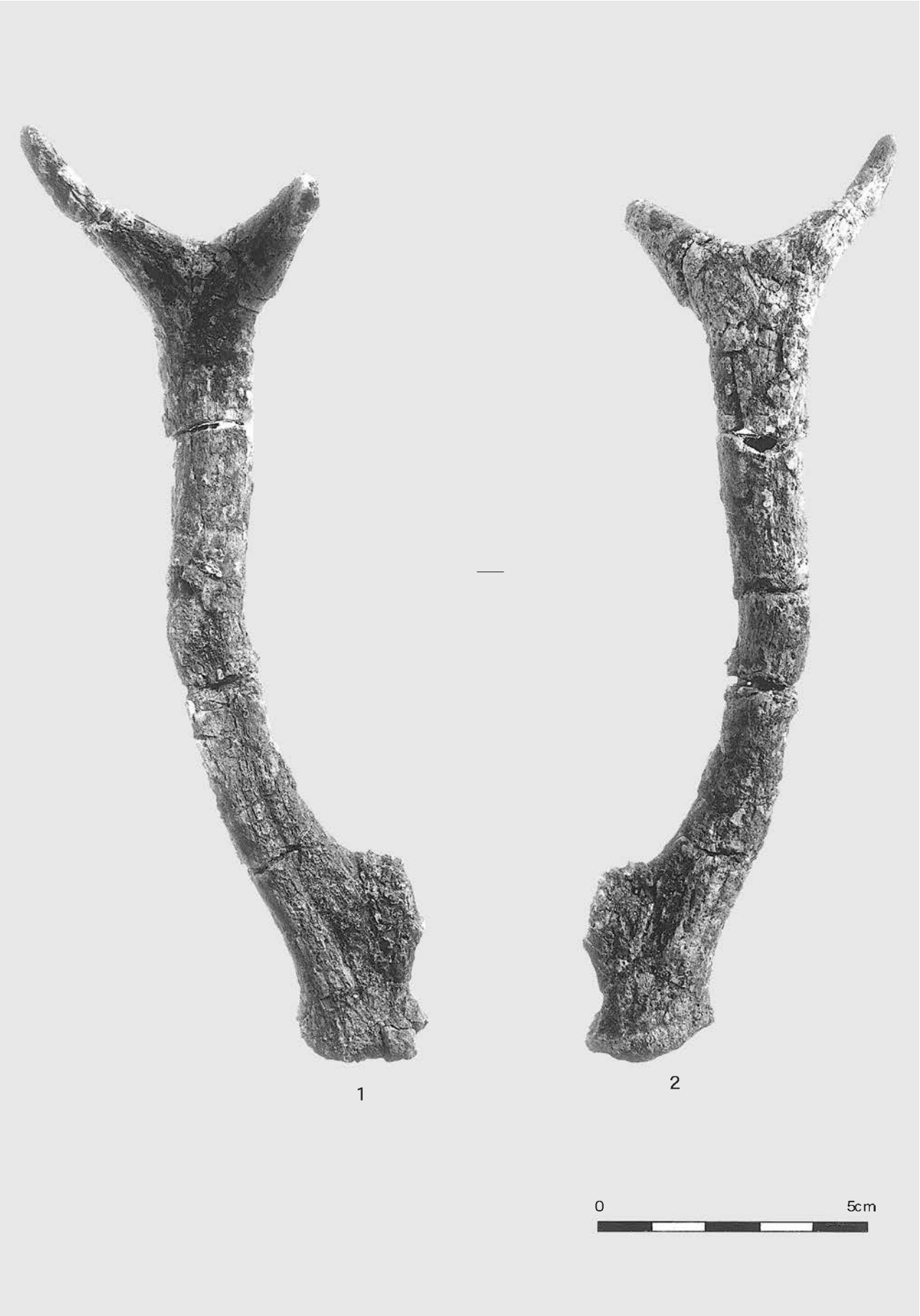
図版 2　1.現生ケラマジカの頭蓋（背側面）角の長さは、27.5cm（県立博物館所蔵）2.現生ケラマジカの頭蓋（左側面）
リュウキュウジカ：3.左角（外側面）4.左角（内側面）



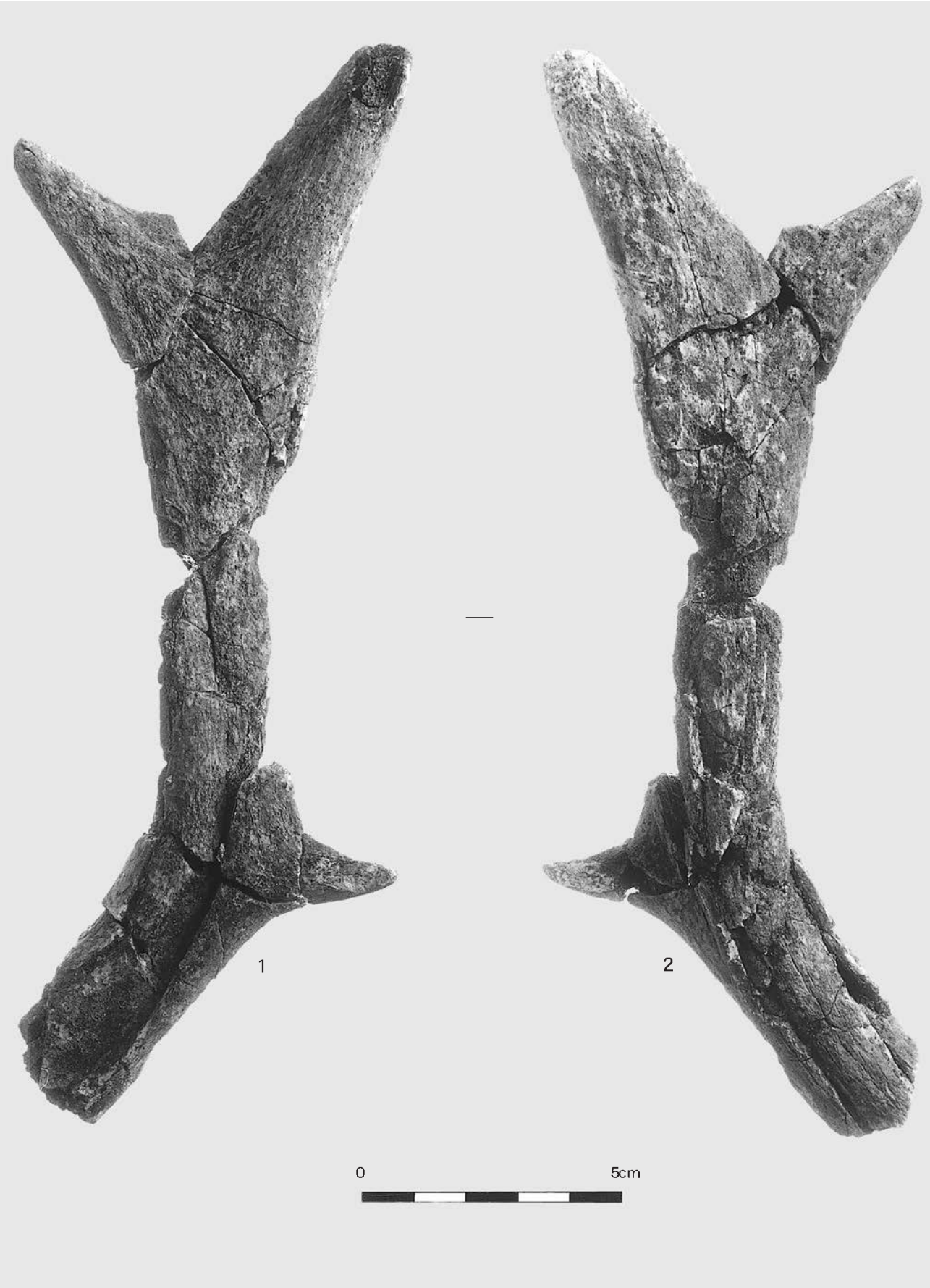
図版 3　リュウキュウシカ：1右角（外側面）2右角（内側面）



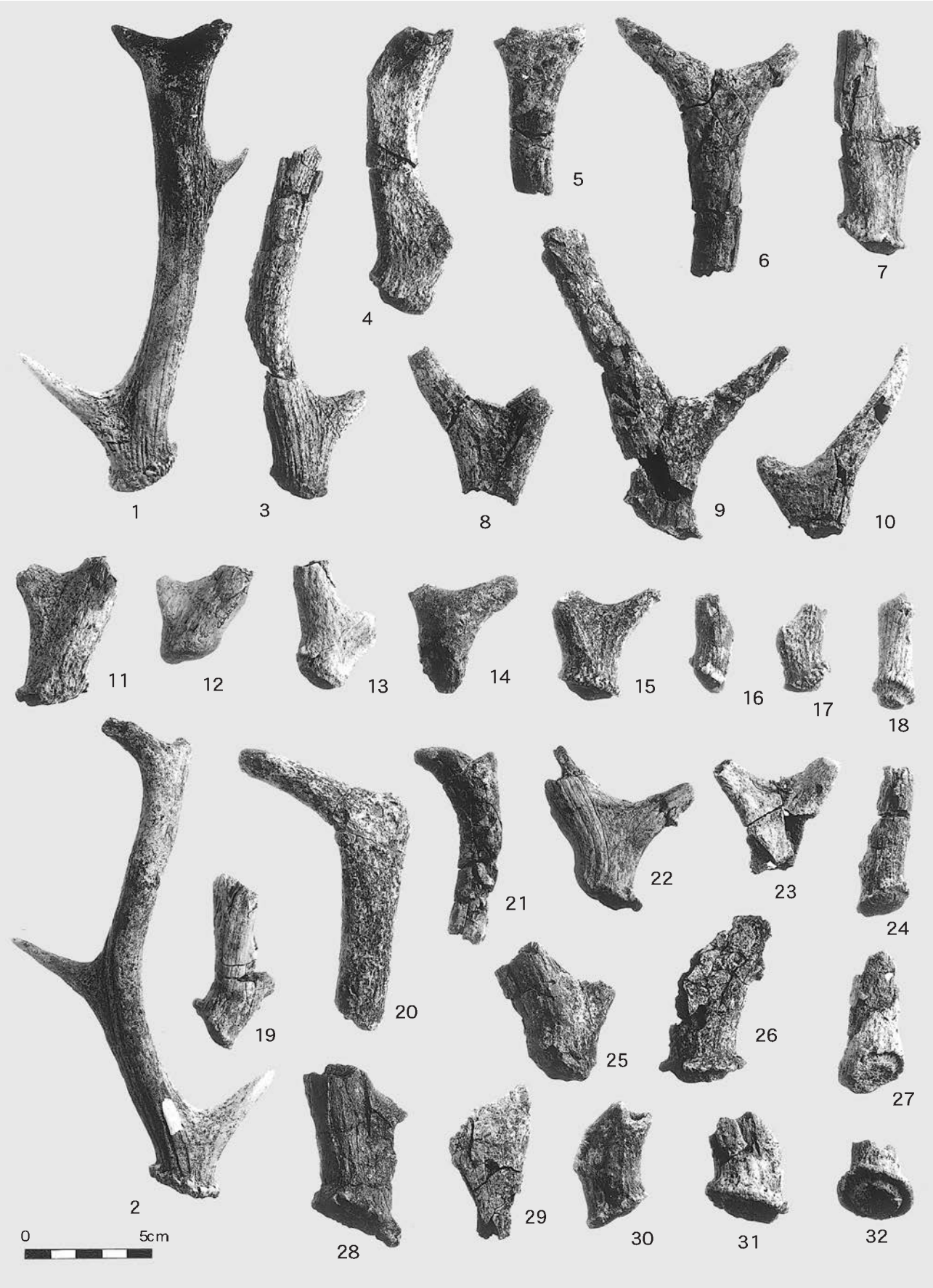
図版 4　リュウキュウジカ：1.右角（外側面）2.右角（内側面）



図版 5　リュウキュウシカ：1左角（外側面）2左角（内側面）

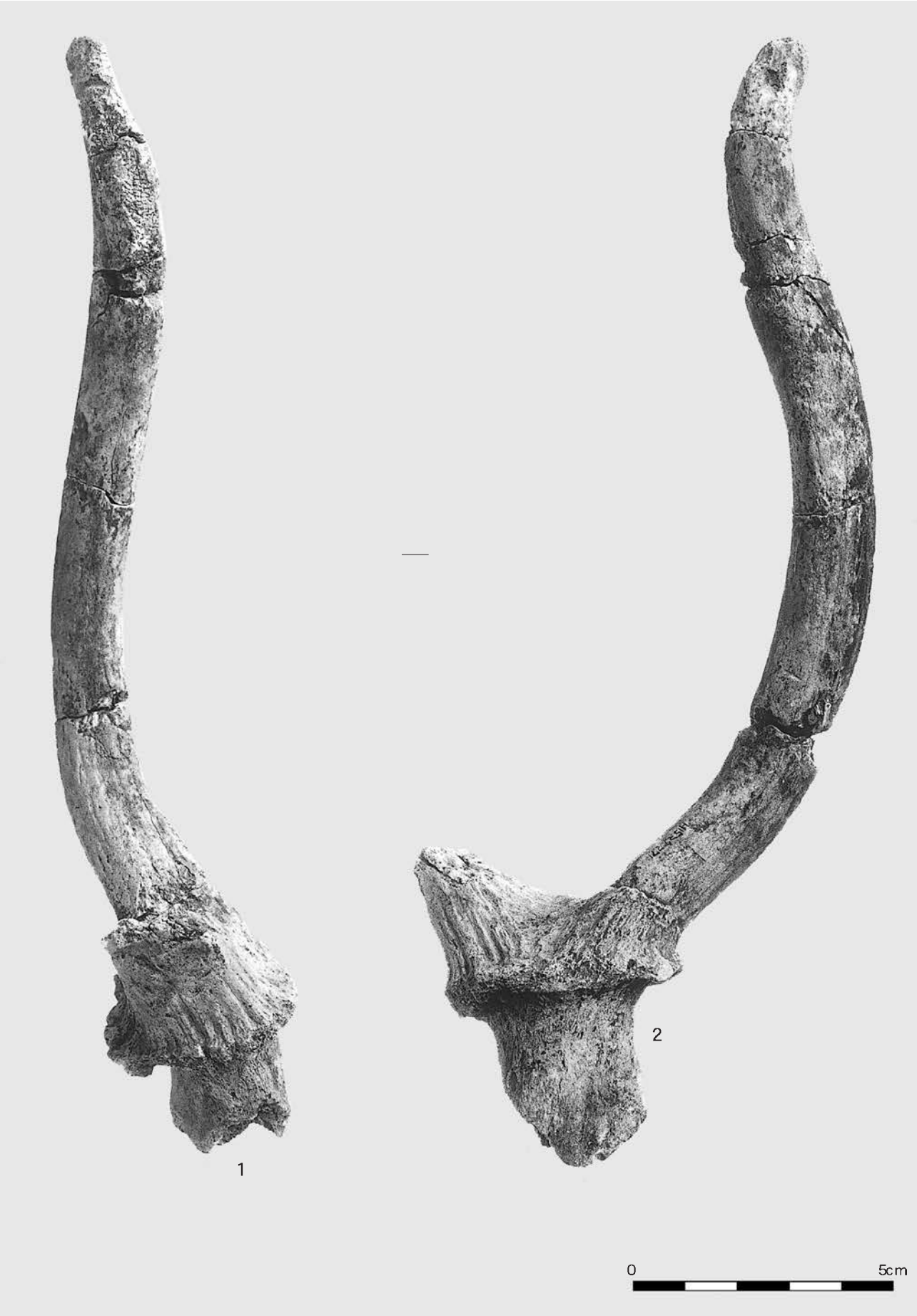


図版 6　リュウキュウシカ：1左角（角座部を欠く、内側面）2左角（外側面）



図版 7

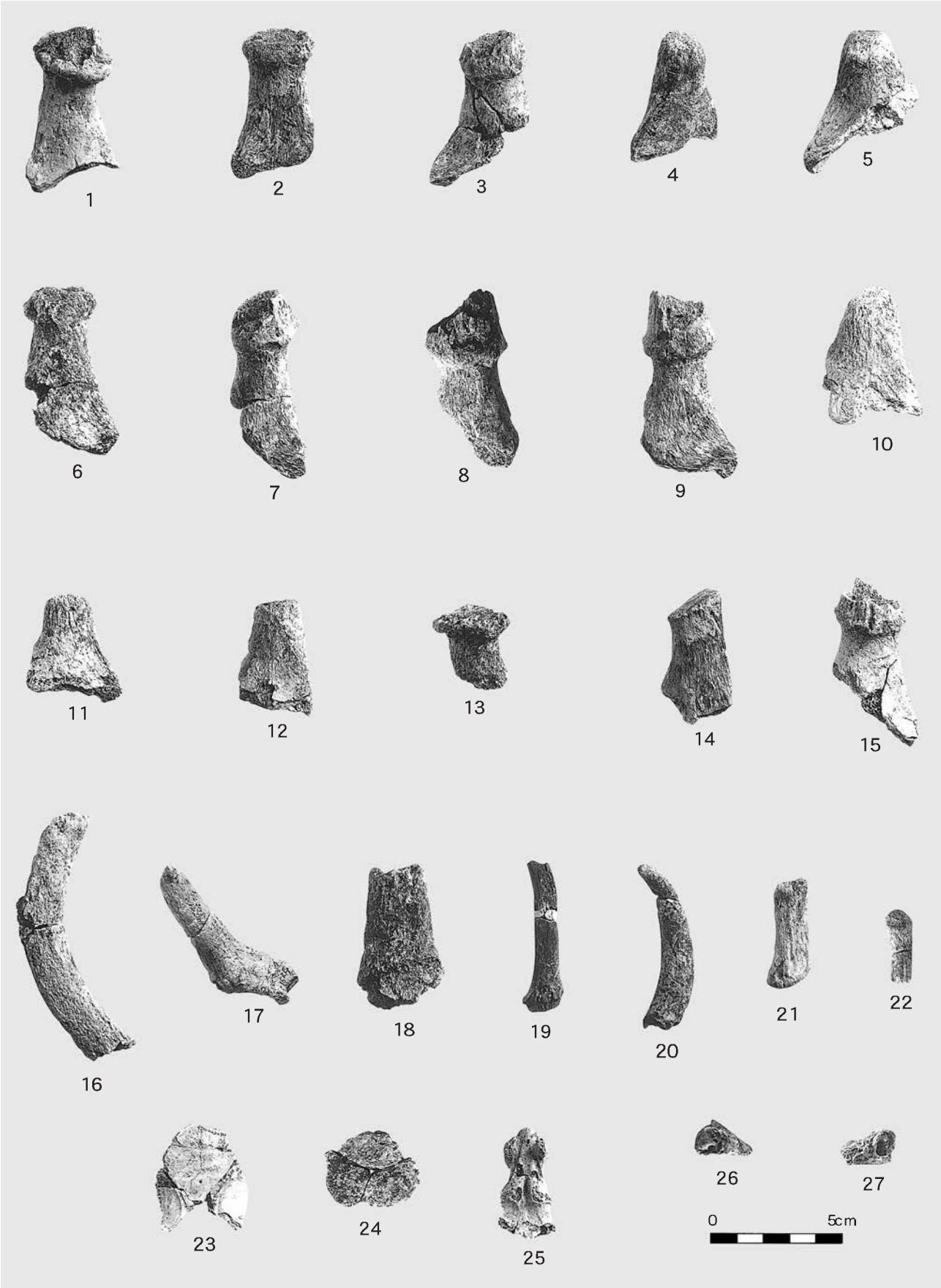
1リュウキュウジカ左角（外側面）・2. リュウキュウジカ 右角（外側面）久米島下地原洞産　3・4. 左角（内側面）5・6. 左角（外側面）7. 左角（内側面）8. 左角（外側面）9. 左角（内側面）10～12. 左角（外側面）13. 左角（内側面）14. 左角（外側面）15・16. 左角（内側面）17. 左角（外側面）18. 左角（内側面）19～22. 右角（外側面）23・24. 右角（内側面）25. 右角（外側面）26・27. 右角（内側面）28・29. 右角（外側面）30. 右角（内側面）31. 右角（外側面）32. 右角（後面）



図版 8
リュウキュウムカシキョン：1.左角（前面）２左角（外側面）

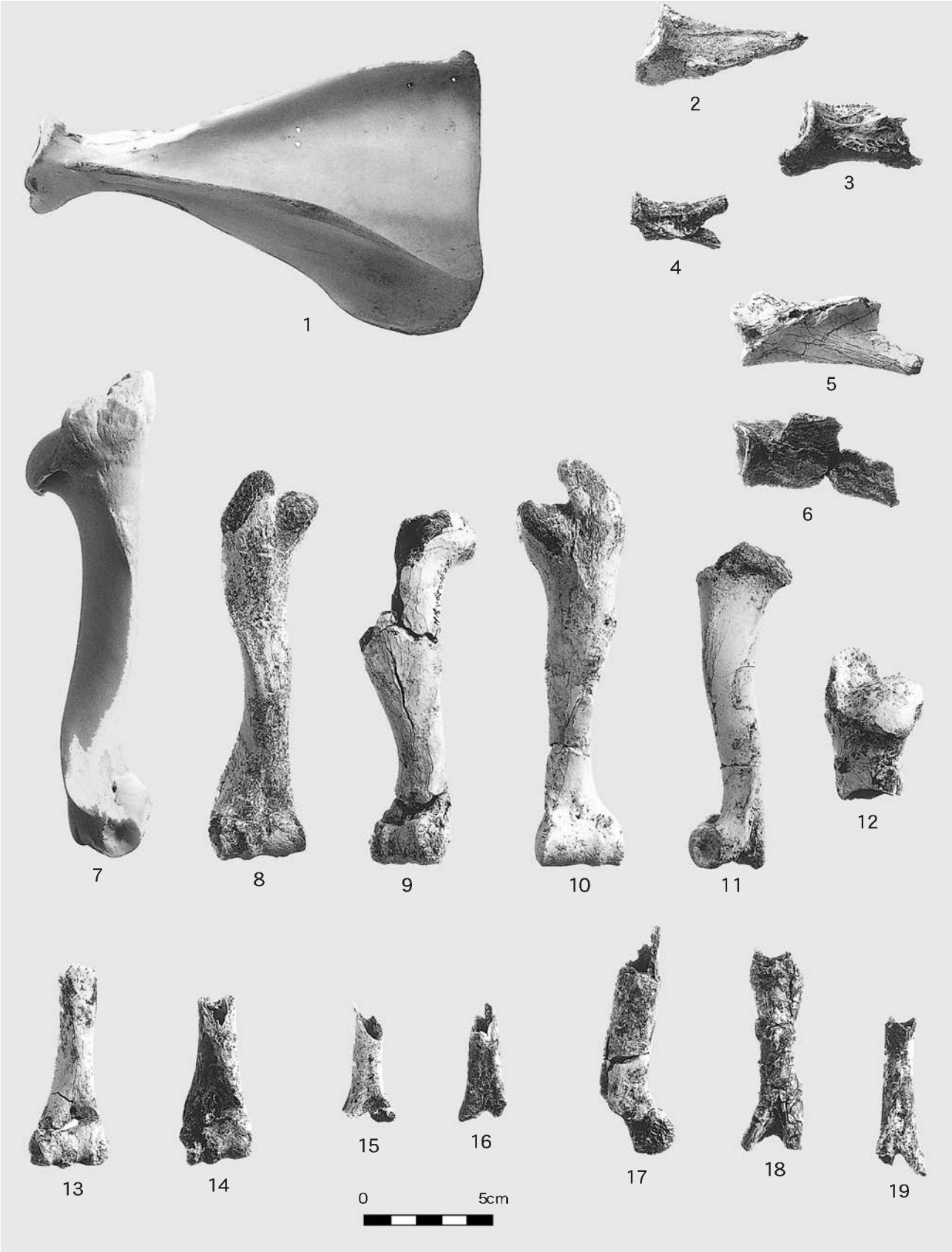
図版 9

リュウキュウムカシキョン：1.左角（前面）（普天満宮洞穴遺跡産、宜野湾市教育委員会所蔵）2右角（後面）3右角（外側面）



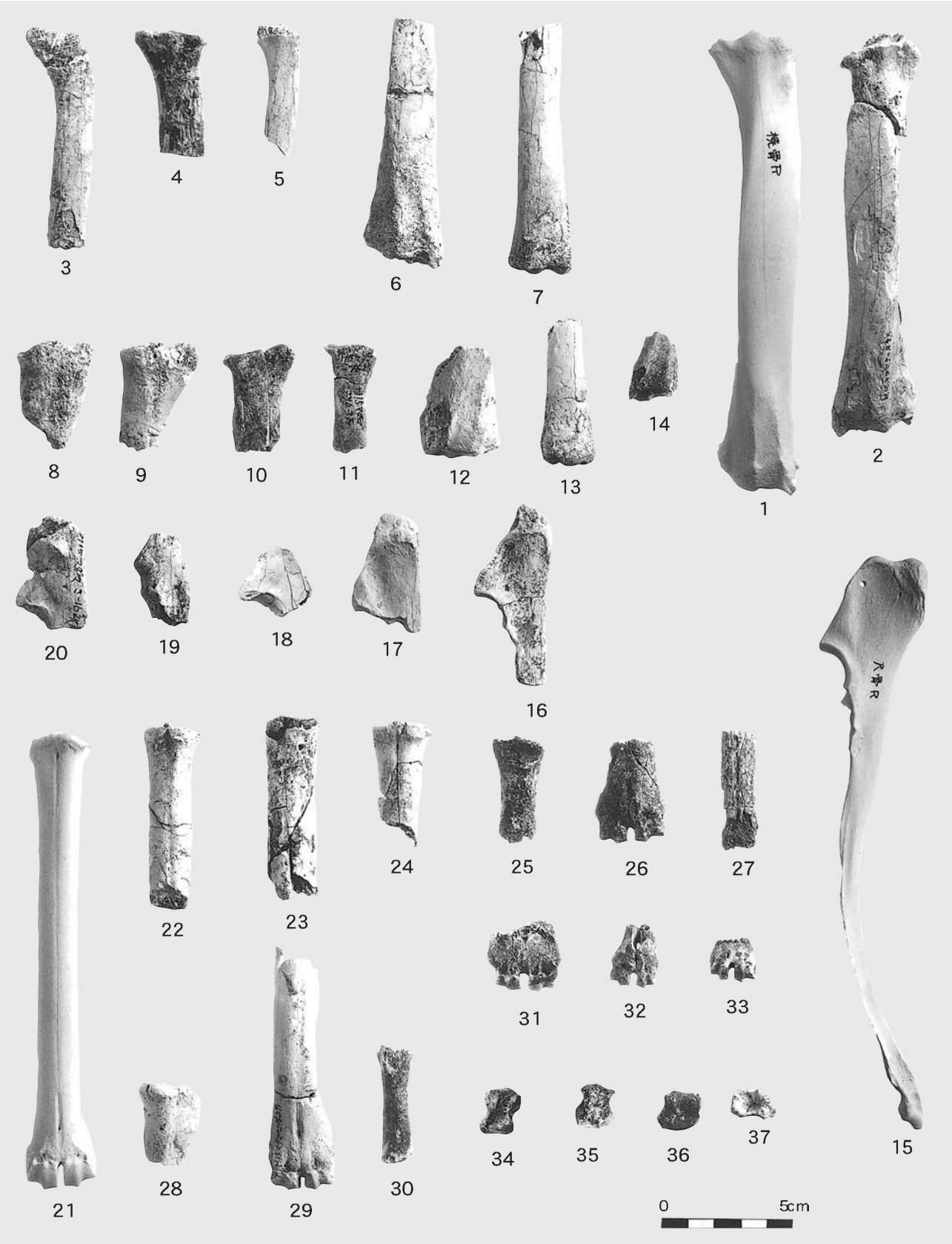
図版10

1～5. リュウキュウジカ右　頭骨角座（前面）6～15. リュウキュウジカ左　頭骨角座（前面）16. リュウキュウムカシキョン左角幹部（側面）17～22. リュウキュウムカシキョン左右不明骨　角幹部（側面）23. リュウキュウジカ後頭部　24. リュウキュウジカ頭骨　25. リュウキュウジカ（？）後頭部底部（内面）26. 右　側頭骨鼓室部　27. 左　側頭骨鼓室部



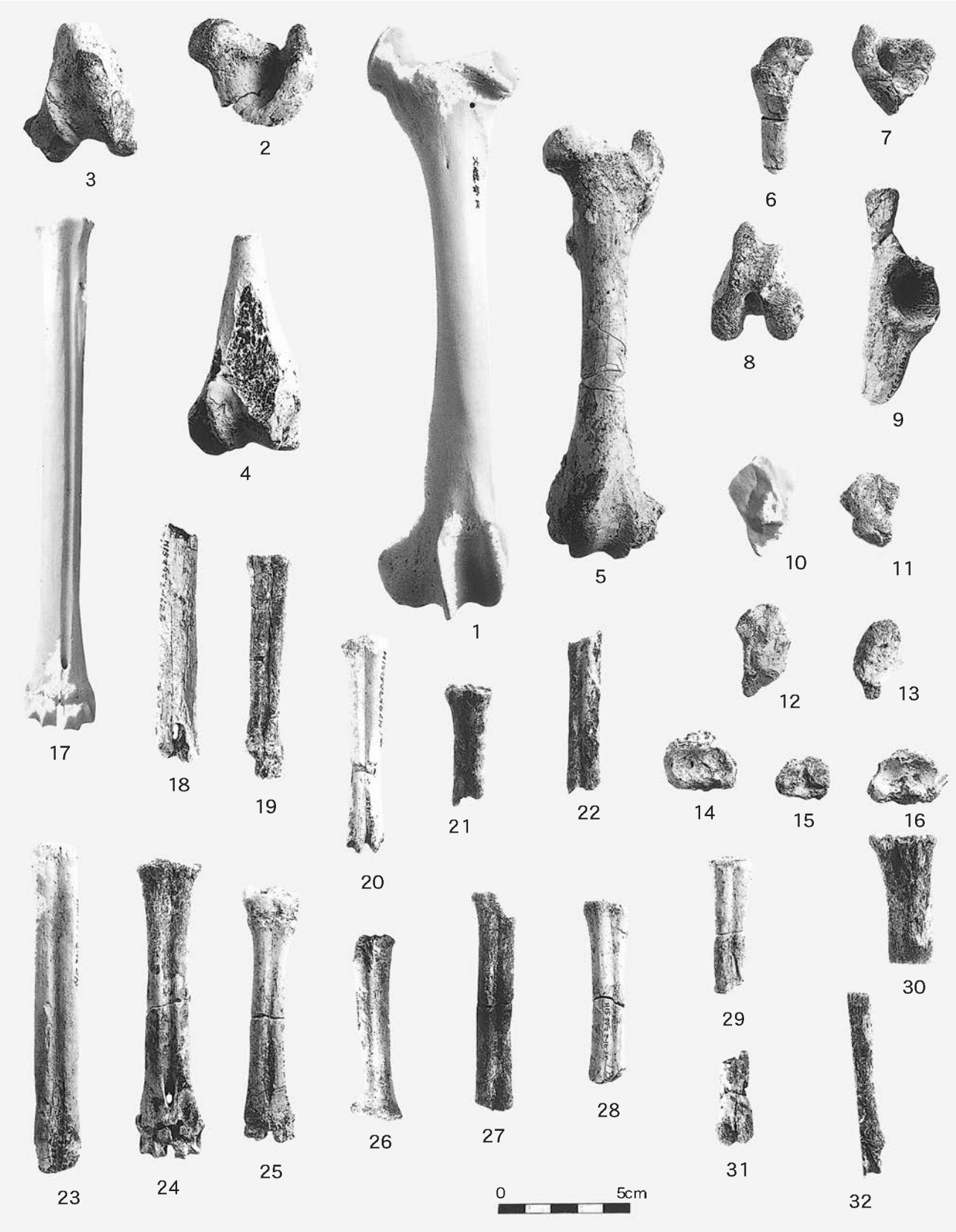
図版11

1.現生ケラマジカ 右 肩甲骨（外側面） 2～4.右 肩甲骨（外側面） 5・6.左 肩甲骨（外側面） **7.現生ケラマジカ 右 上腕骨（外側面）** 8・9.右 上腕骨（前面） 10.左 上腕骨（前面） 11.左 上腕骨（近位端を欠く、外側面） 12.左 上腕骨（近位部のみ、後面） 13・14.右 上腕骨（近位端を欠く、前面） 15・16.右 上腕骨（近位部、遠位端を欠く、前面） 17.左 上腕骨（近位部を欠く、内側面） 18.左 上腕骨（骨幹部、後面） 19.左 上腕骨（骨幹部、前面）



図版12

1.現生ケラマジカ 右 橈骨（背面） 2.左 橈骨（背面） 3.右 橈骨（遠位部を欠く、背面） 4・5.右 橈骨（近位部のみ、背面）
6.右 橈骨（遠位部、背面） 7.右 橈骨（骨幹部、背面） 8・9.左 橈骨（近位部、腹面） 10・11.左 橈骨（近位部、背面）
12.左 橈骨（遠位部、背面） 13.左 橈骨（骨幹部、背面） 14.左 橈骨（遠位部、背面） **15.現生ケラマジカの 右 尺骨（内側面）**
16.右 尺骨（内側面） 17.右 尺骨（尺骨体を欠く、内側面） 18～20.左 尺骨（尺骨体を欠く、外側面）
21.現生ケラマジカの 左 中手骨（背面） 22～24.右 中手骨（遠位部を欠く、背面） 25.右 中手骨（シカのかみ跡あり）
26.右 中手骨（遠位部、背面） 27.右 中手骨（近位部を欠く、背面） 28.左 中手骨（近位部、背面）
29.左 中手骨（近位部を欠く、背面） 30.左 中手骨（骨幹部、背面） 31～33.右 中手骨（遠位端、背面） 34～37.右 手根骨

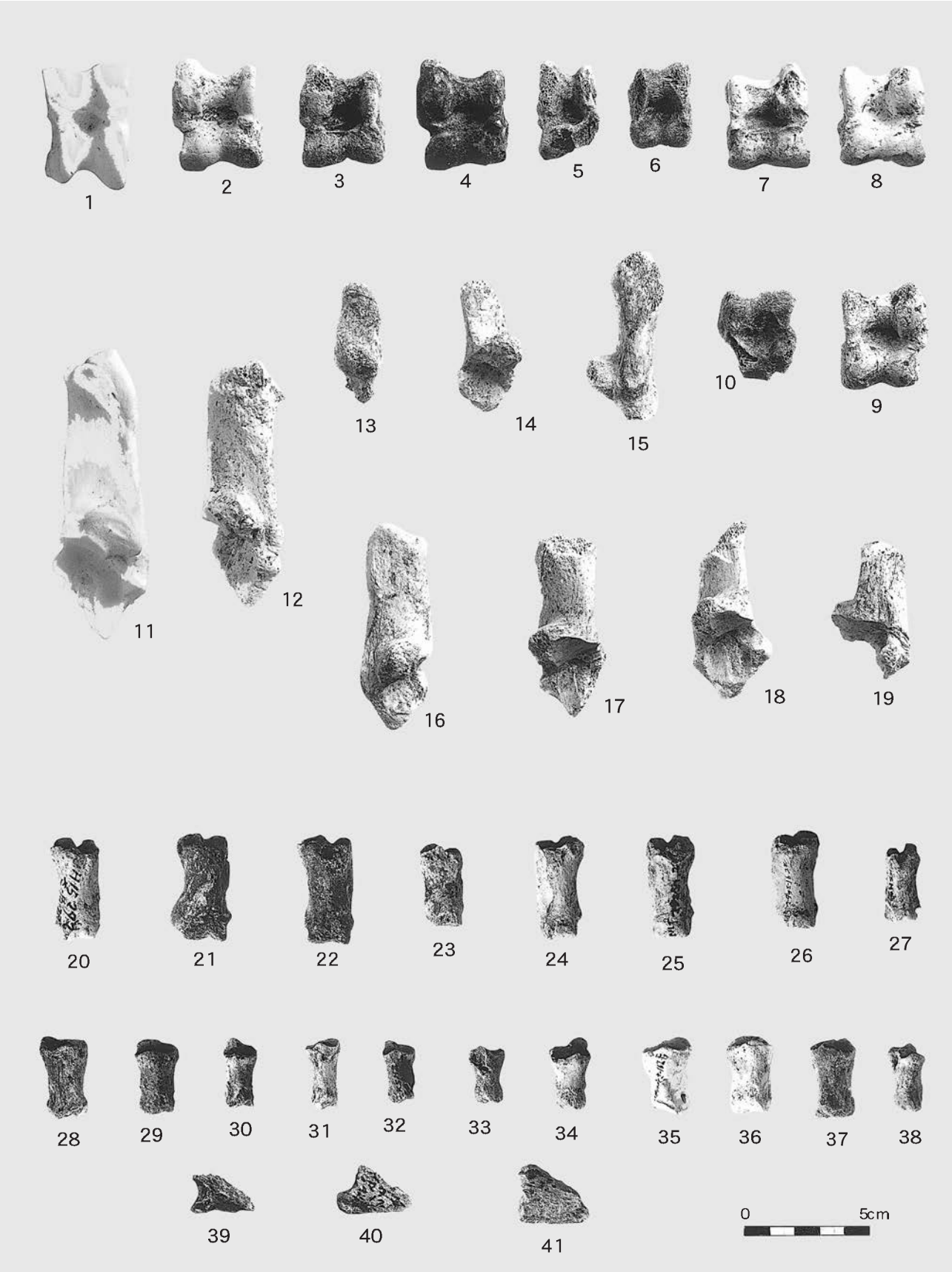


図版13

1.現生ケラマジカの 右 大腿骨（前面） 2.右 大腿骨（近位端、後面） 3.右 大腿骨（遠位端、後面） 4.右 大腿骨（遠位端、前面）
5.左 大腿骨（前面） 6.左 大腿骨（近位部、後面） 7.左 大腿骨（近位端、後面） 8.左 大腿骨（遠位端、背面） 9.左 寛骨（腹面）
10.現生ケラマジカの 膝蓋骨（側面） 11.右 膝蓋骨（側面） 12・13.左 膝蓋骨（側面） 14・15.右 足根骨 16.左 足根骨
17.現生ケラマジカ 左 中足骨（背面） 18～20.右中足骨（背面） 21.右中足骨（遠位部を欠く、背面）
22.右中足骨（近位端を欠く、背面） 23.右中足骨（近遠位端を欠く、背面） 24.左中足骨（背面） 25.左中足骨（足根骨が連結、背面）
26.左中足骨（背面） 27.左中足骨（背面） 28.左中足骨（背面） 29.左中足骨（腹面） 30.左中足骨（近位部、腹面）
31.左中足骨（遠位部、背面） 32.左中足骨（腹面）

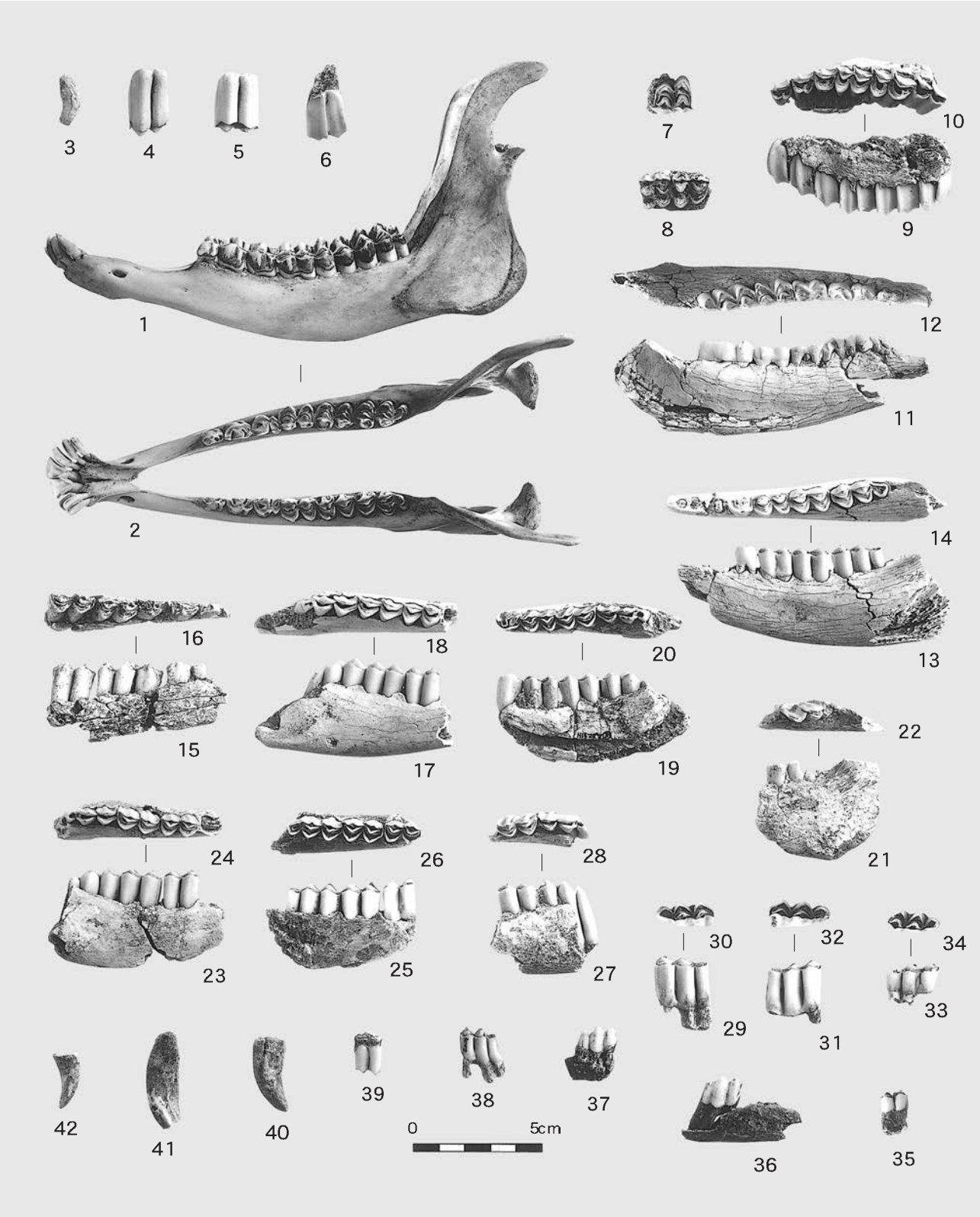
図版14

1.現生ケラマジカ 右 脛骨（背面） 2.右 脛骨（背面） 3・4.右 脛骨（腹面） 5.右 脛骨（近位部、背面） 6.右 脛骨（遠位端を欠く、背面）
7.右 脛骨（骨幹部のみ、背面） 8.右 脛骨（近位端を欠く、背面） 9.右 脛骨（骨幹部のみ、背面） 10.右 脛骨（遠位端、背面）
11.右 脛骨（遠位端、腹面） 12.左 脛骨（背面） 13・14.左 脛骨（腹面） 15.左 脛骨（近位部、腹側面） 16.左 脛骨（遠位部、背面）
17.左 脛骨（近位端を欠く、背面） 18・19.左 脛骨（骨幹部、背面）



図版15

1.現生ケラマジカの 右 距骨（背面） 2～6.右 距骨（背面） 7～10.左 距骨（背面） **11.現生ケラマジカの 右 踵骨（背外側）**
12.右 踵骨（背外側） 13・14.右 踵骨（背面） 15.右 踵骨（背外側） 16～18.左 踵骨（背面） 19.左 踵骨（背内側）
20～23.右 趾骨（基節骨） 24～27.左 趾骨（基節骨） 28～33.右 趾骨（中節骨） 34～38.左 趾骨（中節骨）
39・40.右 趾骨（末節骨） 41.左 趾骨（末節骨）



図版16

1.現生ケラマジカの 下顎骨（頬側面）2下顎骨（咬合面） リュウキュウジカ　3.右 犬歯（側面）4・5.右 上顎第3大臼歯（舌側面）6.右 上顎第3大臼歯（頬側面）7.左 上顎第2大臼歯（咬合面）8.左 上顎第1・2大臼歯（咬合面）9.左 上顎骨（頬側面）10.（咬合面）11.左 下顎骨（頬側面）12.（咬合面）13.左 下顎骨（頬側面）14.（咬合面）15.右 下顎骨（舌側面）16.（咬合面）17.右 下顎骨（頬側面）18.（咬合面）19.左 下顎骨（舌側面）20.（咬合面）21.左 下顎骨（舌側面）22.（咬合面）23.右 下顎骨（頬側面）24.（咬合面）25.右 下顎骨（頬側面）26.（咬合面）27.左 下顎骨（頬側面）28.（咬合面）29.左 下顎第3大臼歯（頬側面）30.（咬合面）31.右 下顎第3大臼歯（頬側面）32.（咬合面）33.右 下顎第3大臼歯（頬側面）34.（咬合面）リュウキュウムカシキョン　35.左 上顎第3大臼歯（舌側面）36.左 下顎骨（舌側面）37.左 下顎第3大臼歯（舌側面）38.左 下顎第3大臼歯（頬側面）39.左 上顎第3大臼歯（舌側面）40・41.左 犬歯（内側面）42.右 犬歯（内側面）

図版17

1.現生ケラマジカの環椎（背面）2.現生ケラマジカの軸椎（腹面）3.軸椎（腹面）4.軸椎の外側関節面部（腹面）
5.軸椎の歯突起と外側関節面部（腹面）6.頸椎（腹側面）7.頸椎（背側面）8～11.胸椎（背側面）12・13.腰椎（背側面）
14.腰椎（背面）15.腰椎（腹面）16.胸骨体　17.胸骨剣状突起　18.仙骨（骨盤面80cm）19・20.仙骨（骨盤面）21.尾椎（背面）
22.頸椎（腹側面）23.腰椎（腹面）24.右 中手骨＋基節骨＋中節骨　25.踵骨＋趾骨　26.趾骨＋足根骨＋中足骨
27.左 第4中心足根骨＋中足骨　28.基節骨＋中足骨　29.橈尺骨と肋骨片含む岩塊　30～34.肋骨

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集

真　珠　道　跡

―首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅱ）―

発行年　2007年（平成19）3月30日

発行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編集　沖縄県立埋蔵文化財センター調査課
〒901-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098（835）8751・8752

印刷　（資）精印堂印刷
〒902-0072
沖縄県那覇市字真地399の3
TEL 098（832）1311

この報告書は、500部製作し、
1部あたりの経費は1,848円です。

沖縄県立埋蔵文化財センター2007 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。